斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

上沢Ⅱ遺跡
狐廻谷古墳
大井谷城跡
上塩冶横穴墓群

(第7・12・22・23・33・35・36・37支群)

1998・3

雲工事事務所
島根県教育委員会

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

上沢Ⅱ遺跡
狐廻谷古墳
大井谷城跡
上塩冶横穴墓群

（第7・12・22・23・33・35・36・37支群）

1998・3

建設省出雲工事事務所
島根県教育委員会

大井谷城全景（上空から）

大井谷古墳全景（上空から）

上塩谷横穴墓群　33―6号穴　石棺

上塩谷横穴墓群　33―7号穴　石棺

金製の環（22—9号穴）

金糸（22—9号穴）

玉

玉
（玉は楠華堂　楠本真紀子氏撮影）

序

建設省出雲工事事務所では、斐伊川・神戸川流域の抜本的な治水対策として斐伊川放水路事業を推進しています。

事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当事務所では放水路の早期完成を目指し、平成３年度から島根県教育委員会のご協力のもとに調査を行っています。出雲市周辺地域は県下でも有数の遺跡集中地区であり、今回調査箇所においても、上塩冶横穴墓群や大井谷城跡といった以前から存在が確認されていた遺跡以外に、放水路工事中に新たに発見された古墳もありました。

建設省出雲工事事務所といたしましては、今後も同教育委員会と調整を図りつつ、貴重な埋蔵文化財の記録保存のため調査を円滑に進めてまいりたいと考えており、本報告書が、埋蔵文化財に対するより一層の関心とご理解を得るための資料としてお役立ていただければ幸いに思います。

最後に今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し、心から厚くお礼申しあげます。

平成10年３月

建設省中国地方建設局出雲工事事務所

所長　鈴木　篤

序

島根県教育委員会は、建設省中国地方建設局からの委託を受け、平成３年度以来、斐伊川放水路建設予定地内遺跡の発掘調査を行っています。本書は平成６年度から平成８年度に発掘調査を実施した遺跡のうち、上沢Ⅱ遺跡、狐廻谷古墳、大井谷城跡、および上塩冶横穴墓群（７・12・22・23・33・35・36・37支群）について、その調査結果をまとめたものです。

斐伊川・神戸川の二大河川が流れる出雲西部の出雲市周辺地域は、島根県下でも有数の遺跡集中地域であり、数多くの歴史的文化遺産が眠っているところです。今回は斐伊川放水路の開削部のうち、上塩冶町内の調査を行いました。この調査により、６世紀から７世紀を中心とした横穴式石室・横穴墓の発見や中世城跡の範囲および時期の判明など大きな成果をあげることができました。いずれも、この地域の歴史を解明していく上で貴重な資料となりうるものです。

本書が、多少なりとも地域の埋蔵文化財に関する理解や歴史学習などに役立てば幸いです。

なお、発掘調査および本書の刊行にあたりましては建設省中国地方建設局出雲工事事務所をはじめ、各方面からご支援、ご協力をいただきましたことに対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成10年３月

島根県教育委員会

教育長　江口博晴

例　　言

1．本書は1994（平成６）年から1996（平成８）年度に島根県教育委員会が、建設省中国地方建設局の委託を受け実施した斐伊川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の内、「大井谷城跡」、「上塩冶横穴墓群第７・12・22・23・33・35・36・37支群」、「狐廻谷古墳」、「上沢Ⅱ遺跡」の報告書である。

上沢Ⅱ遺跡	島根県出雲市上塩冶町菅沢2871番地他
狐廻谷古墳	島根県出雲市上塩冶町菅沢2957番地他
大井谷城跡	島根県出雲市上塩冶町1462番地他
（上塩冶横穴墓群第35・36支群）	
上塩冶横穴墓群第７支群	島根県出雲市上塩冶町1438番地他
上塩冶横穴墓群第33支群	島根県出雲市上塩冶町3121番地他
上塩冶横穴墓群第12支群	島根県出雲市上塩冶町1442番地他
上塩冶横穴墓群第22,23,37支群	島根県出雲市上塩冶町3147番地他

2．出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会（埋蔵文化財調査センター）で保管している。

3．掲載図面は主に定方克之、亀井良一、阿部智子、坂本順子、行藤たけし、伊藤智、梅木政志、守岡正司が作成し、写真は定方克之、亀井良一、伊藤智、守岡正司が撮影した。

4．本書に記載した遺構略記号はＳＢは掘立柱建物跡、ＳＸは石棺、ＳＫは土坑を表している。

5．上塩冶横穴墓群第33支群の名称を下記のように変更した。

旧遺構名	ＳＸ01	ＳＸ02	ＳＸ04	ＳＸ05	ＳＸ06	ＳＸ07	ＳＸ08	ＳＸ09
新遺構名	６号穴	ＳＸ01	７号穴	５号穴	３号穴	ＳＸ02	４号穴	８号穴

6．上塩冶横穴墓群第33支群ＳＸ03は二田谷２号墳、上塩冶横穴墓群第７支群ＳＸ01は大井谷古墳と改称した。

7．挿図中の縮尺は図中に明示した。

8．挿図中の方位は基本的に国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方向を示すが、一部は磁北方向をしめしており、挿図中にＭ．Ｎ．と明記した。

9．本書に掲載した「第２図」は建設省国土地理院発行の地形図、「第３図」、「第８図」、「第44図」は建設省出雲工事事務所作成図、「第11図」、「第61図」は出雲市作成の出雲市都市計画図を一部改変して使用した。

10．出土遺物について金製品は村上隆氏（奈良国立文化財研究所）、玉類は澤田順弘氏（島根大学総合理工学部）、鉄滓は佐藤豊氏（和鋼博物館）に分析を依頼した。

11．横穴墓の記載で、右側壁など左右の表現は奥壁に向かって右・左を表す。

12．本書の編集執筆は文化財課職員の協力を得て、守岡が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　調査に至る経緯と経過 …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の経過 …… 1
　3．調査組織 …… 2
Ⅱ　位置と環境 …… 5
Ⅲ　上沢Ⅱ遺跡 …… 9
Ⅳ　狐廻谷古墳 …… 12
Ⅴ　大井谷城跡 …… 15
Ⅵ　上塩冶横穴墓群第35・36支群 …… 25
　1．第35支群 …… 25
　2．第36支群 ……
Ⅶ　上塩冶横穴墓群第７支群 …… 47
　1．第７支群 …… 47
　2．大井谷古墳 …… 52
　3．ピット群 …… 58
　4．その他の遺物 …… 58
Ⅷ　上塩冶横穴墓群第33支群 …… 61
　1．第33支群 …… 62
　2．石　　棺 …… 86
　3．石組み遺構 …… 89
　4．三田谷２号墳 …… 89
　5．石　　塔 …… 92
　6．土　　坑 …… 98
　7．その他の遺物 …… 102
Ⅸ　上冶横穴墓群第12・22・23・37支群 …… 105
　1．第12支群 …… 106
　2．第37支群 …… 111
　3．第22支群 …… 113
　4．第23支群 …… 173
　5．半分城跡 …… 196
　6．石切場跡 …… 200
　7．第22．23支群の谷部 …… 205
Ⅹ　半分瓦窯跡 …… 206
Ⅺ　ま　と　め …… 208
Ⅻ　自然科学分析 …… 256
　1．上塩冶横穴墓群出土の金製品 …… 256
　2．上塩冶横穴墓群出土玉類の石材分析 …… 259
　3．出雲市上塩冶横穴墓群出土鉄滓の調査 …… 270

挿 図 目 次

第 1 図　調査対象位置図 …… 1
第 2 図　周辺の遺跡 …… 6
第 3 図　上沢Ⅱ遺跡位置図 …… 9
第 4 図　上沢Ⅱ遺跡平面図 …… 10
第 5 図　上沢Ⅱ遺跡石垣実測図 …… 10
第 6 図　上沢Ⅱ遺跡出土遺物実測図 …… 11
第 7 図　上沢Ⅱ遺跡正面図 …… 11
第 8 図　狐廻谷古墳位置図 …… 12
第 9 図　狐廻谷古墳実測図 …… 13
第 10 図　狐廻谷古墳調査後測量図 …… 14
第 11 図　大井谷城跡調査区配置図 …… 15
第 12 図　大井谷城跡 2 区調査前測量図 …… 16
第 13 図　大井谷城跡 2 区調査後測量図 …… 17
第 14 図　大井谷城跡 2 区土層図 …… 18
第 15 図　大井谷城跡 2 区ＳＢ01実測図 …… 19
第 16 図　大井谷城跡 3 区調査前測量図 …… 19
第 17 図　大井谷城跡 3 区調査後測量図 …… 20
第 18 図　大井谷城跡 3 区土層図 …… 21
第 19 図　大井谷城跡 4 区調査前測量図 …… 22
第 20 図　大井谷城跡 4 区調査後測量図 …… 23
第 21 図　大井谷城跡 4 区土層図 …… 23
第 22 図　大井谷城跡出土遺物実測図 …… 24
第 23 図　上塩冶横穴墓群分布図 …… 25
第 24 図　上塩冶横穴墓群35－１号穴実測図 …… 26
第 25 図　上塩冶横穴墓群35－１号穴出土遺物・閉塞実測図 …… 27
第 26 図　上塩冶横穴墓群35－１号穴前庭部遺物出土状況 …… 28
第 27 図　上塩冶横穴墓群35－１号穴出土須恵器実測図 …… 29
第 28 図　上塩冶横穴墓群35－１号穴出土須恵器実測図 …… 30
第 29 図　上塩冶横穴墓群35－１号穴出土土器実測図 …… 31
第 30 図　上塩冶横穴墓群35－１号穴出土金属器・玉類実測図 …… 32
第 31 図　上塩冶横穴墓群36－１号穴実測図 …… 33
第 32 図　上塩冶横穴墓群36－１号穴出土遺物・閉塞実測図 …… 34
第 33 図　上塩冶横穴墓群36－１号穴前庭部遺物出土状況 …… 35
第 34 図　上塩冶横穴墓群36－２号穴実測図 …… 36
第 35 図　上塩冶横穴墓群36－２号穴出土遺物・閉塞実測図 …… 37

第 36 図　上塩冶横穴墓群36－３号穴実測図 …… 38
第 37 図　上塩冶横穴墓群36－３号穴遺物出土状況 …… 39
第 38 図　上塩冶横穴墓群36－３号穴前庭部遺物出土状況 …… 40
第 39 図　上塩冶横穴墓群第36支群正面図 …… 40
第 40 図　上塩冶横穴墓群36－１号穴出土土器実測図 …… 41
第 41 図　上塩冶横穴墓群36－２・３号穴出土土器実測図 …… 42
第 42 図　上塩冶横穴墓群第36支群出土金属器実測図 …… 43
第 43 図　上塩冶横穴墓群35・36支群出土甕実測図 …… 45・46
第 44 図　上塩冶横穴墓群第７支群位置図 …… 47
第 45 図　上塩冶横穴墓群第７支群調査後測量図 …… 48
第 46 図　上塩冶横穴墓群７－１号穴実測図 …… 49
第 47 図　上塩冶横穴墓群７－１号穴遺物出土状況 …… 50
第 48 図　上塩冶横穴墓群７－２号穴実測図 …… 51
第 49 図　上塩冶横穴墓群７－２号穴遺物出土状況 …… 52
第 50 図　上塩冶横穴墓群７－３号穴実測図 …… 53
第 51 図　上塩冶横穴墓群第７支群正面図 …… 53
第 52 図　上塩冶横穴墓群７－４号穴実測図 …… 54
第 53 図　上塩冶横穴墓群第７支群北壁土層図 …… 54
第 54 図　大井谷古墳墳丘測量図 …… 55
第 55 図　大井谷古墳土層図 …… 55
第 56 図　大井谷古墳石室実測図 …… 56
第 57 図　大井谷古墳石室実測図 …… 56
第 58 図　大井谷古墳石列・遺物検出状況 …… 57
第 59 図　上塩冶横穴墓群第７支群ピット断面図 …… 58
第 60 図　上塩冶横穴墓群第７支群出土遺物実測図 …… 59
第 61 図　上塩冶横穴墓群第12・22・23・33・37支群調査区位置図 …… 61
第 62 図　上塩冶横穴墓群第33支群調査前測量図 …… 62
第 63 図　上塩冶横穴墓群第33支群調査後測量図 …… 63
第 64 図　上塩冶横穴墓群33－３号穴実測図 …… 64
第 65 図　上塩冶横穴墓群33－３号穴遺物出土状況 …… 65
第 66 図　上塩冶横穴墓群33－４号穴実測図 …… 66
第 67 図　上塩冶横穴墓群33－４号穴遺物出土状況 …… 67
第 68 図　上塩冶横穴墓群33－４号穴墓道遺物出土状況 …… 67
第 69 図　上塩冶横穴墓群33－５号穴実測図 …… 68
第 70 図　上塩冶横穴墓群33－５号穴遺物出土状況 …… 69
第 71 図　上塩冶横穴墓群33－６号穴実測図 …… 70
第 72 図　上塩冶横穴墓群33－６号穴遺物出土状況 …… 71

第73図　上塩冶横穴墓群33－6号穴墓道遺物出土状況 …… 72
第74図　上塩冶横穴墓群33－6号穴出土石棺実測図 …… 73
第75図　上塩冶横穴墓群33－7号穴実測図 …… 74
第76図　上塩冶横穴墓群33－7号穴遺物出土状況 …… 75・76
第77図　上塩冶横穴墓群33－7号穴墓道遺物出土状況 …… 77
第78図　上塩冶横穴墓群33－7号穴出土石棺実測図 …… 78
第79図　上塩冶横穴墓群33－8号穴実測図 …… 79
第80図　上塩冶横穴墓群33－8号穴遺物出土状況 …… 80
第81図　上塩冶横穴墓群第33支群正面図 …… 80
第82図　上塩冶横穴墓群33－3・4・5・8号穴出土遺物実測図 …… 81
第83図　上塩冶横穴墓群33－6号穴出土遺物実測図 …… 82
第84図　上塩冶横穴墓群33－7号穴出土遺物実測図 …… 83
第85図　上塩冶横穴墓群33－7号穴出土遺物実測図 …… 84
第86図　上塩冶横穴墓群33－3・4・5・7・8号穴出土遺物実測図 …… 85
第87図　上塩冶横穴墓群33－6号穴出土遺物実測図 …… 86
第88図　上塩冶横穴墓群第33支群出土甕実測図 …… 87
第89図　上塩冶横穴墓群第33支群ＳＸ01実測図 …… 88
第90図　上塩冶横穴墓群第33支群ＳＸ01出土遺物実測図 …… 89
第91図　上塩冶横穴墓群第33支群ＳＸ02実測図 …… 90
第92図　三田谷2号墳調査前測量図 …… 91
第93図　三田谷2号墳墳丘測量図 …… 91
第94図　三田谷2号墳上層図 …… 92
第95図　三田谷2号墳実測図 …… 93
第96図　三田谷2号墳周溝内甕出土状況 …… 93
第97図　三田谷2号墳遺物出土状況 …… 94
第98図　三田谷2号墳実測図 …… 95・96
第99図　三田谷2号墳出土遺物実測図 …… 97
第100図　三田谷2号墳出土遺物実測図 …… 98
第101図　上塩冶横穴墓群第33支群石塔出土状況 …… 99
第102図　上塩冶横穴墓群第33支群出土石塔実測図 …… 100
第103図　上塩冶横穴墓群第33支群出土石塔実測図 …… 101
第104図　上塩冶横穴墓群第33支群出土五輪塔復元想定図 …… 102
第105図　上塩冶横穴墓群第33支群土坑実測図 …… 103
第106図　上塩冶横穴墓群第33支群出土遺物実測図 …… 104
第107図　上塩冶横穴墓群第12、22、23、37支群調査後測量図 …… 105
第108図　上塩冶横穴墓群12－1号穴実測図 …… 106
第109図　上塩冶横穴墓群12－2号穴実測図 …… 107

第110図　上塩冶横穴墓群12－2号穴遺物出土状況 …… 108
第111図　上塩冶横穴墓群12－4号穴実測図 …… 109
第112図　上塩冶横穴墓群第12支群正面図 …… 109
第113図　上塩冶横穴墓群第12支群出土遺物実測図 …… 110
第114図　上塩冶横穴墓群37－1号穴実測図 …… 111
第115図　上塩冶横穴墓群37－1号穴遺物出土状況 …… 112
第116図　上塩冶横穴墓群37－1号穴出土遺物実測図 …… 112
第117図　上塩冶横穴墓群第22支群配置図 …… 112
第118図　上塩冶横穴墓群22－1号穴実測図 …… 113
第119図　上塩冶横穴墓群22－2号穴実測図 …… 114
第120図　上塩冶横穴墓群22－2号穴出土石床実測図 …… 115
第121図　上塩冶横穴墓群22－2号穴遺物出土状況 …… 116
第122図　上塩冶横穴墓群22－2・3号穴前庭遺物出土状況 …… 117
第123図　上塩冶横穴墓群22－3号穴実測図 …… 118
第124図　上塩冶横穴墓群22－3号穴遺物出土状況 …… 120
第125図　上塩冶横穴墓群22－4号穴実測図 …… 121
第126図　上塩冶横穴墓群22－4号穴遺物出土状況 …… 122
第127図　上塩冶横穴墓群22－5号穴実測図 …… 123
第128図　上塩冶横穴墓群22－5号穴遺物出土状況 …… 124
第129図　上塩冶横穴墓群22－6号穴実測図 …… 125
第130図　上塩冶横穴墓群22－6号穴遺物出土状況 …… 126
第131図　上塩冶横穴墓群22－7号穴実測図 …… 127
第132図　上塩冶横穴墓群22－7号穴遺物出土状況 …… 128
第133図　上塩冶横穴墓群22－8号穴実測図 …… 130
第134図　上塩冶横穴墓群22－8号穴遺物出土状況 …… 131
第135図　上塩冶横穴墓群22－9号穴実測図 …… 132
第136図　上塩冶横穴墓群22－9号穴遺物出土状況 …… 133
第137図　上塩冶横穴墓群22－10号穴実測図 …… 134
第138図　上塩冶横穴墓群22－10号穴屍床実測図 …… 135
第139図　上塩冶横穴墓群22－11号穴実測図 …… 136
第140図　上塩冶横穴墓群22－11号穴遺物出土状況 …… 137
第141図　上塩冶横穴墓群22－12号穴実測図 …… 138
第142図　上塩冶横穴墓群22－12号穴遺物出土状況 …… 139
第143図　上塩冶横穴墓群22－13号穴実測図 …… 140
第144図　上塩冶横穴墓群22－13号穴遺物出土状況 …… 141
第145図　上塩冶横穴墓群22－14号穴実測図 …… 142
第146図　上塩冶横穴墓群22－14号穴遺物出土状況 …… 143

第147図　上塩冶横穴墓群22－15号穴実測図 …… 144
第148図　上塩冶横穴墓群22－15号穴遺物出土状況 …… 145
第149図　上塩冶横穴墓群22－16号穴実測図 …… 146
第150図　上塩冶横穴墓群22－16号穴遺物出土状況 …… 147・148
第151図　上塩冶横穴墓群22－15・16号穴前庭部前方土層図 …… 149
第152図　上塩冶横穴墓群22－17号穴実測図 …… 150
第153図　上塩冶横穴墓群22－17号穴遺物出土状況 …… 151
第154図　上塩冶横穴墓群22－18号穴実測図 …… 152
第155図　上塩冶横穴墓群22－18号穴遺物出土状況 …… 153
第156図　上塩冶横穴墓群22－19号穴実測図 …… 154
第157図　上塩冶横穴墓群22－19号穴遺物出土状況 …… 155
第158図　上塩冶横穴墓群22－20号穴実測図 …… 156
第159図　上塩冶横穴墓群22－21号穴実測図 …… 157
第160図　上塩冶横穴墓群22－21号穴遺物出土状況 …… 158
第161図　上塩冶横穴墓群第22支群ＳＫ01実測図 …… 158
第162図　上塩冶横穴墓群第22支群石製品出土状況 …… 159
第163図　上塩冶横穴墓群第22支群出土石製品実測図 …… 159
第164図　上塩冶横穴墓群第22支群正面図 …… 160
第165図　上塩冶横穴墓群22－３号穴出土遺物実測図 …… 161
第166図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図 …… 162
第167図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図 …… 163
第168図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図 …… 164
第169図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図 …… 165
第170図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図 …… 166
第171図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図 …… 167
第172図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図 …… 168
第173図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図 …… 169
第174図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図 …… 170
第175図　上塩冶横穴墓群22－７号穴出土玉実測図 …… 171
第176図　上塩冶横穴墓群第23支群配置図 …… 172
第177図　上塩冶横穴墓群23－１号穴実測図 …… 173
第178図　上塩冶横穴墓群23－１号穴遺物出土状況 …… 174
第179図　上塩冶横穴墓群23－２号穴実測図 …… 175
第180図　上塩冶横穴墓群23－２号穴遺物出土状況 …… 176
第181図　上塩冶横穴墓群23－３号穴実測図 …… 177
第182図　上塩冶横穴墓群23－３号穴遺物出土状況 …… 177
第183図　上塩冶横穴墓群23－４号穴実測図 …… 178

第184図　上塩冶横穴墓群23－4号穴遺物出土状況 …… 179
第185図　上塩冶横穴墓群23－5号穴実測図 …… 181
第186図　上塩冶横穴墓群23－5号穴遺物出土状況 …… 182
第187図　上塩冶横穴墓群23－6号穴実測図 …… 183
第188図　上塩冶横穴墓群23－6号穴遺物出土状況 …… 184
第189図　上塩冶横穴墓群23－7号穴実測図 …… 185
第190図　上塩冶横穴墓群23－7号穴遺物出土状況 …… 186
第191図　上塩冶横穴墓群第23支群SK01実測図 …… 187
第192図　上塩冶横穴墓群23－4・5・6号穴遺物出土状況 …… 187
第193図　上塩冶横穴墓群第23支群正面図 …… 188
第194図　上塩冶横穴墓群第23支群出土遺物実測図 …… 189
第195図　上塩冶横穴墓群第23支群出土遺物実測図 …… 190
第196図　上塩冶横穴墓群23－1号穴出土遺物実測図 …… 192
第197図　上塩冶横穴墓群第23支群出土遺物実測図 …… 193
第198図　上塩冶横穴墓群第23支群出土遺物実測図 …… 194
第199図　半分城跡石製品土層図 …… 195
第200図　半分城跡石製品実測図 …… 196
第201図　半分城跡加工段実測図 …… 197
第202図　半分城跡土層図 …… 197
第203図　半分城跡土層図 …… 198
第204図　半分城跡出土古銭拓影 …… 198
第205図　上塩冶横穴墓群第22・23支群石切場平面図・正面図 …… 199
第206図　上塩冶横穴墓群第22・23支群石切場断面図 …… 200
第207図　上塩冶横穴墓群第22・23支群出土遺物実測図 …… 201
第208図　上塩冶横穴墓群第22・23支群出土遺物実測図 …… 202
第209図　上塩冶横穴墓群第22・23支群出土遺物実測図 …… 203
第210図　上塩冶横穴墓群第22・23支群出土遺物実測図 …… 204
第211図　半分瓦窯跡出土遺物実測図 …… 206
第212図　半分瓦窯跡出土遺物実測図 …… 207
第213図　上塩冶横穴墓群第22支群製作工程推定図 …… 210
第214図　工具痕拓影 …… 211
第215図　上塩冶横穴墓群23－7号穴壁画拓影 …… 212
第216図　上塩冶横穴墓群22－16号穴出土石材実測図 …… 217

Ⅰ　調査に至る経緯と経過

1．調査に至る経緯

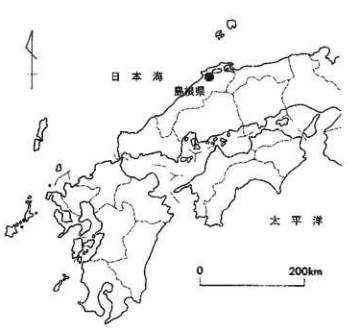
斐伊川放水路事業は、斐伊川の計画高水流量の一部を中流左岸の出雲市大津町来原付近から新たに放水路を開削して分流し、出雲市上塩冶町半分付近において神戸川に合流させるものである。また、それにより神戸川下流は、神戸川の自己流量と斐伊川からの分流量を合わせ、計画高水流量の斐伊川放水路として必要な掘削・築堤工事を行おうとする事業である。その規模は、開削部4.1km、拡幅部9.0kmで、全長13.1kmにも及ぶ。この計画は、斐伊川の流水の一部を早く、しかも安全に日本海に流すことを目的としたもので、島根県が昭和44年に基本構想を発表、同50年に基本計画を策定し、建設省が同51年に確定したものである。ルートの最終決定は54年のことであった。

こうした事業計画の推移・決定のなか、島根県教育委員会は昭和50年度に島根県企画部の依頼を受けて、分流地域の分布調査を実施し、その結果を昭和51年３月に「斐伊川放水路建設予定地域埋蔵文化財分布調査報告」としてまとめ提出した。また、昭和53・54年度には、建設省出雲工事事務所から委託を受けて、上塩冶町を中心とする出雲市全域と簸川郡大社町に所在する遺跡を対象としながら一部発掘調査を含んで分布調査を行い、この結果をもとに、昭和55年３月に『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』を刊行した。

その後、事業地の用地買収が進む一方で、平成元年度より建設省出雲工事事務所、島根県斐伊川神戸川治水対策課及び島根県教育庁文化課の三者で協議が進められ、平成３年１月には文化課が再度分布調査を実施した。そして、同年度末には同事務所と文化課との間で協議文書が交わされ、事前に予定地内にある埋蔵文化財を発掘調査することが決定し、平成３年４月より発掘調査事業がスタートした。

2．調査の経緯

本書関係の事業年度は平成６～９年度である。平成６年度、島根県教育委員会と建設省中国地方建設局は４月１日付けで委託契約を結び、４月20日から２班体制で現地調査を行った。１班は三田谷の沈砂池の必要性から三田谷１遺跡の谷部を、もう１班が大井谷と狐廻谷を結ぶ工事用仮設道の建設のため順次、大井谷城跡、上塩冶横穴墓群第７支群、上沢Ⅱ遺跡を発掘調査した。



第１図　調査対象位置図

大井谷城跡はⅡ区から掘立柱建物跡１棟検出した。その後、谷部を発掘し、遺物などを発見した。その後、Ⅲ区に移動し、頂部発掘中、横穴墓が見つかった。横穴墓は東西２つの斜面に存在しており、東側を上塩冶横穴墓群第35支群、西側を第36支群とし調査した。横穴墓群については９月12月

に調査指導を受けた。Ⅳ区は丘陵先端付近であるが、北西側に平坦面を検出したのみであった。

上塩冶横穴墓群第７支群は用地買収の都合により２ヶ年で調査を行った。６年度は急斜面から３穴の横穴墓を検出した。

上沢Ⅱ遺跡は表土除去の後、岩盤の加工跡を確認し、写真測量を行い調査を終了した。

その後、Ｇ．Ｓ．事業に対応し、Ｂ谷アクセス道路建設のため、Ｂ１・２のトレンチ調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。現地調査は12月22日に終わった。

平成７年度は４月３日付けで委託契約を結び、現地調査は３班体制で、４月17日から12月22日まで行った。１班は昨年度に引き続き三田谷Ⅰ遺跡の調査を行った後、白石谷遺跡に移動した。１班は放水路右岸の農道工事のため放水路予定地内の北側を中心に、上塩冶横穴墓群第22・23・37支群を調査した。もう１班は、Ｇ．Ｓ．事業に対応し、Ｂ谷アクセス道路建設地内のトレンチ調査後、神戸川拡幅に伴う古志橋の掛け替えのために古志本郷遺跡の調査を行った。

まず、上塩冶横穴墓群の調査は頂部にある半分城跡から開始し、途中から平行して第22支群の調査を実施した。調査は重機で表土掘削を行い、丘陵先端の横穴墓から順次谷の奥へ向かって調査した。第22支群９号穴からは金糸と金製の環を検出した。８月12日に横穴墓群の調査指導会を開くとともに、随時、人骨の調査指導も受けた。11月18日に現地説明会を行い300人以上の参加者があった。

平成８年度は４月１日付けで委託契約を結び、現地調査は４班体制で、４月15日から12月20日まで行った。半分大橋の建設予定のため三田谷Ⅰ遺跡、昨年度に引き続き古志本郷遺跡、放水路右岸側の上塩冶横穴墓群第７・33・12支群、１班は半分城跡・上塩冶横穴墓群第28支群の後、Ｇ．Ｓ．事業に対応し、Ｂ谷トレンチ調査を行った。もう１班は報告書を作成した。

上塩冶横穴墓群の調査は第７支群から始め、前回の調査区の南側斜面と緩斜面を調査し、横穴墓１穴、横穴式石室１基、多数のピットを確認した。横穴式石室について７月11日に調査指導を受けた。また、Ｇ．Ｓ．事業に対応し、Ｃ－１の一部をトレンチ調査した。その後、第33支群の調査を開始し、横穴式石室１基、石棺１基、横穴墓６穴を確認した。９月19日に調査指導会を開いた。９月28日には三田谷Ⅰ遺跡と半分城跡とともに現地説明会を行い、好天に恵まれ300人以上の参加者があった。

その後、７年度に確認していた第12支群の調査を開始し、４穴の横穴墓を確認したが、１穴は用地境界に存在することがわかり、保存を依頼し、３穴のみ調査を実施した。また、11月25日に狐廻谷の開削部内で工事中に横穴式石室が発見され、工事を中止させ、すぐに発掘調査を行い、12月26日に現地調査を終了した。

平成９年度は４月１日付けで委託契約を結び、三田谷Ⅰ遺跡、権現山石切場跡、古志本郷遺跡、間府川水路跡、Ｇ．Ｓ．事業に対応し、Ａ谷とＣ谷の一部のトレンチ調査及び木調査（蟹谷遺跡）を行い、１班は整理作業を進め本書を作成した。

３．調査組織

本書に記載した遺跡の発掘調査の関係者は次のとおりである。

○平成６年度（1994）

事務局　広沢卓嗣（文化課長）、勝部　昭（埋蔵文化財調査センター長）、野村純一（課長補佐）、佐伯善治（課長補佐）、工藤直樹（企画調整係主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）

調　査　員　西尾克己（埋蔵文化財調査センター調査第３係長）、定方克之（同教諭兼文化財保護主事）、亀井良一（同教諭兼主事）、守岡正司（同主事）、阿部智子（臨時職員）

調査指導者　池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）、渡辺貞幸（島根大学教授）、花田勝広（野洲町教育委員会）

○平成７年度（1995）

事　務　局　勝部昭（文化財課長）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、森山洋光（課長補佐）、佐伯善治（課長補佐）、渋谷昌宏（企画調整係主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）

調　査　員　西尾克己（埋蔵文化財調査センター主幹）、亀井良一（同教諭兼文化財保護主事）、守岡正司（同主事）、坂本順子（臨時職員）、行藤たけし（臨時職員）

調査指導者　池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）、渡辺貞幸（島根大学教授）、井上貴央（鳥取大学教授）、池上悟（立正大学助教授）

○平成８年度（1996）

事　務　局　勝部昭（文化財課長）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、森山洋光（課長補佐）、古崎蔵治（課長補佐）、渋谷昌宏（企画調整係主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）

調　査　員　宮沢明久（埋蔵文化財調査センター主幹）、亀井良一（同教諭兼文化財保護主事）、守岡正司（同主事）、伊藤智（同主事）、坂本順子（臨時職員）

調査指導者　池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）、渡辺貞幸（島根大学教授）

○平成９年度（1997）

事　務　局　勝部昭（文化財課長）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、島地徳郎（課長補佐）、古崎蔵治（課長補佐）、渋谷昌宏（企画調整係主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）

調　査　員　宮沢明久（埋蔵文化財調査センター主幹）、守岡正司（同主事）、梅木政志（臨時職員）

調査指導者　澤田順弘（島根大学教授）、村上勇（広島県立美術館主任学芸員）

平成７年度、平成８年度の発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、㈱中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から㈱中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人　中国建設弘済会島根支部

布村幹夫（現場事務所長）、原博明、中村弘己、松崎潤、竹田光男、北川憲樹（以上技術員）

板倉律子、原洋子（以上事務員）

発掘調査作業員

荒木恵理子、安部孝代、石川恒夫、石田好子、伊藤務、伊藤猪造、板倉博、板倉四郎、原博信、今岡実、今岡陽子、飯島鑑、飯塚春枝、飯塚美代子、飯国マサコ、飯国倍嘉、飯国協二、飯国美代子、内田勝之、内田一信、上田ミチエ、漆谷澄子、江原美幸、江戸友義、大森俊貞、奥井和男、奥井久子、川上顕、勝部登美子、加藤薫、加藤源次郎、川谷重子、木村栄一、景山晃吉、岸末男、北脇光雄、黒見奈美、斉藤さち子、佐藤益子、佐藤宣美、佐々木明美、須山林吉、杉原節子、杉

原不二子、塩野荘二、神西博江、周藤啓悟、田中重吉、高橋加代子、高橋辰夫、武田淑子、富室和、中島和恵、中島三恵子、永瀬廣吉、永田利恵、永田利江、永田節子、長岡公子、成相幸子、柳楽孝子、野津研一、錦織恵美子、萬代とみ子、原留美子、東原敬子、樋野国男、福代真寿子、福島力、深津光子、福島茂、藤原るみ、槙原幸成、前田慎二、松本太相、溝山由美、三島良、棟石庫七、村上智子、向村房子、室元三紀子、持田貞次、矢田愛子、矢田君枝、矢田千也子、矢田絹子、吉田茂、吉田末子、吉田甫、吉田建造、吉田京子、山田朝野、山本昇、和田虎雄

遺物整理

野中洋子、来海順子、高橋啓子、藤原須美子、月森和子、釘宮和子、金森千恵子、守屋かおる、須山啓子、阿部春枝、田村尚子、加藤麻子、鎌田民江、石川とみ子、槇野喜久恵、中島直美、松井公子、伊藤ゆき江、高瀬則子、向村えりな、内藤洋子、和木洋子、秋国佳枝

なお、調査・整理にあたっては、以下の方々から助言・指導・協力を得た。記して感謝を表しておきたい。（敬称略・年度順）

三浦一美（柿木村教育委員会）、益永浩仁（菊水町教育委員会）、前田軍治（熊本県立装飾古墳館）、最上敏（熊本県立装飾古墳館）、中村唯史（島根大学総合理工学部）、町田章（奈良国立文化財研究所）、村上隆（奈良国立文化財研究所）、西田武彦（文化庁文化財保護部）、和田晴吾（立命館大学）、新納泉（岡山大学）、安村俊史（柏原市教育委員会）、水津浩信（六日市町教育委員会）、菱田哲郎（京都府立大学）、今泉潔（房総風上記の丘）、勝部衛（玉湯町教育委員会）、川上稔・松山智弘・遠藤正樹・高橋智也・藤永照隆（出雲市教育委員会）

参考文献

島根県教育委員会、建設省出雲工事事務所『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980年

島根県教育委員会、建設省出雲工事事務所『三田谷Ⅱ遺跡、上沢Ⅰ遺跡』1994年

島根県教育委員会、建設省出雲工事事務所『上塩冶横穴群第20・21支群』1995年

島根県教育委員会、建設省出雲工事事務所『大井谷石切場跡、上塩冶横穴墓群第14・15・16支群』1997年

『斐伊川放水路発掘物語Ⅰ～Ⅲ』1995～97年

Ⅱ 位置と環境

本報告の遺跡は出雲市上塩冶町に所在し、出雲平野の南側丘陵に位置する。

上塩冶町は出雲市の中心地から南へ2kmと離れておらず、数年前までは水田地帯であったが、現在は、島根医科大学の周辺を中心に宅地化が進んでいる。

出雲市は斐伊川と神戸川の堆積作用で形成された平野部とその北側の島根半島（北山）と南側の丘陵部からなる。平野中央部は遺跡の分布状況や地質学研究から約3600年前頃から形成され、山間部において製鉄業が盛んになり、「鉄穴流し」により土砂の流入が激しくなった中・近世に完成したと考えられ、地下には川跡や微高地などが埋もれており、発掘調査や地質学的・地理学的調査により旧地形が解明されつつある。

遺跡のある南側の丘陵は中国山地から平野に向かって少しずつ標高を下げ、標高20～150mほどでやや平坦になる。このような丘陵の尾根上や斜面には遺跡が存在する。多くの横穴墓が掘られている凝灰岩は約1600万年前に形成され、内部には貝類や樹木などの化石を含む。凝灰岩の上層は凝灰質泥岩、凝灰質砂岩、砂岩が堆積し、一部に火山性礫岩がある。また、丘陵西側の神戸川沿いには段丘も存在している。以下では出雲平野周辺の遺跡を中心に概観しておきたい。

出雲平野の集落が本格的に形成され始めたのは弥生時代中期頃である。しかし、丘陵縁辺部には縄文時代まで遡る遺跡があり、古くから人類の営みがあったと考えられる。集落遺跡など地形的制約を受けながら、人々はそれを克服しながら、平野開発を行い、生活空間を広げていった。

縄文時代

前期として平野北側に繊維土器が山土し、この平野では最も古い菱根遺跡、西側には早期末から前期初めの土器や石器が出土した上長浜貝塚がある。遺跡は平野縁辺部に数個所確認でき、人々が生活し始めていたことがわかる。中期の遺跡は不明であるが、後・晩期になると、大社境内遺跡、三田谷Ⅰ遺跡などの平野縁辺部だけでなく、平野中央部の矢野遺跡にも分布は広がり、平野への居住の足がかりとしている。

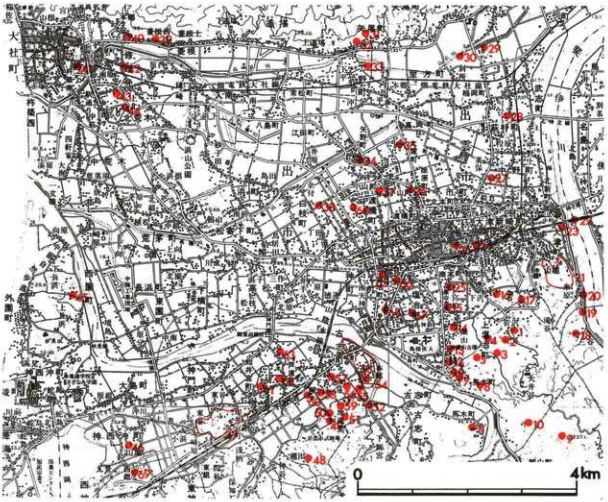
弥生時代

前期の遺跡は縄文時代晩期から続く遺跡が多く、原山遺跡や矢野遺跡が有名である。原山遺跡からは前期前半の土器、石剣、配石墓などが検出され、大きな集落が形成されつつあることが窺える。中期には平野が安定化したと思われ、神戸川右岸だけでなく、左岸にも遺跡が出現し始め、古志本郷遺跡、天神遺跡、四絡遺跡群など大溝を持つ大規模な集落が形成され、出雲平野の開発が進んでいったことがわかる。その頃、丘陵周辺からは大社町命主神社や斐川町神庭荒神谷遺跡から青銅器が発見されている。後期の集落は多く発見され、中期以降続く山持川川岸遺跡、石土手遺跡、斐伊川鉄橋遺跡など遺跡も増加し、平野部はかなり開発が進んでいたと思われる。そのころ斐伊川を見下ろす出雲市大津町の丘陵上に四隅突出型墳丘墓をもつ西谷墳墓群が造られ、出雲平野を統括する有力者の存在が窺える。3号墓は、30～40mの大きさをもつ。

古墳時代

古志本郷遺跡では前期に大溝が埋まり、多くの集落は弥生時代から引き続いたものである。しかし、前期の中で集落が終わるものがある一方、中・後期に新たに集落が形成されるものがあり、群集墳や

横穴墓を生み出す基盤ができたのであろう。前期古墳は集落の数に見合うほど発見されず、全長約50mの前方後円墳である大寺1号墳や円墳で筒形銅器や鏡を持つ山地古墳が存在するほどで、最古級の古墳がないことや円墳系の古墳が多いことなど、古墳築造には方墳が主体である安来市荒島墳墓群とは異なる背景があったのだろうか。中期古墳には平野西南部の丘陵上に65mの前方後円墳である北光寺古墳がある。その他、中～後期の小古墳として北山周辺や仏経山周辺から発見されているが、継続した首長墓系列は現在の所見いだせない。後期になると北山南麓に上島古墳が突如出現する。この古墳は家形石棺を直葬し、多くの馬具が検出され、家形石棺は近畿地方からの影響が見て取れる。その後、北山南麓には大型の古墳はなく、大型古墳は神戸川両岸付近の丘陵地帯に移動する。神戸川右岸に出現した前方後円墳の大念寺古墳は全長約92mを測り、墳丘や石室規模は突出しており、この古墳の出現は出雲平野一帯だけでなく周辺地域がまとまりを持ったことの表れであろう。その後、上塩冶築山古墳・地蔵山古墳に続くが、7世紀前後には石室墳は消え、石室墳と一部重複して、上塩冶横穴墓群が出現する。凝灰岩に掘られたものが多く、精美で、石棺を内蔵するものや装飾大刀・金糸などを副葬することからかなりの有力者も埋葬されていたと思われる。また、神戸川左岸は規模は小さいが、右岸と同じ様相を示し、妙蓮寺山古墳、宝塚古墳、放れ山古墳、大梶古墳が造営される。さらに、南側丘陵には横穴式石室を内部主体とする刈山古墳群や地蔵堂横穴墓群、井上横穴墓群、神門横穴墓群など大規模な横穴墓群も形成される。なお、仏経山周辺や旅伏山周辺の北山にも小規模で横穴式石



第2図　周辺の遺跡

室を持つ古墳が分布し、石室形態やその形態変遷が神戸川周辺の大型古墳と同じであることから密接な関係が成立していたと考えられる。

奈良・平安時代

官衙跡と思われるものとして和銅開珎・「高岸神門」などの木簡、緑釉陶器、墨書土器などが出土した三田谷Ⅰ遺跡、緑釉陶器、墨書土器、大型の掘立柱建物跡が検出された大神遺跡、緑釉陶器が出土した古志本郷遺跡がある。また、古瓦が出土している神門寺境内廃寺や古志遺跡などがあり、733年に編纂されたといわれる『出雲国風土記』の記載との比定が進められている。他に大寺古墳の隣接地にあり、多くの土器が出土した大寺三蔵遺跡、上長浜貝塚などの一般集落遺跡も知られている。古墓として平野南側丘陵に石製骨蔵器を備える菅沢古墓、朝山古墓、さらに、小坂古墳の石室内に置かれた石櫃や須恵器の骨蔵器を使用した西谷古墓があり、火葬の風習がこの地方にも存在していることがわかる。出雲平野は弥生時代や古墳時代の遺跡が注目されているが奈良・平安時代についても解明が進みつつある。

中　　世

前代から続く出雲一宮の出雲大社やその別当寺である鰐淵寺の存在や出雲守護職の佐々木氏が出雲東部から出雲平野中央部の塩冶郷に守護所を置くなど、鎌倉時代後半期の一時、出雲国の中心になる。

第1表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	No.	遺　跡　名	No.	遺　跡　名
1	上沢Ⅱ遺跡	24	大念寺古墳	47	神門横穴墓群
2	狐廻谷古墳	25	角田遺跡	48	深田谷横穴墓群
3	上塩冶横穴墓群第7支群	26	塚山古墳	49	地蔵堂横穴墓群
4	大井谷城跡	27	太歳遺跡	50	地蔵堂北横穴墓群
5	上塩冶横穴墓群第22支群	28	荻杼古墓	51	浄土寺山城跡
6	上塩冶横穴墓群第33支群	29	山持川川岸遺跡	52	放れ山古墳
7	三田谷Ⅰ遺跡	30	里方別所遺跡	53	大梶古墳
8	光明寺古墳群	31	大前山古墳	54	古志本郷遺跡
9	唐墨城跡	32	石臼古墳	55	古志遺跡
10	大坊古墓	33	里方八石原遺跡	56	田畑遺跡
11	小坂古墳	34	矢野遺跡	57	正蓮寺周辺遺跡
12	半分古墳	35	大塚遺跡	58	宝塚古墳
13	地蔵山古墳	36	姫原西遺跡	59	妙蓮寺山古墳
14	上塩冶築山古墳	37	小山遺跡	60	天神原古墳
15	宮松遺跡	38	白枝荒神遺跡	61	知井宮多聞院遺跡
16	下沢古墳	39	菱根遺跡	62	束原遺跡
17	菅沢古墓	40	修理免本郷遺跡	63	極楽寺付近遺跡
18	権現山横穴墓群	41	鹿蔵山遺跡	64	弓原遺跡
19	長廻横穴墓群	42	原山遺跡	65	大神遺跡
20	来原岩陰	43	南原貝塚	66	高西遺跡
21	西谷墳墓群	44	中分貝塚	67	神門寺付近遺跡
22	斐伊川鉄橋遺跡	45	上長浜貝塚	68	橋渡沖遺跡
23	石土手遺跡	46	山地古墳	69	神来山古墳群

また、平野中央部には橋渡沖遺跡や古豪の一つである朝山氏の館跡と推定される蔵小路西遺跡などが存在する。備前焼等が多量に出土した大社町鹿蔵山遺跡も有力者の館跡と考えられている。この時期、青磁等を副葬する荻杼古墓が造られる。蔵小路西遺跡は幅約４ｍの堀や掘立柱建物跡、12～15世紀の遺物が検出され、今後、平野の開発や支配関係を文献だけでなく遺跡からも解明できるであろう。戦国時代には中国地方の雄尼子氏と毛利氏などの戦いがあり、平野を見下ろす丘陵上には鵞ケ巣城跡や唐墨城跡や半分城跡などの多くの山城が点在し、当時、戦いに明け暮れた平野の様子を今日に伝えている。

以上のように出雲平野では大規模発掘が続いており、平野の形成過程や開発状況などの解明に必要な新たな資料が増加しつつある。

参考文献

出雲考古学研究会『出雲平野の集落遺跡Ⅰ・Ⅱ』1983・1986

出雲考古学研究会『荒島墳墓群』1985

出雲考古学研究会『石棺式石室の研究』1987

池田満雄「出雲・西谷出土の骨蔵器」「出雲・菅沢古墓」『島根県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』1971

池田満雄・足立克己「出雲市矢野遺跡出土の縄文土器」『島根考古学会誌４』1987

池田満雄「考古資料」「史跡」『出雲市の文化財１・２』1956・1960

池田満雄「上島古墳調査報告」『古代学研究10』1954

島根県教育委員会・建設省出雲工事事務所『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980

出雲市教育委員会『山地古墳発掘調査報告書』1986

出雲市教育委員会『上長浜貝塚』1996

出雲市教育委員会『神門寺境内廃寺』1985

出雲市教育委員会『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書１～７』1988～97

出雲市教育委員会『地蔵堂横穴墓群発掘調査報告書』1994

出雲市教育委員会『天神遺跡第７次発掘調査報告書』1997

出雲市教育委員会『史跡今市大念寺古墳保存修理事業報告書』1988

近藤正「出雲・荻杼古墓発見の骨蔵器」『考古学雑誌』54－3　1969

島根大学山陰地域研究総合センター『古代出雲文化の展開に関する総合的研究』1989

島根大学山陰地域研究総合センター『古代企属生産の地域的特性に関する研究』1992

田中義昭・西尾克己「出雲平野における原始・古代の集落について」『山陰地域研究４』1988

島根県埋蔵文化財調査センター『島根県埋蔵文化財調査センター年報Ⅰ～Ⅴ』1993～97

朝日新聞社『アサヒグラフ銅鐸の谷』1997

西尾克己・大国晴雄『出雲平野の古墳』1991

山本清「古墳」『出雲市誌』1951

Ⅲ 上沢Ⅱ遺跡

調査の概要

上沢Ⅱ遺跡は菅沢から南へ入る狐廻谷の入口付近にある低丘陵麓に位置し、標高13mの西向きの斜面に存在する。平成5年度のトレンチ調査の結果、井戸や垂直に立ち上がる凝灰岩の岩盤が露出し、その表面に多数の工具痕が存在した。さらに、地面と斜面の境には井戸跡や土坑があることから平成6年9月26日から11月15日まで発掘調査を行った。調査は埋土がほとんどなく、露頭に若干生えていた草木の除去のみであった。また、その前方はコンクリートなどや最近の陶磁器が検出され、最小限の発掘にとどめた。

調査の結果、井戸跡1基、土坑2基、石垣状遺構1基、柱穴3穴、岩盤を刳り抜いた穴を確認した。さらに、斜面と床面の表面に工具痕が確認できた。なお、斜面から7m付近まで床面にも岩盤は続いており、一部その岩盤に掘り窪められていた。

井戸跡

現在でも水が湧いているため内部の調査は実施できなかった。岩盤と地面の境に掘られた井戸で、深さ3m以上、径0.9～1mの円形プランを呈する。前面には56×60cmと50×64cm、厚さ18～20cmを測る2枚の方形の砂岩が置かれていた。井戸内部は凝灰岩を掘り下げているため、工具痕が残っていた。工具痕は幅5～10cmの半刃で、壁に向かって斜め上方から工具を使用している。

SK01

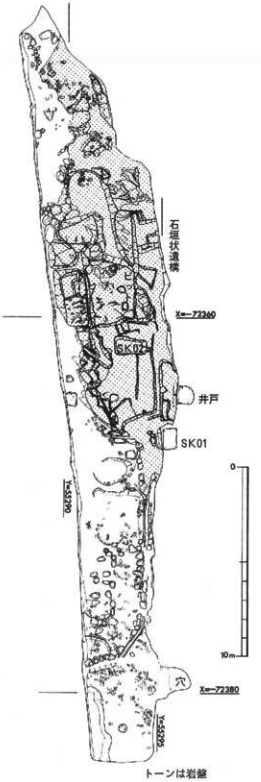
井戸跡の南側にあり、1.12×0.68m、深さ0.82mを測る方形プランを呈する。岩盤と地面との境付近から掘られ、内部は凝灰岩にある。調査前には20cmほど落ち葉や黒色土が堆積しているのみであった。

第3図　上沢Ⅱ遺跡位置図（S＝1／1000）

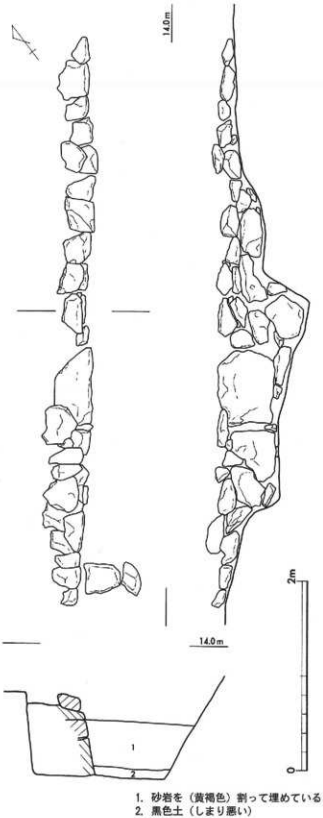
内部の表面には井戸跡と同じ工具痕が残る。時期や用途不明。

SK02

上幅は東側で0.8m、西側で１m、長さは1.7m、深さは東側で0.4m、西側で0.27mを測る。長方形プランであるが、中央付近で20cm東側が狭くなる。床面は平らで、東側が低くなる。内部には拳大の自然石（玄武岩）の角礫が固く詰められていた。内面の工具痕は井戸跡と同じである。時期や用途不明。



第４図　上沢Ⅱ遺跡平面図（S＝1／200）



第５図　上沢Ⅱ遺跡石垣実測図（S＝1／40）

石垣状遺構（第５図）

長さ４ｍ、下幅0.7ｍ、深さ0.5ｍの大きな掘り込みがある。床面は岩盤を掘り下げ、南壁は垂直に、北壁はスロープ状になる。西壁は垂直に立ち上がるが、壁に沿って長さ３ｍ、高さ0.3～0.5ｍの石垣が築かれていた。石垣は上面の高さを揃えるように浅いところで１段、深いところでは４段に石を積み上げている。基本的には厚さ10cm前後の扁平な石を使用しているが、大きなものは30cm×40cmを測る。内側（東向き）に面を揃え、石材は安山岩、玄武岩の角礫が使用される。裏込めは10cmほどである。用途や時期は不明。

ピット

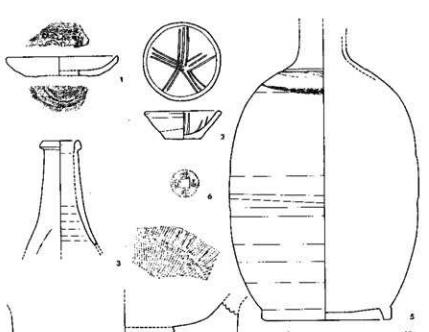
床面の岩盤にあり、深さ約５cmの円形や長方形のピットが３個確認できた。規模は30×40cmで、ピット間隔は0.9ｍと1.2ｍを測る。用途は不明だが、一部が直線的に並ぶことから柱を立てるための窪みと推定できる。

工具痕

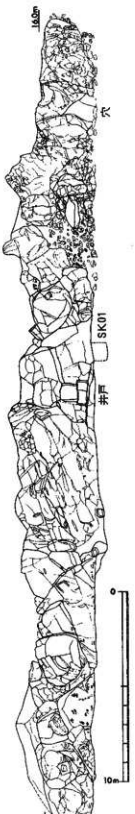
岩盤の表面には２種類の工具痕が認められた。一つは幅５～10cmの半刃で、他は一辺８～10cmの方形を呈し、深さ２cmほど残る。前者はノミ状の工具を、後者はクサビ状の工具を想定できる。場所としては前者は北側の斜面と床面にあり、後者は井戸の上部のみで確認できた。

出土遺物（第６図）

古銭１点と陶磁器が多数出土した。陶磁器は近代から現代のものであり、その一部を図化した。土師器(1)は内面に「大」などの押印が施されている。石見焼(3)は徳利の表面に鉄絵が描かれ、このようなものは大正年間までのものであるという。(5)は表面に白色で「大山」とあり、この銘柄は第二次世界大戦前のものである。(6)は寛永通宝である。



第６図　上沢Ⅱ遺跡出土遺物実測図（S＝1／3）



第７図　上沢Ⅱ遺跡正面図（S＝1／200）

Ⅳ 狐廻谷古墳

調査の概要

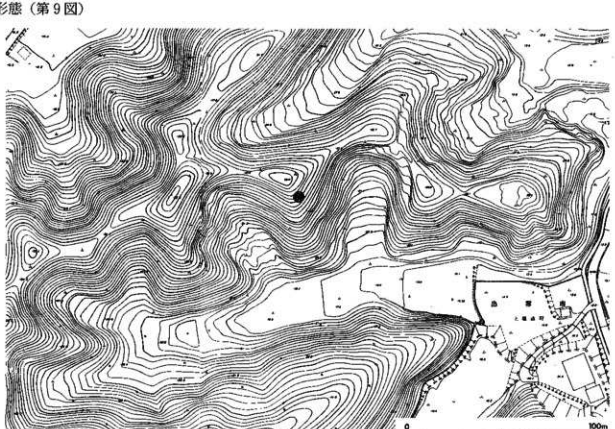
平成８年11月25日に建設省から「22日に工事中、石組みが出土し、工事を止めているが遺跡か確認してほしい」と連絡があり、即現地に向かった。現地を実見した結果、古墳と判断し、その旨を伝え諸手続を行い、発掘調査を実施した。調査は11月25日から始めたが、かなりの範囲で削平されていることがわかり、石室の実測と測景調査を実施し、12月４日に終了した。

菅沢から南の丘陵に向かって入る谷・狐廻谷は大井谷の東側に位置する。この谷の中程から西側に小さな谷が入っているが、この谷の北側丘陵の南向き斜面に狐廻谷古墳は所在する。この古墳は墳丘や横穴式石室の羨道部は残っておらず、わずかに側壁と奥壁の１段分と床石のみ残存していた。

北・西・南側は重機による掘削で破壊され、東側もすぐに丘陵斜面になっているので、本来も大きな墳丘があったかは不明である。聞き取りによると大きな石材は動かしておらず、羨道部の石材や天井石は工事開始時には見えなかったという。周囲の調査をおこなったが大きな石材は発見できず、証言と一致する。また、発掘調査や聞き取り調査から遺物の出土は確認できなかった。これらのことを含めて考えると本当に古墳か確定しにくいが、凝灰岩の使用、石材の組み方から古墳と判断して発掘調査を行った。

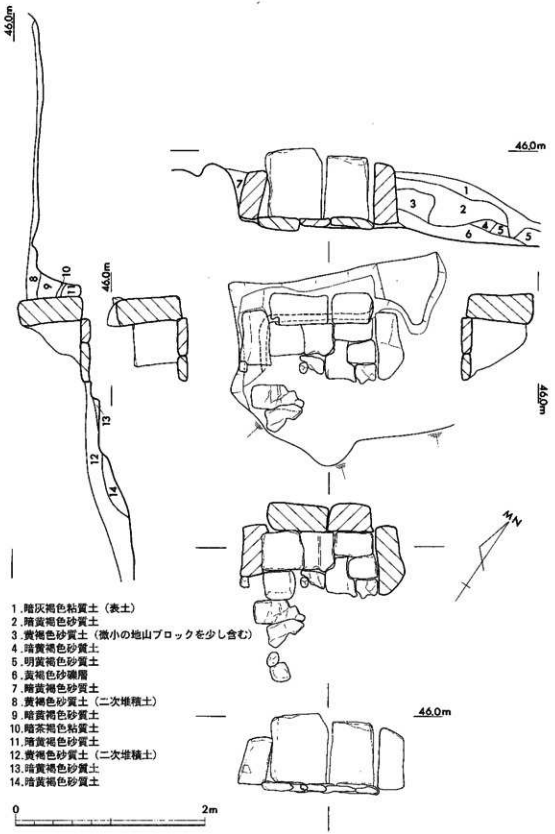
立地（第８図）　尾根から４ｍ下がった標高45.3ｍ付近の急な斜面に位置し、かなり高い場所である。古墳からは見晴らしは悪く、半野部はまったく見えない。工事中発見のため、原地形は不明である。

形態（第９図）



第８図　狐廻谷古墳位置図（Ｓ＝1／2000）

墳形　工事中発見で詳細は不明である。石室側壁から東へ1.5mまで盛土を確認しているが、それから東側は急な斜面になっており、さらに東側に盛土があったとは考えられない。土層を観察すると、横断面では互層状の盛土はなく、地山である砂岩の上に砂質の土が堆積していた。縦断面では重機により削平され、本来の堆積土はほとんどなく、盛土は唯一、墓壙と石室との間だけに残っていた。暗



第9図　狐廻谷古墳実測図（S＝1／40）

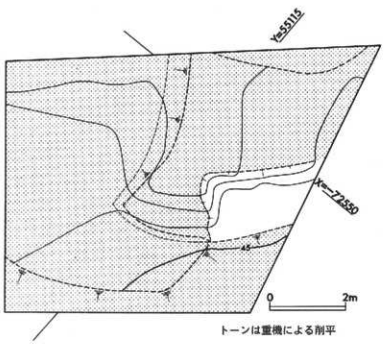
黄褐色砂質土の間に粘質土があり、ほぼ水平堆積していた。奥壁が内傾していたが、土層を見ると重機による移動は大きくなかったと思われる。南側は石室から１ｍまで地山が残っていたが、その上の土砂は全て二次的に動いて堆積したもので、盛土は確認できなかった。

古墳の墳形は不明といわざるとえず、墳丘規模は東側の盛土の範囲を石室主軸で反転した場合、4.6ｍになる。

石室　墓壙は砂岩の地山をＬ字形に掘り、その内部に石室を築く。墓壙は東西16.5ｍ、南北は南側が破壊されているので正確にはわからないが11.5ｍ以上を測る。石室の規模は内法で、奥行き0.65ｍ、幅1.2ｍ、残存高0.75ｍを測り、横長プランである。石材は凝灰岩の切石を板状に加工して使用している。奥壁は内傾し、２枚を使用する。右側は43×70㎝、厚さ30㎝、左側は65×80㎝、厚さ30㎝を測り、側壁を受けるために３×12㎝の刳り込みがある。しかし、左側壁が内傾していたため、うまくはまっていなかった。側壁は各１枚で、右側壁は64×64㎝、厚さ24㎝の石を垂直に立てる。左側壁は48×53㎝、厚さ24㎝の石がやや内傾していた。側壁残存部分には床石が８枚あり、その前方は側壁は残っていないものの、床石は２枚以上の石が残っていた。しかし、二次的に動いているものもあった。床石はレンガ状に加工し、最大のもので43×40㎝、厚さ10～15㎝を測る。床石は隙間なく置かれ、一部には切り組み技法が使われていた。石室主軸はＳ－33°－Ｅで、南西に開口する。

工具痕　石材には工具痕が残っていた。側壁や奥壁の外側には幅約５㎝の平刃の強い削痕や打痕が確認できた。内側にも平刃痕が残り、平刃が深く刺さったところが残ったと思われる。内側の表面は最終的に工具痕を消し、滑らかであった。

遺物　確認できなかった。



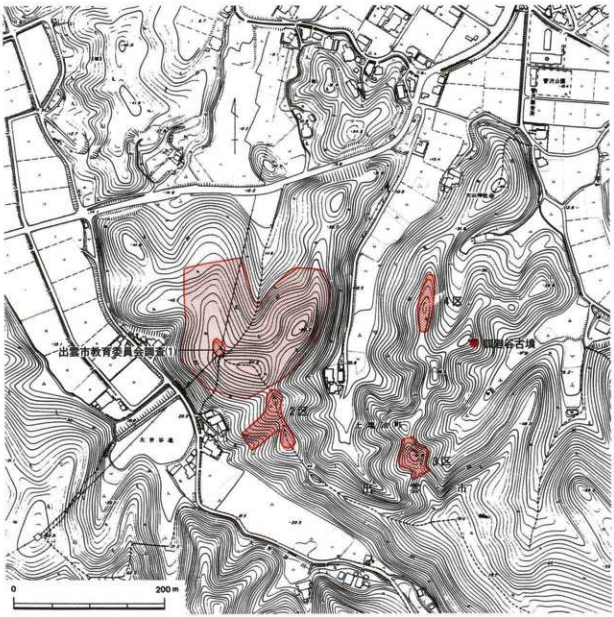
第10図　狐廻谷古墳調査後測量図（Ｓ＝1／100）

V 大井谷城跡

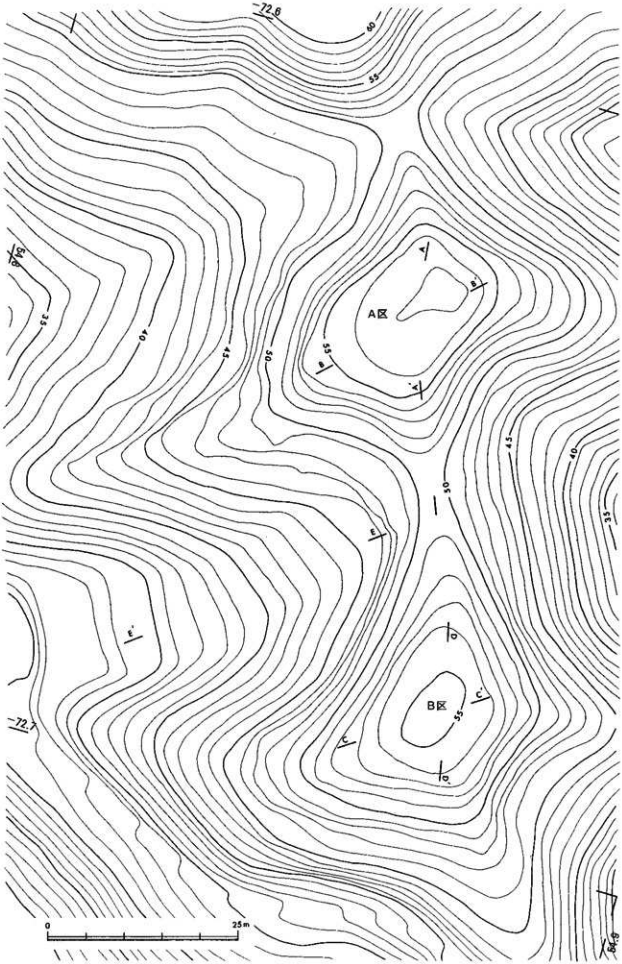
調査の概要

大井谷と菅沢から南に入る狐廻谷との間の尾根上に位置する。丘陵は唐墨山城跡の築かれた頂部から平野に向けて伸び、それが一旦平坦になり、再び標高を緩やかに下げる変換点に存在し、東西両斜面は、急峻である。

主郭は馬蹄形の基郭に、郭は東西の丘陵上に配置されている。主郭は標高61mの最高地点にあり、東西40m、南北10mの長方形を呈する。南側には堀切に続き、今回調査した2区がある。西1郭は主郭との比高差が2m、東西8m、南北30mを測り、長方形を呈する。中国電力送電線鉄塔工事で発掘調査され、東西4.2m、南北2.1mの掘立柱建物跡1棟、柵列、土塁の基郭と考えられる石積み列などが検出されている。東1郭は東西10m、南北30mを測る、主郭に続く大きさである。先端や斜面には小さな郭が配置されている。しかし、遺物は少量しか発見されず、時期は室町時代と考えられてい



第11図　大井谷城跡調査区配置図（S＝1／5000）

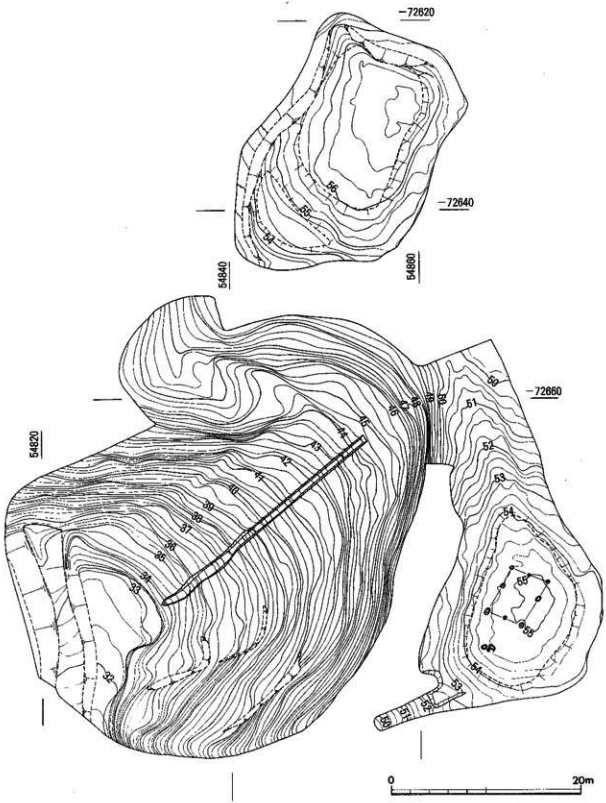


第12図　大井谷城跡２区調査前測量図（S＝1／500）

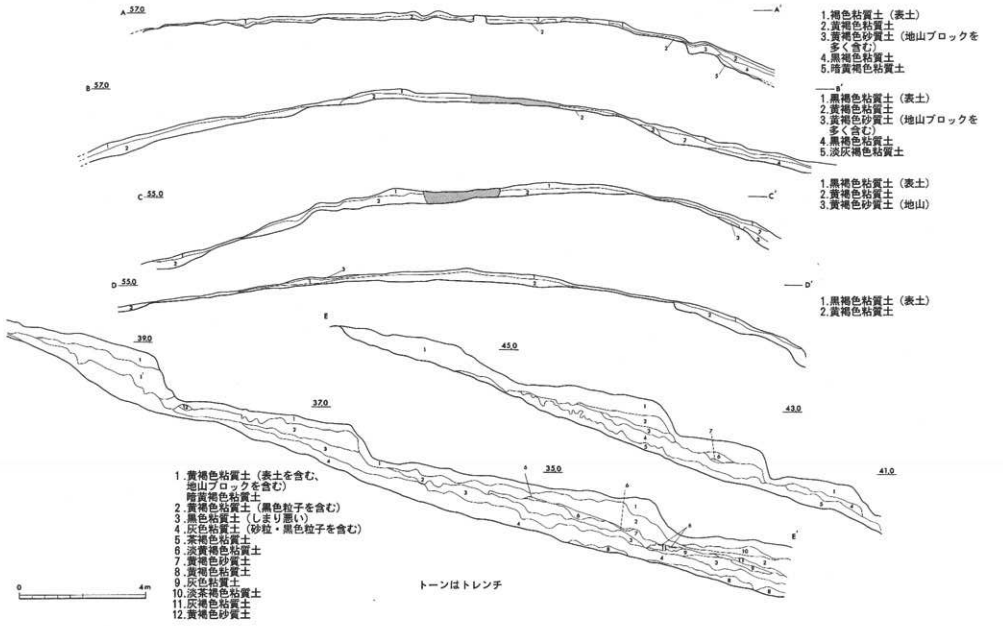
る[注]。

また、尾根上や尾根から少し下がった斜面には毅若寺に続く道跡があり、昭和30年代に谷筋の道路ができるまでは使用され、一丁地蔵が置かれていたという。

今回の調査は、平成5年度のトレンチ調査の結果を受け、3カ所（2～4区）の本調査を実施した。



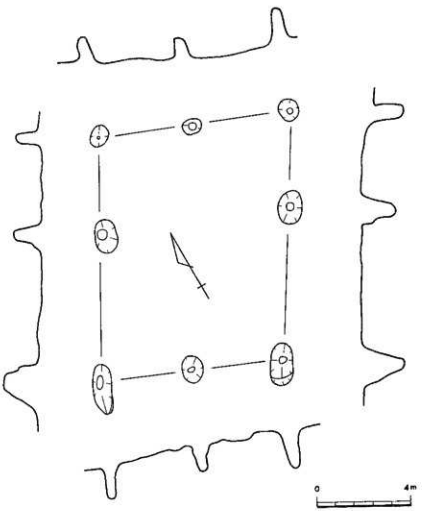
第13図　大井谷城跡2区調査後測量図（S＝1／400）



第14図　大井谷城跡２区土層図（S＝1／120）

なお、1区は1978年に出雲市教育委員会が発掘調査を行った大井谷城跡西1郭とした。

平成6年4月21日に2区頂部（南1郭、南2郭）から調査を開始し、谷部はトレンチ調査の結果、堆積土が厚いことから上層を重機を使用し除去した。その後、3区の堀切を調査中、斜面から横穴墓が検出された。土層を観察しながら掘り下げ、遺構の精査を行った後、空中写真測量を行い調査を終了した。4区は薄い堆積土を除去、精査し平板測量を行った後、調査は終了した。夏は例年にない酷暑で雨が降らず、また、丘陵頂部で風が強い日が多く、土の乾燥などに悩まされながらの調査であった。（第11図）



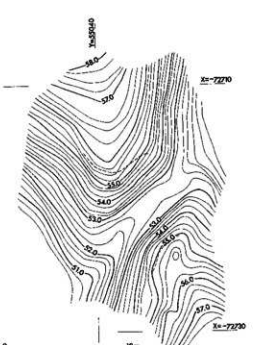
第15図　大井谷城跡2区SB01実測図（S＝1／80）

調査の結果、2B区から掘立柱建物跡1棟、3区から堀切、4区から加工段を確認した。遺物としては2A区、2区谷部から縄文土器、土師器、中国製青磁・鉄釉、備前、鉄器が出土した。

2区（第12～14図）

標高57mと標高55mの尾根上のピークとその間の谷部を調査した。北頂部をA区（南1郭）、南頂部をB区（南2郭）、谷部をC区とした。A・B区からは出雲平野を一望することができ、A区は水田からの比高が36.5mを測る。

A区は大井谷城跡主郭南側に位置し、主郭とは堀切によって区画され、堀切底部からの比高は6mを測る。頂部の規模は10.5×15mを測り、楕円形をしている。また、北西側に一段下がった平坦



第16図　大井谷城跡3区調査前測量図（S＝1／300）

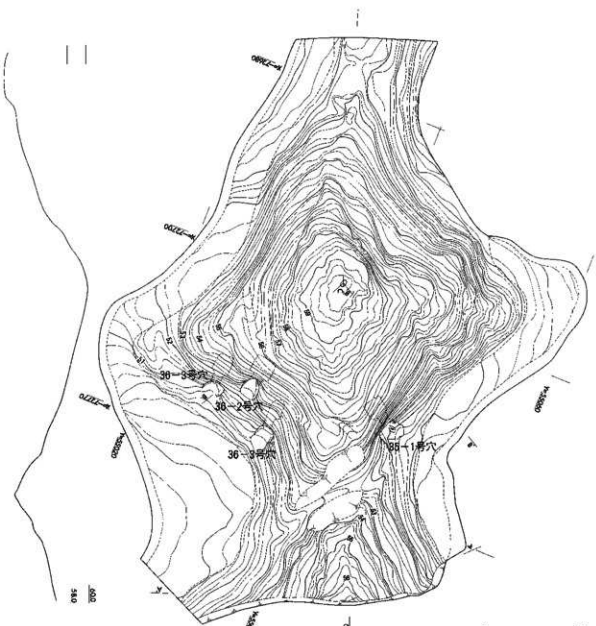
面があり、4×10mの三日月形を呈する。平坦面の周囲は急斜面になっている。遺構は検出されなかったが、頂部の南側で0.5mの範囲に厚さ15cmの盛土が確認できた。

遺物は全て小片で、黄褐色砂質層からの出土である。土師器は全域で、青磁と鉄釉は北側の端で出土した。

B区はA区の南側に位置し、A区との境は比高5～6mの堀切状になっており、堀切底部から平坦面まではかなり急な斜面になっている。また、A、B間は幅1.5mほどの狭い尾根となり、両側は急な斜面になる。

B区の規模は10.5×15mの楕円形をしている。頂部の一部で厚さ約15cmの盛土を確認した。平坦面のやや西側にずれた地点で、8個のピットが検出でき、掘立柱建物跡に復元できた。遺物は出土しなかった。

SB01（第15図）　2×2間の掘立柱建物跡で、東西規模は4.1m、3.95mで、柱穴間の距離は2.1



第17図　大井谷城跡3区調査後測量図（S＝1／400）

m、2m、1.95m、2mである。南北規模は5.3m、5.2mを測り、柱穴間の距離は2m、3.3m、2.1m、3.1mである。南北方向において、南側の柱穴間が北側に比べ1m以上長い。柱穴は円形から長楕円形を呈し、砂岩に深く、先細りするように掘られていた。上幅は円形のものは20～30cm、楕円形で40×100cm、深さ30～40cmを測り、南側柱穴が北側柱穴より深い傾向にある。

C区は植林と畑により階段状に造成されていた。谷部は上に向かうに従って急斜面になり、A、B間の尾根付近ではほとんど垂直な崖になっている。遺構は検出されなかったが、遺物は第3、4、9層の灰色土、黒色土から出土した。

3区（第16～18図）

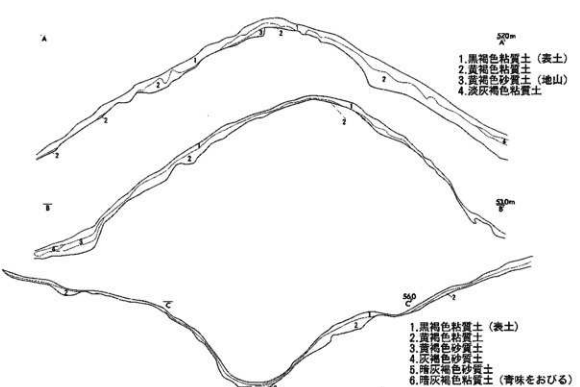
南から伸びる丘陵がY字に分岐し、北側に延びた丘陵に2区があり、北東方向に伸びた丘陵に3、4区がある。3区は丘陵が分岐した所から約75m北に行った標高57m付近に位置し、人工的に丘陵をカットした堀切が存在した。また、横穴墓は西側斜面に3穴、東側斜面に1穴確認した。

堀切

上端9.5m、高さ北側で3.5m、南側で3.2mを測り、断面はV字に近く、底部はやや丸くなっている。丘陵を14mにわたり、削っている。南側では2段にカットし、上段はやや緩やかに削られ、下段は底部から2.5mの所で急な崖になっていた。

その他、堀切の北側の標高56m付近に幅0.8m、断面U字形の溝状遺構を2カ所で確認できた。長さ3mと5.5mを測り、途中は切れ、地山が他の場所より急な斜面になっていた。もとは一続きで、道の可能性もある。

遺物はなく、時期は不明である。

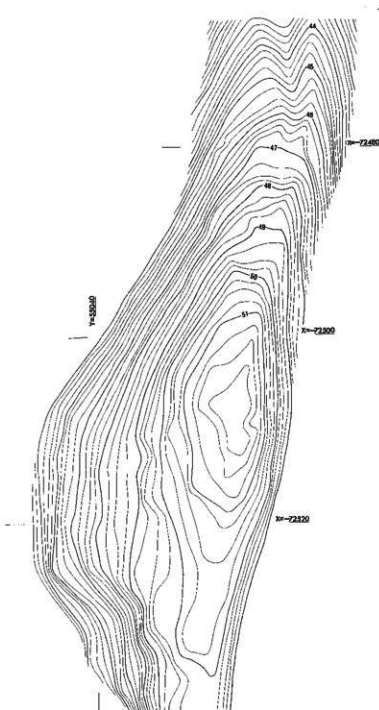


第18図　大井谷城跡3区土層図（S＝1／160）

4区

3区のある丘陵の先端部付近に位置し、尾根上及び斜面に平坦面が存在した。丘陵先端には「大山権現」が祭られている。尾根中央には山道があり、北側斜面ではU字状にえぐられていた。4区からは出雲市の中心街や北山を一望できる。

調査の結果、頂部に6×11mの平坦面があり、西側斜面にも緩やかに傾斜しているが、3×8mの平坦面が確認できた。尾根上の広い平坦面から南側の尾根上には、幅3mの平坦面があり、両側は急な斜面になっている。この平坦面は通路などの役割を果たし、尾根上には一定の幅が確保されていた可能性がある。



第19図　大井谷城跡4区調査前前量図（S＝1／400）

先端に近い北側には三段の平坦面があり、北から順に東西4.5×南北4.5m、5×5m、5×5.5mの規模で、各比高は1mほどである。ピットや遺物は検出できなかった。

遺物（第22図）

大井谷城跡2区から出土した中世遺物の破片数は土師器107点，備前4点，青磁1点，鉄釉1点である。

陶磁器　2A区から、青磁、鉄釉が出土している。陶磁器は小片のため図化できない。中国製青磁は外面に雷文を施し、胎土は灰色で、青緑釉をしている。中国製鉄釉は犬目の口縁部で、口縁部の下がわずかにくびれている。胎土は暗灰色を呈し、釉は黒色をしている。備前は壺の底部や体部の破片である。これらの時期は15世紀頃と思われる。

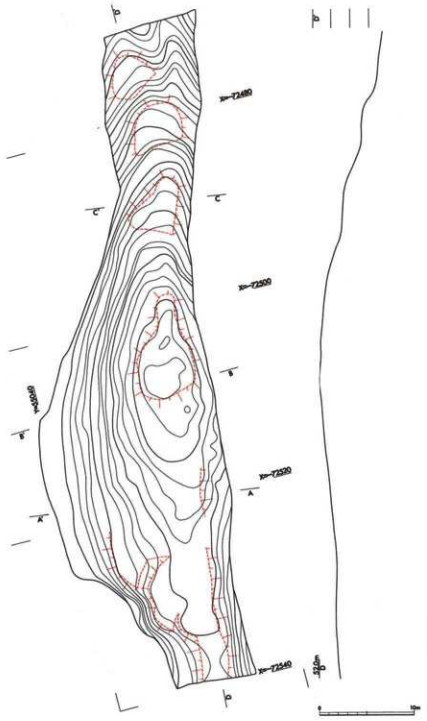
縄文土器（1～5）　(1)と(2)は同一個体の可能性があり、黄褐色で胎土は粗く、表面は風化が著しい。底部(3～5)は上げ底で、厚みがある。縄文時代晩期のものであろう。

土師器（6～13）　皿の破片は風化が著しく、小片のため全体をうかがうことはできない。底部は糸切りで、黄灰色である。胎土は精良で、焼成はしっかりしている。

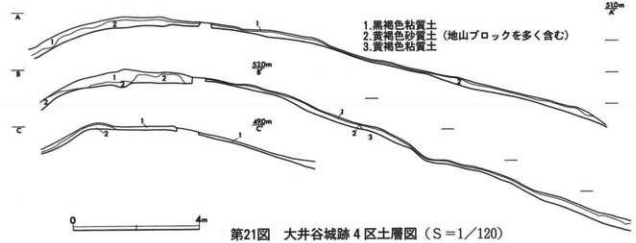
須恵器（14～16）　蓋坏(14)は3区の堀切付近から出土している。周辺の横穴墓と同じ時期のものであり、城跡に伴うものではなく、横穴墓に関連したものと思われる。

石鏃（17・18）　4点出土している。無茎鏃で、(17)は安山製で、基部は直線的になり全長1.6㎝、最大幅1.1㎝、厚さ0.3㎝を測る。(18)は黒曜石製で、基部に抉りがあり、全長2.5㎝、最大幅1.7㎝、厚さ0.5㎝を測る。

鉄製品（19～22）　鉄刀の切先付近の破片(19)は4つに分割している。幅1.9㎝、厚さ0.4㎝を測る。(20)は断面長方形で、先端がわ



第20図　大井谷城跡4区調査後測量図（S＝1／400）



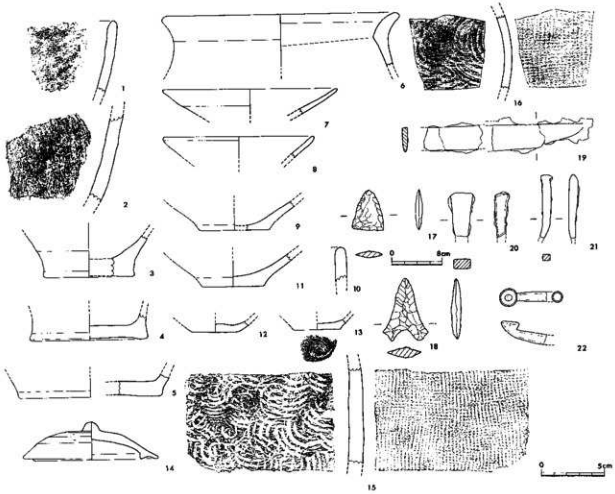
第21図　大井谷城跡4区土層図（S＝1／120）

ずかに折れ曲がり、くさび状を呈している。幅1～1.7cm、厚さ0.8cm、残存長4cmを測る。(21)は断面方形の釘状を呈し、先端は細くなる。幅4～7mm、残存長5cmを測る。青銅製のキセル雁首(22)は口径1.2cm、残存長3.7cmを測る。

小　結

大井谷城跡は1978年の発掘では西1郭が調査され、掘立柱建物跡や柵列跡、道跡、石列、土師器、瓦質土器が確認され、室町時代の実践的な山城と位置付けられている。今回の調査では、山城が南側にも広がり、南2郭の尾根上に掘立柱建物を築き、さらに、東側丘陵にも堀切や加工段を造るなど自然地形を巧みに利用し広範囲に造成を行っていることがわかった。さらに、南1郭から中国製などの陶磁器が出土し、15世紀に使用されていたことがわかった。

注　出雲市教育委員会『中国電力高圧送電線鉄塔工事に伴う大井谷城跡・半分城跡発掘調査報告書』1979年



第22図　大井谷城跡出土遺物実測図（S＝2／3 17・18）（S＝1／3その他）

Ⅵ　上塩冶横穴墓群第35・36支群

調査の概要

上塩冶横穴墓群は出雲市上塩冶町に分布する横穴墓群で、大井谷と三田谷を中心に存在する。支群名は1980年に付けられ、現在、38支群約180穴確認されている。丘陵先端付近に位置する横穴墓は砂岩等に掘られ、新しくなると凝灰岩に掘られるようになる。新しい横穴墓は凝灰岩の地層に意識的に築かれている印象を受ける。[33]

上塩冶横穴墓群第35•36支群は大井谷城跡３区の斜面から新たに検出した横穴墓群である。横穴墓がある丘陵は標高60ｍを頂点として周囲から独立峰的に一段高くなる。丘陵頂部の周りはやや平坦になり、一見すると径15×20ｍの円墳状の高まりに見える。横穴墓はこれを意識して掘られた可能性もある。

今回の調査は大井谷城跡を調査中、横穴墓を確認し、大井谷城跡３区とともに５月23日から９月14日まで行った。支群名は1980年以降、発見された順に支群を付けた。（第23図）

調査の結果、東斜面から１穴（第35支群）、西斜面から３穴（第36支群）を検出した。遺物として須恵器、土師器、馬具や大刀などの鉄製品、玉類がある。

１．上塩冶横穴墓群第35支群（第17図）

１号穴

立地　小さな谷になった東向き斜面に位置し、尾根頂部から９ｍ下がった地点に立地する。黄褐色砂岩で検出され、標高は前庭部で51ｍを測る。調査前は玄門部から土砂の流入が著しく、埋没していた。周辺を調査したが１穴のみであった。

形態（第24図）

前庭部・玄門部　玄門部は幅1.09ｍ、奥行き0.99ｍ、高さ1.02ｍを測り、壁は垂直に近く、天井との界線も明瞭に施され、断面は方形である。床面はわずかに前方に向かって傾斜している。前庭部は奥幅1.3ｍを測り、右側は0.52ｍ付近で外側に広がるが、左側は奥行き1.6ｍある。床面はかなり凸凹で、中央には上幅27㎝、下幅16㎝、深さ５～15㎝の排水溝があり、断面はコ字形を呈し、前方に向かって広がり、中には５～10㎝ぐらいの黄色砂岩が詰められていた。床面は排水溝までは平坦であるがその前は斜面となっている。前庭部左側には庇状の天井部があり、閉塞石を受けていた。

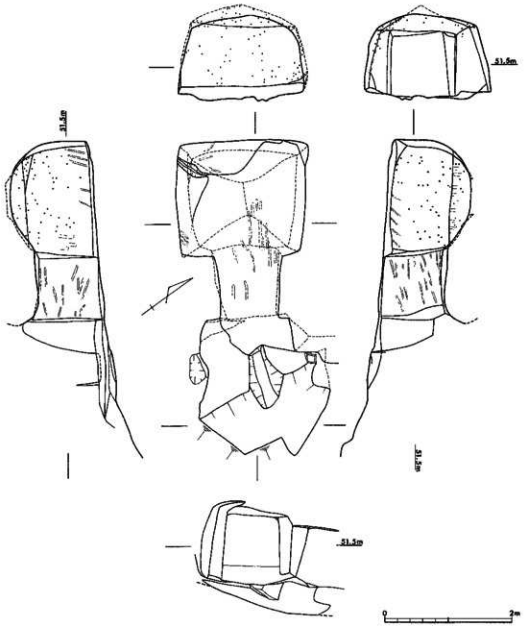
玄室　整正家形妻入り構造で、幅２ｍ、奥行き1.8ｍ、高さ1.32ｍを測り、ほぼ正方形プランである。壁から天井部にかけてやや丸味をおびるが、界線ははっきりしている。軒線は玄門部と同じ高さにある。側壁の軒線は工

第23図　上塩冶横穴墓群分布図（島根県教育委員会1980年転載・一部改変）

具で表しているが、奥壁は傾斜を変えて表現している。棟線は14×44㎝の不明瞭な平坦面で表現されている。床面は凸凹であるが、左側奥部で1段高くなっており、これが元の床面と思われる。壁は工具痕が多数残っていた。

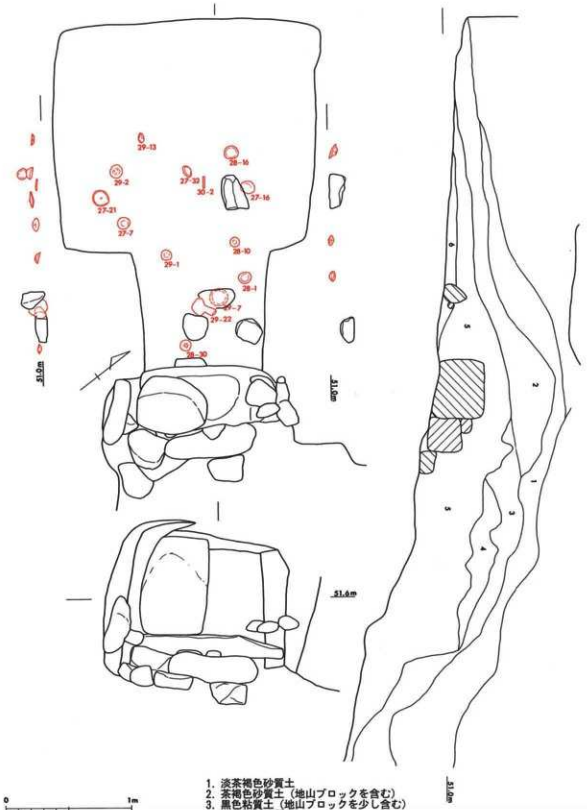
閉塞状況（第25図）　黄色砂岩の割石と切石で作られた閉塞施設は一部残存した。床には幅0.5m、長さ1.1mの長方体の石とその前方に別の直方体の石がある。その上には幅50㎝、高さ77㎝、厚さ15㎝の板石が左側に残存していた。板石の上部は前庭部の天井にはまっていた。閉塞石の周辺には玄門部との隙間を詰めるように直方体の石があった。閉塞は二枚の板石で行っていたと思われ、もう一枚の石は第5層の黄色砂層上にあり、盗掘時あるいは追葬時に動かされたと考えられる。

土層堆積状況（第25図）　前庭部の上層堆積状況を見ると、第3層の黄黒色土や第4層の灰黄褐色土



第24図　上塩冶横穴墓群35－1号穴実測図（S＝1／60）

を取り除くと幅0.8mの断面U字形を呈した上面の固い溝が検出された。この溝は玄門部まで達し、閉塞石と取り外し、玄室に向かっている。溝の前方からは前述した閉塞石と思われる切石の砂岩が検出された。



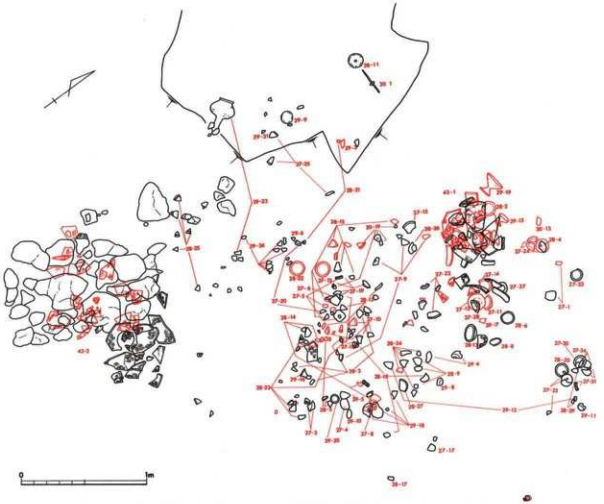
第25図　上塩冶横穴墓群35－１号穴出土遺物・閉塞実測図（S＝1／30）

遺物出土状況（第25・26図）　前庭部の３層中からは鉄製品や須恵器が破損した状態で多量に出土した。盗掘や追葬などの際に掻き出されたものと考えられる。５層中からも須恵器や土師器の破片は出土しているが、数は少なく、前庭部床面の遺物と接合する。５層下の前庭部床面には完形に近い須恵器があった。これは初葬あるいは早い段階に置かれたものと思われ、前庭部奥の左側には壺が倒れた状態で出土した。また、右側中央から甕や左側前方からは口縁部を下にして甕が出土した。上には黄色砂岩が乗っており落石などにより割れたものと思われる。玄門部の遺物は伏せた状態で、石材に接するように出土した。玄室の第５層中からは蓋坏が伏せた状態のもが多かった。玄門部よりで出土し、遺物は奥壁側にはなかった。

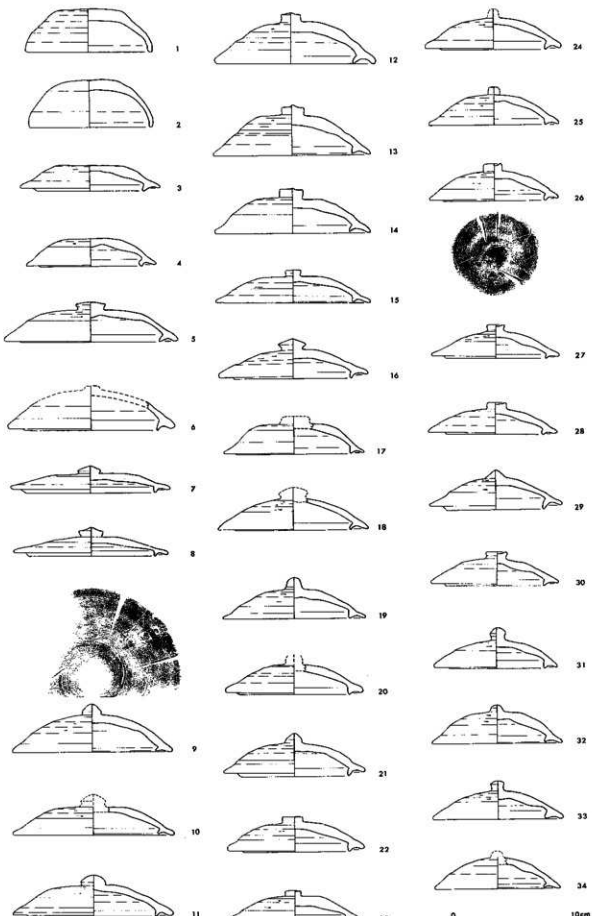
工具痕　玄門部は側面と床面に溝状痕がある。玄室の床面には主軸方向や斜め方向の溝状痕があり、床面は凸凹である。側面は断面方形の刺突痕が多数存在し、特に、界線付近には集中して残っていた。この刺突痕は荒掘や成形時に界線位置の目安などに使用されたものと思われる。側面には刺突痕の後、幅10cmほどの平刃による削痕が一部に残る。天井部には刺突痕の後、縦方向の幅10cm未満の平刃削痕が軒線まで伸びる。

遺物（第27～30・43図）

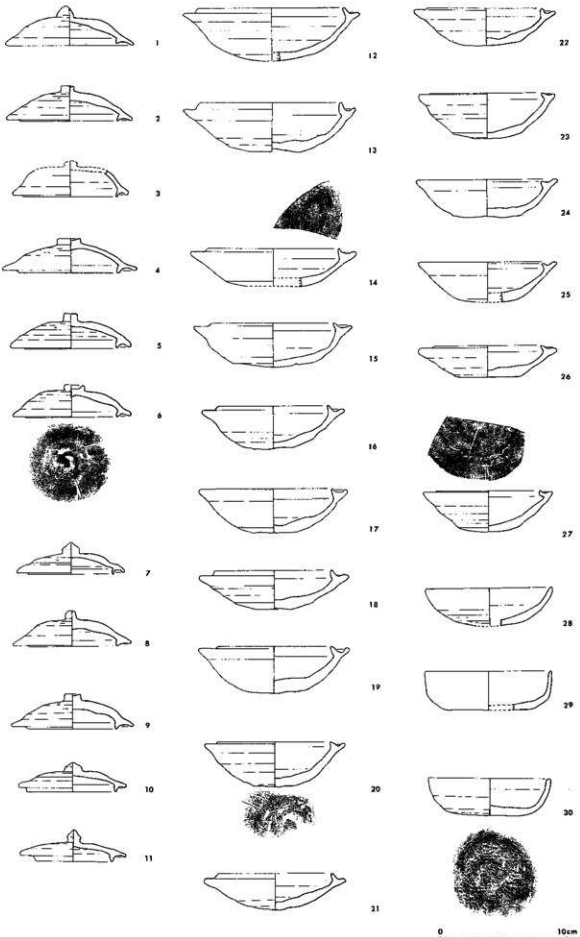
土器　須恵器は蓋坏、高坏、壺、甕が出土している。(1・2)は小型の蓋坏であり、他の坏蓋より古層のものである。(3・4)は天井部をヘラケズリしており坏蓋としたが、つまみはない。その他の坏蓋はつまみを持ち、内側にかえりがある。つまみの形態は乳頭状(9・19など)、宝珠状(7・8など)、中



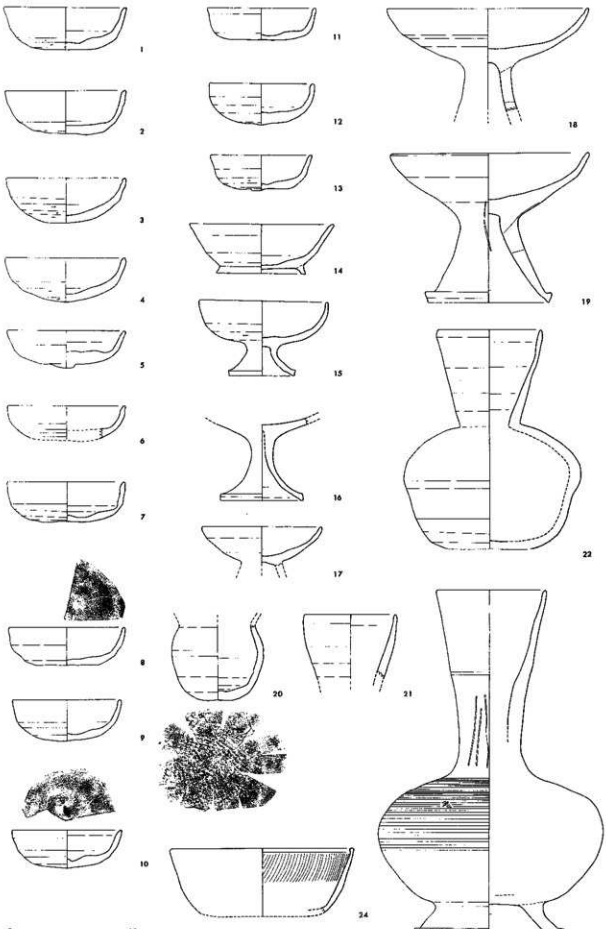
第26図　上塩冶横穴墓群35－１号穴前庭部遺物出土状況（S＝1／30）



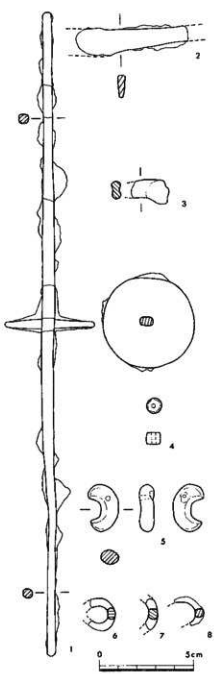
第27図　上塩冶横穴墓群35－１号穴出土須恵器実測図（S＝1／30）



第28図　上塩冶横穴墓群35－１号穴出土須恵器実測図（S＝1／3）



第29図　上塩冶横穴墓群35－１号穴出土土器実測図（S＝1／3）



第30図　上塩冶横穴墓群35－1号穴出土金属器・玉類実測図（S＝1／3）

央部が凹むもの(27・28)など多種類である。犬井部はヘラケズリのままのものもあるが、ナデが施されるものが多い。(23－11)は口径が小さく、立ち上がりが長いことから、壺の蓋の可能性が高い。坏身は三種類あり、内面にかえりを持つもの、高台も持つもの、高台を持たないものである。(29－3・4)は底部が丸く、坏蓋の可能性もあるが、ヘラケズリを行っているので坏身とした。(29－19)の高坏は口径は広いが坏部の器高が低く、透かしは線状になる。(29－23)は高台を持つ壺で、体部上半分はカキ目が施されている。甕（43－1・2）は2個体出土し、口縁部の形態は違う。

土師器は1点出土している。坏身は風化しているが、内面に二段の暗文がある。口唇部は内側に肥厚する。

金属製品（第30図）　鉄製紡錘車(1)は長さ34.5cm、断面径0.5cmを測る鉄棒に、径4.8cm、厚さ0.4cmの円形の円盤を伴うもので、ほぼ全体像をうかがうことができる。(2)は刀子か鑿と思われ、全体を錆びに被われている。不明鉄器(3)は断面の中央部が両側から凹む。耳環(6～8)を図化したが(7)と(8)は同一個体と思われ、2個体分出土している。(6)は銅芯鍍金製で、鍍金はほとんどはげている。先端部は欠けているが長径1.7cm、太さ0.4cmを測る。(7)は中央部、(8)は先端部で太さは0.5cmを測る。銅芯鍍金製で、鍍金はほとんどはげている。

玉類（第30図）　ガラス小玉(4)は紺色で、小口は面を持つ。勾玉(5)は赤メノウ製で、片側穿孔である。コの字形を呈し、断面は丸みを持つ。

2．上塩冶横穴墓群第36支群（第17図）

第35支群の裏側の西向き斜面に位置し、菅沢に向かって開く谷のやや奥まった斜面に位置する。頂部の大井谷城跡を掘り下げていく段階で、後の3号穴付近から須恵器が出土し、開口したのが発見の経緯となった。3穴確認でき、南から1号穴とする。2号穴が一番高所に位置し、3穴は山形に配置され、2号穴と他の横穴墓との比高は1.5mである。1号穴と3号穴の距離は7.5mを測る。

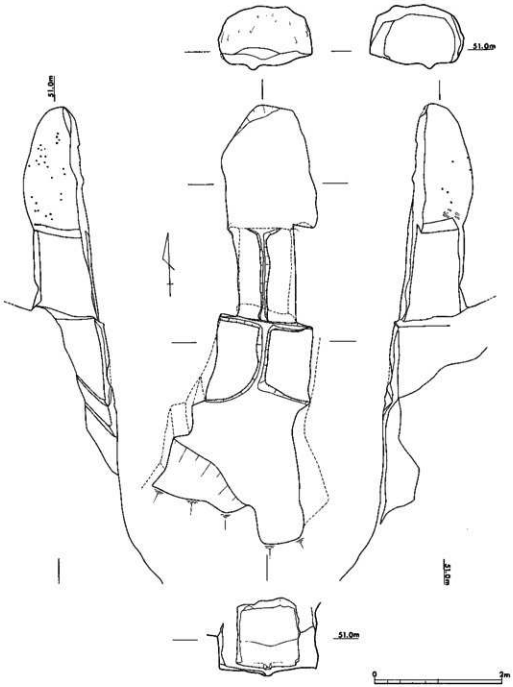
1号穴

立地　小さく谷になった西向き斜面に位置し、尾根頂部から9.5m下がった地点に立地する。黄色砂岩に掘られ、前庭部で標高50.8mを測る。調査前は玄門部から土砂の流入が著しく、埋没していた。

形態（第31図）

前庭部・玄門部　玄門部は幅0.91m、奥行き1.55mと長く、高さ0.9mと低い。壁は垂直に立ち、天井とははっきりした界線をもち、断面は方形である。床面には上幅15cm、下幅5cm、深さ5～10cmの排水溝があり、前庭部に続いている。前庭部との境には高さ12cmの段と、幅10cmの溝がある。前庭部は奥幅1.5mあり、玄門部から1.35m付近でやや広がり、幅1.85mになる。前庭部の全長は2.8m以上ある。床面は平坦であり、前方に傾斜している。左側側壁は2.4mの所まで高さ0.4～0.55m、また、右側側壁は玄門部から1.1mまで、垂直な壁になる。

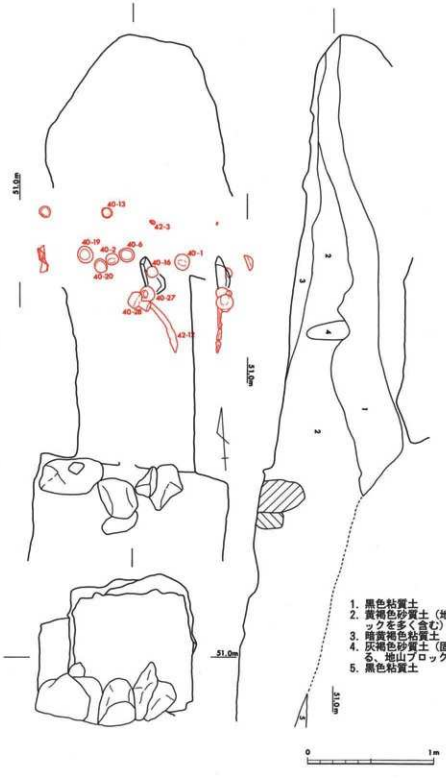
玄室　未成形の横穴墓で、壁や天井、袖部などは凸凹で高さも低い。丸天井で、前幅1.43m、奥行き



第31図　上塩冶横穴墓群36－1号穴実測図（S＝1／60）

1.9m、高さ0.92mを測る。縦長プランで、奥壁側は不整形で先細りになり、右袖は33cm、左袖は8cmしかなく片袖状になる。天井は丸く、奥壁側に向かって低くなる。また、工具痕も著しく、最後まで成形されたとは思われない。前壁と天井部の界線ははっきりしているが、他の壁同士の界線は不明瞭である。軒線と棟線はない。床面の傾斜は著しく凸凹であり、奥壁付近で一段高くなっている。

閉塞状況（第32図）　玄門部には20～40cm大の黄色砂岩のやや大きな割石が5個一列に置かれ、前庭部側には小さい砂岩の割石があった。また、玄門部前に溝が施されていることを考えると、溝に板などの有機物を置き閉塞し、それを割石で押さえていたと思われる。



第32図　上塩冶横穴墓群36－1号穴出土遺物・閉塞実測図（S＝1／30）

土層堆積状況（第32図）　須恵器が出土して横穴墓があることがわかったので、上面の土層はない。2層の黄褐色の上は黒色土が堆積し、その上はすぐに表土になり、黒色土は厚い所でも15cmほどしかなかった。2層は前庭部から玄室まであり、この土層で横穴墓がほとんど埋没していた。

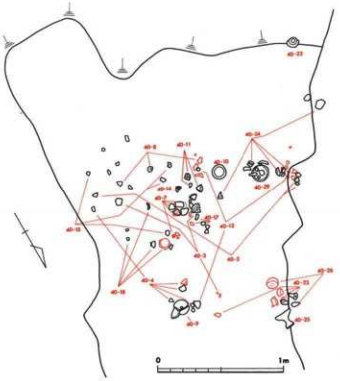
遺物出土状況（第32・33図）　前庭部の第2層やその上の5層の黒色粘質土内から鉄製品や須恵器が多量に出土し、盗掘か追葬の際、掻き出されたものと考えられ、多くの須恵器は破損して小片になっていた。接合関係を見てもかなり離れた地点

の須恵器同士が接合している。一部にはほぼ完形品も存在した。玄門部の奥から玄室前半部の間からはまとまって遺物が出土している。大刀は外側に刃を向け、茎は須恵器の下あった。(40－1)は2層中であるが、他は3層中から出土した。

工具痕　未成形横穴墓であり、玄室の壁面には多数の工具痕が残る。床面は溝状痕があり、側壁には幅5～8㎝の平刃打痕と刺突痕が残る。刺突痕は特に、界線上に多い。天井部にも平刃打痕が残り、方向は中央から外側へ施しているが、重なり工具幅がわかるものは少ない。

遺物（第40・42図）

土器　坏蓋は大きく分けて古墳時代の通有のもの(1)と内面にかえりを持つものがある。(2)はつまみがないが天井部をヘラケズリしている。つまみは乳頭状のものが多く、断面方形で中央部が凹むものは少ない。坏身は高台を持つものと持たないものの二種類がある。



第33図　上塩冶横穴墓群36－1号穴前庭部遺物出土状況
(S＝1／30)

金属製品（第42図1～3）　大刀(1)は刃部と柄部で4分割になり、鍔びで被われている。棟幅0.9㎝、幅2.4㎝を測り、両関であるが均等でない。刀金具(2)は長径3.2㎝、短径1.95㎝、厚さ0.4㎝を測り、一部欠損しているが、表面には鍍金が残っている。

2号穴

立地　小さく谷になった西向き斜面に位置し、尾根頂部から7.5m下がった地点に立地する。標高は前庭部で52.6mを測る。調査前は玄門部から土砂の流入が著しく、埋没していた。

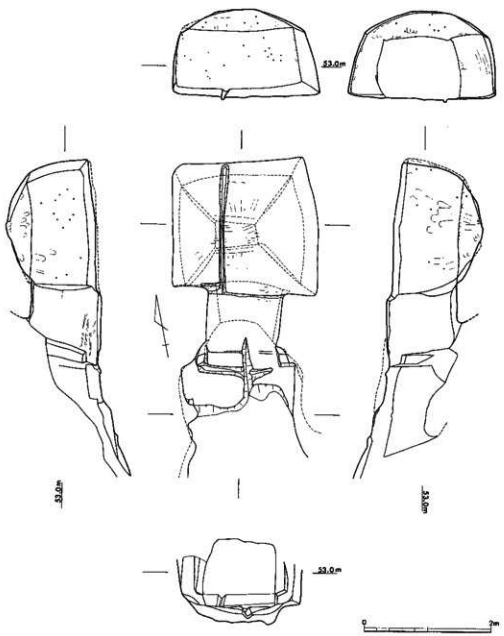
形態（第34図）

前庭部・玄門部　玄門部は幅1.16m、奥行き1.1m、高さ1.1mを測る。床は水平に近く、玄室とは10㎝の段差がある。側壁は垂直に立ち、天井とははっきりした界線をもち、断面は方形である。玄門部先端には閉塞石を置くための平坦面が削り出されている。左側の平坦面は23×55㎝、右側の平坦面は25×45㎝を測り、玄門部床面から5㎝ほど高くなっている。床面は平らでほぼ水平である。前庭部側は上幅12㎝、深さ5～8㎝の溝がある。側面にも床から17㎝の高さに閉塞石を受けるために、左側で13×18㎝、右側で、18×18㎝の範囲を削り出し、平坦面を造っている。前庭部は奥幅1.72mを測り、前方に向け広がる。床面は凸凹でかなり傾斜をもち、中央部には玄門部から続く幅13㎝、深さ10㎝の排水溝がある。前庭部右側壁は玄門部から1.4m、左側壁は1.3mまである。前方は急な崖となり、墓道のようなものは検出できなかった。

玄室　整正家形平入り構造で、幅2.15m、奥行き2.13m、高さ1.4mを測り、やや玄門部方向が広がる

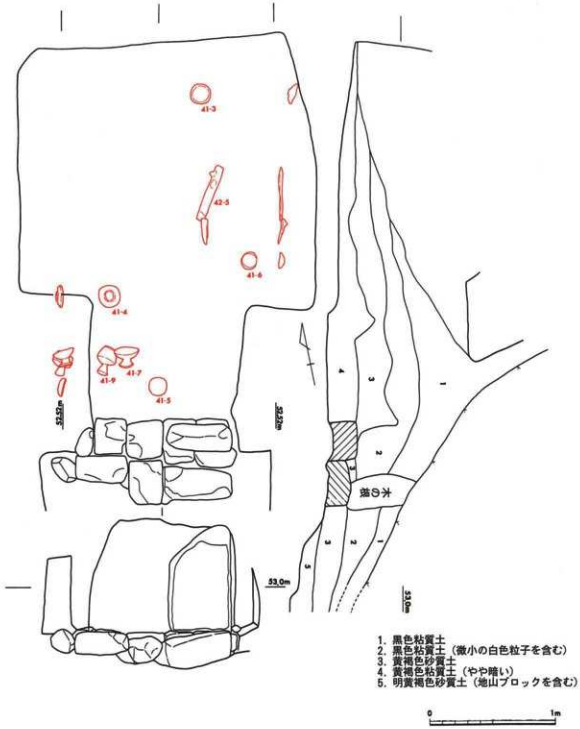
が正方形プランである。天井は全体にやや丸味をおびる。側壁はほぼ垂直に立ち、界線ははっきりしている。軒線は玄門部側の一部以外に一段深く施され、玄門部と同じ高さである。棟線は幅20cm、長さ62cmの長方形の平坦面として表現される。棟線から軒線の角に向かう界線はV字状に3cmほどに深く掘り込まれている。床面には幅6～10cm、深さ7～8cmの断面コ字形の排水溝が玄門部まで続く。その排水溝（あるいは区画溝）で、左側は幅0.75m、長さ1.9mに区画されている。床面は凸凹で3cmほど凹んだ所もある。

閉塞状況（第35図）　黄白色凝灰岩（小さい軽石を含む）の切石で作られた閉塞施設が一部残存した。まず、玄門部にある床面を削り出した平坦面に幅25～35cm、長さ25～30cm、厚さ18cmほどのブロック状の石を4個置く。その前庭部側にも幅20～35cm、長さ30～55cmの石を3個置き、0.65×1.5mの平坦



第34図　上塩冶横穴墓群36－2号穴実測図（1／60）

面を作り出す。この平坦面の上面は玄門部側壁に造られた平坦面と同じ高さである。その上に2枚の板石を置いて閉塞していたと思われる。調査時には幅0.5m、長さ0.83m、厚さ0.2mを測る右側の閉塞石しか残っていなかった。その右端はわずかに側壁の平坦面にかかるように置かれていた。また、排水溝は閉塞石の下に存在した。しかし、閉塞石の下には幅3.3cmの溝が主軸に直行するように存在しており、この溝の用途は不明である。想像すれば、初葬時に板などの仮の閉塞がここで行われ、最終的な閉塞時には切石を使って閉塞したとも考えられるが、土層観察などではっきりしたことはわからなかった。

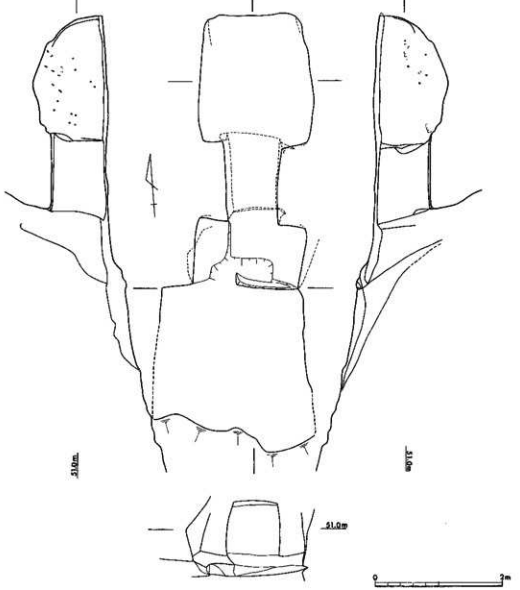


第35図　上塩冶横穴墓群36－2号穴出土遺物・閉塞実測図（S＝1／30）

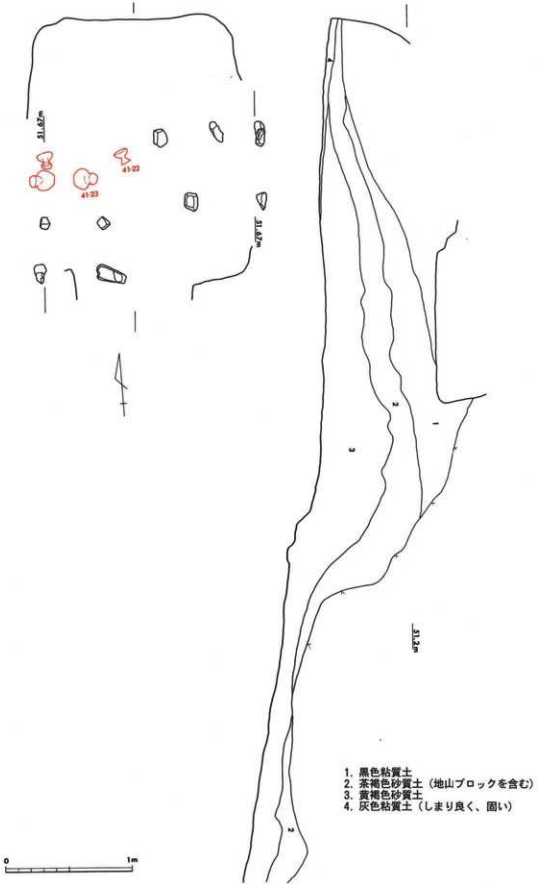
土層堆積状況（第35図）　玄室内の土層は１層は確実に流入した土である。前庭部の５層はかなり固く堆積していた。前庭部の床面が凸凹であることなどから前庭部の置土の可能性もある。

遺物出土状況（第35図）　前庭部から遺物は出土しなかったが、玄門部から玄室の４層中から完形の須恵器、鉄製品が検出された。二カ所に分かれ、玄室右側と玄門部左側である。前者の大刀は主軸沿って出土し、刃部は内側を向け、切先は入口側である。後者はほぼ同じ高さで出土している。

工具痕　床面には滑状痕はなく、平刃打痕した際、強く打痕した跡が残こる。側壁は一部に刺突が残るが、幅10㎝の断面Ｕ字形を呈した丸刃の削痕で仕上げており、壁面はきれいに整えられている。前壁、天井には幅10㎝の断面Ｕ字形の削痕が棟から放射状に残る。これは軒線までで止まっている。各



第36図　上塩冶横穴墓群36－３号穴実測図（Ｓ＝1／60）



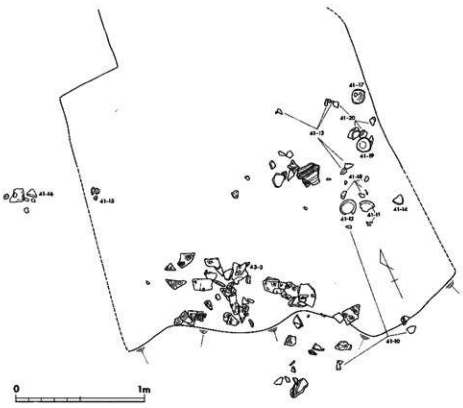
第37図　上塩冶横穴墓群36－３号穴遺物出土状況（S＝1／30）

壁同士の界線は平刃によりV字状に深く掘られている。玄門部天井には幅5㎝の平刃削痕が残る。玄門部の右側壁には幅10㎝の丸刃削痕があり、左側壁には溝状痕が走る。

遺物（第41・42図）

土器　須恵器（41－1～9）は蓋坏、高坏、壺がある。(4)は浅い坏部にふんばった高台がつく。

金属製品（第42図5）　大刀(5)は一部欠損し錆びに被われているが、復元全長76.8㎝、棟幅0.9㎝、幅3.4㎝、柄幅1.8㎝、厚さ0.4㎝を測る。両関で、径0.4㎝の目釘穴が2つある。



第38図　上塩冶横穴墓群36－3号穴前庭部遺物出土状況（S＝1／30）

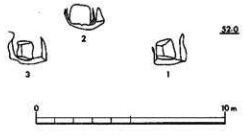
3号穴

立地　小さく谷になった西向き斜面に位置し、尾根頂部から7.5m下がった地点に立地する。一番北側に位置し、標高50.7m付近に存在する。調査前は玄門部から土砂の流入が著しく、埋没していた。

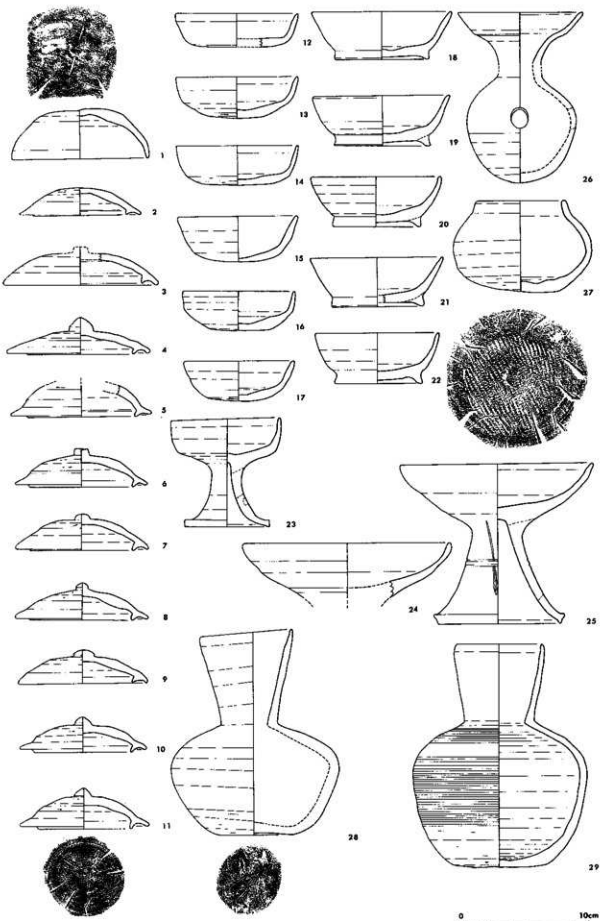
形態（第36図）

前庭部・玄門部　玄門部は幅0.9m、奥行き1.27m、高さ0.87mを測り、長くほぼ同じ幅で推移する。床面は凸凹で、前庭部方向に傾斜する。壁は垂直に立ち、天井とは明瞭な界線をもち、断面は方形である。前庭部は奥幅1.8m、奥行き3.4mを測り、前方に向けて広がる。右側は玄門部から1.1mで0.5m広がる。床面は凸凹で、傾斜している。左右の側壁の高さは途中で極端に低くなり、右側で30㎝ほどしかない。前庭部と玄門部は成形され整っていた。

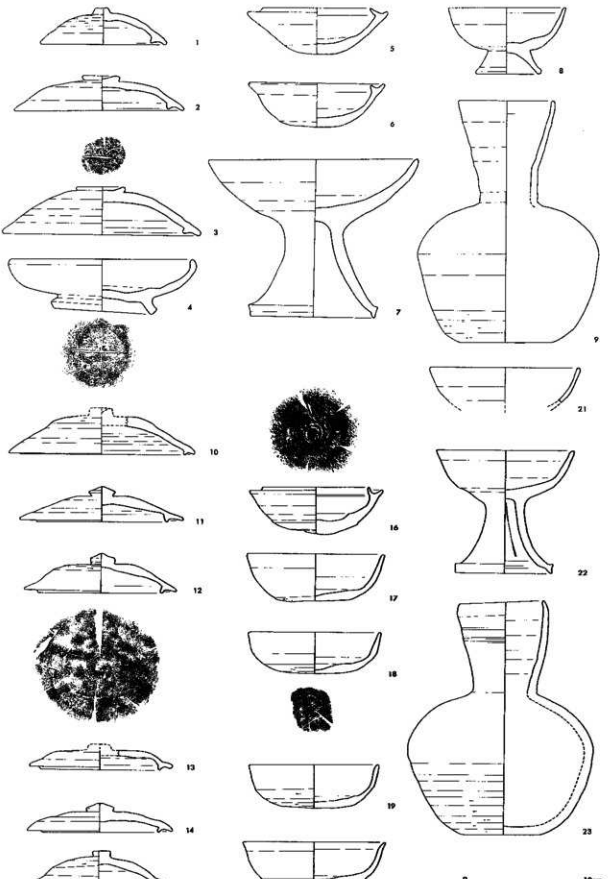
玄室　奥幅1.4m、前幅1.6m、最大幅1.85m、奥行き2～2.15m、高さ1.17mを測り、縦長長方形プランである。丸天井で、界線が一部しかない。天井は成形が最後まで終わっておらず、低く丸い。壁面及び天井部には工具痕も著しい。前壁と側壁の界線ははっきりしているが、他の壁同士の界線は不明瞭である。軒線と棟線はない。床面は少し凸凹で、奥側が傾斜を持つが玄門部付近は水平に近い。排水溝などはない。



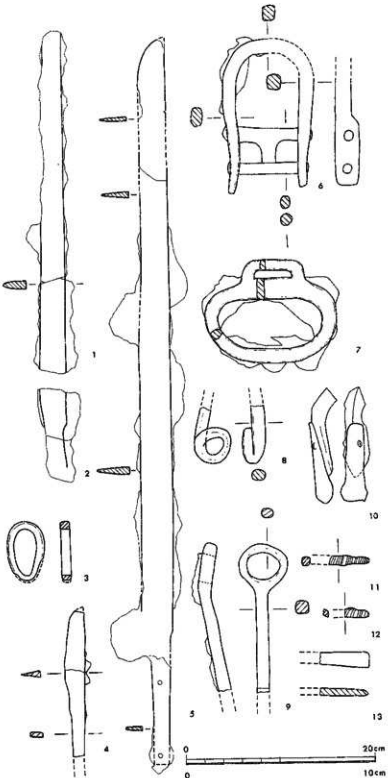
第39図　上塩冶横穴墓群第36支群正面図
（S＝1／200）



第40図　上塩冶横穴墓群36－１号穴出土土器実測図（S＝1／3）



第41図　上塩冶横穴墓群36－２・３号穴出土土器実測図（S＝1／3）



第42図　上塩冶横穴墓群36支群出土金属器実測図（S＝1／4・1.2.5）（S＝1／2その他）1～3（1号穴）5（2号穴）4・6～13（3号穴）

閉塞状況　閉塞石や溝が無く、どのように閉塞していたか不明であるが、前庭部で、人頭大の砂岩の自然石が確認でき、1号穴と同じようなものかもしれない。

土層堆積状況（第37図）　前庭部から玄室に広がる1層は流入土である。3層は地山と同じ砂岩の風化したものと同じである。閉塞石などがなく、1～3層はすべて流入土の可能性もある。

遺物出土状況（第37図）　前庭部の3層の黄色砂層中や上面から鉄製品や須恵器が多量に存在し、盗掘か追葬の際、掻き出されたものと考えられる。蓋坏などは前庭部右側壁付近から検出された。多くの須恵器は破損して砕片なっているが、一部にはほぼ完成のものも存在した。前庭部先端付近の2層からは須恵器甕片がまとまって出土した。玄室からは遺物はほとんど出土せず、わずかに壺と高坏が床面から検出された。玄室内から10～25cmの角礫が床面から五個確認できた。この石の用途は不明であるが棺台の可能性もある。

工具痕　玄室左側面に刺突痕や幅5cmの平刃削痕が残る。奥壁は上から下に向けて重なり合った平刃削痕がある。側壁の上方には平刃削痕の他、幅10cmの丸刃削痕も残る。また、左側壁には多くの断面方形の刺突痕もある。羨線付近には平刃削痕が小刻みに施され、羨線を表現させている。

遺物（第41～43）

土器　坏蓋は内面にかえりを持つもので、つまみは宝珠状、乳頭状、断面方形がある。

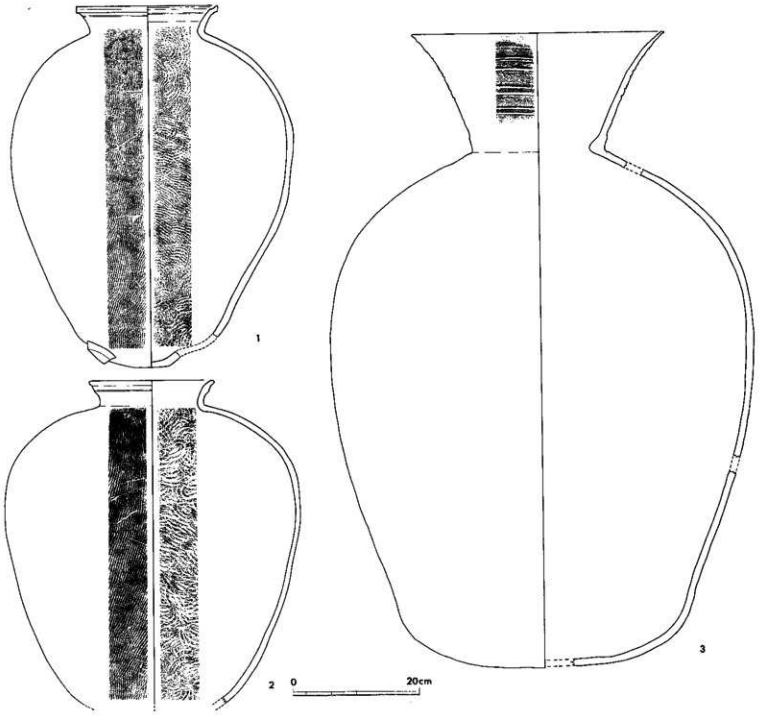
金属製品（第42図4、6～13）　刀子(4)は端部が欠損しているが、復元刃部長5.7cm、背の幅1.15cm、幅1cmを測り、茎は断面方形を呈する。鉸具(6)は左右に鋲を2ずつ持る。　轡(7、8)は方形立聞

の鏡板をもつ。長径７cm、立聞を含めた短径5.5cmに0.4×２cmの方形の窓がある。断面は方形であるが一部丸みがあり、厚さ0.4cmを測る。破損した箇が付く。(10)も馬具と思われ、鋲の一部が見える。引手(9)と思われ先端に径1.4×1.8cmの輪をもち、1.5×1.6cmを測る断面方形の鉄棒を持つ。鉄鏃(11～13)はすべて破片となる。長頸方頭式(13)と思われ、鏃身部のみで刃幅は0.7cmを測る。(11、12)は茎部で、幅0.1cmの樹皮が巻かれている。

注　建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』　1980年

支群番号	確認穴数	形　式	遺　物	備　考	調　査
1	1	家形妻入り	不　明		
2	2	不　明	須恵器、耳環	消　滅（東Ａ群）	
3	2	不　明	須恵器	アオゴシ支群	
4	2	不　明	不　明		
5	2	不　明	不　明		
6	4	家形妻入り	須恵器、鉄器、鉄釘	エーケ支群（東Ｃ群）	一部調査済
7	4	家形妻入り、丸天井	須恵器		本報告書
8	5	家形妻入り	不　明	（西Ａ群）	
9	1	家形妻入り	不　明		
10	5	丸天井	群前面の畑に須恵器片散布	（西Ｂ群）	
11	2	不　明	不　明		
12	11	丸天井、家形妻入り	不　明	（西Ｃ群）2地点あり	本報告書
13	4	不　明	不　明		
14	10	家形妻入り、丸天井、小横穴	須恵器、土師器、鉄器、玉類		県報告済
15	4	家形妻入り、丸天井、小横穴	須恵器、鉄器		県報告済
16	3	家形妻入り、丸天井	須恵器		県報告済
17	11	家形妻・平入り、丸天井	須恵器、土師器、鉄器、耳環	岸宅裏支群（西Ｄ群）	市調査済
18	2	家形妻入り、平天井	須恵器、玉類		市調査済
19	4	家形妻入り、丸天井	須恵器、鉄器、土師器	屍床、勝ケ谷支群	市調査済
20	5	家形妻・平入り	須恵器、鉄器	屍床	県報告済
21	10	家形妻入り	須恵器、鉄器、金糸	屍床	県報告済
22	21	家形妻・平入り、丸天井	須恵器、土師器、鉄器、玉類、金糸、耳環	石床、屍床	本報告書
23	7	家形妻入り、丸天井	須恵器、土師器、鉄器、玉類、耳環		本報告書
24	1	家形妻入り	不　明		
25	1	家形妻入り	不　明		
26	1	家形妻入り	不　明		
27	4	家形妻入り	須恵器、耳環	半分城跡横穴群	一部市報告済
28	2	家形妻入り	須恵器、鉄器		県調査済
29	1	不明	不　明		
30	0	横穴墓なし	須恵器、土師器		市調査済
31	2	家形妻入り	不　明		
32	2	家形妻入り、丸天井	須恵器、鉄器、耳環	家形石棺	一部県調査済
33	8	丸天井	須恵器、鉄器、耳環	家形石棺	本報告市調査
34	7	丸天井	須恵器、鉄器、耳環	礫床	市調査済
35	1	家形妻入り	須恵器、鉄器、玉類、耳環		県本報告書
36	3	家形妻入り、丸天井	須恵器、鉄器		県本報告書
37	1	丸天井	鉄滓		県本報告書
38	3	家形妻入り	須恵器、土師器		市調査済

表２　上塩冶横穴墓群支群一覧（県教委1980年一部改変）



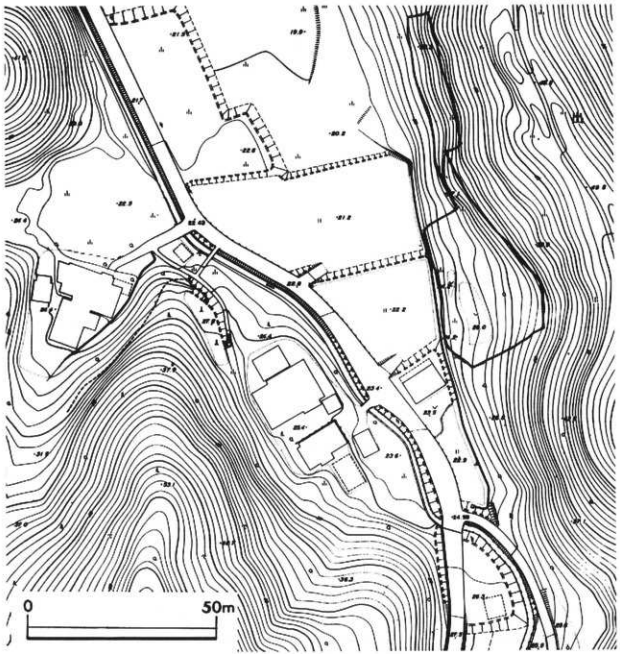
第43図　上塩冶横穴墓群35・36支群出土壺実測図（S＝1／6）

Ⅶ　上塩冶横穴墓群第７支群

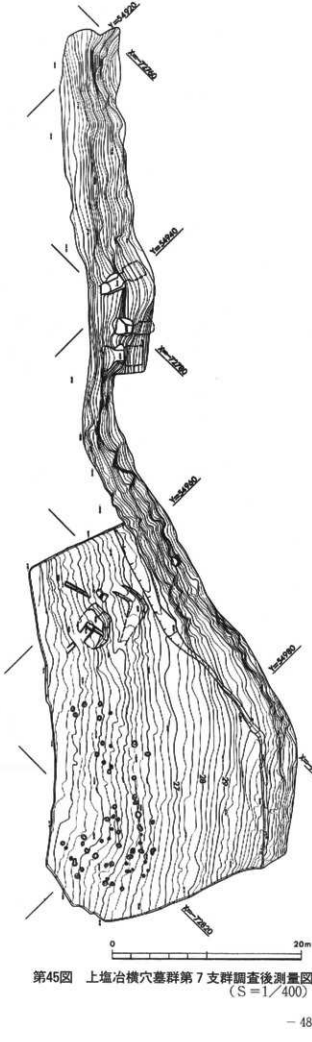
調査の概要

第７支群は出雲平野から南に入り込む大井谷の中程、東側の崖と緩斜面に所在する。谷を挟んで西側の丘陵斜面には上塩冶横穴墓群第17支群がある。この場所は谷の両側から丘陵が迫り、また、奥に向かって広くなるような一番狭くなった所である。緩斜面は畑として使用され、崖は約10㎝の表土があるのみで、一部は岩盤が露出していた。横穴墓は凝灰岩に掘られ、既に開口していた。

調査は平成４年度のトレンチ調査の結果を受け、平成６年度に斐伊川放水路開削部にある横穴墓を、平成８年度にG．S．事業としてのC谷関連部にある緩斜面を調査した。平成６年度は６月16日に表土掘削から開始し、横穴墓内部の調査を実施し、８月26日に終了した。なお、土砂はすべてふるいにかけ、微小遺物の採取を心がけた。平成８年度は４月17日から開始し、表土を重機で除去後、人力で掘



第44図　上塩冶横穴墓群第７支群位置図（S＝1／1000）



第45図　上塩冶横穴墓群第７支群調査後測量図
（S＝1／400）

り下げた。ピット群や横穴式石室を検出し、調査指導を受けた後、９月３日に終了した。

調査の結果、横穴墓３穴、その製作途中と考えられたもの１穴、横穴式石室を持つ古墳１基、ピット群を検出した。横穴墓は北側から１号穴とした。横穴墓は既に開口していたので遺物は少なかった。横穴式石室は大井谷で初めての発見であり、大井谷古墳とした。石室は破壊が著しく、遺物や盛土もほとんど流失していたが、一部に外護列石と思われる石列が残存していた。ピット群は上部が削平され、どれも浅く、建物跡を復元することは難しかった。

１．上塩冶横穴墓群第７支群

１号穴（第46・47図）

立地　凝灰岩の急な斜面に掘られ、調査前は埋没していた。一番北側の標高28.5ｍ付近に位置する。

形態（第46図）

前庭部・玄門部　玄門部は雨水などで凝灰岩が風化しているが、奥行き0.6ｍ、幅0.9ｍを測る。床面は平らで、わずかに前庭部方向に傾斜している。天井部は玄室から0.57ｍまで残り、高さ1.22ｍを測る。風化が著しく、側壁は丸く、天井部に至っては大きく広がっていた。玄門部の中央部には玄室から前庭部にかけて幅10㎝、深さ３㎝の断面逆台形の排水溝がＹ字状にある。玄門部と前庭部との境には３～５㎝の段がある。前庭部は奥幅1.35ｍ、奥行き1.96ｍを測り、長い。前庭部前方は急な崖になる。

玄室　幅1.75ｍ、奥行き1.8ｍ、高さ1.35ｍを測り、ほぼ正方形プランを呈する。左側壁は垂直気味に立ち上がり、各壁の界線はしっかり表現される。右側壁の表面はかなり凸凹である。天井部は丸天井で、床面は

玄門部方向に少し傾斜している。右側面には幅10cm、高さ9cmの穴が穿たれている。床面や壁面の表面は風化や剥離のため凸凹であった。

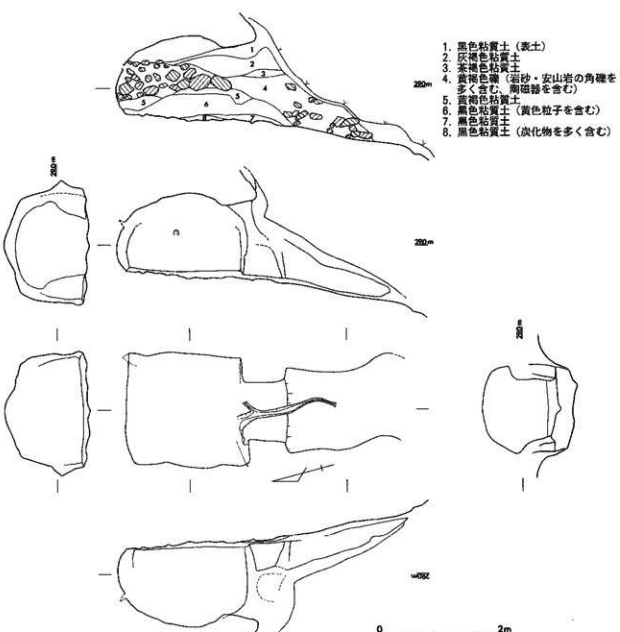
閉塞状況（第47図）　玄門部前には20～50cmの砂岩が4個一列に床面上に残っていた。その右側と側壁の間には15cmほどの石を詰めていた。これらの石は閉塞板を押さえるの根石と思われる。

土層堆積状況（第47図）　前庭部の土層を見ると、1層を除去すると角礫が現れる。この層は玄室内へ続き、15～70cmの角礫が詰められていた。この層から出土した遺物は新しく、横穴墓に伴うものではなく、再利用されたものと思われる。

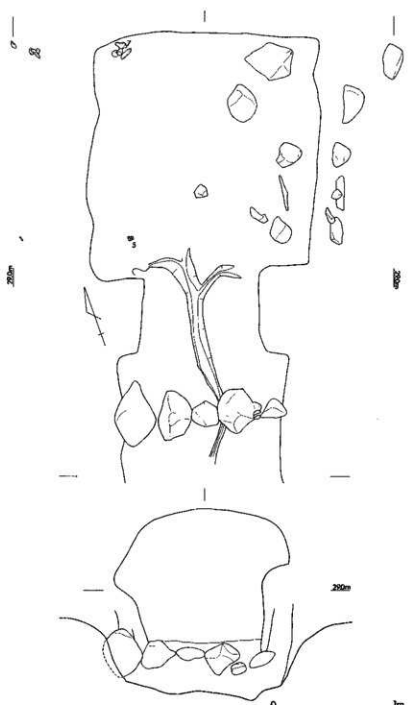
遺物出土状況　玄室右側には第4層を中心に2～40cmの石が散在し、この層から3点の磁器と土師器が出土した。横穴墓に伴うような遺物はなかった。8層からは炭化物が多数出土した。

工具痕　風化が著しいので残っていない。

遺物（第60図）　(6)は底部内面が円形に釉はぎされている。(6・7)は17世紀末から18世紀前半の長



第46図　上塩冶横穴墓群7－1号穴実測図（S＝1／60）



第47図　上塩冶横穴墓群７－１号穴遺物出土状況（S＝1／30）

崎地方の陶磁器である。(8)は底部糸切りの土師器で、時期は不明である。

２号穴（第48・49図）

立地　１号穴から4.5m南東側に位置し、標高30m付近にある。１号穴から1.5m高く、３穴の中では最高位に位置する。凝灰岩に掘られ、調査前はわずかに開口していた。

形態（第48図）

前庭部・玄門部　玄門部は幅1.02m、奥行き0.75m、高さ１mを測る。天井部と側壁の界線はないが、断面は方形である。右側壁に沿って玄室から前庭部まで幅５cm、深さ３cmの排水溝がある。床面は玄室から前庭部まで段差はなく、前方に傾斜している。前庭部は奥幅1.15m、奥行き1.4mを測り、前方は急な崖になる。床面と側壁の界線はしっかりしている。

玄室　奥幅1.15m、最大幅1.3m、奥行き1.7m、高さ1.1mを測る。左片袖で、縦長長方形プランを呈する。しかし、壁同士の界線は丸みを持ち、特に、右奥角は雑な造りである。天井部は丸天井を呈し、壁面の調整は雑で、表面には凸凹が残る。

閉塞状況（第49図）　玄門部の前には30～40cmの石が床面に置かれていた。やや大きめの石を３個置き、その間に小さい石を詰めている。閉塞のための根石と思われる。

土層堆積状況（第49図）　前庭部土層を見ると、１層除去後、閉塞のための根石の一部が見え出し、２層を除去すると石の上面が完全に確認できた。１～３層からは遺物は出土していない。

遺物出土状況（第49図）　玄室内から４個の須恵器が出土した。(3)以外は伏せた状態で、床面から約５cm浮き、４層上面からの出土である。玄室内の土をふるいにかけた結果、銅製品が出土した。

工具痕　風化しており、工具痕は確認できなかった。

遺物（第60図）　須恵器は蓋坏のみであった。坏蓋は全体に丸みを帯び、口縁部と体部の境はない。坏身は受け部をもつ完形品である。(28)は大変小さな銅製品で、宝珠状を呈する。中は空洞になり、中央のくびれ付近には上下にしわがいく。用途は不明。規模は長さ5.5㎜、下部幅4.8㎜、上部幅4.2㎜、厚さ0.8㎜を測る。

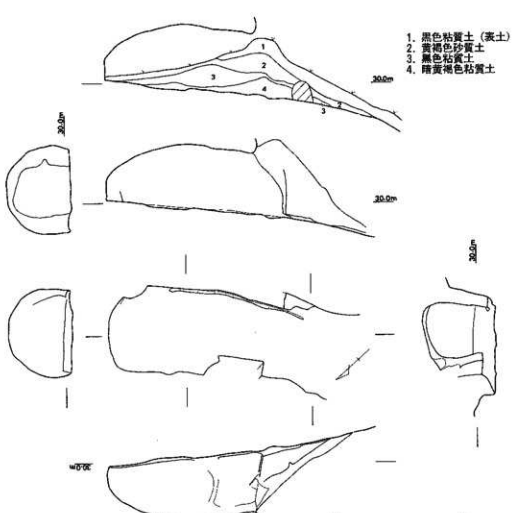
3号穴

立地　2号穴から3.5m南東に位置し、標高29.2m付近にある。凝灰岩に掘られ、調査前から開口する。

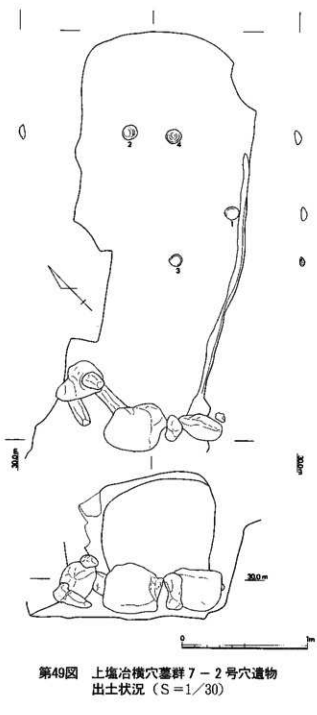
形態（第50図）

前庭部・玄門部　玄門部は幅1.1m、奥行き0.5mを測る。天井部は完全に崩落し、床面や側壁は風化が著しく、丸みを持っている。床面はほぼ水平で、左側に幅 10cm、長さ60cmにわたり短い排水溝がある。前庭部は奥幅1.85m、奥行き0.6～0.8mと短く、左側はほとんど奥行きはない。床面は前方に向けかなり傾斜し、前方は急な崖になる。左右には墓道などは確認できなかった。

玄室　幅2m、奥行き1.85m、高さ1.55mを測り、横長長方形を呈する。奥壁及び右側壁には床面から約1mの高さに軒線がある。棟線は風化が著しく、確認できないが、軒線付近からの傾斜は家形に近い。奥壁はなかり内傾する。床面の表面は凸凹で、傾斜を持つ。右側壁は37×40cmの方形に抉られた穴があり、同様な物が1号穴や第21支群にもあるが、3号穴の穴が大きい。



第48図　上塩冶横穴墓群7－2号穴実測図（S＝1／60）



第49図　上塩冶横穴墓群７－２号穴遺物出土状況（S＝1／30）

閉塞状況（第51図）　閉塞石や玄門部先端に溝などはなく、閉塞方法は不明である。

土層堆積状況（第51図）　前庭部の２層上面に扁平な板状の石材がある。用途は不明である。玄室内の３層からは10～20cmの角礫が多数出土した。これは１号穴と似ている。

遺物出土状況　玄室内の３層から陶磁器が２点出土している。陶磁器は角礫中にあり、割れていた。

工具痕　壁面の加工痕は風化や剥離のため残っていない。

遺物（第60図）　(5)は底部内面が円形に釉はぎされており、17世紀末から18世紀前半の長崎地方の陶磁器である。(31)は棒状を呈し、一部は錆びに被われている。長さ7.5cm、幅0.7cmの断面方形である。

４号穴（第51図）

立地　凝灰岩と礫層との境に掘られた横穴で、３号穴から22m離れている。出土遺物はなく、規模も小さい。埋葬したとは思われず、横穴墓という確証はない。

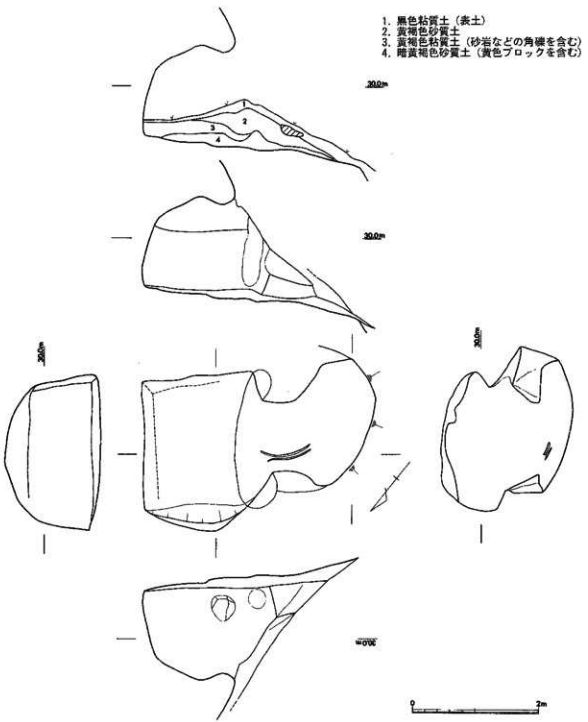
形態（第51図）

幅0.85m、奥行き0.97m、高さ0.85mの方形を呈し、わずかに掘りくぼめられている。横穴の断面は方形で、奥壁や天井部は崩れている。壁面には幅５cmの平刃削痕が残る。

２．大井谷古墳

立地　大井谷古墳は平野からやや奥まった谷奥の丘陵の緩斜面に位置する。崖から２mしか離れておらず、古墳の立地としては窮屈な印象を受ける。眺望は悪く、水田からの比高は２mと低い。周囲を調査したがこの古墳しか確認できず、単独で存在する。

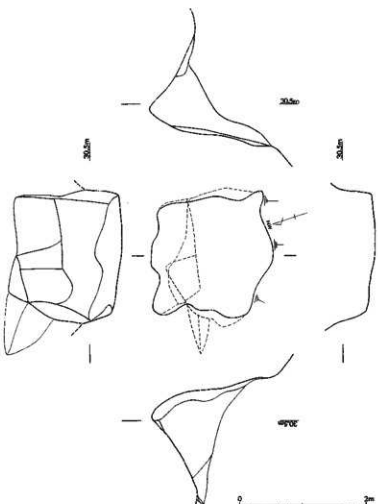
墳形・規模　調査前は墳丘の高まりは確認できなかった。耕作土を除去中に石材が検出されたことで、石室とわかった。石室の東側は盛土はすでになく、耕作土下は凝灰質砂岩の地山であった。しかし、石室と地山の間には裏込めが確認できた。茶褐色土（40・42・43層）と暗茶褐色土（41層）の土を水平堆積させながら裏込めしている。石室の北側は地山上に黄褐色土（29層）や茶褐色土（32層）を盛っ



第50図　上塩冶横穴墓群７－３号穴実測図（S＝1／60）

ている。一部は地山しか残っていないところもある。石室の裏込めは黒褐色土（25層）と黄色土（26・27層）を水平堆積させている。30層は凝灰岩の小片が堆積しており、盛土しながら石室の組み合わせを微調整したと思われる。南側の土層を見ると厚い耕作土（12層）があり、それを除去すると斜面に沿って７～11層が堆積していた。石室内には左奥隅にわずかに床石が残存しており、床石の床面は７層の下と同じ高さであった。このことは７層も後世の堆積を表しているので、その上層の土は全て、二次的な

第51図　上塩冶横穴墓群第７支群正面図
（S＝1／200）



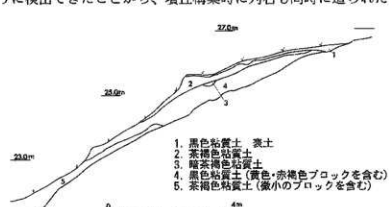
第52図　上塩冶横穴墓群７－４号穴実測図（S＝1／60）

堆積と思われる。１層が奥壁から4.7ｍまで傾斜はしているものの、本来の造成跡を表しているかもしれない。西側はかなり盛土は流出していた。しかし、45～47層は盛土と考えられ、西側列石は47層中にある。45・46層と47層の区別ははっきりしている。前者が石室を押さえるための一次墳丘で、後者は二次墳丘とも考えられるが、天井石などはなく、詳細は不明である。石室北側の地山上から0.8×1.3ｍ、厚さ0.3ｍの石を検出した。きれいに三分されているが、人工的なものかは不明。

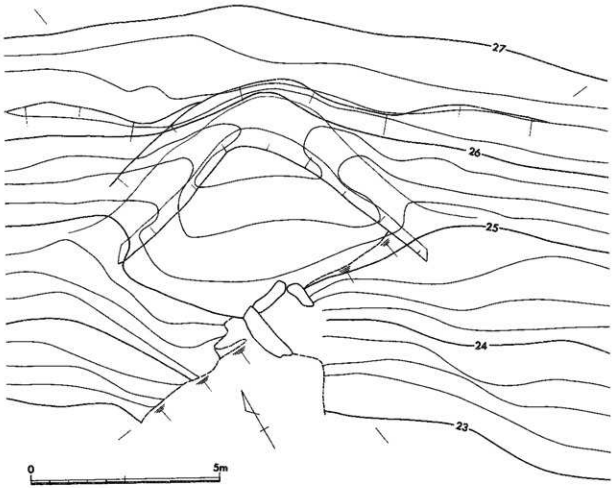
墳丘の造成は丘陵斜面の地山を４×４ｍの範囲を削り、３×３ｍの平坦面を造り出す。その周辺には旧表土（５層）を残すところもある。石室はその中央に築かれ、地山との間に裏込めし、その後、一次墳丘、二次墳丘を構築していると思われる。

北側と東側には周溝が巡っていた。一部では地山を削り出している。周溝の幅は1.5～２ｍ、一番深いところで0.5ｍ残っていた。北側の周溝の堆積土を見ると下層に砂岩の風化したものが堆積し（13・14層）、その上に耕作土が堆積する。

列石（第58図）　墳丘端部には10～30cmの円礫の列石が南側以外で確認できた。東側の列石は周溝に落ちた石が多く、転石を取り除くと4.6ｍにわたり確認できた。石材は流紋岩や石英安山岩である。確認された列石は二段で、高さは0.2～0.4ｍしか残っていなかった。石は墳丘盛土に埋め込まれるように検出できたことから、墳丘構築時に列石も同時に造られたと考えられる。南東側には多数の転石が集まっていた。また、東側の墳丘内（１層上面）には15～20cmの比較的大きさのそろった石で、長さ0.9ｍにわたり直線状の列石を造っている。この石材の用途は不明である。北側の列石は残っておらず、一石のみであった。北側は地山を削り出して造っており、列石をする必要がなかったか、あるいは盛土をした上部

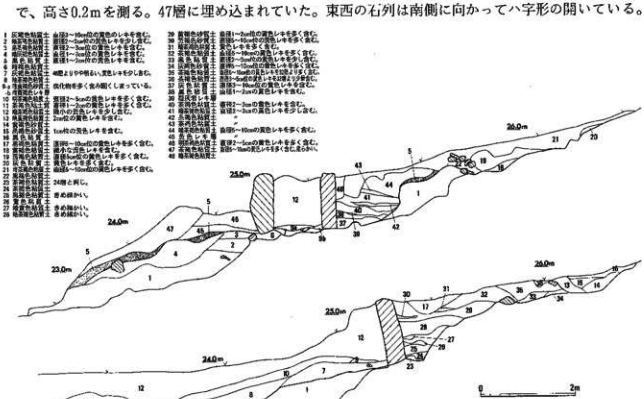


第53図　上塩冶横穴墓群第７支群北壁土層図（S＝1／200）

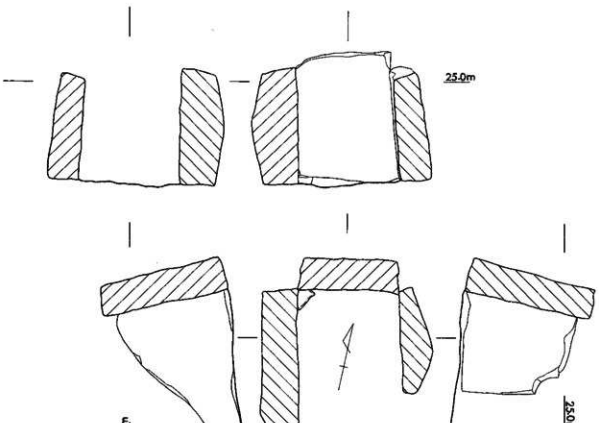


第54図　大井谷古墳　墳丘測量図（S＝1／100）

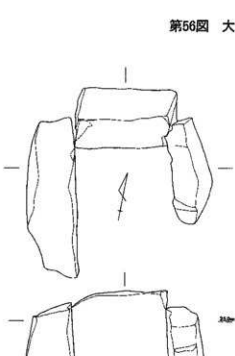
に石材があり、耕作時に移動された可能性もある。西側は0.6mにわたり確認できた。やはり、一段で、高さ0.2mを測る。47層に埋め込まれていた。東西の石列は南側に向かってハ字形の開いている。



第55図　大井谷古墳土層図（S＝1／80）



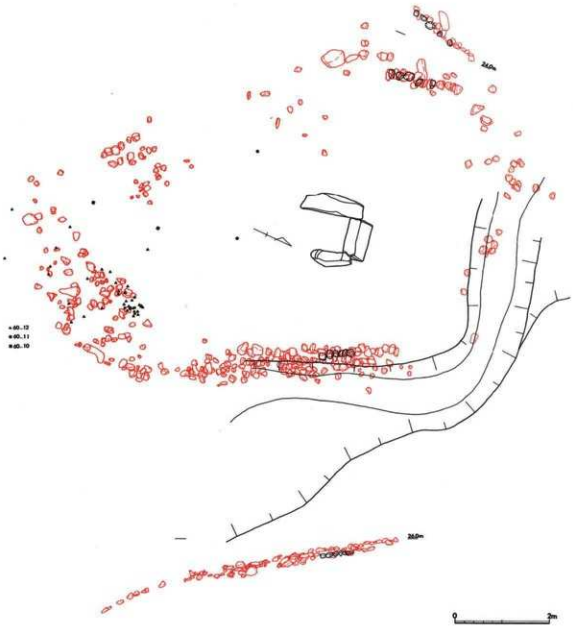
第56図　大井谷古墳石室実測図（S＝1／40）



第57図　大井谷古墳石室実測図
（S＝1／40）

墳丘規模は東西は北側がやや狭く、6.2～7mを測る。南北は南側の墳端が不明であり、北側は石室奥壁から墳端まで2.6mを測り、その距離を南側に反転すると、南北は5.2mになる。南東側で須恵器が出土したが、その場所を南東端と考えると南北は7.5mになる。

石室形態（第56・57図）　石室は主軸がS－11.5°－Eにとり、ほぼ真南に開口する。奥壁と両側壁の一枚分しか残存せず、天井石はなかった。規模は幅1.05m、奥行きは右で1.05m、左で1.65m、高さは奥壁で1.4mを測る縦長長方形である。奥壁は幅1m、高さ1.4m、厚さ0.35mの板状の溶結凝灰岩を使用する。奥壁はわずかに内傾し、側壁は垂直に立っている。奥壁の両側には側壁を受ける刳り込みがある。左側は4×18cm、右側で5×10cmを測る。左側壁は奥壁にはまっているが、右側壁は下半部ははまっているが、上部はずれていた。右側壁は前方をL字形に加工している。床面は左奥に15×25cm、厚さ7cmの床石が残存していた。側壁は内面は平らに仕上げられているが、外側は凸



第58図　大井谷古墳石列・遺物検出状況（S＝1／80）

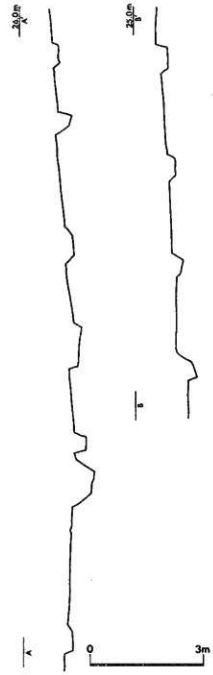
凹である。工具痕は外側によく残る。幅5㎝ほどの平刃で細かく削痕している。墳丘内や石室前方に凝灰岩の細かな石片があり、石室構築時に石材の微調整を行った可能性がある。床面を精査したが、石材を立てるための掘り方や、石材の抜き取り痕は確認できなかった。

遺物出土状態（第58図）

石室内から遺物は検出できなかった。(10)は石室前方から出土した。周囲には列石の転石が散在していた。(11)は石室に一番近い地点から出土している。10層からの出土であるが、原位置でないことは確かである。(12)の須恵器壺は小片に割れた状態で出土した。出土場所は東側列石の一番南側で、転石が集まっている所で、転石の下から出土した破片もある。

遺物（第60図）

大井谷古墳出土の遺物としては須恵器壺1、蓋坏の坏蓋2、坏身1を図化した。その他に、別個体の須恵器甕片、坏蓋の小さい破片がある。(9・10)は受け部を持ち、つまみがつく蓋である。坏身(11)



第59図　上塩冶横穴墓群第７支群
ピット断面図（S＝1／50）

は底部から直線的の伸びる口縁部を持つ。直口壺(12)は内外面に強いタタキが施されている。

3．ピット群（第59図）

調査区南側の緩斜面から65個のピットが見つかった。調査前は畑地として使用され、ピットの深さは浅いものが多い。基本的な層序は２～30cmの耕作土（黒色粘質土）があり、その下に、斜面下方には暗黄色～茶褐色粘質土が堆積し、斜面上部では砂岩が露出する。遺物は黒色土にあり、茶褐色土からは出土せず、砂岩等落石を含んでいる。加工段など確認できず、斜面はなだらかに下がっていた。その中で、２列並びの建物跡が確認できた。

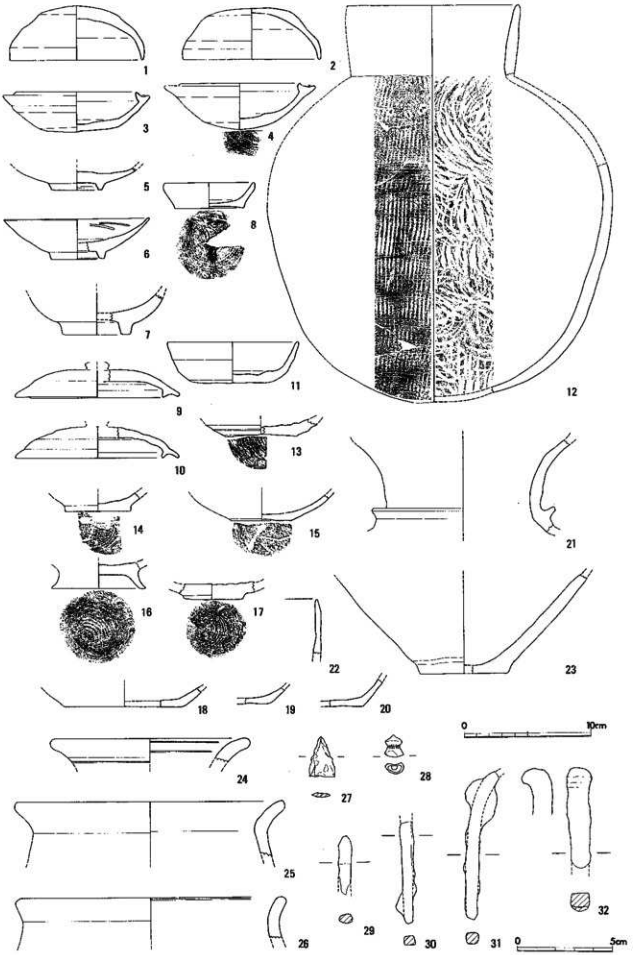
ＳＢ01　上部に位置する６間の建物跡。柱間は多くは1.4ｍであるが、南側にいくに従って、1.7ｍ、1.0ｍとばらばらである。特に、南側の柱穴は小さく、少し離れているので、同時期でない可能性がある。柱穴の深さは20～35cmを測る。周囲からは中世の土師器が出土している。

ＳＢ02　ＳＢ01の下に位置し、柱穴は４穴確認できた。３間の建物跡で、柱間は1.4ｍを測る。深さは浅く、10～20cm程である。周辺から古墳時代前期の土師器が出土している。

4．上塩冶横穴墓群第７支群出土の遺物（第60図）

縄文土器、土師器、中世土師器の小さい破片がある。ピット群の中央部はピットが少なく、この場所から多くの土器が出土している。ピット内から遺物が出土することは少なく、ピットの時期を決めることは難しい。ＳＢ01を構成するピットからは小さい中世土師器が出土している。

(13～20)は中世の土師器である。基本的には底部は糸切りである。(16)は底部糸切りの後、高台を付けている。底部と体部に段があるもの(12～15)と段のないもの(18～20)に分かれる。時期は不明である。(21)は古墳時代前期の土師器壺で、頸部に突帯を巡らす。(22・23)は縄文時代晩期の深鉢と思われる。表面は風化が著しい。(24～26)は土師器の甕である。内面に口縁部体部との境界がはっきりしたもの(25)とそうでないもの(26)がある。石鏃(27)は長さ2.05cm、最大幅1.35cm、厚さ0.2cmを測る。無茎式で、平面形は三角形である。安山岩製。(29)は鉄鏃の破片と思われる。残存長3.2cm、幅0.7cmを測る。(30)は棒状を呈し、一部は錆びに被われている。長さ5.3cm、断面は方形で、0.4×0.6cmを測る。(32)は全体が錆びに被われている。長さ5.2cm、断面は方形を呈し、0.8×１cmと太く、先端はＬ字に曲がる。



第60図　上塩冶横穴墓群第７支群出土遺物実測図　27～32（S＝1／2）その他（S＝1／3）

小　結

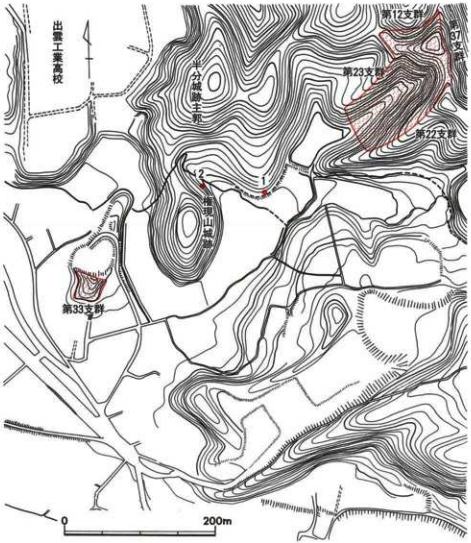
大井谷古墳は横穴式石室を内部主体とする古墳である。縦長長方形プランで、一枚石を基調にした石室は大井谷をはじめ、神戸川周辺には今のところ見られない形態である。周辺地域では仏経山南麓の斐川町高野古墳群や佐田町切石古墳などで知られるが、時期などは不明である。また、大井谷古墳が造られた時期は大念寺古墳や地蔵山古墳などの大型古墳がなくなり、首長墓の系譜が追えなかった。このような状況の中、大井谷古墳が即、首長墓といえないが、資料が増え、切石一枚石を基本とした縦長長方形プランの小石室が築かれた時期がはっきりすると、首長墓系列の問題や上塩冶横穴墓群との被葬者の違いなど新たな課題が出て来るであろう。

Ⅷ　上塩冶横穴墓群第33支群

調査の概要

第33支群は三田谷の入口北側の段丘に立地する。眼下には北流する神戸川があり、刈山古墳群や井上横穴墓群のある丘陵や、古志地区を中心とした出雲平野西部を見ることができる。横穴墓群の南側には浄福寺があったが、放水路事業により立ち退き、北側に移転した。その移転の際の1992年に、2穴の横穴墓と近代の半分瓦窯跡の発掘調査が出雲市教育委員会により行われている。(注1) 現状は北側が浄福寺建設に伴う崖になっている。西側は本来もう少し西側まで段丘が続いていたが、国道187号の建設による土取りのために削られている。また、横穴墓のあった南東斜面も寺の造成により急斜面になっていた。調査前は竹林であり、丘陵中央には古道があった。

今回の調査の契機となったのは平成4年度のトレンチ調査の結果、須恵器が出土したことによる。また、表面に窯道具や瓦が多数落ちており、さらに、北側で出雲市教育委員会が横穴墓を発掘していることから窯跡や横穴墓の存在する可能性があったので、丘陵全面を発掘調査を行った。調査は平成8年6月27日から開始した。竹林であったことから表土を重機で除去し、精査を行い、横穴墓と横穴式石室などを検出し、調査指導を受けた後、現地説明会を行い、12月20日に終了した。



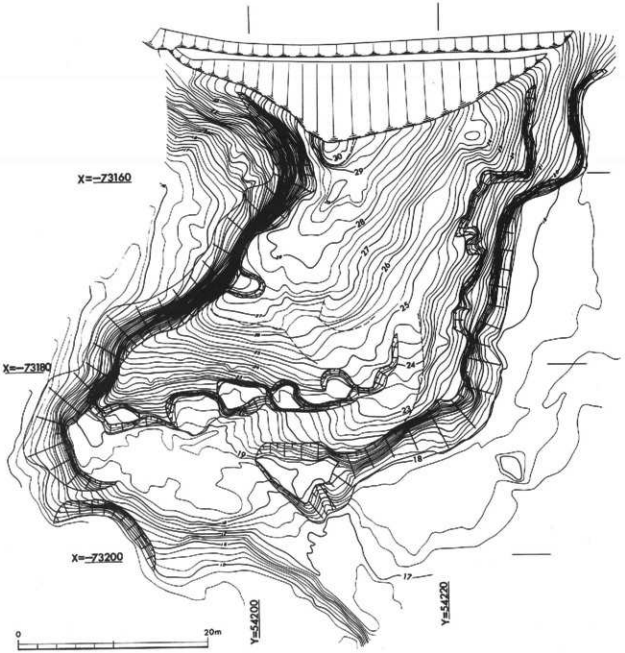
第61図　上塩冶横穴墓群第12、22、23、33、37支群調査区位置図（S＝1／5000）

調査の結果、横穴墓6穴、横穴式石室を持つ古墳1基、石棺1基、石組み遺構1基、火葬墓1基、土坑3基などを検出した。三田谷では2基目の横穴式石室の発見であり、前回の三田谷Ⅱ遺跡Ⅱ区SX01を三田谷1号墳とし、[注2] 今回のものを三田谷2号墳とした。横穴墓については出雲市教育委員会が発掘調査を行ったものを1・2号穴とし、北側から3号穴とした。礫層に掘られているため天井部はすべて崩壊していた。6・7号穴から石棺を確認し、上塩冶横穴墓群ではやや古手の須恵器も出土した。半分瓦窯跡については赤瓦が四カ所以上に集められいたのみで、窯跡などの遺構は確認できなかった。なお、半分瓦窯跡は分布調査報告書に登録されている。[注3]

1．上塩冶横穴墓群第33支群

3号穴

立地　浄福寺との境界付近に位置し、北側はすぐに崖になっている。標高24mを測り、調査前は埋没



第62図　上塩冶横穴墓群第33支群調査前測量図（S＝1／400）

し、瓦片が堆積していた。

形態（第64図）

墓道・玄門部　玄門部は奥幅1.05m、前幅0.6m、奥行き1.1mを測り、前庭部側が細くなる。床面中央には3～8cmの段がある。側壁は床面から30～50cmの高さまで垂直に立ち上がる。羨道は幅0.6m、奥行き2.8mを測り、狭く長い。玄門部との境には刳り込みがあり、幅20～25cmに広がっている。側壁は高いところで、1.3mまである。床面は平坦で、傾斜もあまりない。

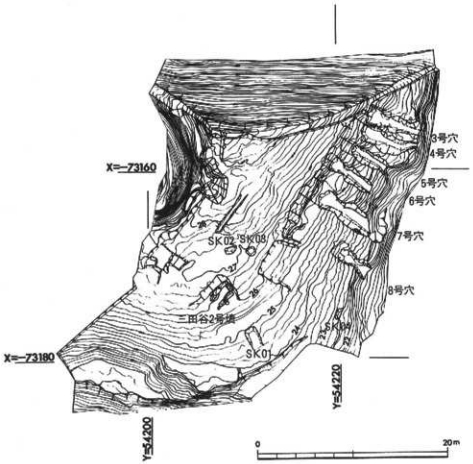
玄室　奥幅1.85m、前幅1.7m、奥行き2.3mを測る縦長長方形を呈する。天井は崩落しているが、側壁は内傾し、界線を復元すると丸天井であったと思われる。床面は平らで、表面は滑らかである。

閉塞状況（第65図）　4層下面に角礫を使った閉塞石が置かれていた。中央に30×40cm、厚さ10cmの扁平な石を置き、ほぼ同じ高さに6個の石を玄門部幅いっぱいに詰められていた。しかし、これでは閉塞はできないので閉塞板の押さえ石と思われる。さらに、20cmほど下がった8層中の左側に2個の石材が検出できた。

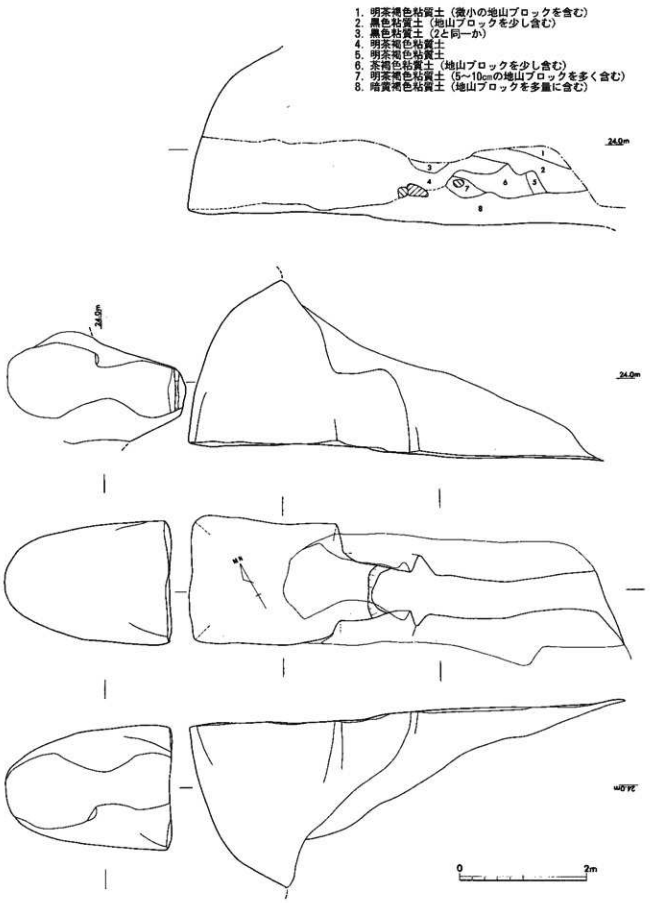
土層堆積状況（第64図）　8層は玄室から墓道まで堆積し、固くしまり地山に似ている。この上面に閉塞石状の集積がある。4層は崩落土で、その上面に2、3層の黒色土が堆積している。天井部が崩落した跡に、その上面が一時、表土化したものと思われる。

遺物出土状況　玄関内の遺物は床面から出土し、8層中に位置する。鉄釘は玄室の両側から出土している。(1)は破片となり散らばっている。鉄釘はかなり離れた破片が接合する。

遺物（第82図1～4、第86図1～16）



第63図　上塩冶横穴墓群第33支群調査後測量図（S＝1／400）



第64図　上塩冶横穴墓群33－３号穴実測図（S＝1／60）

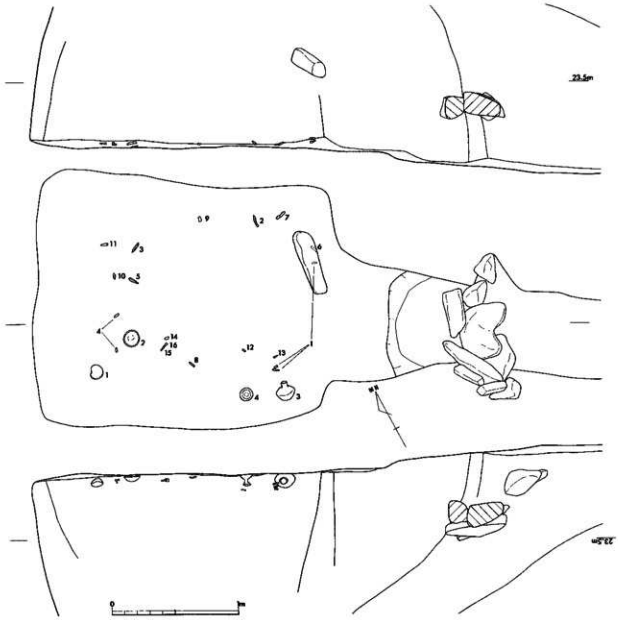
遺物は須恵器坏蓋1、坏身1、平瓶1、高坏1、鉄釘がある。蓋坏は体部と口縁部の境がなく丸く、口径も小さい。鉄釘(1～16)は断面方形を呈し、頭部は折り曲げられており、11本ある。全長は(1)で9.8cm、(2)で9.1cm、(3)で7.5cm、(5)で7.6cmを測り、大小2種類ある。表面には木質が残り、木理方向から2種類に分けられる。1つは木理が釘頭から中央にかけて横方向にはしり、中央から釘先は縦方向にはしるもの。もう1つは釘頭から釘先まで横方向にはしるものである。先端部の欠落などで全体がわかるものが少ないが、前者に(1・5)、後者に(7・8)などがある。

4号穴

立地　標高22.9m付近にある。3号穴に接するように位置し、墓道先端では1.5mしか離れていない。調査前は完全に埋没していた。

形態（第66図）

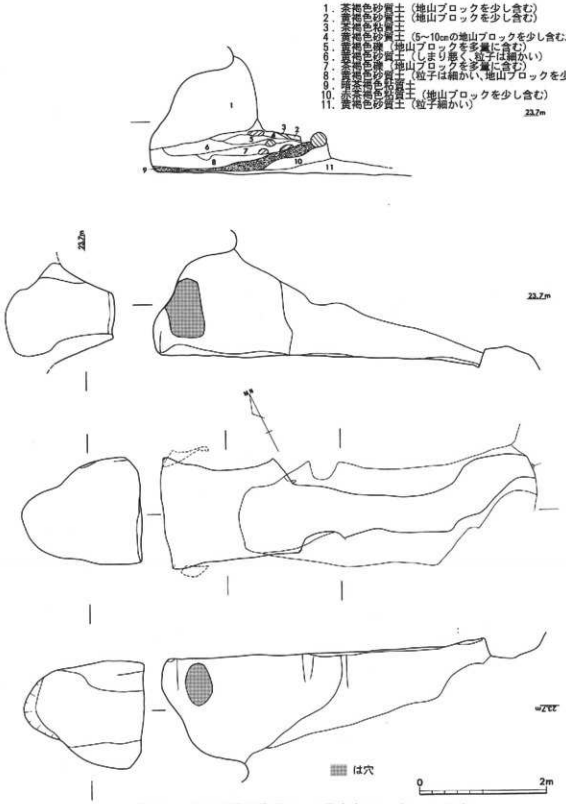
墓道・玄門部　玄門部ははっきりしないが、左側にやや狭くなる場所があり、ここことすると、幅0.65



第65図　上塩冶横穴墓群33－3号穴遺物出土状況（S＝1／60）遺物は第82・86図に対応

～0.8m、奥行き0.45mを測る。側壁は高く立ち上がる。墓道は奥幅0.65m、奥行き2.8mを測り、先端付近で3号穴方向に曲がっている。床面は平坦で傾斜もあまりない。

玄室　奥幅1.75m、前幅1.45m、奥行きは右で2.1m、左で2.2mを測り、左側が長い。袖部は右側が38cmと左袖より長い。奥壁や側壁は内傾し、床面はあまり傾斜がない。右側壁は3号穴とつながっている。また、左奥側の側壁にも奥行き20cm以上の穴があるが、先細りで、腕も入らないぐらい続いており、動物の掘った穴の可能性がある。閉塞石や床面には溝はなく、明確な閉塞施設は確認できない。

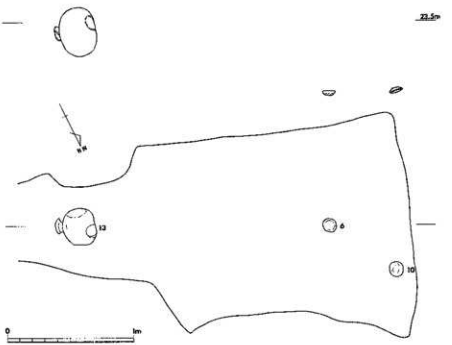


第66図　上塩冶横穴墓群33－4号穴実測図（S＝1／60）

しかし、玄門部の左前方には10cmの刳り込みがあり、ここで板などを利用して閉塞していた可能性もある。

土層堆積状況（第66図）

玄門部から玄室にかけての土層を観察すると、9層の暗茶褐色上を境に区別できる。その上面は軟質で、地山と同じ礫層や粒子の細かい砂質土が交互に堆積している。これらは天井部などの崩落土と思われる。11層は粒子の大きさがそろい、細かい土であり、床面に敷かれた可能性もある。



第67図　上塩冶横穴墓群33－4号穴遺物出土状況（S＝1／30）
遺物は第82図に対応

遺物出土状況（第67、68図）　玄門部から横瓶が倒れた状態で出土している。玄室の9層中から須恵器が2点出土している。墓道のかなり高い地点で(5)と(13)の破片が出土している。さらに、(7～9・11・13～15）は墓道先端付近から出土した。(12)は4号穴周辺から出土している。鉄釘は玄室内の9層をふるいにかけて検出した。

遺物（第82図5～17、第86図17～22）

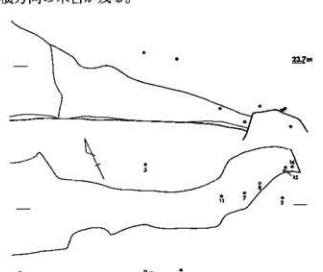
遺物は坏蓋3、坏身4、提瓶1、横瓶1、平瓶2、鉄釘が出土している。(8)は体部と口縁部に境があり、口縁部内面に沈線がある。(9)の底部はヘラケズリされている。横瓶(13)は大型で、底部に焼成後に、穿孔されている。鉄釘(17～22)の破片で完全に残っているものはない。断面方形を呈し、頭部(17～19)は折り曲げられている。(18～20)は横方向の木目が残る。

5号穴

立地　4号穴より0.4m高い標高23.3mに位置し、西へ4m離れている。

形態（第69図）

墓道・玄門部　玄門部は奥幅1.05m、前幅0.55m、奥行き0.75mを測り、玄門部は明確に表現されている。側壁は垂直に立ち上がり、床面はわずかに傾斜している。墓道は幅0.8m、奥行き3.2mを測り、狭く長い。側壁は高く、最も高いところで1.5mを測り、掘り込みが深い。先端は急激下がっている。床面は平らであるが、

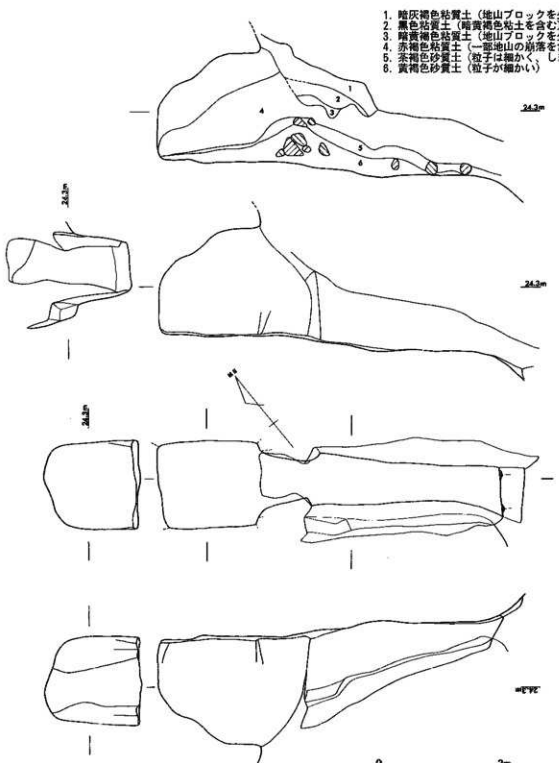


第68図　上塩冶横穴墓群33－4号穴墓道遺物出土状況（S＝1／60）遺物は第82図に対応

前方に傾斜している。

玄室　奥幅1.3m、前幅1.25m、奥行き1.6m、高さ1.7mを測り、縦長長方形を呈する。天井はほとんど崩落しているので、高さは現状である。各界線は明瞭に表現されている。袖部は短く、丸みを持つ。側壁は垂直気味に立ち上がり、奥壁は0.8mまで垂直に立ち上がる。

閉塞状況（第70図）　6層中に角礫が積まれていた。墓道幅にいっぱいに下から積み上げられている。小さい石を置いた後、30×55cm、厚さ30cmの直方体の石を真ん中に据え、右側壁との間に10×30cmの

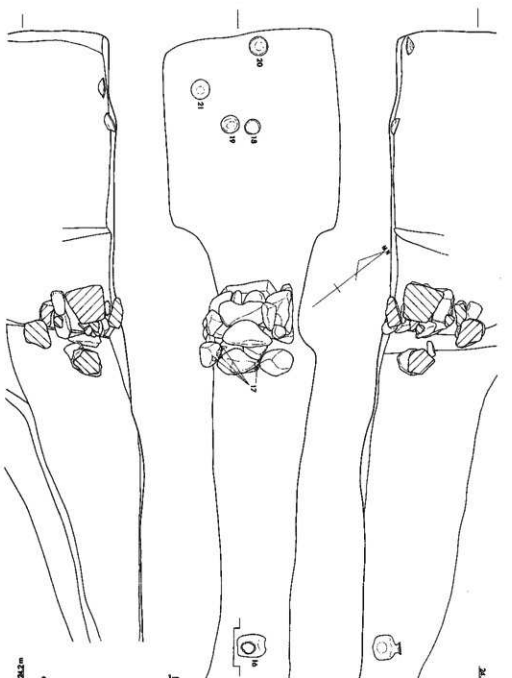


第69図　上塩冶横穴墓群33－5号穴実測図（S＝1／60）

長方形の石を詰める。その周囲に10～40cmの石を置き、50×70cm、高さ40cmの範囲に閉塞石を積み上げている。その上に5層を挟んで25×40cm、厚さ10cmの扁平の石が検出された。

土層堆積状況（第69図）　墓道の1～3層は横穴墓が埋没してから堆積したものと思われる。3層からは石塔周辺から検出した円礫と同様なものを含んでいた。横穴墓を検出する前に石塔が4層上面から多数出土しているので、それに関係したものと思われる。6層の下の閉塞石は動かされておらず、6層上面時に盗掘あるいは追葬があったと思われる。4層は天井などの崩落土である。

遺物出土状況（第70図）　墓道先端付近の6層上面から横瓶が置かれるように状態で出土した。玄室の床面からは須恵器の蓋坏が出土した。前庭部からは少数の須恵器甕片が出土した。(18)は上を向いているが、他は伏せていた。閉塞石の間からは(17)が破片となり出土した。金属製品も玄室内からの

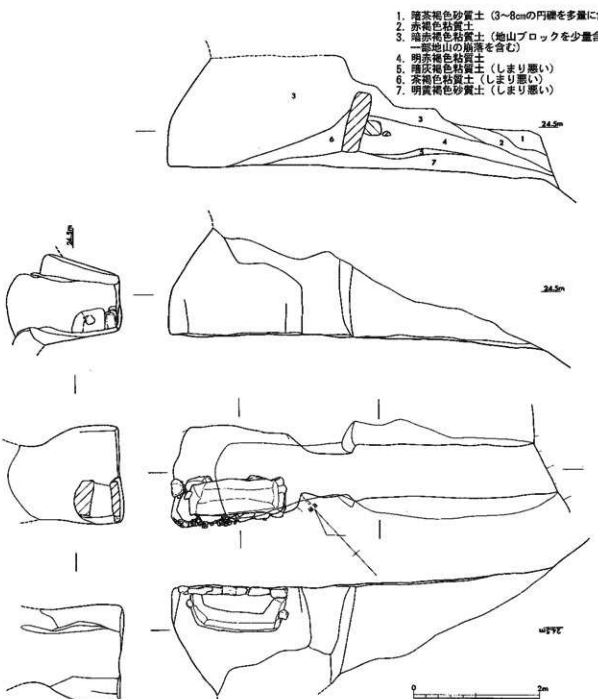


第70図　上塩冶横穴墓群33－5号穴遺物出土状況（S＝1／30）遺物は第82図に対応

出土である。

遺物（第82 図18～21、第86図23～25）

遺物は坏蓋２、坏身２、壺１、横瓶１、耳環１、玉１が出土した。(17)は完形で、小口の一方には円形の穴があく。(18～21)は完形である。蓋坏の口径は大きく、口縁部から体部にかけて丸みをもつ。耳環(23・24)は２個あるが、大きさが異なる。(23)は銅芯鍍金製で、鍍金は残りが悪く、内面の一部に残る。環の端面で金箔を折り込んでいる。太く大型で、断面はやや楕円形になり、平面形はきれいに残る。長径2.9㎝、短径2.9㎝、太さ0.9㎝を測る。(24)は細く小型で、銅部分のみ残り、両先端は先細りになる。長径1.8㎝、短径1.6㎝、太さ0.35㎝を測る。玉(25)は白色で風化しており、材質は不明である。小型のわりには穴が大きい。長さ1.0㎝、幅0.7㎝、穴径0.3㎝を測る。



第71図　上塩冶横穴墓群33－６号穴実測図（S＝1／30）

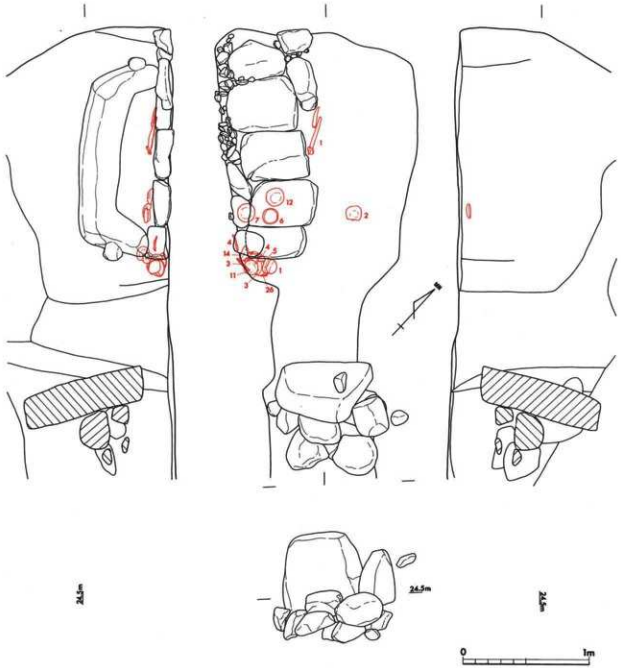
6号穴

立地　第33支群3～8号穴では最も高所にあり、標高23.8mを測る。5号穴から西に2.5m地点に位置する。

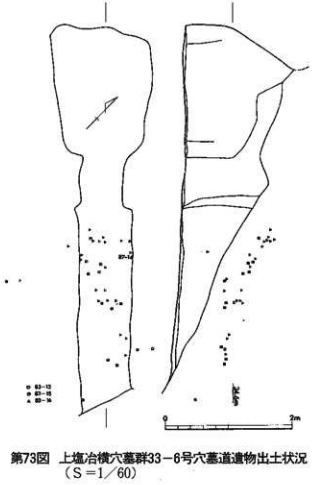
形態（第71図）

墓道・玄門部　玄門部は奥幅0.75m、前幅0.65m、長さ0.75～0.8mを測る。玄門部の中央には20×35cmの扁平な石があった。側壁は垂直に立ち上がり、表面は滑らかである。墓道は幅0.85m、長さ3.3mと長く、床面は平坦である。先端は急斜面に続く。

玄室　奥幅1.55m、前幅1.15m、奥行きは右で1.55m、左で2mを測る。各壁は内傾し、壁同士の界線は丸みを持ち、復元すると丸天井になる。左側壁に沿って石棺が置かれており、やや左側が広くな



第72図　上塩冶横穴墓群33－6号穴遺物出土状況（S＝1／30）遺物は第83・87図に対応



第73図　上塩冶横穴墓群33－6号穴墓道遺物出土状況
（S＝1／60）

り、窪んでいた。床面は前庭部までほぼ水平である。石棺は床石の上に刳り抜かれた天井部が置かれていた。その周りには5～10cmの円礫が敷かれていた。

石棺（第74図）　石棺は小さい軽石を含む凝灰岩を使用していた。天井石は両側に一つずつ径15cm、突出長10cmの円形の縄掛突起を持ち、内部を刳り抜いたものである。縄掛突起は小口の中央ではなく、横穴墓中央部方向にずれている。天井部には幅15cmの棟が表現されている。玄室内やその他からは凝灰岩の破片は出土していない。内法で長さ162cm、幅48cm、高さ手前で26cm、奥で32cmを測る。内部の天井は平坦で、小口は10cmほどえぐられている。外法で長さ1.6m、幅0.53m、高さ0.72mを測る。床石は中央に大きな石を一列に5枚並べ、その左右に小さい石を5枚を置いて構成されている。床石は厚さ12cmほどで、一番大きい石は40×55cmを測る。床石周囲には5～10cmの川原石状の円礫が置かれていた。床石は側壁に接して置かれている。

小口側の外側と棟線から横穴墓の側壁側の工具痕は粗く、石棺内部や手前や天井部はきれいに滑らかなである。粗い工具痕を見ると幅5cmの平刃である。

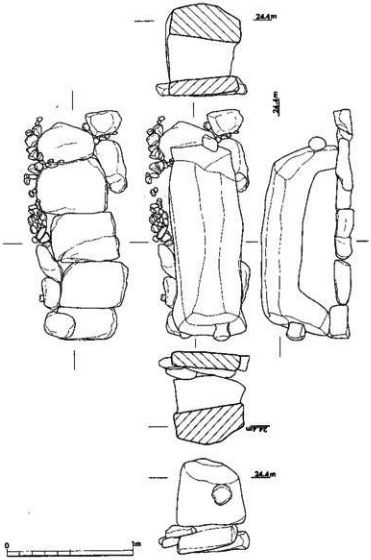
閉塞状況（第71図）　玄室から墓道にかけて7層が堆積し、その上面で閉塞している。閉塞石は砂岩である。幅65cm、高さ75cmの一枚石を置き、その前に20×35cm、15×20cmほどの石を押さえとして置く。一枚石の右側には幅30cm、高さ45cmの石で側壁との隙間を埋めている。この石による閉塞は床面との間に一層はさんでいることから初葬とは限らない。この閉塞石を動かした形跡はないが、墓道側に傾いていた。

土層堆積状況（第71図）　墓道の1，2層は内部に円礫を含んでおり、石塔周辺と同様な堆積と思われる。3層は天井部や地山の崩落土である。6層も3層と同質の土であるが、区別ができる。7層は地山に似ており、固く堆積している。5層はやや暗い土で、しまりが悪い。

遺物出土状況（第72、73図）　玄室内の遺物は石棺内、石棺前、石棺と左袖の間付近から出土している。石棺内からは須恵器が3点出土した。これらの須恵器は石棺上から5cmほど浮いている。石棺前の6層、床面から5cmほど浮いた状態で、大刀や鏃坏が出土した。大刀は四分され、切先を奥に刃は石棺側を向いていた。最も多く遺物が出土したのは石棺と側壁の間で、幾重にも須恵器は伏せて重ねられ、その途中から5本以上の刀子と鉄鏃が一緒に検出した。刀子は須恵器の間に埋まり、刃を上に向けたものや切先が下を向いたものもある。鉄斧は墓道の4層中の閉塞石の下から出土した。墓道からは(13～16)が破片となり出土した。これらは3層中あるいはその上層から出土している。

遺物（第83図1～16、第87図1～14）

遺物は坏蓋6、坏身6、提瓶1、高坏1、甕1、甕、鉄製品が出土した。(1～5)は体部と天井部に境があり、天井頂部はヘラケズリを行っている。(6)はヘラケズリは施していないが、口径や器高などの法量は他の坏蓋と同じである。(7～10)は口縁部の立ち上がりも高く、底部はヘラケズリされている。(11)は口縁部の立ち上がりも低く、底部は削られていない。(15)は小片で、体部には櫛による刺突文が施されている。(16)は軟質で、焼成が悪い。体部の破片もかなり出土しているが、接合できなかった。大刀(1)は全長52.8cm、棟幅0.9cm、幅2.4cmを測る。全体に錆びに被われ、4つに分かれている。棟は直線で、関には鉄製金具が一部残り、規模は幅2.1cmの楕円形をしている。茎は柄頭に向かいやや細くなり、断面は0.6×1.3cmの方形である。鍔は無窓で、長さ5.2cm、幅4.7cm、厚さ0.3cmを測る。刀身と茎の表面には木質が残る。刀子(2～8)は5個体以上出土した。(2)～(4)は両関で、茎部には木質が残る。(2)は全長14.5cm、刃部長8.9cm、最大幅1.7cm、厚さ0.4cmを測り、表面には他の刀子の切先が付着している。鹿角装刀子(5)の茎部で、刃部と鹿角の柄がわずかに残る。(6)は切先、(7)は茎、(8)は関付近の破片である。(8)の関には残存で1.8×1.1cmの楕円形に木質が残る。鉄鏃(9～13)は短頸の鏃箭式と思われ、撫関で、(9)は2個体分あり、1個体は鏃先を、もう1個体は頸部を欠損している。先から篦被までの長さ8.1cm、鏃身部の最大幅1.2cm、厚さ0.3cmを測り、断面は扁平である。篦被の断面は0.6×0.3cmの方形である。(13)は茎部の破片で、断面は径0.5cmの楕円形をし表面には木質が残る。鉄斧(14)は全体を錆びに被われている。方形の袋部を持つ無肩で、袋部から刃部に向かい片側が湾曲する。全長7.0cm、刃部幅4.0cm、袋部幅3.2×1.5cmを測る。



第74図　上塩冶横穴墓群33－6号穴出土石棺実測図（S＝1／30）

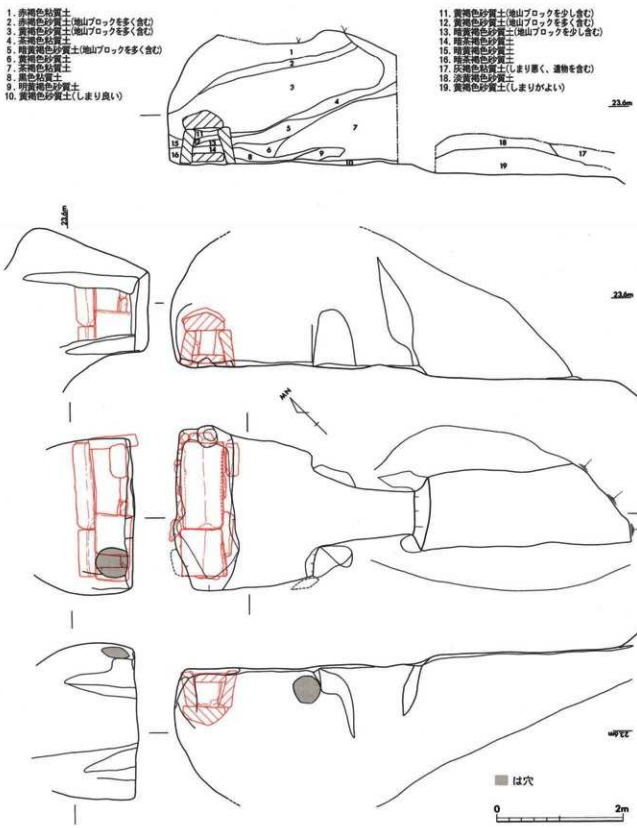
7号穴

立地　6号穴から3.5m西側にあり、標高22.6m付近に位置する。調査前は埋没していた。主軸はS－

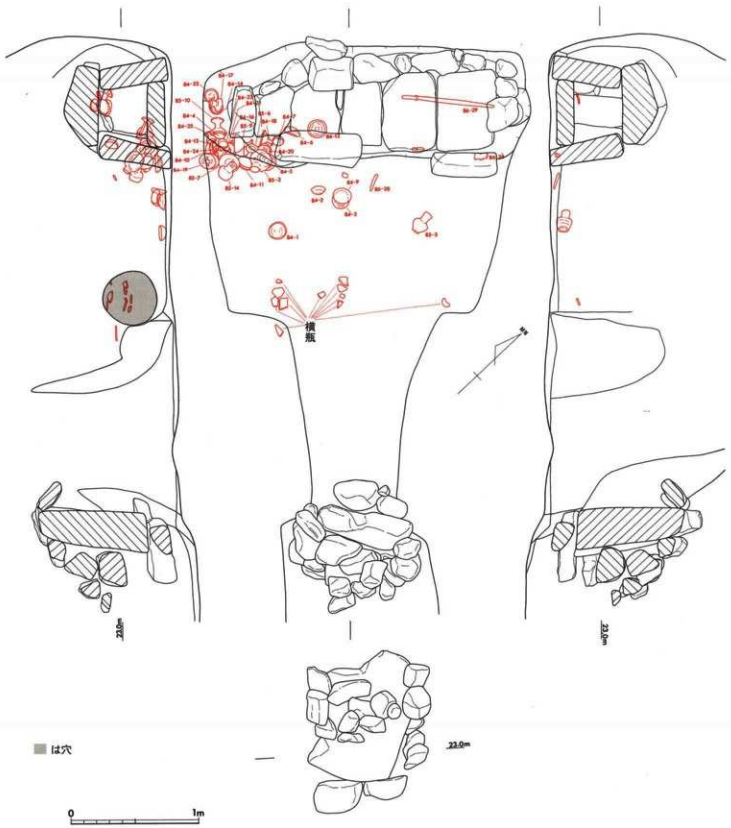
47° －Eで、南東に開口する。

形態（第75図）

墓道・玄門部　玄門部は幅0.7～1.2m、奥行き1.6mを測り、奥に向かって広がっている。側壁は垂直に立ち上がる。墓道との境には10cmの段差がある。墓道は奥行き3.15m、奥幅1.15mを測り、断面はコ字形である。側壁はかなり高く2mを測り、掘り込みが深い。



第75図　上塩冶横穴墓群33－7号穴実測図（S＝1／60）



第76図　上塩冶横穴墓群33－７号穴遺物出土状況（S＝1／30）

玄室　前幅1.9m、奥幅2.5m、奥行き2.1mを測り、台形を呈する。側壁は内傾し、奥壁はやや外側に広がるようなカーブになる。壁同士の界線は明瞭に表現されている。床面は平坦で、奥壁に向かって高くなり、奥壁に沿って石棺が置かれていた。床面は石棺のため長方形に5㎝ほどの深さに掘り窪められていた。

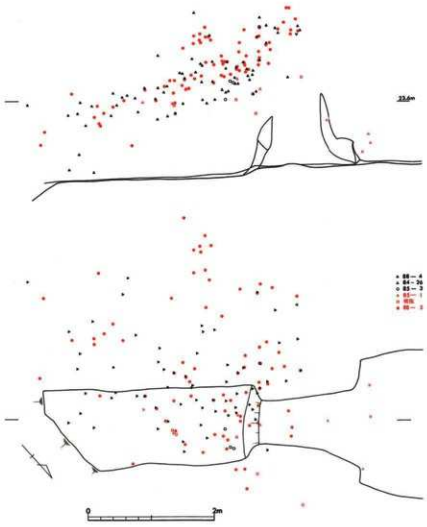
右袖部の10層上から砂岩を2つ検出した。奥壁左側と左側壁には40㎝の穴がある。奥壁の穴は石棺の裏側に当たり、石棺があると掘れない。小動物が掘った可能性がある。

石棺（第78図）　天井石は2枚で構成され、線状の棟が表現され、寄棟である。長さ2.1m、幅0.65m、厚さ0.27mを測る。工具痕が2枚では違い、左側が丁寧である。床石からの高さは0.85mを測る。床石は5枚からなり、横穴墓の奥壁や側壁との間には9枚の小さい石が詰められていた。側壁は右側20×40㎝、左側15×20㎝の直方体の石を使用している。2枚の天井石が合う場所に奥石と前石があり、天井石を支えている。前石は20×65㎝、後石は17×32㎝を測る。右前にも石が置かれているが、幅53㎝、高さ25㎝と低く、仕切状を呈する。右側壁が砂岩で、それ以外は凝灰岩を使用し、厚さ15～18㎝に切られ、石により灰色や白色など色にばらつきがあり、同一箇所で採集したかは不明である。玄室内やその他からは石棺以外の石片は出土していない。天井石をのせるため、側壁等の上面は揃えられ、側壁の床面はやや深く掘られている。

閉塞状況（第76図）　閉塞石は墓道に堆積した20層の上面に置かれている。25×35×50㎝、15×30×60㎝の板状の長い凝灰岩を2枚敷き、その上に幅75㎝、高さ110㎝、厚さ30㎝の大きな一枚石（砂岩）を置いていた。その前には15～30㎝の角礫が一枚石に張り付くようにあった。この角礫は床面から40㎝の20層上面にある。天井が崩落しているのではっきりとはわからないが、閉塞をした後に閉塞石を動かした形跡はない。同質の砂岩が墓道前方でも確認できた。

土層堆積状況（第75図）

玄室内は完全に埋没し、陥没していた。7層はし



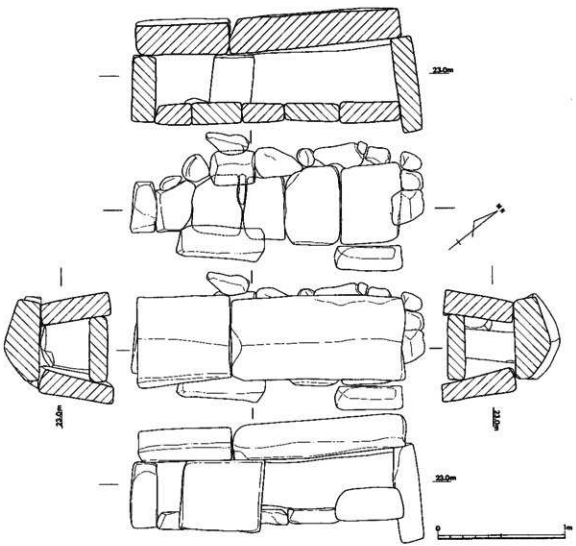
第77図　上塩冶横穴墓群33－7号穴墓道遺物出土状況（S＝1／60）

まりが悪く、遺物を含んでいる。その上層である1～6層は天井の崩落土などで地山と類似している。3層上面からは五輪塔が出土しているので、五輪塔が置かれた後に大井が崩落したと思われる。10層は粒子が細かく、上面から遺物が出土しており床面の置土あるいは整地土の可能性がある。

遺物出土状況（第76、77図）　玄室内からは石棺内、石棺前、石棺と左側壁の間から多く出土している。石棺内からは大刀と須恵器が2個倒れた状態で出土している。大刀は石棺上にあり、切先を右側にし、刃部を前側に向けている。石棺前からは鏃や壺、蓋坏が検出された。石棺と側壁の間からは須恵器や土師器が積み重ねられていた。土師器高坏の中に蓋坏が入っていたりし、片づけられたと考えられる。これらの遺物は10層上面から出土している。石棺の側壁の下からは鉄斧が出土し、刃部は中央側を向く。鏃(28)は切先を前方に向ける。玄室の玄門部側で7層から横瓶の破片が出土した。この同一個体が墓道からも出土している。さらに墓道の上方や17層からは須恵器甕片が多数出土した。それに混じり提瓶、高坏、壺もあり、追葬や追善供養を行った可能性がある。(27)は閉塞石の中から出土した。

遺物（第84、85図、第86図26～30、第88図4・5）

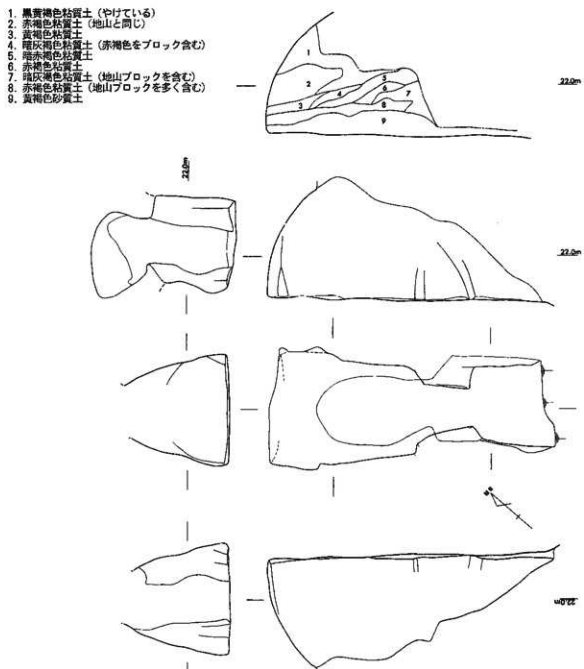
土器は蓋11、坏身5、有蓋高坏6、無蓋高坏3、壺2、提瓶3、平瓶1、甕と土師器高坏5が出土



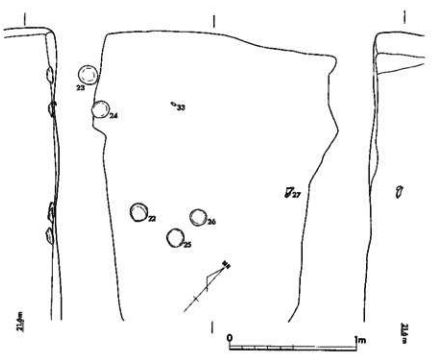
第78図　上塩冶横穴墓群33－7号穴出土石棺実測図（S＝1／30）

した。蓋は数的に坏蓋と有蓋高坏の２種類あるが、区別できない。体部から口縁部にかけてわずかに沈線や段を持つものがあり、数的に有蓋高坏に伴うと思われる。(13)にヘラケズリがわずかに施されている他の、蓋坏の天井部や底部はナデ調整である。有蓋高坏は似た形態であるが、三角形透かしが、２方向で脚端部が断面三角形(17～21)と３方向透しで、脚端部が垂直におりるもの(22)がある。土師器高坏は表面に赤色顔料が塗布される。口縁部が外反するもの(6・7・10)と体部から口縁部にかけて内湾するもの(8・9)がある。

鉄斧(26)は全体を錆びに被われている。方形の袋部を持つ両肩式である。全長8.3cm、刃部幅4.2cm、袋部幅3.2×1.9cm、刃部から肩部の長さ4.2cmを測る。(27)は大刀の柄頭か鞘尻金具と思われる。長さ15.1cm、幅2.7×1.5cm、厚さ0.1～0.2cmを測る。外面に繊維の圧痕、内面に木質が残る。(28)は鏨と思



第79図　上塩冶横穴墓群33－８号穴実測図（S＝1／60）



第80図　上塩冶横穴墓群33－８号穴遺物出土状況（S＝1／30）
遺物は第82図に対応

われる鉄器で、錆びに被われている。中央にアクセントをもち、一方には木質が残り、断面は方形に近く、0.8×0.9㎝を測る。もう一方は片面から細り、先端までの長さは9.6㎝で、断面は方形に近い。大刀(29)は全長67.8㎝、棟幅0.9㎝、幅2.8㎝を測る。刀身は大きく２か所に錆びが着いているがその他の部分は保存状態は良い。茎は幅2.2㎝で、径0.5㎝の円釘が２か所あり、関側には目釘が残る。鐔は長さ2.8㎝、幅3.2㎝を測り、卵形をしている。刀身と茎の表面には木質が残る。耳環(30)は１個のみ出土した。中空で、全体に錆ており、一部内外面に緑青が出る。環の端面で別造りの板状のものを折り込んで留めている。断面はやや楕円形になり、平面形はきれいに残る。長径3.2㎝、短径３㎝、太さ0.9㎝を測る。その他幅７㎜、断面半円形の刀金具が出土している。

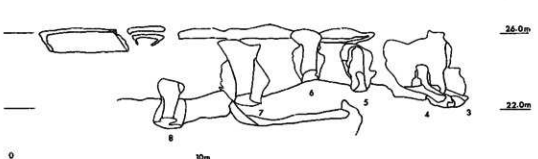
８号穴

立地　標高21.3ｍに位置し、７号穴から4.5ｍ離れ、やや孤立した状態であった。

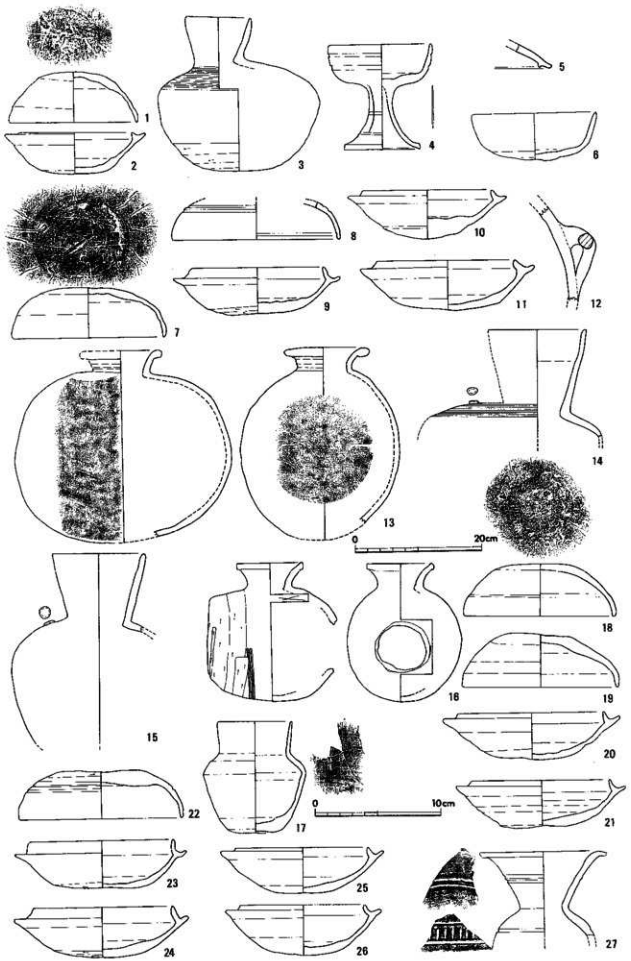
形態（第79図）

墓道・玄門部　玄門部は奥幅0.95ｍ、前幅0.55ｍ、長さ0.7ｍを測り、小さい。側壁は垂直気味に立ち上がる。墓道は幅1.1ｍ、長さ1.15ｍと短く、側壁は垂直に立ち上がる。墓道前方は調査前から崖になっており、本来はもう少し長かったと思われる。

玄室　奥幅1.8ｍ、前幅1.3ｍ、奥行き2.2～2.3ｍを測り、縦長長方形である。天井は奥壁や側壁の残存状況から丸天井が復元できる。奥壁と側壁の界線は明瞭であるが、袖部は丸みを持つ。



第81図　上塩冶横穴墓群第33支群正面図（S＝1／200）



第82図　上塩冶横穴墓群33－3・4・5・8号穴出土遺物実測図 13・16（S＝1／6）その他（S＝1／3）
1～4（3号穴）5～15（4号穴）16～21（5号穴）22～27（8号穴）

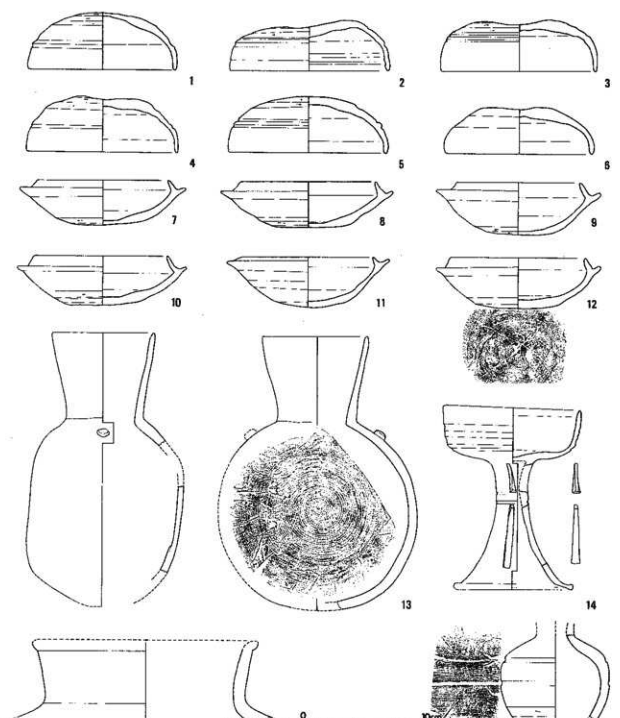
閉塞状況　玄門部の前幅いっぱいに砂岩の石が７個置かれていた。

土層堆積状況（第79図）　墓道から玄室にかけて９層が堆積している。８層までは水平堆積しているが、その上面の土は玄室奥壁に向かって斜めに堆積している。２層は天井部の崩落土である。１層の上面はわずかに赤く焼けていた。上面からの遺物はなかった。

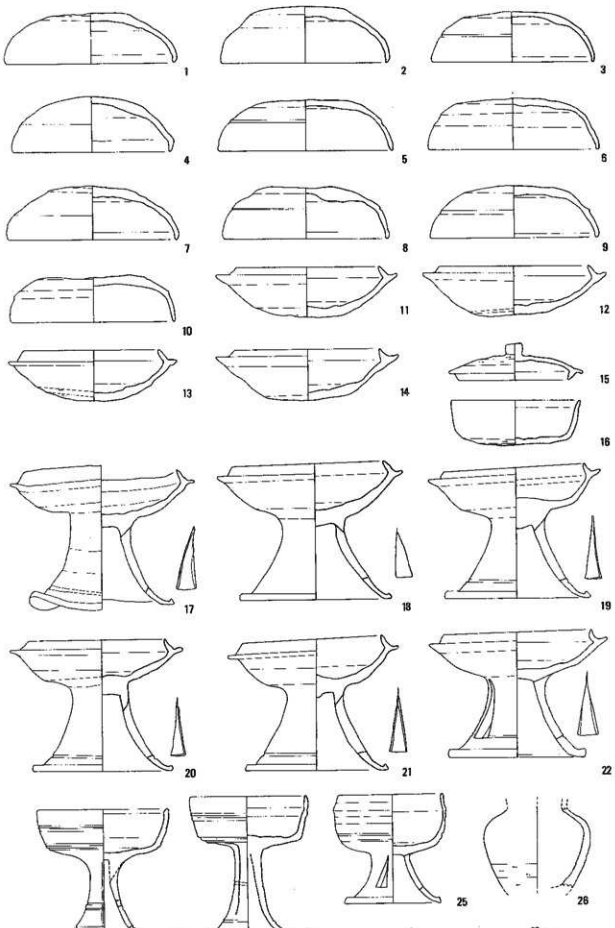
遺物出土状況（第80図）　全ての遺物は玄室内から出土した。蓋坏は坏面から出土し、全て伏せた状態であった。(27)は一つ離れた右側壁付近の９層中から出上した。(33)は床面直上から出土した。

遺物（第82図22～27、第86図31～33）

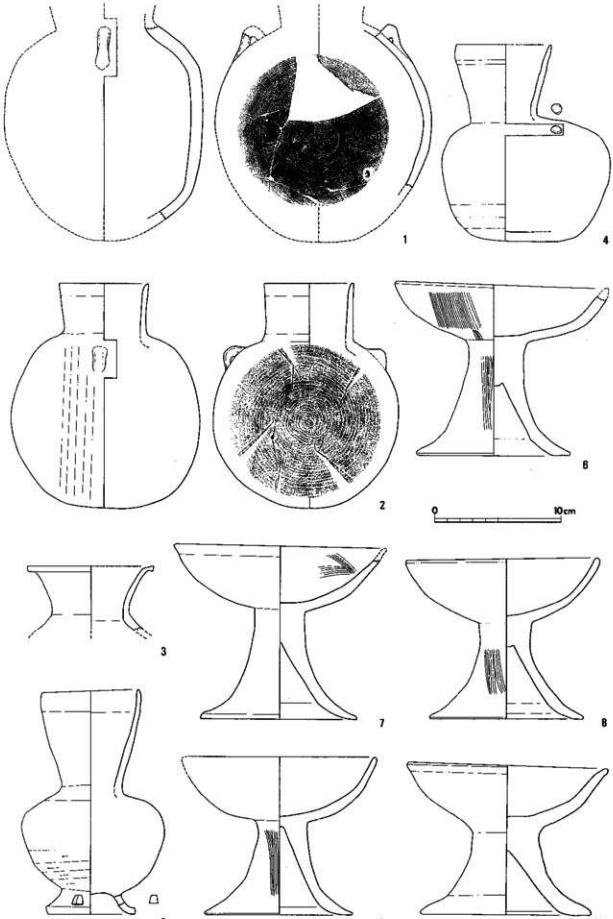
須恵器は坏蓋１、坏身４、甑１がある。蓋坏は底部や天井部をヘラケズリするものが多い。



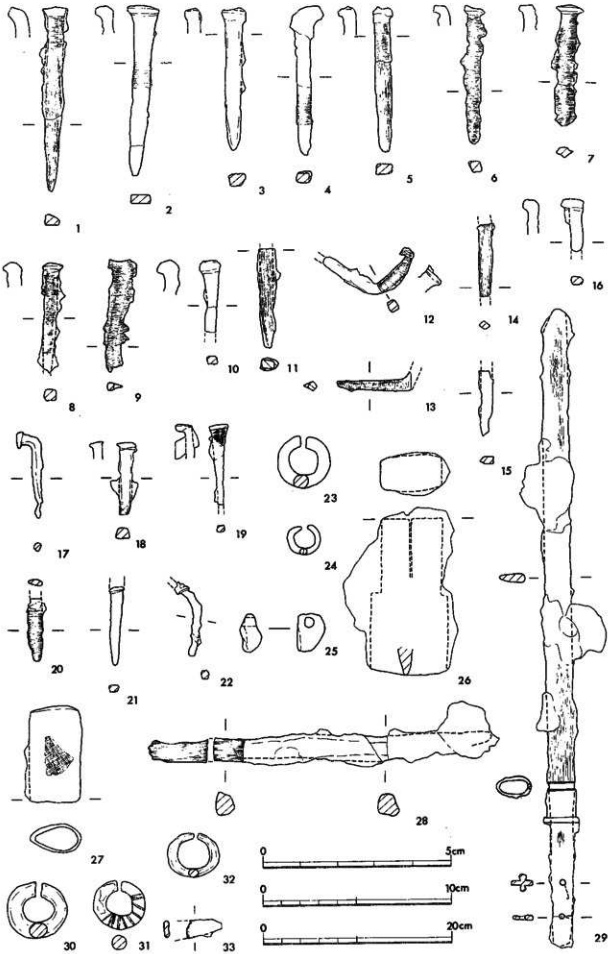
第83図　上塩冶横穴墓群33－６号穴出土遺物実測図（S＝1／3）



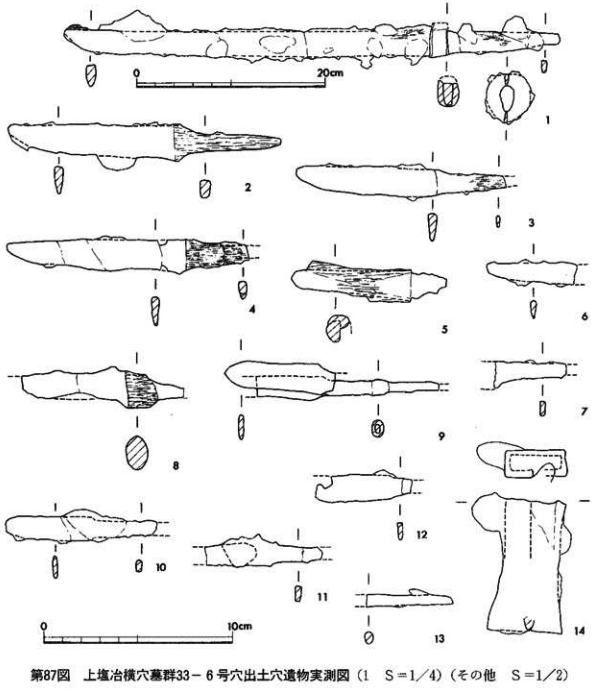
第84図　上塩冶横穴墓群33－７号穴出土遺物実測図（S＝1／3）



第85図　上塩冶横穴墓群33－７号穴出土遺物実測図（S＝1／3）



第86図　上塩冶横穴墓群　33－3・4・5・7・8号穴出土穴遺物実測図（25 S＝1／1）（29 S＝1／4）（その他 S＝1／2）
1～16（3号穴）、17～22（4号穴）、23～25（5号穴）、26～30（7号穴）、31～33（8号穴）



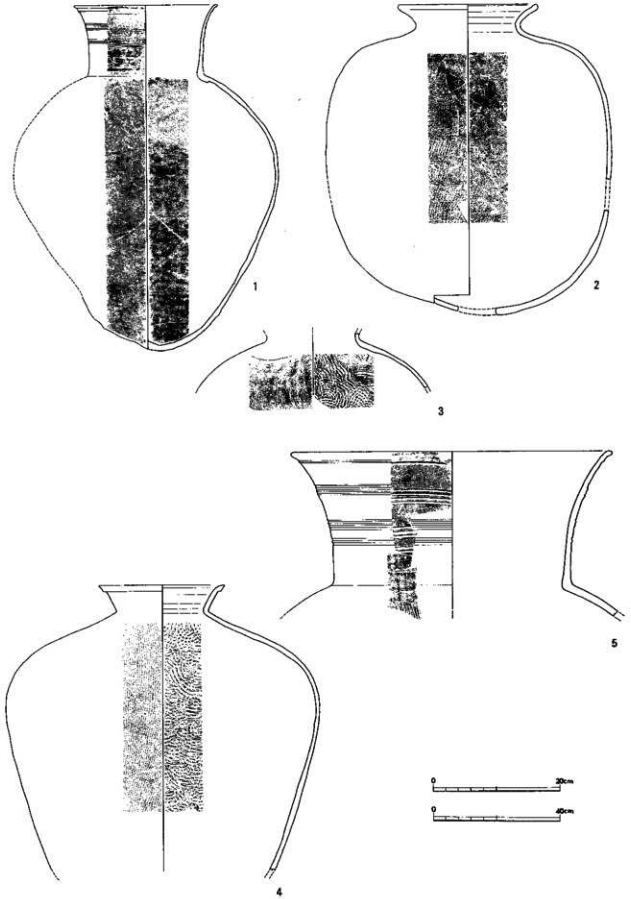
第87図　上塩冶横穴墓群33－6号穴出土穴遺物実測図（1　S＝1／4）（その他　S＝1／2）

耳環(31・32)は2個あるが、大きさが異なる。(31)は銅芯鍍金製で、太く大型で、鍍金の残りは悪く、内面の一部に残る。断面はやや楕円形になり、平面形はきれいに残る。長径2.7cm、短径2.6cm、太さ0.8cmを測る。(32)は細く、銅部分のみ残こる。長径2.7cm、短径2.3cm、太さ0.5cmを測る。刀子の茎(33)の破片で、残存長1.9cm、幅0.9cm、厚さ0.3cmであり、表面に木質が残る。

2．石棺（第89図）

丘陵中央の南側斜面に位置する。調査前は墳丘など目立つものはなかった。

小口は一枚石で構築され、側壁は基本的には二段であるが、高さを揃えるために三段になるところもある。北側の側壁は内側に面が揃えられているが、南側は一部内側に迫り出している。張り出した石は、厚さ35cmもあり、他の石が厚さ15～20cmの板状なのに比べ大型で、丸みを持つ。西側には幅40

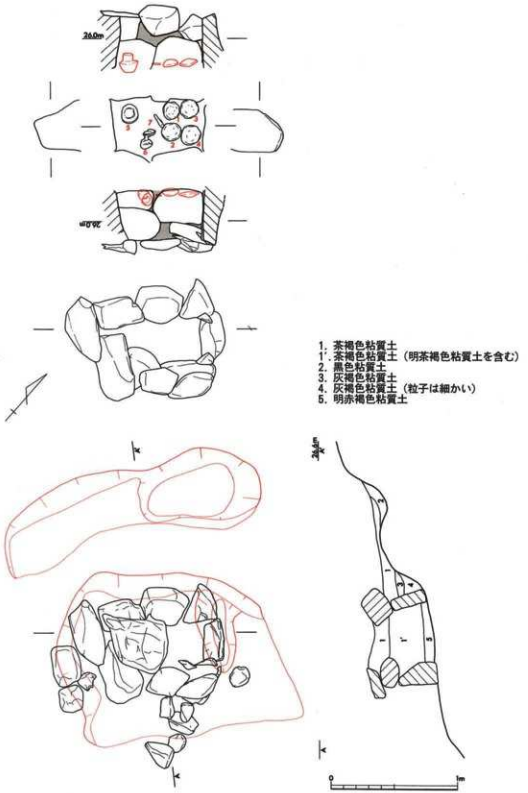


第88図　上塩冶横穴墓群33支群出土甕実測図（1　S＝1／12）（2～5　S＝1／6）
1～3（SX03）4、5（7号穴）

cm、長さ45cmの天井石が残存していた。天井石は2枚であったと思われる。床石はなかった。石は斜面を20～25cm掘り窪め、東側の小口はさらに10cm掘り下げ、石を配置している。組み合わせから小口の石を置き、その後、側壁を構築したと思われる。内法で長さ72cm、幅40cm、高さ55cmを測る。

石棺の斜面上部からは幅0.5m、長さ2.1m、断面U字形の溝が確認できた。

遺物（第90図）　内部の5層上面から須恵器と刀子が出土した。壺や甕は立てた状態であり、蓋坏は

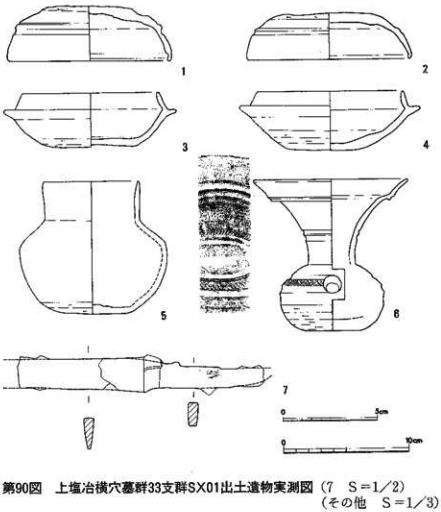


第89図　上塩冶横穴墓群33支群SX01実測図（S＝1／30）遺物は第90図に対応

すべて伏せてあった。天井部や底部は削られている。刀子は切先が欠損しているが残存状況は良い。残存長13.0cm、幅1.6cm、背幅0.5cmを測る。茎部は1.2×0.5cmの断面方形を呈し、木質が残る。両関で、関部の一部に金具が残る。

3．石組み遺構（第91図）

3、4号穴の墓道上面から検出した石組み遺構である。横穴墓の墓道が埋まった後に構築されている。石塔を除去すると5～10cmの円礫に混じり、石組みの上面が確認できた。規模は内法で、長さ0.4m、幅0.2m、高さ0.2mを測る。西側の小口は一枚石であるが、西側は3枚の石を重ねている。側壁は内側に面を揃え、床石には一部に平らな石を敷いていた。石材は厚さ5～8cmの薄い溶岩を使用している。天井石は調査前から存在していなく、内部には茶褐色土が堆積していた。



第90図　上塩冶横穴墓群33支群SX01出土遺物実測図（7　S＝1／2）
（その他　S＝1／3）

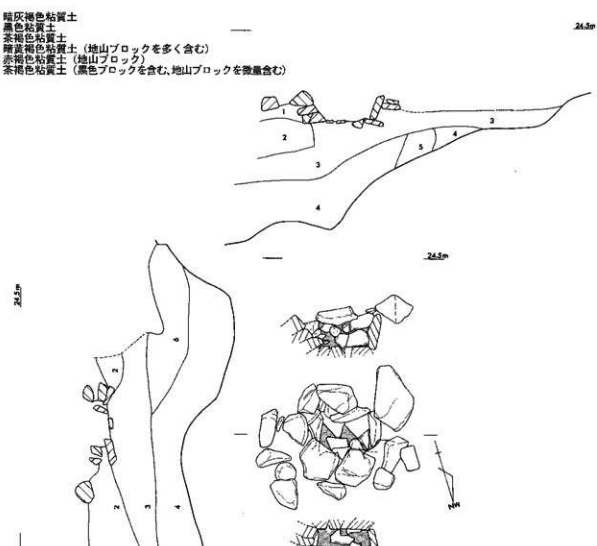
内部からの遺物はなく、時期は不明である。

4．三田谷2号墳

立地（第92図）　三田谷2号墳は、独立丘陵上に位置する。北西側が大きく削られているため、地形が不明である。現在は、丘陵から2m下がった地点の標高26m付近に横穴式石室が築かれる。

墳丘（第93図）　発掘前は、墳丘や石室は確認できなかったが、墳頂部がわずかに陥没していた。精査を行うと石室北側で、すぐに地山が検出された。しかし石材が見つかり、石室とわかり、墳丘とともに石室の調査を開始した。北側は地山と思っていた土は崖を削ったときの廃土であり、下からは溝が見つかった。三田谷2号墳は東・南側の墳端が不明であるが、復元すると7mの方墳である。

北側と西側には溝があり、区画している。西側の溝の幅は1.7m、外側で0.85mの深さで地山を削っている。北側は一部しか確認できず、丘陵斜面に同化している。幅は1m程度である。東側は石室中軸線から4m地点に、幅0.8m、断面U字形に地山が削られ、これを持って区画していたと思われる。石室底部との比高は0.9mである。丘陵斜面に位置するため墳端のレベルは一定ではない。北側で標高27.5m、西側で標高27m、東側で25m付近である。東側から見ると墳丘の高さは高く見える。南側



第91図　上塩冶横穴墓群第33支群SX02実測図（S＝1／30）

については明確な墳端を表すものがなく、明確な傾斜の変換も認められなかった。また、葺石や埴輪は検出されかった。

墳丘構築状況（第94、97図）

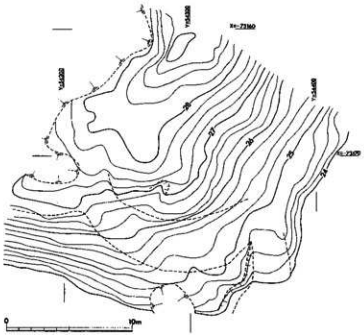
墳丘を築く前にかなり、整地されている。旧表土は石室東側で確認できた（5層）が、他からは検出できなかった。丘陵斜面を幅1.8m、長さ5.4mにわたり、L字状に削り、平坦面を確保し、底に石室を築いた後、墳丘を構築している。墳丘は赤と黒の粘質土で石室の裏込めを（18・19層）行い、同様な土で墳丘を造っていたと思われる。天井石などがないため、正確なことはわからないが、一次墳丘を築いた後、二次墳丘を築いていると思われる。一次墳丘は石室の裏込めと同時に墳丘の基本となる盛土で、黒色土と赤褐色土が交互に盛っている。

石室（第95、97図）　石室は主軸を　S－43.5°－Wにとり、南西に開口する。両側壁は奥壁から三枚分確認できる。天井石はなく、両側壁で一段から二段しか残っておらず、奥壁は一枚であった。残

存状況が悪いが規模は長さ２ｍ、奥幅1.1ｍ、前幅0.9ｍ、奥壁の高さ1.1ｍを測り、幅はほぼ同じで、長方形を呈する。

壁面構成（第95図）　奥壁は一枚である。右側壁について、一番奥は二段で、高さは奥壁と同じである。中央は奥側の石と同じ高さの石を使用している。左側は中央のみ二段であり、高さはほぼ均一であるが、奥壁よりは30cm低い。もう一段積んで、奥壁と同じ高さであったと思われる。

石材は凝灰岩を使用し、右側壁中央の小さい石のみ溶岩であった。石室内側に面を揃え、外側は丸みのあるままである。石材の内側は面が整えられている。

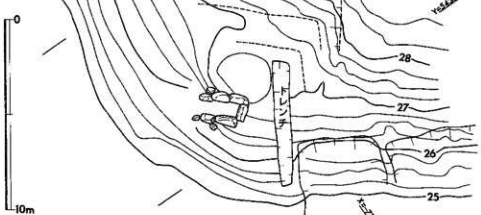


第92図　三田谷２号墳調査前測量図（Ｓ＝1／300）

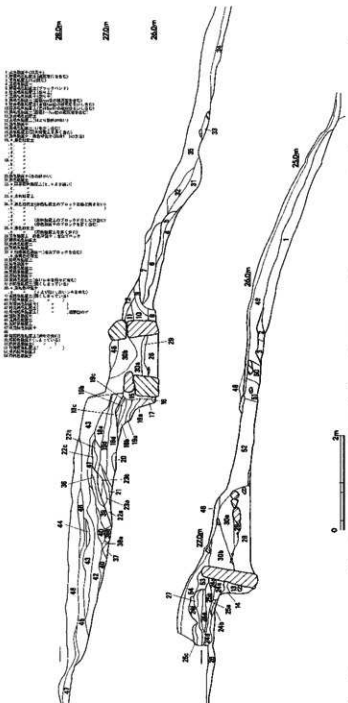
奥壁と墓壙の間には20cmの砂岩や自然石、凝灰岩が詰められていた。両側壁の１石目と２石目の接合部分の外側に、長さ40cm、幅30cm、厚さ20cmの凝灰質砂岩が置かれていた。左側では側壁に密着しており、裏込めのためと思われる。

構築方法（第94、95、97図）　奥壁のみ幅0.4ｍ、長さ1.2ｍの溝を掘り、底に据えている。他は地山を削った上に置かれているのみで、基底石据え穴はなかった。よって残存した側壁の前方に石が続いていたかは確認できなかった。床面は傾斜はなく、敷石は確認できなかった。石室内の土砂はすべて流入土で、底まで凸凹に荒らされていた。

遺物出土状況（第96、98図）　石室内は盗掘により徹底的にかき乱されていたので、遺物はほとんど



第93図　三田谷２号墳墳丘測量図（Ｓ＝1／200）



第94図　三田谷２号墳土層図（S＝1／80）

なかった。石室内方は28層からガラス製小玉が２点出土した。

他の遺物は石室前方ないし西側溝内および東側で出土した。西側からは原位置を保った大甕が出土した。甕は径50cm、深さ25cmの穴に据えられ、土圧で破片は内側に落ち込んでいた。42層中から多く出土し、破片となり散らばっていた。同じ層中から土師器（第100図）や須恵器蓋坏が検出された。甕片は石室前方と東側でまとまって出土した。それらに混じり、高坏や完形に復元できる蓋坏もある。しかし、いつの時点で掻き出されたのかは不明。石室の石材と思われる凝灰岩を、ＳＫ01上で使用されているので，ＳＫ01が13世紀頃と考えらるので、この時期かも知れない。

工具痕（第95、97図）　一番奥壁側の左側壁の内面には幅５～10cmの丸刃削痕が認められた。

遺物（第99、100図）

遺物は須恵器、土師器、玉類がある。数量は須恵器が坏蓋11個以上、坏身22個以上、高坏２個、壺２個、提瓶１個以上、甕３個、土師器が高坏４個、甕１個、玉類が２個である。

須恵器　坏蓋は天井部に削りをもち、体部との境に段を持つもの、削りを施すが境がないもの、削りを施さないものに分かれる。坏身は天井部に削りを持つものと持たないものに分かれる。立ち上がりは高く、立ち上がりの長さでは分類できない。

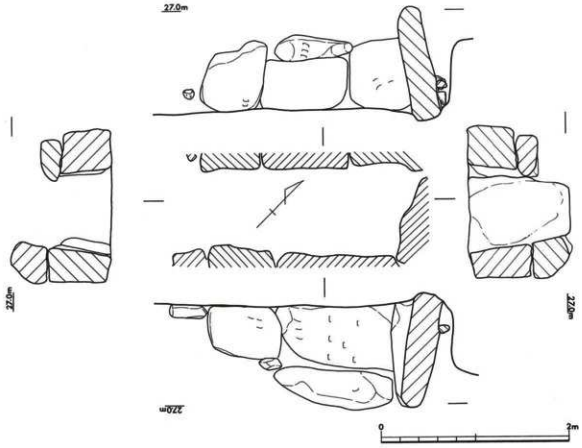
土師器　(6)は甕の体部の破片である。周溝内から須恵器の甕片とともに出土している。他の高坏も、同じように出土する。風化が著しく、接合できない。

玉類（12･13）　玄室中央部と左側の覆土からガラス小玉が出土している。形はいびつで、小口部はきれいな面があり、紺色を呈す。

５．石塔

出土状況（第101図）

第33支群の表土を除去すると、南西斜面からおびただしい角礫が検出された。石材は安山岩溶岩や流紋岩が多く、10～40cmの大きさのものが多い。まとまりなどはなく、用途や時期については不明である。

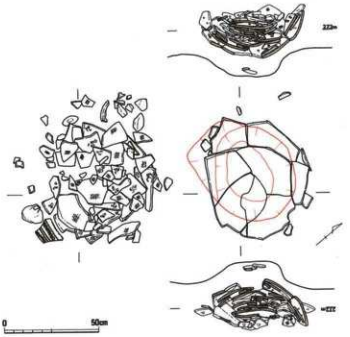


第95図　三田谷２号墳実測図（S＝1／40）

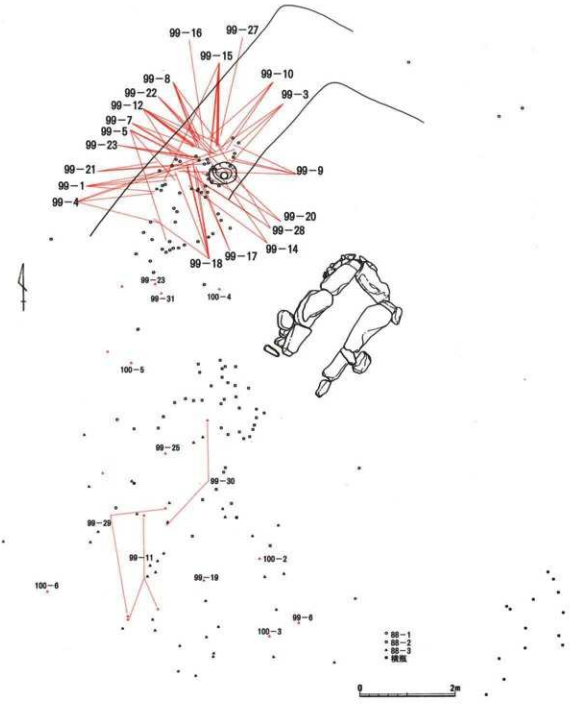
石塔は標高26ｍより低い所にある。３号穴から７号穴付近では横穴墓の天井部が崩落し、傾斜が緩やかになっており、この周辺から石塔が検出された。標高26ｍ付近で横一列に並らび、標高23ｍ付近には集まっていた。その他に、散在的に分布するが、上部から転落したものであろう。標高26ｍ付近の石塔は数個ずつまとまりがある。しかし、同じ部材であったり、３～４個と数が少ないなど五輪塔のセットにならない。

標高23ｍ付近では大きく三カ所にまとまる。北側のグループ(42・47など)、中央のグループ(18・44など)、南側のグループ(17・36など)である。しかし、これらも五輪塔のセット関係にはならない。南側のグループからは１×2.4ｍの範囲に５～20㎝の川原石がまとまって出土した。円礫の上面は平坦になっている。

これら全ての石塔は地山上に置か



第96図　三田谷２号墳周溝内甕出土状況（S＝1／20）



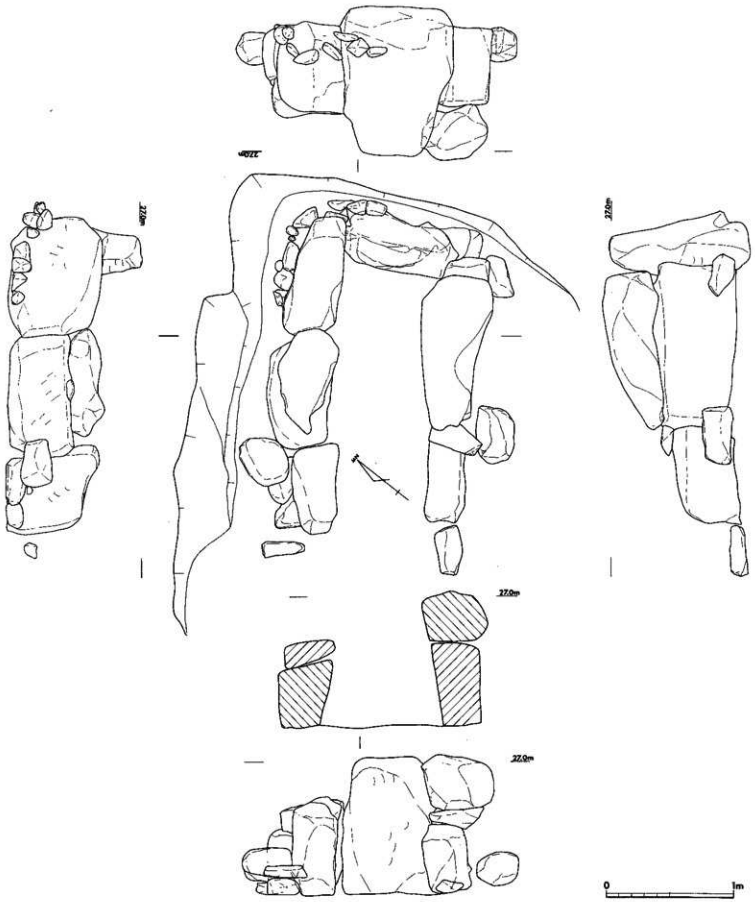
第97図　三田谷２号墳遺物出土状況（S＝1／80）

れており、石塔の下部から土坑や遺物は検出できなかった。

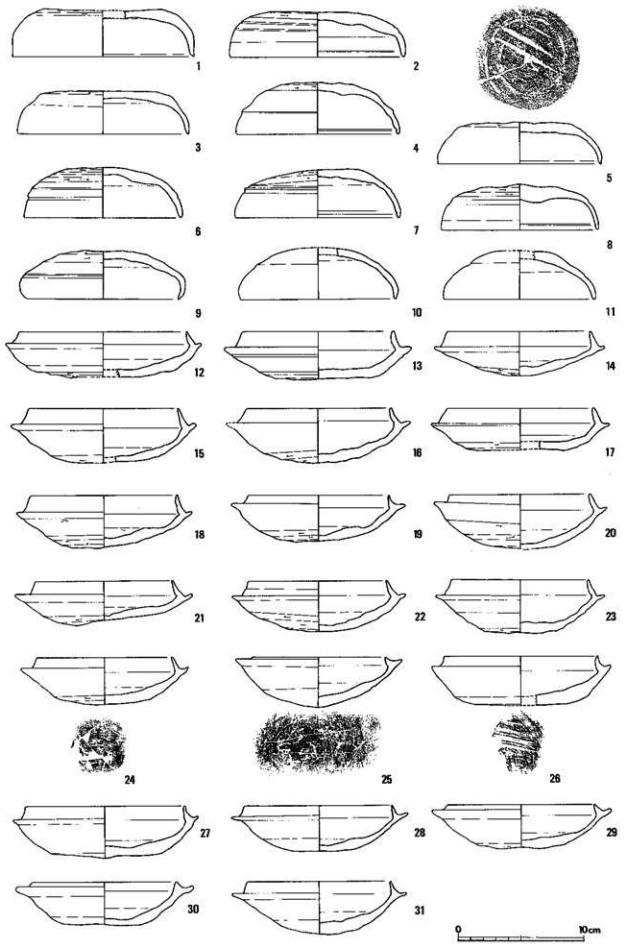
石塔には五輪塔と宝篋印塔の２種類がある。石材は凝灰岩できめ細かいものとやや粗く、鉱物を含むものがあり切り出し場所が違うのかもしれない。五輪塔は空風輪37個、火輪20個、水輪25個、地輪14個、基壇１個、宝篋印塔２個が確認できた。

五輪塔（第102、103図）

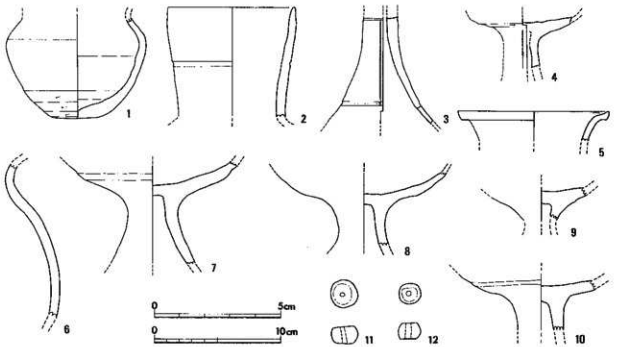
空風輪には形態が２種ある。空風輪の境が溝状のもの(16・18など)と滑らかに意向するもの(1・2など)とがある。後者には大小２種がある。ほぞは丸く先端側が少し狭くなる。空風輪の境が溝のも



第98図　三田谷２号墳実測図（S＝1／30）



第99図　三田谷２号墳出土遺物実測図（S＝1／3）



第100図　三田谷２号墳出土遺物実測図（S＝2／3　11・12）（S＝1／3　その他）

のが新しい。(注4)

火輪には３種類ある。大きなものと小さいものがあり、後者には降り棟が反るもの(40など)と直線的で高さが高いもの(34など)の２種類ある。

水輪は基本的に上下に円形の穴がある。しかし、穴が浅いものや平らなものもわずかにある。また、穴があるものではきちんとしたものと雑なものがある。上下が確実にわかる例がないので、平坦面が広い方を上として図下した。

地輪には大小がある。(14)には墨による梵字がある。下半が消えているので、正確には読めないが、「アク」が考えられる。

基壇（第103図）

１基確認できた。地山上に置かれ、周辺には円礫が敷かれていた。

宝篋印塔（第103図）

相輪部分だけ出土した。(23)は宝珠から九輪の上部のみである。請花には蓮弁文などはない。(24)は九輪の一部であるが、風化により丸みをもつ。

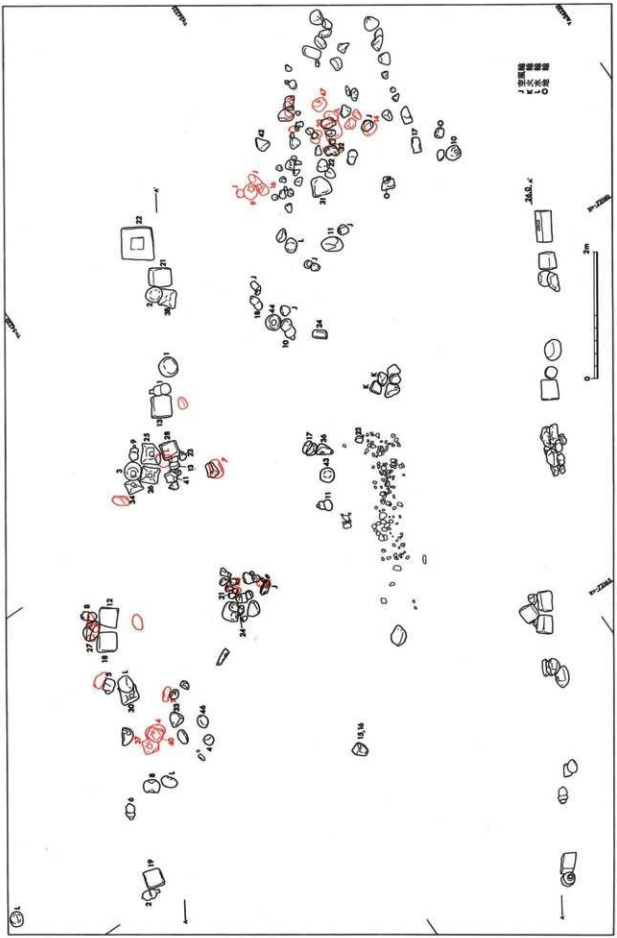
これらの石塔の時期は空風輪の形態から時期差があると思われる。五輪塔の研究が進んでいないので、正確には判断できないが、中世末から近世初頭と思われる。

石塔の規模は観察表にかかげている。規模や形態から規格された製品が多いと思われる。五輪塔はセット関係で出土したものがなかったが、第104図に復元してみた。水輪の幅に比べ火輪と地輪の幅が狭く、幅の狭い印象を受ける。

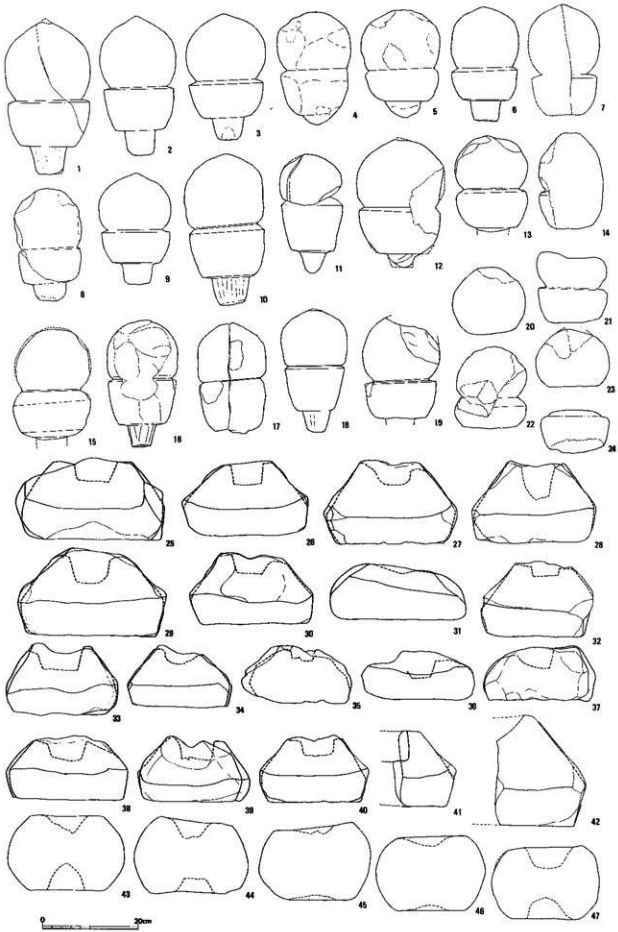
６．土坑（第105図）

ＳＫ01

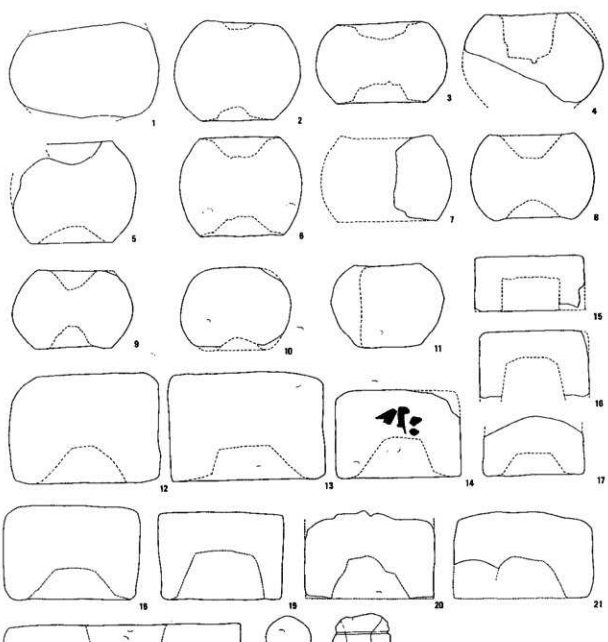
幅1.2ｍ、長さは南側で不明瞭であるが、東側で2.1ｍ、深さは北側で0.38ｍを測る。南側は開口し、



第101図　上塩冶横穴墓群第33支群石塔出土状況（S＝1／60）番号は第102、103図に対応



第102図　上塩冶横穴墓群第33支群石塔実測図



第103図　上塩冶横穴墓群第33支群出土石塔実測図（S＝1／8）

地面は全体に火を受けているが、特に南側がよく焼け、内部からは多くの炭化物が出土した。上部には置かれたかのように凝灰岩の切石や溶岩の角礫が3×8mの範囲にあった。凝灰岩の切石は70×80cmを測る。これらの凝灰岩は三田谷2号墳の石材と同じものであった。人骨などは検出できなかった。

遺物（第106図）　青磁碗1個、土師器坏2個、刀子が4層中のほぼ同じ高さから出土した。青磁は3片に割れ、かなり離れた地点から出土したが、土坑内に全ての破片が残っていた。土師器は北側から割れた状態で出土した。刀子は土師器に接するように出土した。土師器は厚い底部からわずかに内湾しながら口縁部に至る。口縁端部は面を持つ。青磁(3)は四カ所に輪花を持ち、体部から底部にかけて丸みをもつ。太宰府分類の龍泉窯系青磁小碗Ⅰ1b類。[16] 刀子(4)は全長29.2cm、刃部長10.2

cm、幅2.5cm、背幅0.2cmを測る。両関で茎部には木質が残る。

SK02

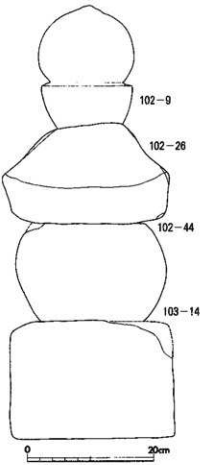
三田谷2号墳の周溝内から検出された。幅0.8m、長さ1.2m、深さ7～10cmを測り、長楕円形である。周囲の地面は火を受けており、赤褐色になっていた。土坑内からは炭化物が多量に出土した。遺物は検出されなかった。

SK03

三田谷2号墳の周溝内から検出された。SK01の南東側に位置した。径0.9m、深さ15～20cmの円形である。周囲の地面は火を受けており、赤褐色になっていた。土層観察を行うと、三田谷2号墳の周溝が埋まった後、掘られている。遺物は検出されなかった。

SK04

SK01の南東側に位置した。幅1.1m、残存長0.5m、深さ0.2mを測り、方形である。東側に続いていたと思われるが、調査前から崖になっていた。周囲の地面は火を受けており、赤褐色になっていた。遺物は検出されなかった。



第104図 上塩冶横穴墓群第33支群出土五輪塔復元想定図（S＝1／6）

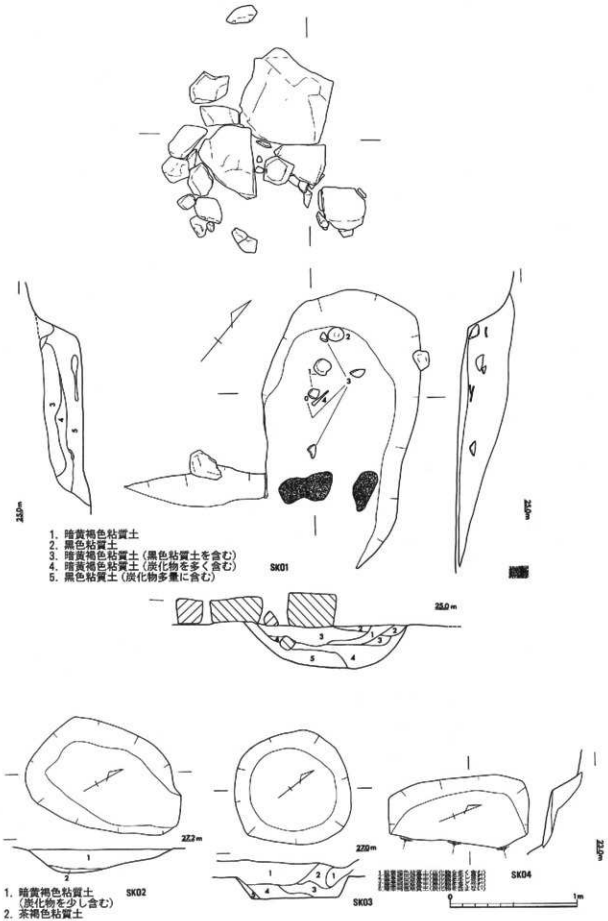
上塩冶横穴墓群第33支群出土遺物（第106図）

坏身(5)は底部糸切りで、口縁部から体部にかけて丸みをおび、同形がもう1点ある。(6)は瓦質の鉢で、焼成が悪い。中・近世のものと思われる。(8)は大刀の一部と思われる。第33支群から寛永通宝が2枚出土している。(9)は全体に磨滅し、もう1枚は小片になっているが字は判読できる。

小　結

三田谷2号墳は、切石を使った横穴式石室である。出雲市周辺の横穴式石室の研究は進んでおり、[注6]西尾・角田編年によると横穴式石室は大きく3類に分かれ、そのうち2類は玄室の奥壁に切石の一枚石、側壁を切り組み積み手法用いて構成し、犬井石に自然石を架構するものという。さらに、2類は側壁の積み方や羨道部の用材で細分できる。a類は切り組み積み手法を多用し、4～5段に積み上げ、羨道部は切石を用いる。b類は大型の切石を2～4段に積み、一部に切り組み積みを用い、羨道部は自然石を使用する。三田谷2号墳は奥壁が1枚で、側壁は現状で2段である。羨道部は残存しておらず、使用石材も不明である。側壁が2段ということから2b類の可能性が高い。その時期は2期後半に当たり、6世紀後半から末としている。今回の発掘調査では古墳に伴う須恵器が出土し、出雲編年[注7]の蓋坏の分類ではA3～A6型にあたり、出雲3～4期になる。他の器種もこの時期をはずれるものはなく、大谷氏は出雲3～4期は畿内との並行関係がTK43からTK209に当たると考えている。この時期、出雲平野では円墳が主流であり、本墳が方墳である意味は今後考えなければいけない。

石室内がほとんど破壊されていたので、遺物は須恵器、土師器以外、玉類のみであり、大念寺古墳

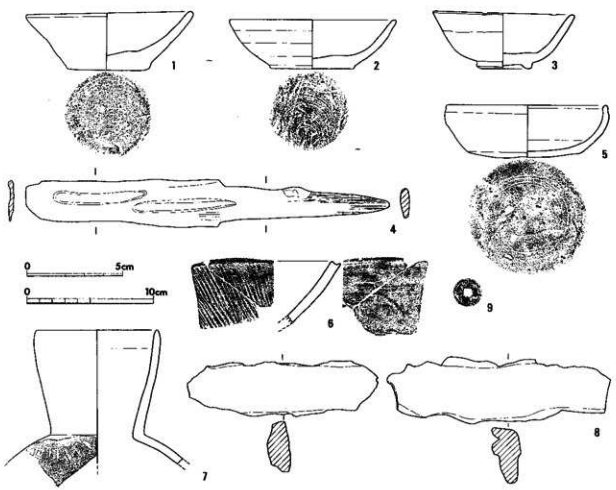


第105図　上塩冶横穴墓群第33支群土坑実測図（S＝1／30）遺物は第106図に対応

や上塩冶築山古墳などの大型古墳と比較できない。三田谷1号墳でも破壊を受け、玉類しか出土していない。(注7) 類例の増加を待ち、検討する必要があろう。須恵器の坏蓋(99－5)や坏身(99－26)は特徴的な器形である。(5)は天井部が平坦で、板状工具の圧痕がつき、内面は摩滅する。(26)は底部が平坦で、板状圧痕がある。立ち上がりも短く太い。これらは内田氏が石見型蓋坏とされたものと思われ、(注8) 神戸川左岸の刈山4号墳でも出土している。また、三田谷Ⅱ遺跡からはカキ目を施した蓋坏や甕の口縁部に連続刺突文を施すなど、(注9) これらの土器が出土するのは出雲西部から石見地方であり、石見地方に近い出雲平野の特徴である。

注

1 出雲市教育委員会川上稔、松山智弘両氏のご教示よる。
2 島根県教育委員会他『三田谷Ⅱ遺跡・上沢Ⅰ遺跡』 1994
3 島根県教育委員会『島根県生産遺跡分布調査報告書－窯業関係遺跡－』1985
4 島根県教育委員会間野大丞氏のご教示による。
5 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978
6 角田徳幸・西尾克己「出雲西部における後期古墳文化の検討」『松江考古』7 1989
佐藤雄史「島根半島西部における横穴式石室の様相」『島根考古学会誌』7 1990
7 大谷晃二「出雲地域の須恵器と編年と地域色」『島根考古学会誌』11 1994
8 内田律雄「出雲刈山4号墳と搬入須恵器」『ふいーるど・のーと』6 1984年



第106図　上塩冶横穴墓群第33支群出土遺物実測図　1～4 (SK01) (4・8　S＝1／2) (その他　S＝1／3)

第107図　上塩冶横穴墓群第12、22、23、37支群調査後測量図（S＝1／800）

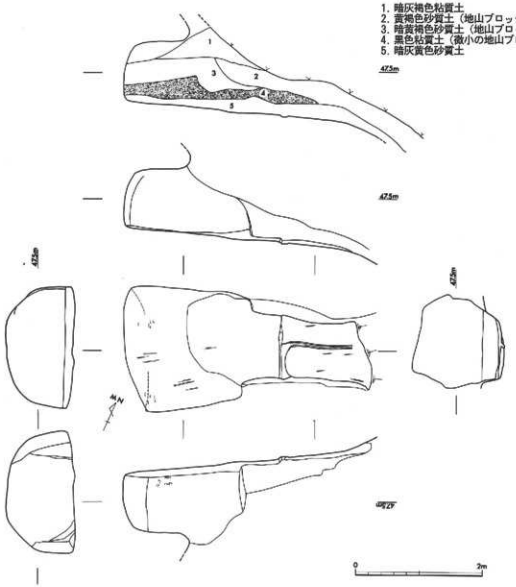
Ⅸ　上塩冶横穴墓群第12・22・23・37支群

1．上塩冶横穴墓群第12支群

調査の概要

上塩冶横穴墓群第12支群の調査は、平成７年度に第22・23支群を調査した折り、樹木の伐採を行い、放水路予定地内に一部含まれることが判明し、平成８年度に発掘調査を行った。調査期間は10月28日から12月20日までである。表土を人力で掘り下げた後、精査し、横穴墓内の土砂は全て水洗した。最後に、空中写真測量を実施した。

第12支群は大井谷池から入る谷奥部の北東向き斜面に位置する。尾根から5.5ｍ下がり、11穴以上存在するが、今回はその内の３穴を調査した。大きく２カ所に位置し、一方は谷奥の１号穴を一番高所に、２号穴以下は標高を下げつつ、２～５ｍほどの間隔で、一列に並んでいる。横穴墓は砂岩に掘られ、玄室形態が家形のものも存在する。しかし、上部斜面が崩れ、多くのものは玄室まで崩落していた。３号穴は用地境界付近にあり、保存することとし調査は行っていない。もう一方は、この谷は



第108図　上塩冶横穴墓群12－１号穴実測図（Ｓ＝1／60）

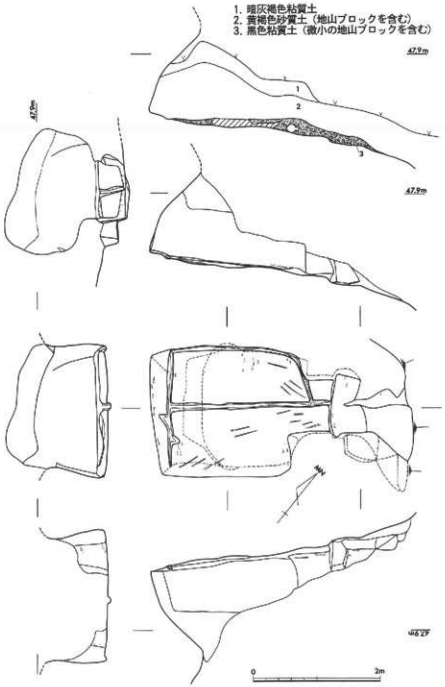
W字状になり、谷最奥部が突出している。この突出部（第107図矢印）の凝灰岩の露頭に1980年報告[注1]の第12支群が２穴開口している。今回発見された横穴墓群は1980年報告の第12支群とは別の場所にあるが、同じ谷の近い位置にあるので、今回は第12支群として報告する。なお、周辺の調査が進めば、小支群として分ける必要が生じるかもしれない。

１号穴

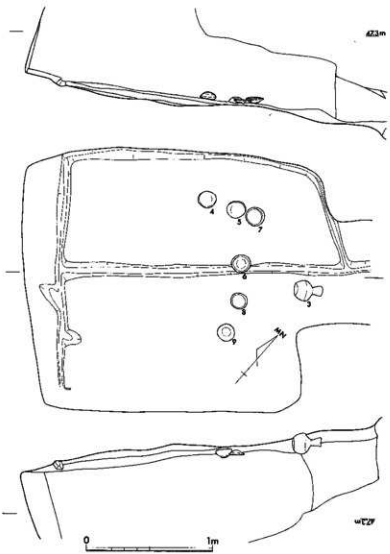
立地　谷奥の一番南側に位置し、標高47.1ｍ付近に存在する。調査前は完全に埋没していた。

形態（第108図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥行き0.45ｍ、幅1.1ｍを測り、断面コ字形である。側壁は垂直に立ち上



第109図　上塩冶横穴墓群12－２号穴実測図（Ｓ＝1／60）



第110図　上塩冶横穴墓群12－２号穴遺物出土状況（S＝1／30）

がり、天井部はなかった。前庭部との境には横穴墓主軸に直行する幅10cm、深さ５cmほどの溝がある。床面は平らで、ほぼ水平である。前庭部は玄門部とほとんど同じ幅で、最小幅0.88m、奥行き1.4mを測る。床には幅６cm、深さ２cmの浅い溝がある。この溝は前庭部先端まで続かず、途中で終わる。

玄室　幅1.98m、奥行き1.7～2.05m、高さ1.04mを測る。平面形は台形をし、左右で奥行きがかなり違う。奥壁と側壁の界線ははっきりし、壁同士の角はしっかり表現されている。奥壁は垂直気味に立ち上がる。側壁は下部は垂直に立ち上がるが、上部は丸みを持ち、丸天井を呈する。床面の表面は滑らかで、玄門部に向け傾斜している。

土層堆積状況　前庭部から玄室にかけて一様の堆積で、表土、崩落土の下に黒色土が堆積する。

閉塞状況　玄門部と前庭部の境から10～40cmを測る砂岩の自然石が幅いっぱいに一段で検出された。高さはあまりなく、第４層内で終わる。上部が破壊されたかあるいは、閉塞板等を押さえた根石の可能性もある。また、玄門部内に同じように集石がある。根石と思われる石とは20cmの間隔があり、内側の押さえに使用されたものかもしれない。

遺物出土状況　遺物として甕片が２点、第４層から出土している。

工具痕　床には主軸方向に溝状痕が残り、天井・側壁には幅５cmほどの平刃削痕があり、側壁では床との境付近のみに残る。

遺物（第113図）　須恵器甕片が２点出土し、須恵器の内外面にタタキ痕が残る。

２号穴

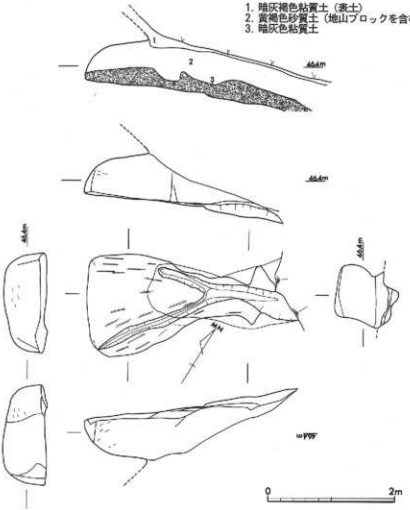
立地　１号穴から2.5m北側に位置し、標高47m付近に存在する。調査前から開口していた。

形態（第109図）

前庭部・玄門部　前庭部の壁はかなり崩れている。閉塞用の刳り込みの前方を前庭部と考えると、40cmほどの平坦面がある。その前方はさらに低く、幅が広がり、急な斜面となる。玄門部の奥行きは左

右で長さが違い、北側で0.42m、南側で0.66m、幅0.83mを測る。断面はコ字形である。前方には閉塞のための10cmほどの段があり、奥行き15cm、幅95cmを測り、やや広くなる。床面には玄室から延びる幅10cm、深さ5cmの排水溝がある。床面は前方に向けかなり傾斜している。

玄室　幅2.03m、奥行き2.47mの方形プランである。床面には奥側と右側壁、中央部に排水溝が存在する。奥側のものは奥壁から25cm離れている。天井形態は不明で、床面から1.45mまでしか確認できない。奥壁は内傾し、側壁は垂直に立ち上がる。奥壁と側壁の界線は明瞭である。側壁に棟線状の線刻があるが、それより上面が風化しているので、本来の棟線か不明。床面は少し凸凹があるが、平坦である。



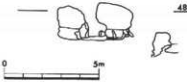
第111図　上塩冶横穴墓群12－4号穴実測図（S＝1／60）

土層堆積状況（第109図）　前庭部から玄室にかけて一様に堆積し、表土と崩落土が厚く堆積し、第3層は黒色土があり、その中に遺物が含まれる。3層中からは落盤した天井部と思われる砂岩片が検出された。

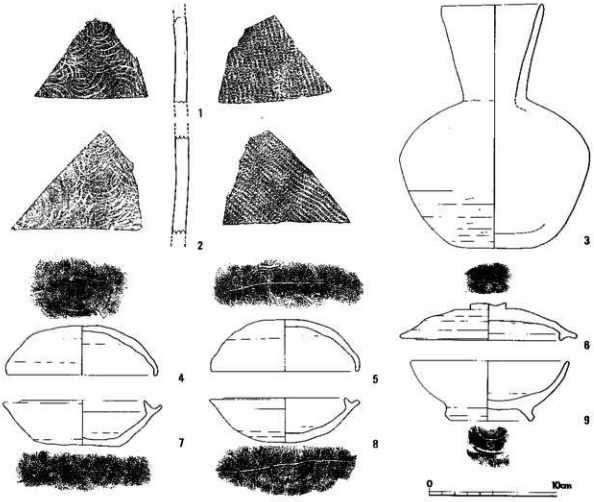
遺物出土状況（第110図）　遺物は3層中から出土し、床面に接していた。蓋と身の一個が伏せた状態で、壺は転倒して出土した。

工具痕　工具痕は床面に溝状痕と幅広の平刃の二種類がある。前者が先に刻まれている。側壁には平刃削痕がわずかに残るが、工具の先端幅は不明。

遺物（第113図）　須恵器のみ出土した。蓋坏は3セットあり、2セットは丸みを持つ蓋に、低いかえりをもつ身である。天井部と底部にヘラ記号があり、(4・7)は短く、(5・8)は長い。1セットはかえりがあり、中央が凹んだつまみを持つ蓋と、踏ん張る高台を持つ身からなる。天井頂部と高台内に竹管文がそれぞれある。



第112図　上塩冶横穴墓群第12支群正面図
（S＝1／200）



第113図　上塩冶横穴墓群第12支群出土遺物実測図（S＝1／3）

4号穴

立地　2号穴と3号穴の間で、2号穴の少し下に存在する大変小さい横穴墓である。2号穴から3.5m北側に位置し、標高46.2m付近にある。調査前は完全に埋没していた。

形態（第111図）

前庭部・玄門部　玄門部と前庭部の区別はない。奥行き1.55m、最小幅0.6mを測り、床面には玄室から続くY字状の溝がある。幅20cm、深さ5～20cmを測り、断面コ字形である。床面は前方にかなり傾斜している。

玄室　最大幅1.6m、奥行き1.35m、高さ0.7mを測る。右袖はわずかにあるが、左袖は不明瞭で、平面形はとっくり状を呈する。天井は丸天井である。床面の溝は13cm、深さ2～4cmを測り、玄門部の溝より小さく浅い。壁は全て丸みを持ち、各壁同士の界線は不明瞭である。

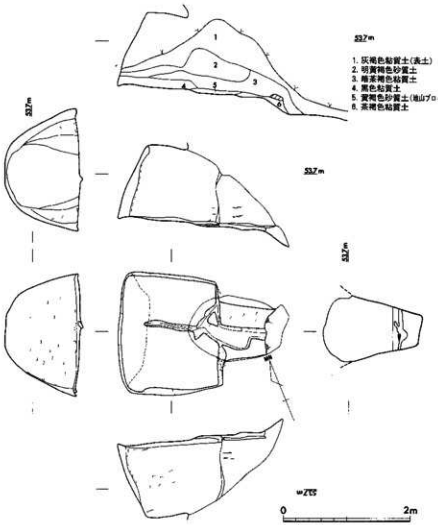
土層堆積状況（第111図）　前庭部から玄室にかけて一様な堆積で、地山の風化した土が厚く堆積していた。遺物や閉塞石はなかった。

工具痕　天井部には幅5～6cmの平刃削痕ある。玄室の奥壁や前壁は縦方向、斜め方向の平刃削痕が残る。床面には主軸方向の溝状痕があり、奥に向かって広がるように施されている。加工は雑で、未成形段階と思われる。

2．上塩冶横穴墓群第37支群

調査の概要

大井谷の東向き斜面に位置し、上塩冶横穴墓群22－21号穴と尾根を挟んで反対側に１穴のみ存在する。調査前には確認できず、平成８年度に半分城跡調査中、開口した。上塩冶横穴墓群の支群名の付け方は同一斜面を同一支群にしていることから[注1]、第13支群とすべきである。しかし、第13支群は水田との境付近に位置し、同じ斜面にありながら、水平距離で約60m、比高差で約33mもあり、同一の横穴墓群とは考え難いので、今回は第37支群とした。支群名の付け方については、今後、調査の進展に伴い考えなければならない問題である。



第114図　上塩冶横穴墓群37－１号穴実測図（S＝1／60）

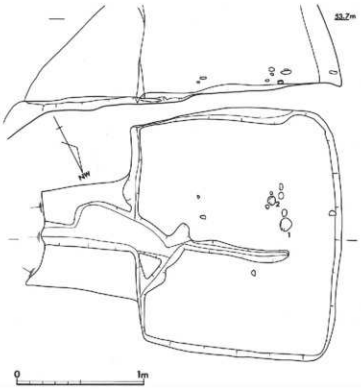
立地　標高53m付近に位置し、尾根から４m下がった急な斜面にある。砂岩に掘られている。周囲は急な斜面で、墓道などは検出できなかった。

形態（第114図）

前庭部・玄門部　前庭部はなく、いきなり玄門部が口を開けている。玄門部は幅0.96m、奥行き0.75m、高さは天井部が崩壊し不明。床面中央には崩れているが、幅17cm、深さ７cmの排水溝が玄室内から続く。床面はほぼ水平である。

玄室　幅1.88m、奥行き1.63m、高さ1.19mを測り、奥側が広くなる方形プランである。床面の奥壁側は丸みを持ち、側壁と奥壁や前壁の界線は明瞭である。奥壁は直線的に立ち上がり、断面形は三角形に近いが、天井部で丸みを持ち、軒線や棟線はない。玄室周囲には幅７～10cm、深さ４cmの溝が巡る。中央にも幅10cm、深さ５cmのやや幅広の溝がある。

土層堆積状況（第114図）　表土の下の２・３層は天井の崩落土や流入土と思われ、地山と同じ黄褐色の砂質土が堆積している。その下に鉄滓を含む４層の黒色土が堆積している。

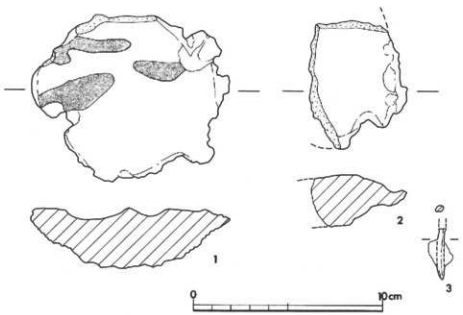


第115図　上塩冶横穴墓群37－１号穴遺物出土状況（S＝1／30）

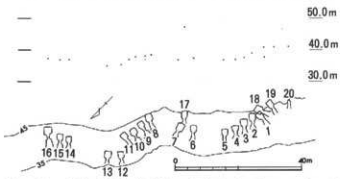
遺物出土状況（第115図）　玄室の第４層の黒色土から鉄滓、鉄釘の小片、炭化物が出土した。鉄滓は玄室の奥壁中央でまとまって検出された。

工具痕　玄門部の側壁に溝状痕がある。玄室内の壁面には幅５cmの平刃削痕が残る。奥壁と側壁の界線上には平刃削痕が多くあり、界線を明瞭に表現している。玄門部側壁には溝状痕が残る。

遺物（第116図）　玄室内から鉄滓のみ11点が出土し、総重量は756.73ｇを測る。(1・2)は炉底滓で、(1)は厚さ3.2cm、8.8×10.4cmの楕円形を呈し、上面は比較的滑らかであり、黒色の付着物がある。茶褐色で340.92ｇ。(2)は２面が欠損しており、1／4程度が残る。規模は厚さ2.6cm、5.2×7.8cmを測り、茶褐色で112.93ｇ。(3)は錆びに被われているが鉄釘と思われる。断面は0.2×0.4cmの方形である。なお、鉄滓については成分分析などを行った。（第Ⅻ章）



第116図　上塩冶横穴墓群37－１号穴出土遺物実測図（S＝1／2）



第117図　上塩冶横穴墓群第22支群配置図（S＝1／1200）

3．上塩冶横穴墓群第22支群

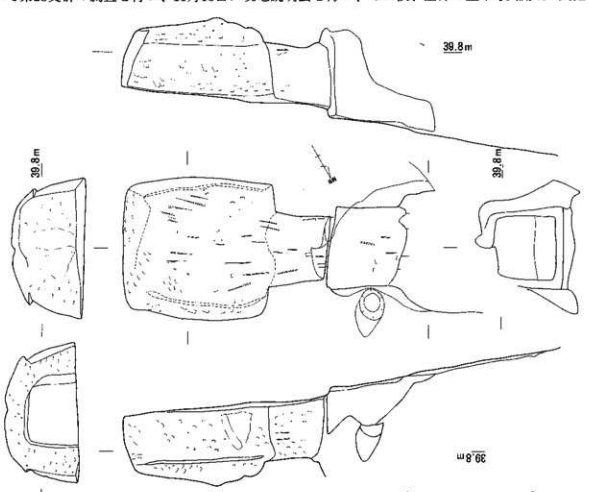
調査の概要

三田谷の谷奥に位置する。南北に伸びる丘陵が分岐し、西側に派生した丘陵斜面に存在する。北向き斜面の標高40m付近に分布する。1986年発行の『島根県埋蔵文化財調査報告書XII』[注2]に分布図と横穴墓名が掲載され、それに準ずるが、その後の発見されたものは発見順に横穴墓名を付けた。

第22支群1～20号穴はほぼ一列に分布し、17号穴のみやや高位にあり、数穴からの小群に分かれる。谷の入口側から18～20号穴、1～5号穴、6・7・17号穴、8～11号穴、12～13号穴、14～16号穴、21号穴に分けられる。21号穴は谷の一番奥にあり、他の横穴墓から高さ、距離などが違い、同一支群とすべきではないかも知れないが、今回は第22支群として報告する。

砂岩に掘られた21号穴以外は凝灰岩にあり、床面は凝灰岩の下の凝灰質砂岩にかかる横穴墓もある。他の支群と比較した場合、凝灰岩は南から北に向かって標高を下げており、横穴墓も南にある第20支群や第21支群の標高は高く、逆に北側に位置する第23支群、第24支群は標高は低くなり、凝灰岩の存在する高さに併せて横穴墓の標高も変わっている。21号穴は凝灰岩の上部に位置する砂岩に掘られている。

調査は平成7年4月17日から丘陵頂部の半分城跡と平行し、丘陵先端付近の20号穴から始め、谷の奥へ進めていった。横穴墓周囲は人力で、他は機械を使用して表土を掘り下げた後、精査を行った。第21支群の調査で金糸など微小な遺物が出土していたことから[注3]、横穴墓内の土砂は全て水洗した。続いて第23支群の調査を行い、11月18日に現地説明会を行い、その後、全体の空中写真測量を実施し、



第118図　上塩冶横穴墓群22－1号穴実測図（S＝1／60）

12月22日に終了した。調査前は1～20号穴まで開口していた。

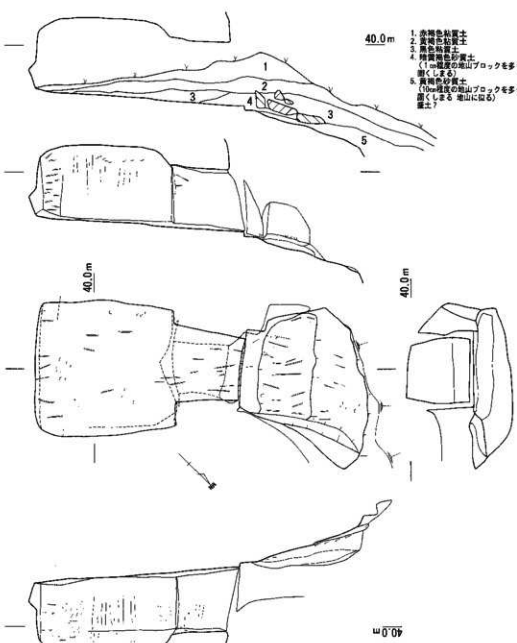
1号穴

玄室を中心とした発掘調査が1979年に行われ、既に報告されている。(注2)

立地　標高38.8m付近に位置し、上方には18号穴が存在する。1号穴から5号穴の前方には幅3～7m、長さ20mのやや広い平坦面があり、20号穴前方付近まで平坦面は続く。横穴墓の上方は急な斜面になっている。横穴墓の床面は凝灰岩と砂岩の境にある。

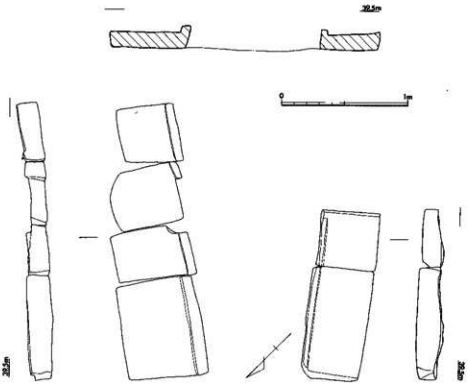
形態（第118図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.15m、前幅1.0m、奥行き0.86m、高さ0.9mを測り、側壁と天井の境にはしっかりした界線があり、断面方形を呈する。玄門部から前庭部にかけて床面はかなり傾斜している。前庭部は奥幅1.3m、長さ1.1m地点でさらに広がり、全長は3.6m以上になる。右側は0.23m広がる。前庭部と玄門部との境は10cmの段がある。



第119図　上塩冶横穴墓群22－2号穴実測図（S＝1／60）

玄室　奥行き2.3～2.4m、幅1.9～2.25m、高さ1.15mで、平面形は縦長長方形である。側壁は内傾し、高さ0.7～0.9m地点に4cm掘り窪められた軒線状のものがある。天井には棟線はなく、丸みを持ち天井頂部に至る。壁面は調整を行っておらず、粗い工具痕が残る。床面は凸凹で、かなり傾斜している。



第120図　上塩冶横穴墓群22－2号穴出土石床実測図（S＝1／30）

工具痕　玄室壁面は幅5cmの平刃削痕が著しく、前壁や側壁前部には刺突痕も残る。床には溝状痕が主軸方向に認められる。軒線状には平刃を水平に掘り込んでおり、先端が平坦になる。玄門部の床面や側壁には溝状痕がある。側壁には幅5cmほどの平刃削痕も残る。

その他　前庭部左側には凝灰岩の人頭大の石や切石があった。（後述）

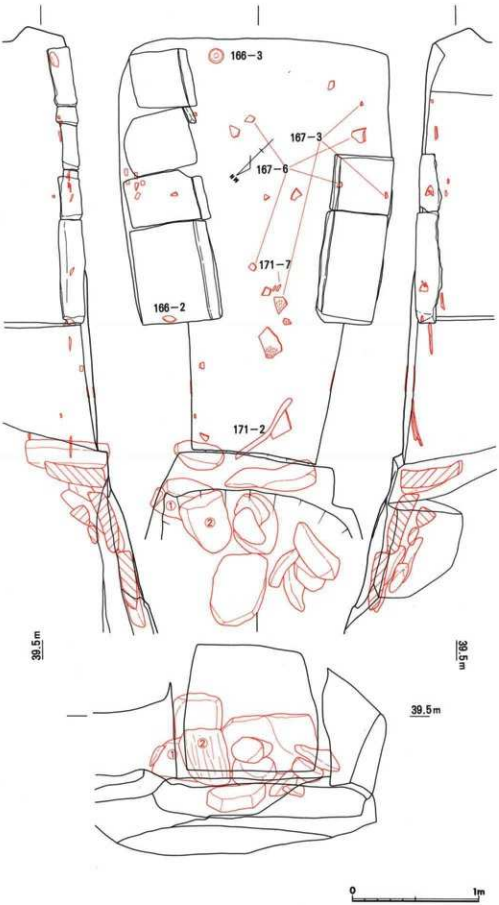
2号穴

立地　標高39m付近に位置し、1号穴から4.5m東に位置する。凝灰岩と砂岩の境に床面が位置する。

形態（第119図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.23m、前幅1m、奥行き1～1.1m、高さ0.95mを測る。側壁は内傾し、天井との界線ははっきりし、断面台形である。前庭部とは7cmほどの段差を持つ。玄門部前方には閉塞石を受けるため幅1.2m、奥行き0.2mの平坦面があり、平坦面から前方の床面は急な傾斜になる。前庭部の奥幅は1.45m、全長1.9mを測る。玄門部から1.1m付近で、床面は凝灰質砂岩になり、傾斜が急になる。前庭部左側壁は3号穴へと続き、前方には伸びない。なお、前庭部床面にはクラックが入っている。前庭部床面と側壁の境は丸みを持ち、不明瞭である。

玄室　奥幅2m、前幅1.8m、奥行き2.15～2.25m、高さ1.2mを測り、縦長長方形である。前・奥壁と側壁との界線ははっきりしている。左側壁には高さ85cmの地点に、前壁から1.4mの所まで2cmほど掘り込まれた軒線があり、その高さは玄門部側壁の界線と同じである。右側壁は高さ70cmに傾斜変換点があり、棟線はないが、家形である。前壁や奥壁には軒線はない。右側には前壁から1.8m付近に工具痕の違いによりわずかな段差があり、奥行き30～40cmの範囲で、奥壁側に拡張されたか、あるいは前方部から調整が行われたかと思われる。玄門部との境は幅1～2cmの面取りがされている。玄室の両側壁に接して凝灰岩製の石床が置かれていた。



第121図　上塩冶横穴墓群22－２号穴遺物出土状況（S＝1／30）

石床（第120図）

右側の石床は２つの石からなり、断面L字状に加工されている。幅45～47㎝、長さ133㎝、仕切を含んだ高さ17～20㎝測る。仕切は高さ５㎝、幅５～10㎝ある。左側の石床は４つの石からなり、断面L字状に加工されている。長さ2.15ｍ、幅47～65㎝、仕切を含んだ高さ15～20㎝測り、玄門側の石床の幅が広い。一部、ずれたり、仕切部分がなくなっているものもあった。

閉塞状況（第121図）

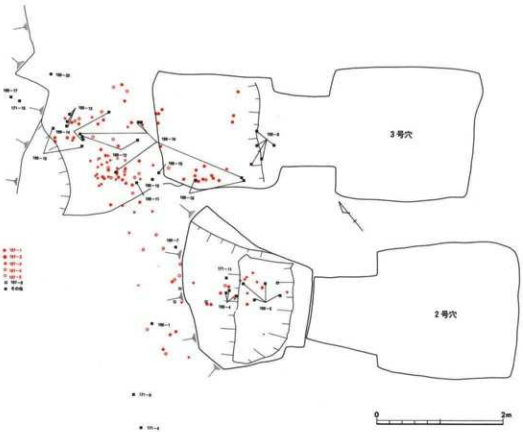
右側に高さ50㎝、幅70㎝、厚さ20㎝の石を、左側に高さ70㎝、幅45㎝、厚さ20㎝の凝灰岩の切石を立て、その前に30～40㎝の切石を９個ほど積んでいた。その中の①は、仕切を持ち、断面L字形の石床と同じ形態の石材であり、石床を転用していると思われる。②の石の壁面にはひっかき傷状の痕跡があった。

遺物出土状況（第121・122図）　前庭部の黒色土（3層）の上面から耳環が発見され、黒色土中や5層上面から須恵器甕片が多量に出土した。甕片では3号穴と接合する個体もあった。同一層から中世土師器が検出された。その他、前庭部からは蓋坏や壺の破片が出土した。玄室の黒色土（3層）や2層から須恵器甕片が、また、左前壁と石床の間から挟まるように蓋坏が出土した。須恵器の破片は離れた地点同士で接合した。大刀は閉塞石のすぐ奥側で出土した。大刀は切先を玄門側に向け、刃部が奥側にある。右奥で石床の下から鉄器がまとまって出土している。

土層堆積状況（第119図）　前庭部には、地山と同じような5層（黄褐色砂質土）が最下層に堆積していた。その土は凝灰岩片を含み硬く締まる。また、閉塞石が5層上面にあり、遺物も含まない。これらのことから5層は横穴墓玄室掘削時の廃土あるいは人工的に積んだ土（置土）の可能性があり、この土によって地山に付けられた工具痕は隠れてしまう。1層は最近の流入土である。

工具痕　溝状痕は玄門部側壁や玄室側壁の奥壁側（拡張の可能性がある地点）、玄門部から前庭部の床面に横穴墓主軸方向に施される。前庭部床面は平刃痕が筋状に残る。玄室側壁前部は幅5㎝の平刃削痕があり、中央部は丸刃削痕が天井部から床面にかけて残る。左側壁には軒線があり、工具痕は軒線で一回止まる。奥部は横方向の溝状痕があり、先端は平刃である。溝状痕は丸刃により消える場所もある。玄室床面は奥壁側は溝状痕で凸凹で、前部は平刃で調整されている。

まとめ　2号穴玄室奥部の拡張の可能性のある工具痕、閉塞石に使用された石床石材の存在、遺物の出土状態から盗掘、再利用などがあったと思われる。再利用の時期は不明であるが、中世土師器は14世紀頃と考えられる。(注4)



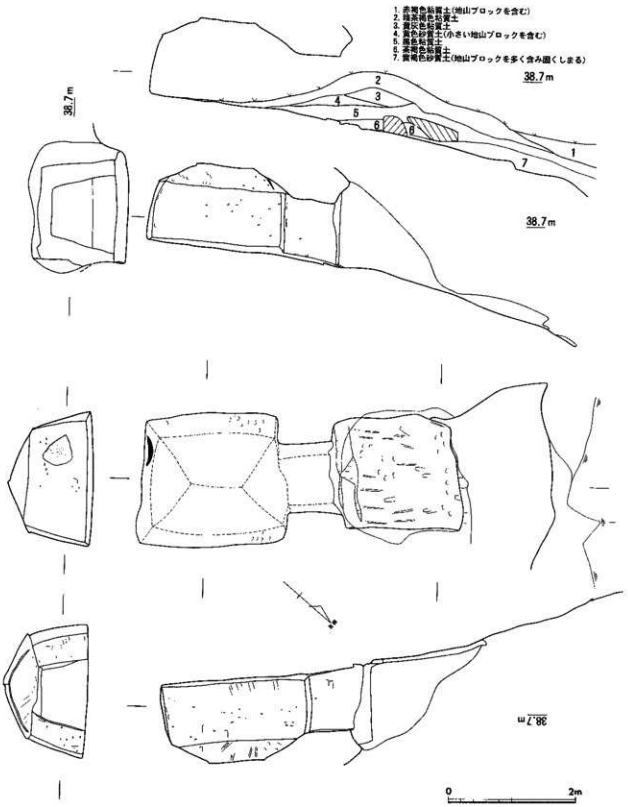
第122図　上塩冶横穴墓群22－2・3号穴前庭部遺物出土状況（S＝1／60）

3号穴

立地　標高38.3m付近にあり、2号穴から3m東である。床面は砂岩で、天井部は凝灰岩である。

形態（第123図）

前庭部・玄門部　前庭部は奥幅1.65m、前幅1.75m、全長3.3mを測る。床面は閉塞石の平坦面から5～10cm低くなり、前方に向かってかなり傾斜している。玄門部から1.9m付近で床面は傾斜や工具痕



第123図　上塩冶横穴墓群22－3号穴実測図（S＝1／60）

もかわり、玄門部側が丁寧に加工されている。右奥部を中心にわずかに天井部も残る。前庭部側壁は短いが垂直に立ち上がる。玄門部は奥幅1.1m、前幅1.15m、奥行き0.8～0.9m、高さ1mを測る。側壁は内傾し、天井との界線は明瞭で、断面方形である。床面は前庭部に向け傾斜している。玄門部前方には閉塞石を受けるため幅1.7m、奥行き0.2～0.3mの平坦面がある。

玄室　奥幅1.9m、前幅1.93m、奥行き2.1～2.4m、高さ1.3mを測り、やや縦長長方形である。家形妻入で、各壁は丸みを持ち内傾している。各壁には深さ2～3cmに刳り込まれた軒線がある。奥壁の凝灰岩中には45cmほどの角礫が14cmほど浮き出ており、横穴墓掘削時に掘り残されていた。床面は一部崩れているが、玄室から玄門部にかけて傾斜がきつい。天井の界線は断面V字に掘り窪められ、棟線は幅5cmでV字形に掘り込まれている。奥壁以外の壁は滑らかになる。玄門部との境には面取りが施されている。

閉塞状況（第124図）　長さ0.95m以上、幅1.15m、厚さ0.2mの凝灰岩の閉塞石があり、前方に倒れていた。基本的には一枚で閉塞していたと思われ、周囲や閉塞石の下からは20cmほどの凝灰岩が検出された。閉塞石は中央付近で大きく割れ、ずれていた。

遺物出土状況（第122・124図）　閉塞石と前庭部側壁の間から蓋坏、壺、甕片が出土した。また、5層からは須恵器甕片や蓋坏などが多数出土し、2号穴と接合する遺物もある。これらの遺物は閉塞石が倒れた以降の土から出土しているので、掻き出しや盗掘の痕跡とも考えられる。玄室内の4層から中世土師器が出土した。炭化物や鉄器や須恵器は小片になって5層や床面から検出され、かなり離れた遺物が接合する。

土層堆積状況（第123図）　1～5層は閉塞石が倒れた以降に堆積している。閉塞石は7層上面にあり、7層は均質な砂質土で、固くしまる。これらのことから横穴墓玄室掘削時の廃土あるいは恣意的に積んだ土（置土）、横穴墓使用時の床面などの可能性がある。この土によって地山に付けられた工具痕は隠れてしまう。

工具痕　玄室床面には幅5cmほどの平刃削痕がある。また、前庭部にも明瞭な平刃削痕や溝状痕が残る。溝状痕の一部は平刃の角を使用している。玄室側壁には平刃の刺突痕があり、その上から平刃削痕が施され、表面は滑らかである。天井などの界線は平刃によって施し、V字形になっている。

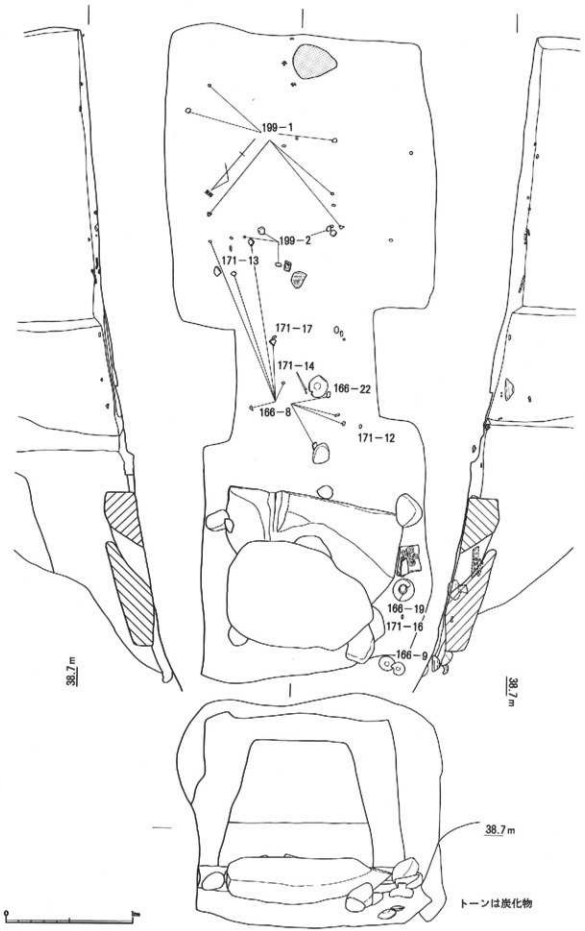
4号穴

立地　標高37.6m付近に位置し、3号穴から3.5m東に位置する。

形態（第125図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.3m、前幅1.05m、高さ1mを測る。側壁は垂直気味に立ち上がり、断面は方形であるが、側壁と天井の界線はない。閉塞石を受ける繰り込みは玄門部から6cmほど下がり、奥幅1.3mを測り、奥行き10～15cmの平坦面となっている。前庭部は砂岩になり、中央部が深く掘られている。奥幅1.9mを測り、奥行きは前方がはっきりしないが、傾斜変換点から考えて1.65mぐらいと思われる。玄門部から前庭部にかけて床面はかなりの傾斜を持つ。

玄室　奥壁に沿って一段高い屍床がある。屍床は幅70～80cm、長さ2.3mを測る。玄室の前幅は1.7m、奥行き1.6～1.7m、高さ1.25mを測り、平面形は台形をしている。刳り込まれた軒線と棟線があり、家形妻入構造である。天井の界線はすべてV字状に掘り込まれ、四壁は垂直気味に立ち上がる。床は

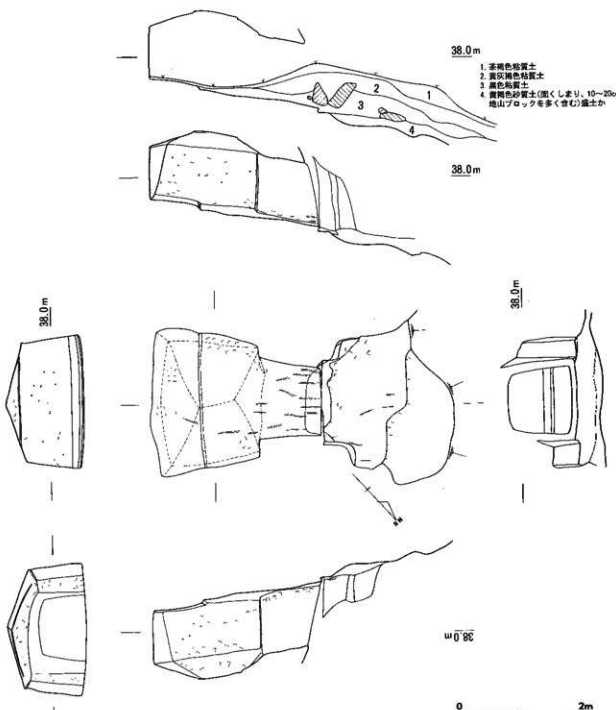


第124図　上塩冶横穴墓群22－３号穴遺物出土状況（S＝1／30）

かなり傾斜し、玄門部との境は面取りされる。

閉塞状況（第126図）　幅１ｍ以上、高さ0.6ｍ以上、厚さ22㎝の凝灰岩の切石と幅35㎝、高さ40㎝の石を立て、玄門部側には幅30㎝ほどの凝灰岩礫が６個あり、押さえと使用されたと思われる。押さえ石の４個を前庭部側に面を揃えて玄門部幅いっぱい置き、その前面に閉塞石が置いたと思われる。閉塞石が前方に倒れていたので、押さえ石も２個以外は倒れていた。閉塞石の前方からも凝灰岩の礫が検出されたが、扁平で、小さい。

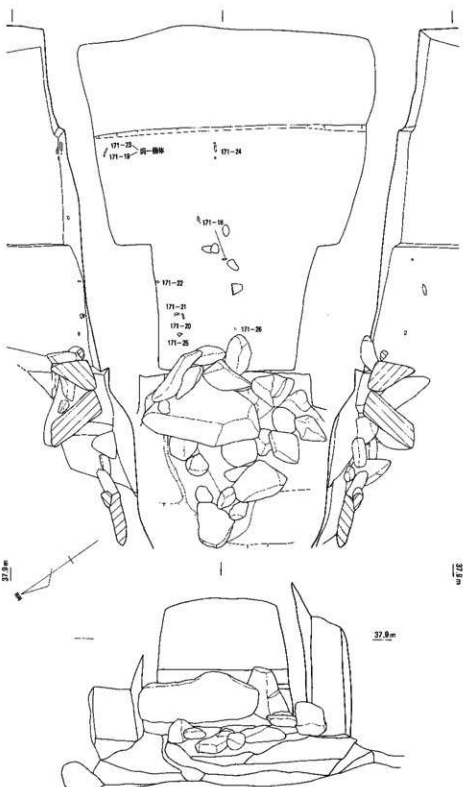
遺物出土状況（第126図）　鉄器は玄室の３層上面や３層中から出土し、須恵器は２・３層中から出土した。遺物は全て小片になる。



第125図　上塩冶横穴墓群22－４号穴実測図（Ｓ＝1／60）

土層堆積状況（第125図）　玄室内にはほとんど土は入っていなかった。前庭部には地山と同じような4層が最下層に堆積していた。その土は硬く締まり、遺物も含まない。これらのことから横穴墓掘削時の廃土あるいは恣意的に積んだ土（置土）、横穴墓使用時の床面の可能性があり、これによって地山に付けられた工具痕は隠れてしまう。

工具痕　玄門部床面には溝状痕があり、前庭部の段差がある地点には幅5㎝の平刃痕が残る。玄室床面は平刃痕や平刃による刺突痕が残るが、表面は滑らかである。四壁には方形の刺突痕や平刃削痕が残る。玄門部側壁には溝状痕があり、その後、縦方向の平刃削痕が施されている。



第126図　上塩冶横穴墓群22－4号穴遺物出土状況（S＝1／30）

5号穴

立地　標高37.1m付近にあり、4号穴から4m東である。1～4号穴までは前庭部の側壁が前方に伸びず、一続きであるが、5号穴の前庭部側壁はしっかりしており、隔絶した印象がある。

形態（第127図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.15m、前幅1m、奥行き1.05m、高さ0.95mを測る。側壁は垂直気味に立ち、天井との界線も明瞭である。犬井は丸みを持つが、断面方形である。床面はわずかに傾斜する。前庭部は玄門部から10㎝下がり、奥幅1.3m、奥行き1.85mを測る。前庭部の側壁は高さ40㎝ほどまではしっかり立ち、

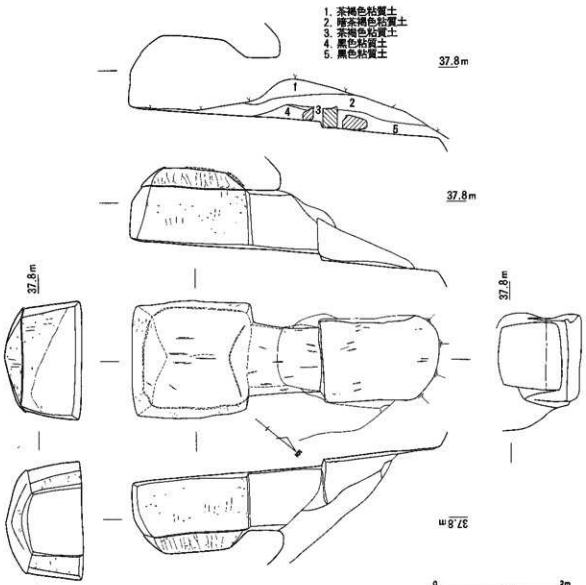
その上部は丸みを持つ。床面は水平に近く、前方は急な崖になる。

玄室　奥壁1.73m、前幅1.65m、奥行き1.85m、高さ1.2mを測り、縦長長方形である。側壁は垂直気味で、2cmほど刳り込まれた軒線があり、家形妻入り構造を呈する。天井中央部に長さ40cmにわたり、棟線がある。奥壁は床面から55cmまで垂直気味に立ち上がり、その上はやや内傾し、丸みを持つ。壁面は滑らかで、玄門部との境は幅2～3cmの面取りがある。

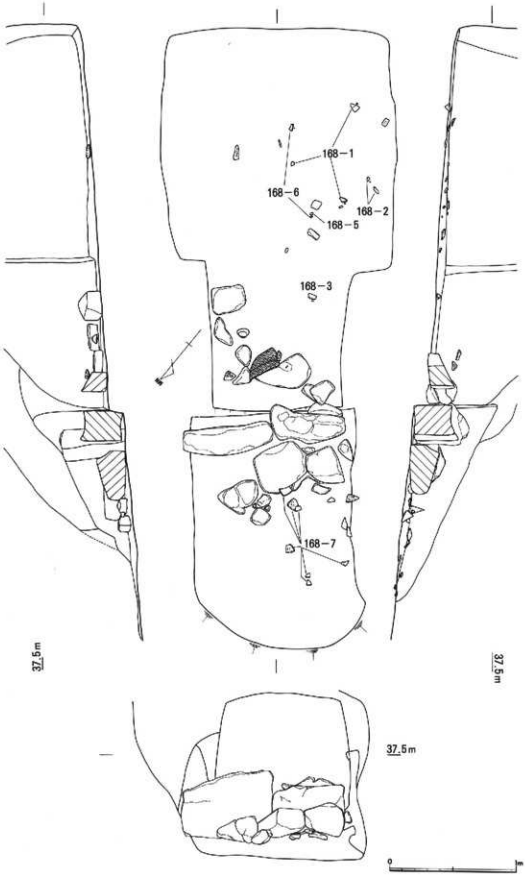
閉塞状況（第128図）　閉塞は幅70cm、高さ50cm、厚さ20cmと幅60cm、高さ45cm、厚さ20cmの二枚の凝灰岩の切石を使用している。この閉塞石は前庭部の床上に置かれていた。その前方に大きさが40cm、厚さ20cmの切石が数個あり、閉塞石の上部がかけているので、その破片の可能性がある。また、玄門部側から10～40cmのかなり風化した凝灰岩片が検出された。

遺物出土状況（第128図）　玄室からは須恵器甕や鉄器が破片になり出土したが、原位置を保っているものはなかった。遺物の出土層位は2層が多いが、4層もある。前庭部の床面からも甕片や壺片を検出した。

土層堆積状況（第127図）　玄室内はほとんど土はなく、流入土である。



第127図　上塩冶横穴墓群22－5号穴実測図（S＝1／60）



第128図　上塩冶横穴墓群22－５号穴遺物出土状況（S＝1／30）

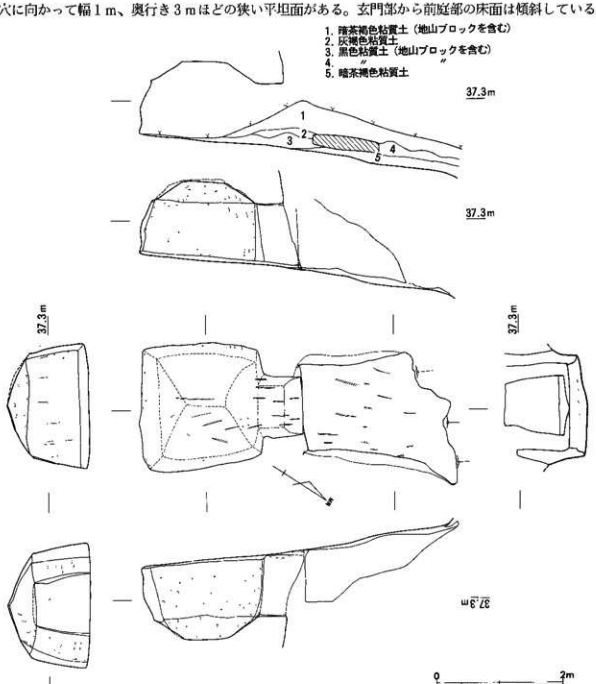
工具痕　床面には玄室から前庭部にかけて溝状痕が残る。玄室側壁には方形の刺突痕の後、平刃削痕が施される。平刃は縦方向に削るように施される。軒線の刳り込みは平刃を水平方向に打ち込んでいる。天井は丸刃により肋骨状に調整されている。

6号穴

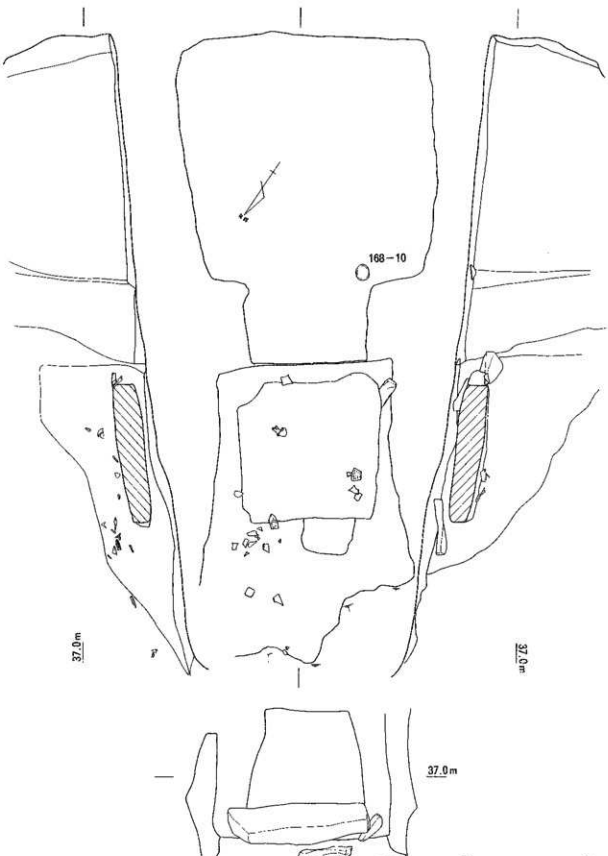
立地　標高37.7mにあり、5号穴から東へ10.5m、7号穴から西へ5.5mに位置し、やや隔絶した横穴墓である。

形態（第129図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1m、前幅0.9m、奥行き0.57mと短く、高さは0.98mを測る。側壁と天井との界線は明瞭で、断面は方形を呈する。前庭部は玄門部と5～10cmの段があり、奥幅1.35m、前幅1.7m、奥行き2.4mを測る。前庭部の側壁はしっかりある。前方は急な崖になっており、前庭部の右側は5号穴に向かって幅1m、奥行き3mほどの狭い平坦面がある。玄門部から前庭部の床面は傾斜している。



第129図　上塩冶横穴墓群22－6号穴実測図（S＝1／60）

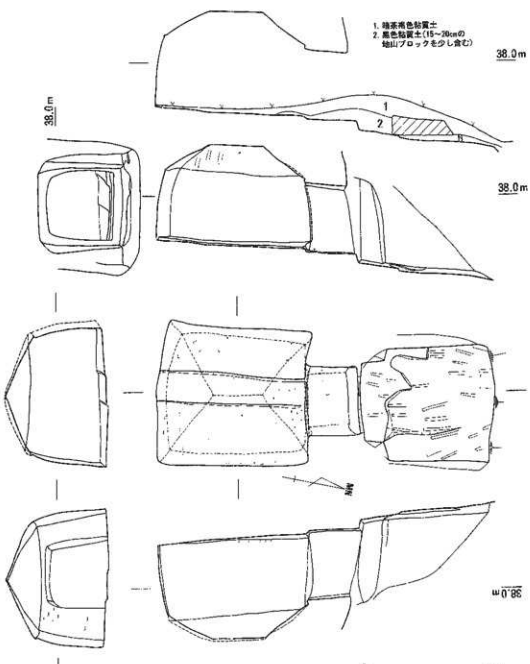


第130図　上塩冶横穴墓群22－６号穴遺物出土状況（S＝1／30）

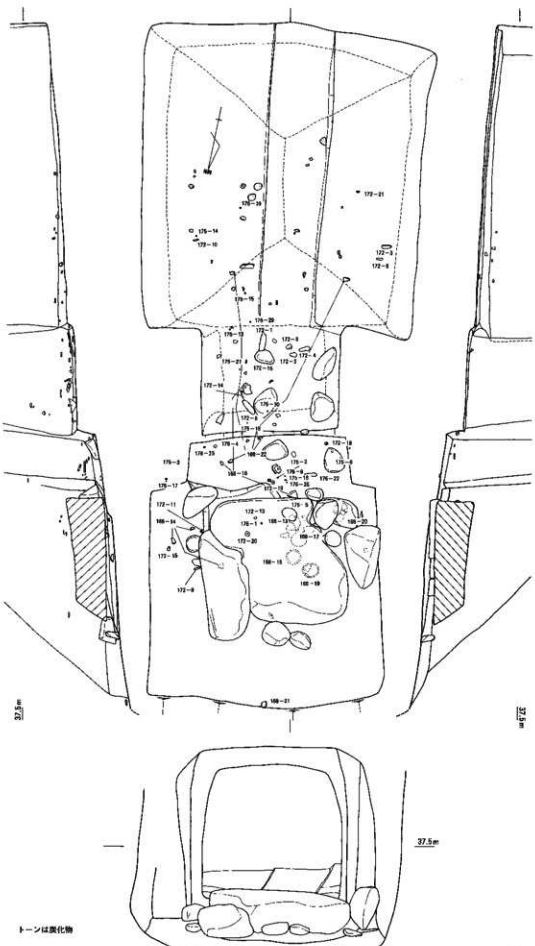
玄室　奥幅1.9m、前幅1.65m、奥行き1.9m、高さ1.3mを測る家形妻入り、台形プランである。奥壁や側壁は内傾し、表面は凸凹である。四壁には2cmほど刳り込まれた軒線が施され、少し高低差を持っているが、基本的には玄門部の天井と側壁の界線と同じ高さである。奥壁の軒線は平刃を止めて表現する。棟線は長さ63cmと短く、幅2cmの丸刃で、奥壁に向かって削っている。床面は傾斜し、各コーナーは丸みを持つ。玄門部との境はわずかに面取りされている。

閉塞状況（第130図）　長さ1.1m、幅1.1mの方形で、厚さは30cmの凝灰岩が前方に倒れ、周囲に凝灰岩片が崩れていた。閉塞石は床面から10～20cm浮いている。一枚の切石で本来閉塞していたと思われる。

遺物出土状況（第130図）　玄室からはほとんど遺物はなく、坏身が床面から1～2cm浮いて出土した。前庭部からは長頸壺の口縁部や甕片が多く出土しているが、接合できない。



第131図　上塩冶横穴墓群22－7号穴実測図（S＝1／50）



第132図　上塩冶横穴墓群22－７号穴遺物出土状況（S＝1／30）

土層堆積状況（第129図）　1・2層は流入土で、その下から閉塞石が検出された。3層と4層はよく似ており、閉塞石が上面にのる。

工具痕　前庭部の床面には溝状痕が残り、表面は凸凹になる。玄室床面は溝状痕のち平刃痕を施し、一部に断面方形の刺突痕がある。側壁には刺突痕や平刃削痕があり、特に、壁同士の界線上には多くの刺突痕が残る。溝状痕の先端には刺突痕があり、壁面を滑らすように刺突していると思われる。玄門部側壁にも幅5cmの平刃痕が残る。

7号穴

立地　標高37.3m付近に位置し、8号穴から西へ7m離れ、やや隔絶している。

形態（第131図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.18m、前幅1.05m、奥行き0.85m、高さ1.1mを測り、玄室とは5cmの段がある。天井と側壁の界線は明瞭で、断面は方形である。床面はほぼ水平である。前庭部と玄門部とは15cmの段がある。玄門部の前方には閉塞石を受ける刳り込みがあり、幅1.22m、奥行き0.3cmを測る。前庭部は奥幅1.67m、長さ1.7mを測り、側壁はしっかりしている。閉塞石を受ける刳り込みの前方から傾斜はきつくなり、床面中央には1.2mの範囲で凹みがある。

玄室　奥幅2.25m、前幅2m、奥行き2.3～2.4m、高さ1.6mを測り、家形妻入りを呈する。側壁や奥壁は垂直気味に立ち上がり、深さ1～3cmの刳り込まれた軒線があり、棟線も明瞭に施される。天井同士の界線は幅5cmの平刃で、明瞭に刳り込まれている。床面は左右方向に三段になっており、右側が一番高く、3cm、2cmの段差がある。幅は右側から75cm、45cm、95cmを測り、中央が狭く、通路状になる。玄室から玄門部の床面は工具痕が残り、かなりの傾斜を持つが、表面は滑らかである。

閉塞状況（第132図）　1層を取り除くと、幅1m、長さ1m、厚さ25cmの板状の凝灰岩が倒れていた。数カ所で割れ、その下には30×40cmほどの方形の石や凝灰岩の破片があった。閉塞石の底部は一部床面に接していた。

遺物出土状況（第132図）　玄室の中央からは炭化物も出土しているが、その時期は不明である。玄門部に20～30cmの礫が方形に規則的にあった。その下から大刀や玉類が出土している。玄門部から前庭部の1層からは須恵器が小片になり出土し、古銭や鉄器や耳環も散在していた。須恵器や玉類は「寛永通宝」と同一層から出土している。玉類はガラス製で、濃緑色の丸玉と紺色の小玉である。古銭と須恵器など横穴墓使用時の遺物と同一層から出土し、破片も小片が多いことなどから、江戸時代以降に再利用や盗掘が行われたと思われる。玄室内からは蓋坏や高坏の小片が出土した。

閉塞石の下、右側近くで、蓋坏が7個体まとまって出土した。一部はその場でつぶれた状態で出土した。

土層堆積状況（第131図）　玄室内にはほとんど流入土はなく、前庭部や玄門部にわずかに堆積していた。1層は流入土で、しまりも悪く、その下層から閉塞石が検出された。

工具痕　前庭部床面には幅5cmほどの平刃による削った痕跡が明瞭に残る。玄室床面には断面方形の刺突痕や平刃の打痕に近い状態で工具痕が残る。天井や側壁は平刃削痕が縦方向に残る。

8号穴

立地　標高38.5m付近に位置し、9号穴から西へ2.5m離れ、小さい谷の奥に位置し、7号穴とは谷を挟んで対面になる。8号穴のある西向き斜面には11号穴まで存在する。

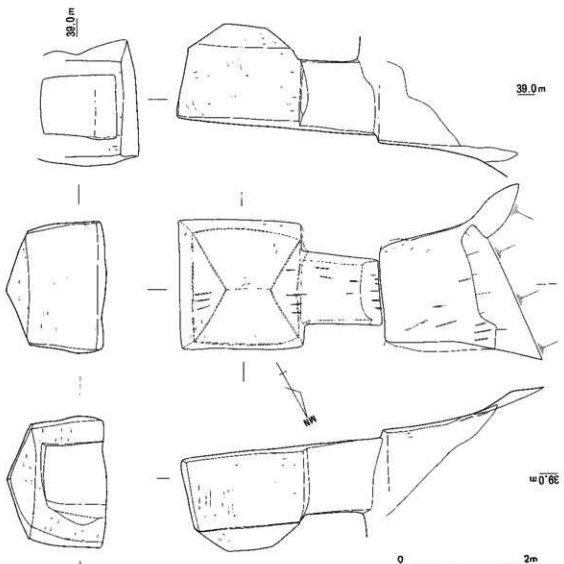
形態（第133図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.22m、前幅1.02m、奥行き1.2m、高さ1.1mを測り、天井と側壁の界線は明瞭で、断面は方形である。側壁は垂直気味に立ち上がり、床面は平らである。前庭部は玄門部から10cm下がり、奥幅1.4m、前幅2m、奥行きは右側で1.3m、左側で1.8mを測り、前方に広がる。床面の先端は砂岩で、表面は凸凹になり、急な斜面になる。前庭部側壁は明瞭である。

玄室　奥幅2m、前幅1.92m、奥行き右側で1.95m、左側で2m、高さ1.6mを測る。方形プランで、刳り込まれた軒線や棟線は明瞭で、整正家形妻入りを呈する。側壁は垂直気味に立ち上がり、天井に至る。床面は傾斜を持って前庭部に至る。玄門部との境には面取りがある。

閉塞状況（第134図）　幅1.3m、長さ1m、厚さ0.3mの板状の切石が前庭部に倒れていた。現状では風化して複数に割れているが、本来は凝灰岩の一枚石で閉塞していたと思われる。

遺物出土状況（第134図）　玄室から玄門部にかけての発掘調査は1979年に行われているので、遺物

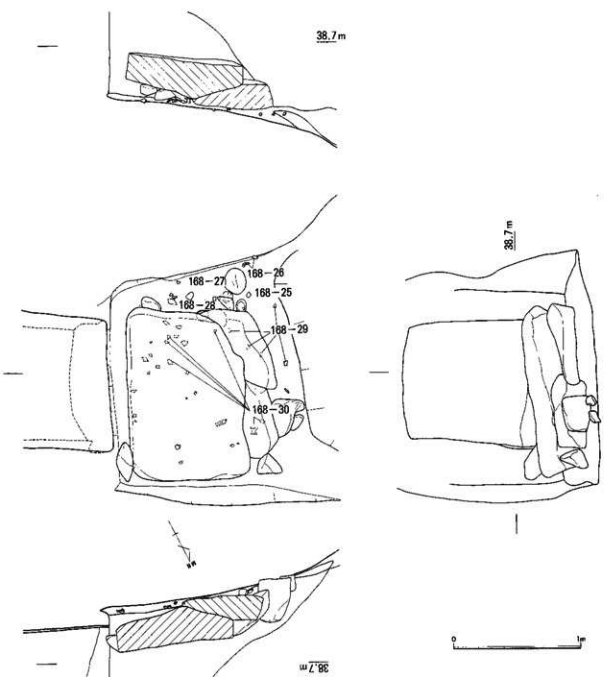


第133図　上塩冶横穴墓群22－8号穴実測図（1／60）

は出土していないが、閉塞石の下から遺物が出土している。鉄製品が2点の他は全て須恵器であった。完形の蓋坏もあるが、甕片が小片となり散在し、接合するものは少なかった。前庭部からも蓋坏や壺の破片が出土した。

土層堆積状況　閉塞石の下は黒色土が堆積し、遺物を含んでいた。

工具痕　玄室から前庭部の床面に溝状痕と平刃削痕が残る。溝状痕は玄門部から玄室に続くものもあるが、多くは玄室から始まる。側壁には平刃削痕や打痕のように工具の先端が鋭く刺さった跡もある。断面方形の刺突痕は少ない。



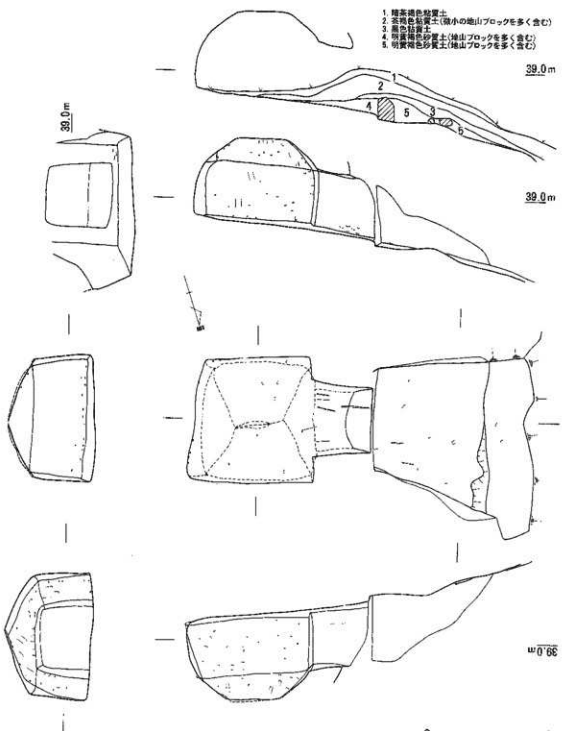
第134図　上塩冶横穴墓群22－8号穴遺物出土状況（S＝1／30）

9号穴

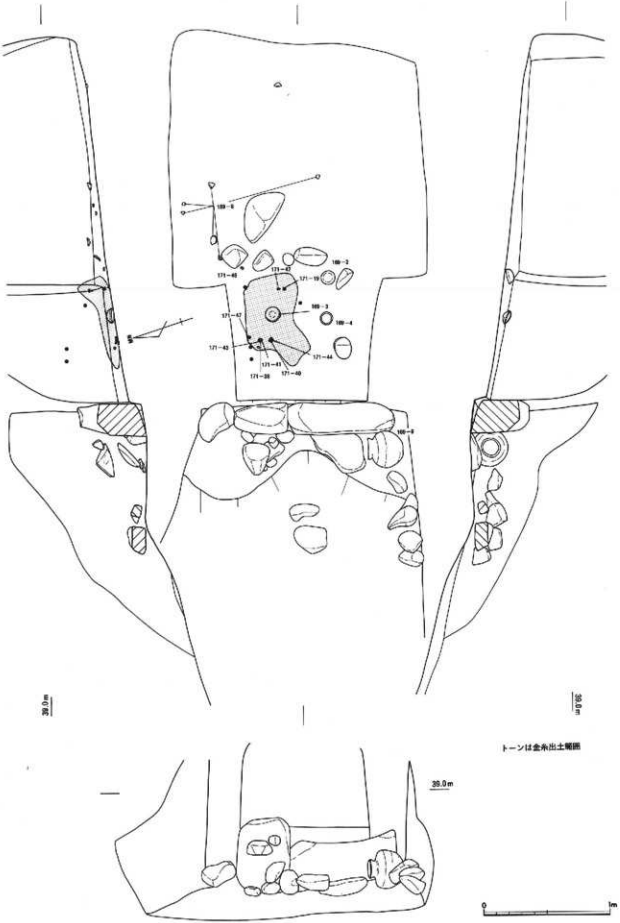
立地　標高38.7m付近に存在し、8号穴の東4mに位置する。

形態（第135図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.25m、前幅1.05m、高さ0.95mを測る。側壁と天井の境は明瞭で、断面は方形である。床面は傾斜している。前庭部は玄門部から10cm下がり、奥幅1.6m、前幅2.8m、長さ2.4mを測り、前方に向かって広がり、玄門部から1.8m付近で急な傾斜になる。前庭部側壁もしっかりしており、左右の横穴墓と隔絶している。床面は中央部がやや高くなっているが、前方に向けて



第135図　上塩冶横穴墓群22－9号穴実測図（S＝1／60）



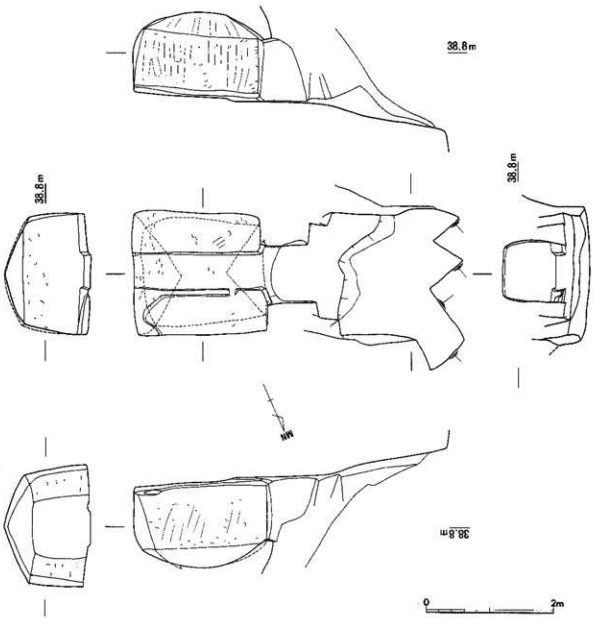
第136図　上塩冶横穴墓群22－９号穴遺物出土状況（S＝1／30）

傾斜している。

玄室　奥幅1.8m、前幅２m、奥行き1.75～２m、高さ1.4mを測り、家形妻入である。ほぼ正方形プランで、各コーナーや壁同士の界線は不明瞭である。傾斜変換線程度の軒線や最大幅10cmを測る不明瞭な棟線がある。側壁は垂直気味に立ち上がり、奥壁は内傾し、天井部との傾斜の違いは少なく、天井と奥壁の境は軒線を入れただけの印象を受ける。

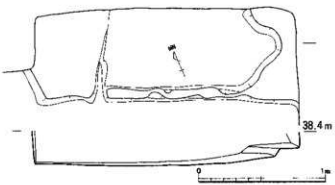
閉塞状況（第136図）　高さ45cm、幅84cm、厚さ25cmと高さ55cm、幅43cm、厚さ25cmの２枚の凝灰岩の切石が立てられていた。床面は前庭部の床面に接していた。その前方からは大きさ30cmのくずれた凝灰岩片が検出された。

遺物出土状況（第136図）　前庭部右側壁と閉塞石の間から壺が置かれた状態で出土した。口縁部が横転していたが、本来の位置とあまり変わらないと思われる。その他、前庭部からは蓋坏の小片が出土している。玄室内から須恵器、鉄器、金糸が出土した。金糸は玄門部左側の２～４層から検出され、



第137図　上塩冶横穴墓群22－10号穴実測図（S＝1／60）

多くは水洗によって発見した。(171 -50)は前庭部の右側で出土し、(171－51)は玄室右側の奥の2層から出土したが、両方とも水洗によって確認したので、正確な位置は不明である。須恵器は4層を中心に、破片は2層からも出土し、同じ層から10～50cmの石も検出された。耳環は金糸と同じ範囲で出土している。



第138図　上塩冶横穴墓群22－10号穴屍床実測図
(S＝1／30)

土層堆積状況（第135図）　玄室にはほとんど土は入っていなかった。3層の黒色土は玄室内まで及んでいなかった。

工具痕　玄室側壁には断面方形の刺突痕と平刃削痕あり、床面にも平刃による刺突痕があり、表面は凸凹である。玄門部床面には溝状痕が残る。前庭部床面は平刃痕が残り、凸凹である。玄室内では前壁が平刃削痕で一番滑らかに調整されている。

10号穴

立地　標高38.2m付近に位置し、9号穴の東3mに位置する。前庭部側壁はしっかりしている。

形態（第137図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1m、前幅0.9m、奥行きは右側で0.75m、左側で0.8m、高さ1mを測る。天井部はかなり風化するが、側壁と天井の界線は明瞭で、断面は方形である。玄門部の前には幅1.5m、奥行き25～30cmの刳り込みがあり、閉塞石を受けるためと思われる。床面は水平に近い。前庭部は奥幅1.96m、前幅2.05m、奥行き1.6mを測る。床面の中央に10cmほどの段差がある。床面は工具痕が残るが、表面は滑らかで、側壁との境は不明瞭である。前庭部の前方は岩盤の割れ目につながっている。

玄室　奥幅1.9m、前幅1.8m、奥行き2m、高さ1.35mを測り、方形プランである。側壁は垂直気味に立ち上がり、刳り込まれた軒線がある。棟線は不明瞭で、幅8cmほど丸刃で施されている。天井頂部は丸みを持つが、家形妻入である。前壁の軒線は玄門部の高さと同じである。

床面の両側には削り出しの屍床がある（第138図）。右側は床面から5cmほど高く、幅60～68cmで、奥側が広くなる。左側も5cmほど高く、幅66～75cmあり、奥側が広い。その屍床を人形に掘り下げ、頭部で深さ8cmを測るが、玄門部側では右側と同じ屍床状になる。頭部から玄門部側までの奥行きは1.9mを測る。

閉塞状況・遺物出土状況・土層堆積状況　1979年に発掘調査が行われている。

工具痕　玄室側壁は平刃削痕や刺突痕も残るが、丸刃できれいに調整され、肋骨状を呈する。奥壁、前壁や床面にも幅5cmの平刃削痕が残る。

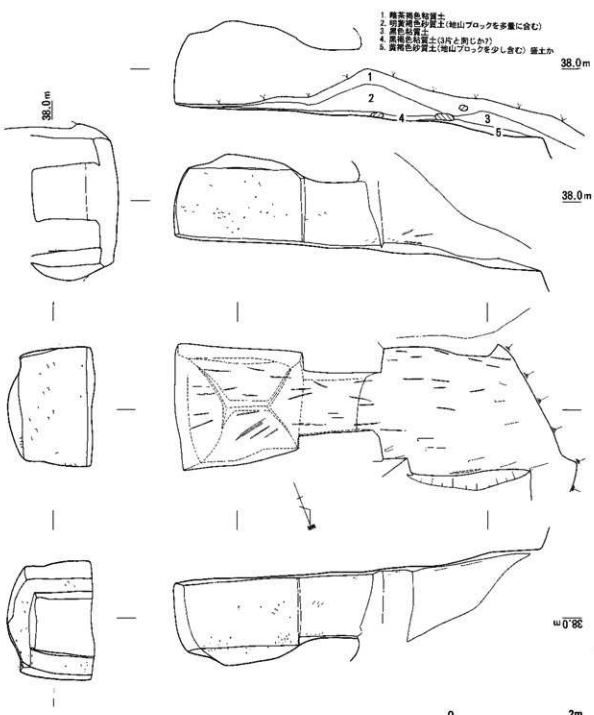
11号穴

立地　標高37.4m付近にあり、10号穴の3m東に位置する。

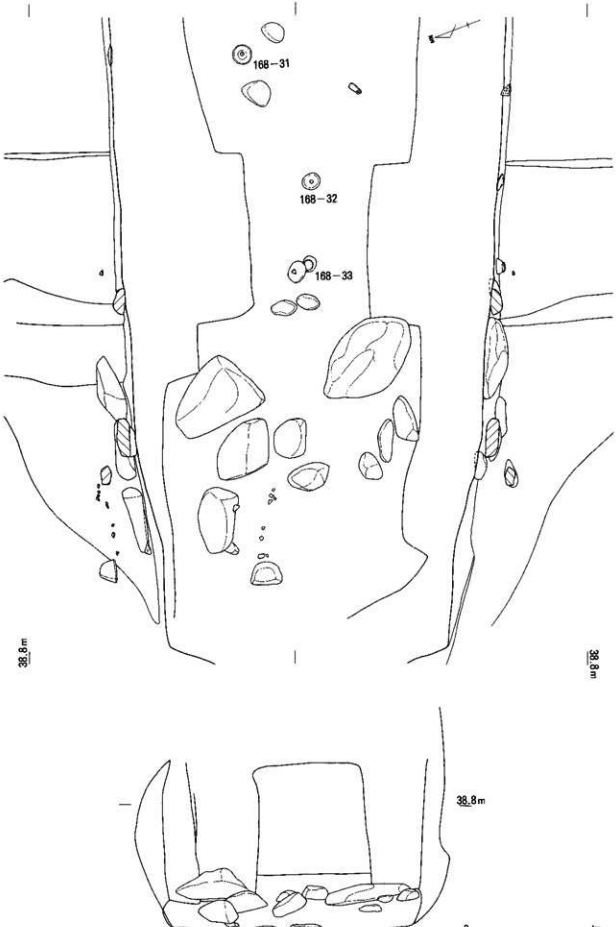
形態（第139図）

前庭部・玄門部　奥幅1.05m、前幅0.9m、奥行き1.2m、高さ1.05mを測り、側壁は垂直に立ち上がり、側壁と天井の界線は明瞭で、断面方形である。玄門部の前方には幅1.75m、奥行き0.4mの刳り込みがあり、閉塞石を受けるためと思われる。前庭部は奥幅2m、前幅2m、奥行き2.55mを測る。前庭部側壁はしっかりしており、他の横穴墓と隔絶している。玄門部から前庭部の床面はわずかに傾斜している。

玄室　奥幅2m、前幅1.55m、奥行き左側で1.85m、右側で2.05m、高さ1.35mを測り、台形プランである。側壁は垂直気味に立ち上がり、左側壁の軒線は2cm刳り込んでいる。犬井同土の界線や棟線は



第139図　上塩冶横穴墓群22－11号穴実測図（S＝1／60）



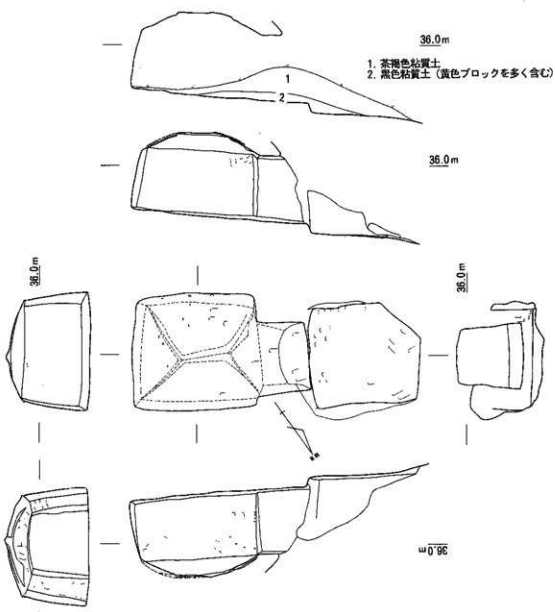
第140図　上塩冶横穴墓群22－11号穴遺物出土状況（S＝1／30）

工具で幅広に表現されているので不明瞭である。棟線は幅15cm、深さ2cmほど丸刀で表現されている。家形妻入り構造である。天井や側壁の表面は凸凹で、かなりゆがんでいる。

閉塞状況（第140図）　切石の閉塞石などは検出できなかった。しかし、50×70cmと55×90cmの大きな石が検出された。また、その前方に20～40cmの石があったが、これらの石の用途は不明である。なお、石は5層上面で検出されている。

遺物出土状況（第140図）　前庭部の3層から須恵器の小片が出土している。完形品の須恵器が3点、玄室の4層から出土し、床面から2～3cm浮いていた。その他、玄室から須恵器の小片が少し出土してが、接合しない。須恵器の周囲からは20～30cmの礫も出土している。

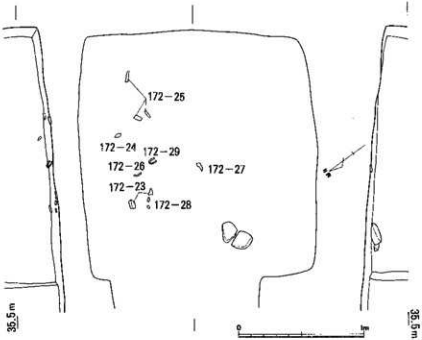
土層堆積状況（第139図）　玄室内はあまり土が堆積していなかった。3層は黒色土で、この上面から遺物が出土しており、1・2層は流入土である。前庭部の側壁が立っており、現状では他の横穴墓などに移動ができない。前庭部の前方の土層を見ると、地山の上に黄褐色土があり、その上に白色の



第141図　上塩冶横穴墓群22－12号穴実測図（S＝1／60）

凝灰岩纖層が厚いところで35㎝堆積していた。その上面は幅1.1m以上の平坦面になっており、墓道あるいは横穴墓掘削時の作業面とも考えられる。

工具痕　前庭部から玄室の床面には横穴墓主軸方向の溝状痕が多数残り、表面は凸凹である。玄室側壁や天井には刺突痕や平刃削痕が多く、表面は凸凹である。一部には丸刃打痕がランダムに施されている。前庭部側壁にも溝状痕が残り、先端は平刃である。奥・前壁と側壁の界線は平刃を止めて表現する程度である。



第142図　上塩冶横穴墓群22－12号穴遺物出土状況（S＝1／30）

12号穴

立地　尾根が少し出っ張った先端に位置し、標高35.3mを測る。他の横穴墓より一段低く、11号穴から東6m離れる。

形態（第141図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.2m、前幅1.05m、奥行き0.75m、高さ1.05mを測る。側壁は内傾し、側壁と天井の界線は明瞭で、断面方形である。床面はわずかに傾斜している。前庭部は玄門部と15㎝の段がある。奥幅1.6m、前幅1.3m、奥行き1.7mを測る。床面は平坦で、側壁前方は低く、両側壁外側には平坦面が加工され、左側は幅1m、長さ3mを測り、13号穴まで続く。

玄室　奥幅1.62m、前幅1.72m、奥行き1.9m、高さ1.3mを測る。左袖は10㎝ほどしかない。側壁はやや内傾し、四壁全てに軒線が2㎝刳り込まれている。棟線は幅20㎝、深さ5㎝の断面V字に掘り込まれ、天井同士の界線もV字形に表現されている。家形妻入り構造で、床面はわずかに傾斜している。閉塞石などは検出できず、閉塞方法は不明である。

遺物出土状況（第142図）　玄室左側の第2層中から鉄器が出土した。鉄器は小片になり、接合する遺物もあった。その他、玄室内から20㎝ほどの石が検出された。

土層堆積状況（第141図）　玄室内はほとんど土は堆積しておらず、すぐ凝灰岩の岩盤が露出した。

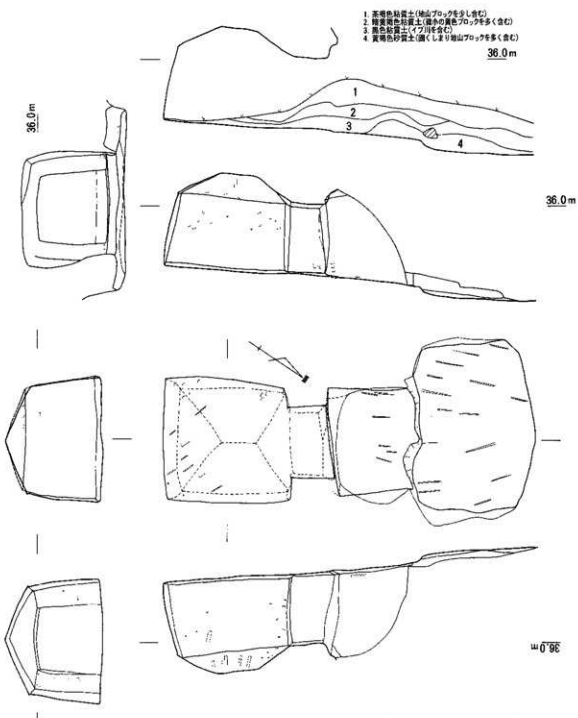
工具痕　前庭部から玄室の床面には平刃痕が残る。特に、側壁との境には多く、床面と側壁の境を明確に表現している。天井界線は断面方形の刺突痕や平刃により刳り込まれている。壁面には方形の刺突痕や平刃削痕が残る。

13号穴

立地　標高35mと12号穴と２穴のみやや低いところに位置する。12号穴から東4.5mと離れている。

形態（第143図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.1m、前幅1.15m、奥行きは右側で0.62m、左側で0.68mと短く、高さは1.1mを測る。側壁は垂直に立ち上がり、天井との界線も明瞭で、断面は方形である。前庭部は二重構造になっている。前庭部の玄門部側は玄門部と3cmの段があり、奥幅1.7m、前幅1.6m、奥行き1.1m、高さ1.35mを測る。天井はほとんど風化し、35cmほどしか残存しない。側壁は垂直に立ち上がる。前庭部前部は８cmの段差があり、奥幅2.35m、前幅2.65m、奥行き1.8mを測り、側壁は低く、



第143図　上塩冶横穴墓群22－13号穴実測図（S＝1／60）

床面は平坦である。側壁の外側にも平坦面があり、東側の平坦面は長さ3.5m、幅1.6mを測り、西側は12号穴に続く。玄門部から前庭部中央までの床面はわずかに傾斜しているが、前庭部前部はほぼ水平である。

玄室　奥幅1.9m、前幅1.8m、奥行き2m、高さ1.55mを測る。各コーナーは明瞭で、しっかり表現されている。側壁は垂直に立ち、刳り込まれた軒線を持つ。側壁と天井部とは明確に表現されている。棟線も明瞭で、家形妻入り構造である。壁の表面は丁寧に調整され、床面も凸凹は少なく、傾斜もわずかである。閉塞石などは検出できず、閉塞方法は不明である。

遺物出土状況（第144図）　玄室から前庭部にかけて須恵器の小片が少し出土した。前庭部の3層か

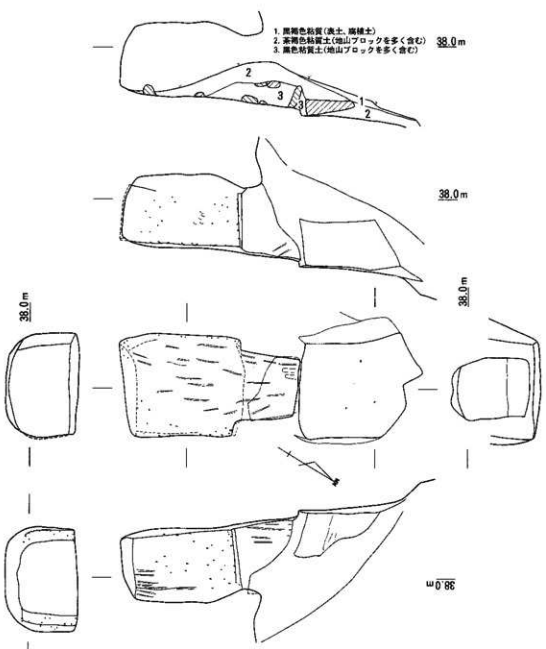
第144図　上塩冶横穴墓群22－13号穴遺物出土状況（S＝1／30）

らは須恵器甕などのやや大きめの破片が山土するが、ほとんど接合しない。玄室内には蓋坏や壺と鉄器が散在していた。その他、前庭部から10～30cmの石が検出されたが、用途は不明である。

土層堆積状況（第143図）　遺物は3層の黒色土や4層から若干出土している。4層は固く締まり、地山ブロックを多く含む。前庭部前部は当初、4層上面を床面と考えていたほどで、4層は置土などの可能性もある。

工具痕　前庭部の床面には溝状痕があり、玄室の床面には溝状痕が残るが、平刃で調整されている。側壁は刺突痕も少しあるが、全体に平刃で丁寧に調整されている。

その他　前庭部あるいは玄門部が二重になり、玄門部の奥行きが短いなど、一種の「意字型」横穴墓を呈している。



第145図　上塩冶横穴墓群22－14号穴実測図（S＝1／60）

14号穴

立地　標高37.3m付近に位置し、13号穴から東13m離れている。14号穴から16号穴までで小群をなしている。

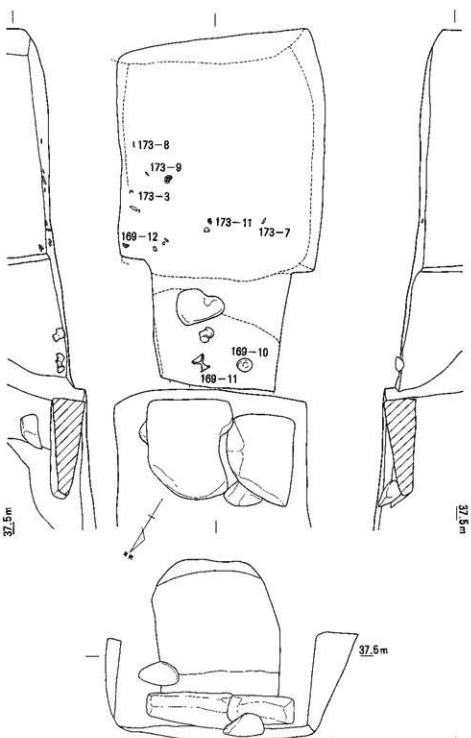
形態（第145図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.1m、前幅0.9m、奥行き0.95m、高さ1.05mを測り、大井部はほとんど風化して残存しない。側壁は垂直に立ち上がるが、大井部は丸みを持つ。床面はわずかに傾斜する。前庭部は玄門部と10cmの段差があり、奥幅1.5m、長さ1.65～1.9mを測る。側壁は高く、他の横穴墓と隔絶している。床面はほぼ水平である。

玄室　奥幅1.5m、最大幅1.6m、奥行きは右側で1.95m、左側で1.6m、高さ1.15mを測る。左右で奥行きが違い、袖部は両側とも短く15cmほどしかない。各コーナーは丸みを持つ。側壁は垂直気味に立ち上がり、左側壁には奥壁側から1mまで床から60～70cm地点に軒線があるが、前方にはない。右側壁の軒線は奥壁から40cmまで施されている。天井は凸凹で、棟線がなく丸天井である。奥壁は垂直に立ち上がり、側壁や天井との界線は明瞭に表現する。床面は凸凹で、わずかに傾斜している。

閉塞状況（第146図）

前庭部から閉塞石と思われる二枚の凝灰岩の切石が出土した。板状の石で、前方に倒れ、風化しかなり崩れていた。元は一枚の石であったと思われ、

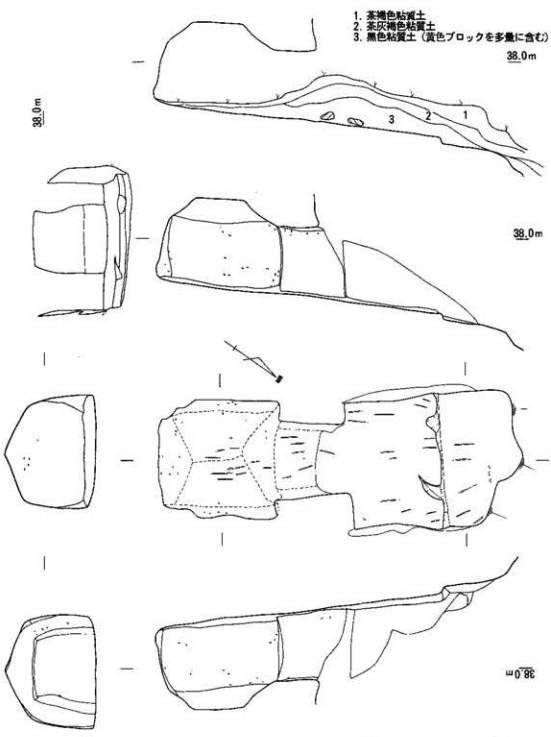


第146図　上塩冶横穴墓群22－14号穴遺物出土状況（S＝1／30）

規模は幅1.15m、高さ0.8m以上、厚さ約15cmを測る。その周辺から20～30cmの風化した凝灰岩片を検出した。

遺物出土状況（第146図）　玄門部の石の下からは須恵器壺や高坏が出土している。玄室からは鉄器や須恵器の小片とともに同一層から中世土師器や炭化物もかなり出土している。その他、玄室から玄門部にかけての黒色土から10～40cmほどの礫が多数出土し、足の踏み場もないぐらいであった。その石群は奥壁側では床面上、玄門部付近では3層中に多かった。

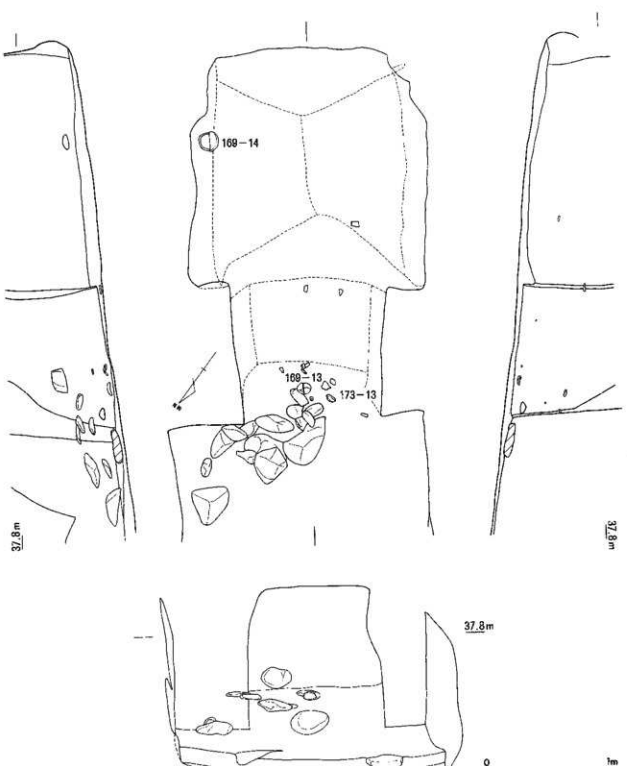
土層堆積状況（第145図）　閉塞石が前方に倒れており、調査前から開口していた。また、3層中か



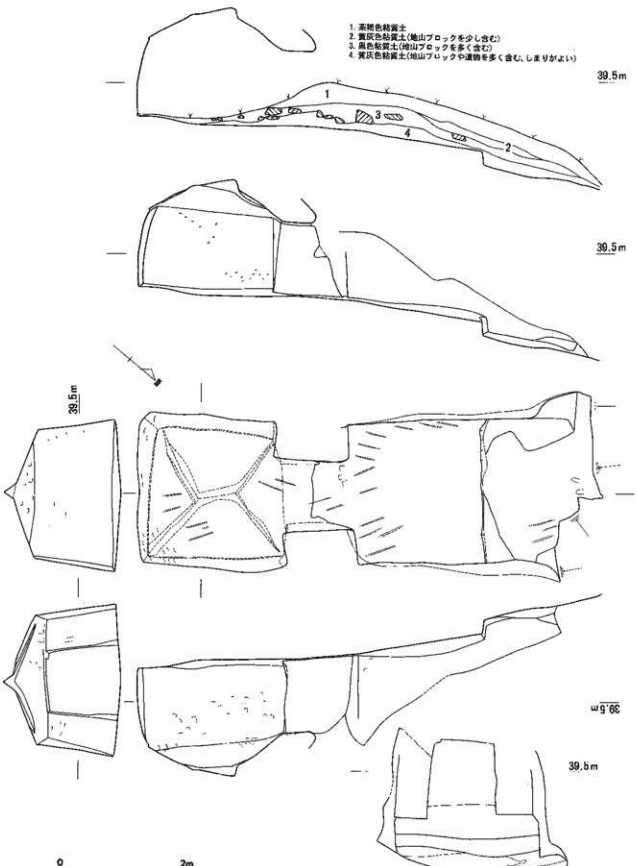
第147図　上塩冶横穴墓群22－15号穴実測図（S＝1／60）

ら中世土師器や炭化物が出土していることから、ある時期、再利用あるいは盗掘があったと思われる。石群もその時期と思われる。

工具痕　玄室から玄門部床面には溝状痕が多数残り、表面が凸凹である。側面には方形の刺突痕や平刃を壁面に強く当てた打痕が残っている。刺突痕は特に界線上に多い。左側壁には軒線付近に横方向の溝状痕があり、軒線は傾斜を変えて表現している。奥壁と側壁の界線は平刃を止めて表現する。前庭部床面は少し凸凹であるが、滑らかである。



第148図　上塩冶横穴墓群22－15号穴遺物出土状況（S＝1／30）



第149図　上塩冶横穴墓群22－16号穴実測図（S＝1／60）

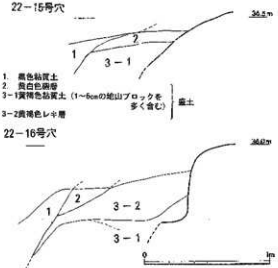
第150図　上塩冶横穴墓群22－16号穴遺物出土状況（S＝1／30）

15号穴

立地　標高37.4m付近に位置し、14号穴の東6mにある。

形態（第147図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.26m、前幅1.1m、奥行き1.1m、高さ1.1mを測り、側壁は垂直気味に立ち上がる。側壁と天井の界線は明瞭で、断面は方形である。前庭部は奥幅2m、床面は玄門部から1.4m付近で10cmの段差を持ち、全長は2.7mほどある。玄門部から前庭部かけての床面は傾斜している。前庭部前方は急な崖になり、側壁もしっかりしており、他の横穴墓と隔絶している。



第151図　上塩冶横穴墓群22－15・16号穴
前庭部前方土層図（S＝1／30）

玄室　奥幅1.35m、前幅1.8m、最大幅1.85m、奥行きは右側で1.85m、左側で1.8m、高さ1.4mを測る。奥壁は内傾し、凸凹で歪んでいる。側壁は凸凹であるが、幅線は傾斜変換として表現され、丸みを持つ。棟線は幅5～6cmで削り込んで表現され、家形妻入である。各コーナーも丸く、床面は凸凹で、かなり傾斜している。

閉塞石などの閉塞施設は検出できず、閉塞状況は不明である。

遺物出土状況（第148図）　玄室から玄門部にかけての3層から10～30cmの礫が多数検出された。その石の間から須恵器が小片になり出土した。また、玄門部付近から中近世土師器の小片が出土した。

土層堆積状況（第147・151図）　3層に分かれるが、すべて流入土と考えられる。3層からは凝灰岩の風化した礫や凹礫が多く検出され、中近世土師器もともに出土している。これらのことから中近世に横穴墓の再利用や盗掘があったと思われる。前庭部の側壁は垂直に立ち上がり、現状では他の横穴墓や他の場所に移動ができない。前庭部前方の土層を見ると、凝灰岩片を多数含んだ黄褐色土の上に白色凝灰岩礫層が堆積し、上幅60cmぐらいの平坦面を確保している。これは羨道あるいは横穴墓を掘削した時の廃土とも考えられる。

工具痕　玄室から前庭部の床面は溝状痕が多数残っている。玄室壁面には刺突痕があり、表面は凸凹である。天井界線は刺突痕によって表現される。前庭部床面には溝状痕の他、平刃痕も残る。

16号穴

立地　標高38mに位置し、谷の一番奥にある。15号穴から西へ3.5m離れている。

形態（第149図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.2m、前幅1.1m、奥行き1.1m、高さ1.15mを測り、天井部前方は風化して無くなっている。側壁は垂直気味に立ち上がり、天井の界線も明瞭に表現され、断面は方形である。床面は水平に近い。前庭部は奥幅2.25m、前幅2.3m、奥行き3.9mを測る。中央には20～30cmの段差がある。側壁はしっかり立ち、他の横穴墓と隔絶している。床面は凸凹で、傾斜を持つ。

玄室　奥幅2.4m、前幅2.35m、奥行き2.3m、高さ1.8mを測り、方形プランである。側壁は内傾し、幅線は幅2cmほど削り込まれて明瞭に表現されている。棟線は幅22cm、深さ15cmほどのV字状に掘り

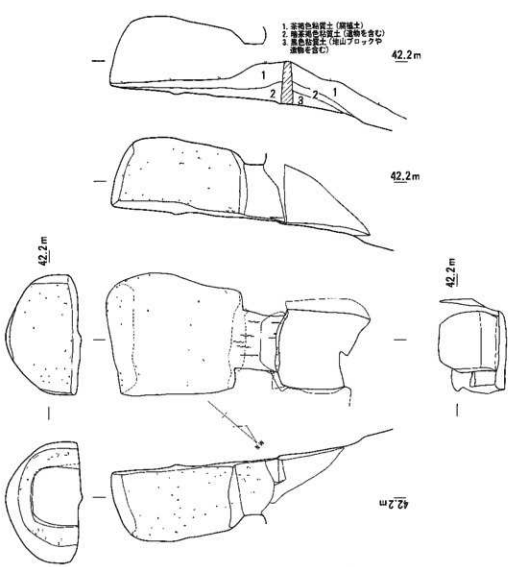
込まれている。天井同上の界線も断面V字形に表現されている。家形妻入り構造である。床面は水平に近い。

閉塞状況（第150図）　前庭部の左側に0.6×1.3m、厚さ20cmの方形の切石が床面に接するように置かれていた。閉塞石の可能性もあるが、一枚では閉塞できず。用途は不明である。

遺物出土状況（第150図）　前庭部には10～30cmの石が多量にあり、その下や石に挟まれるように須恵器が散在した、離れた須恵器同士が接合できた。玄室内にも同じような石が多量にあり、炭化物も含まれていた。玄室から数点須恵器が石の隙間から検出されたが、ほとんど出土しなかった。

土層堆積状況（第149・151図）　玄室にはほとんど土はなかった。2層中に円礫や炭化物が多数出土しており、横穴墓の再利用があったと思われる。また、前庭部の側壁が立っており、今のままでは移動ができない。前庭部の前方の土層を見ると黄褐色土の上に白色凝灰岩礫層が堆積し、幅1mぐらいの平坦面を確保している。これは墓道あるいは横穴墓を掘削した時の廃土とも考えられる。

工具痕　玄室から前庭部の床面には溝状痕があり、玄室においては丸刃痕もある。壁面には刺突痕や平刃削痕が残り、壁の界線には平刃打痕や刺突痕が多数ある。



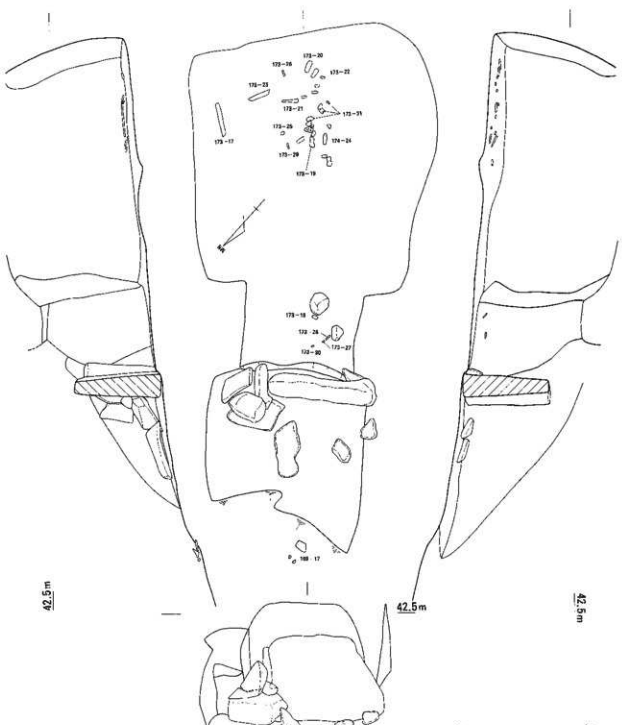
第152図　上塩冶横穴墓群22－17号穴実測図（S＝1／60）

17号穴

立地　6号穴と7号穴の間、標高41.8m、7号穴から西へ3m行った上方に1穴のみ存在する。

形態（第152図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅0.9m、前幅0.9m、奥行き0.65m、高さ0.85mを測る。側壁は垂直気味に立ち上がるが、天井付近で丸い。床面は傾斜している。前庭部は玄門部と5cmの段差があり、奥幅1.2m、前幅1.2m、奥行き1.2mを測る。奥幅は左右で玄門部からの広がりの幅が違い、左側が広い。左奥部には20×25cmの平坦面が床面から35cm上にある。床面は傾斜を持ち、前方は急な崖になる。周

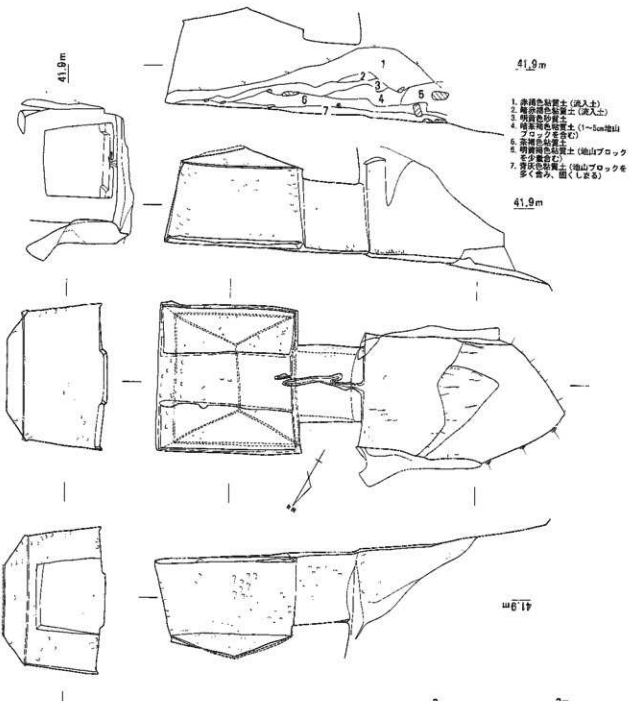


第153図　上塩冶横穴墓群22－17号穴遺物出土状況（S＝1／30）

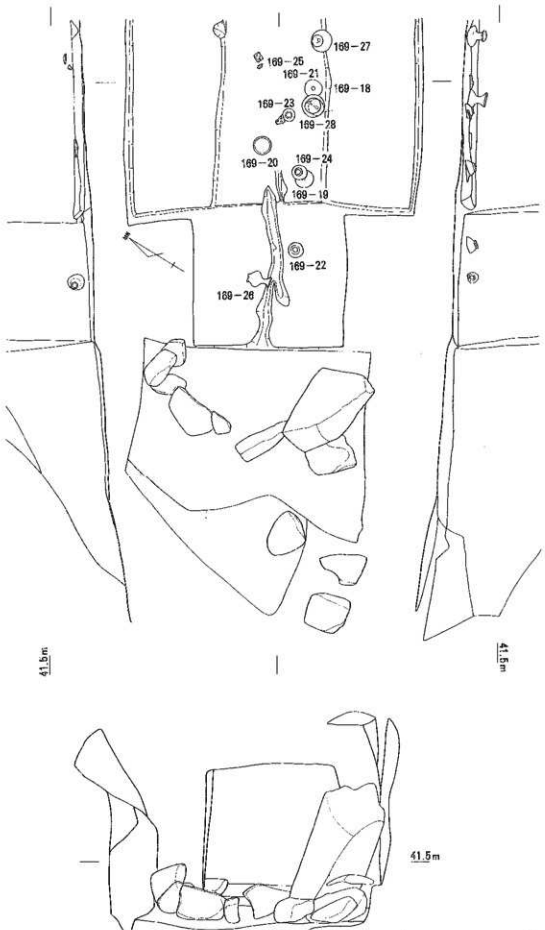
辺は急な斜面になり、地山を加工した羨道や平坦面は検出できなかった。

玄室　奥幅1.75m、前幅1.55m、奥行きは左側で2.1m、右側で1.85m、高さ1.17mを測る。コーナーは丸みを持ち、奥壁側はかなり歪でいる。奥壁や前壁と側壁の界線は明瞭であり、アーチ形である。天井部は玄門部に向けて傾斜する。床面は中央部が凹んだり、かなり凸凹で、傾斜もきつい。

閉塞状況（第153図）　幅90cm、高さ62cm、厚さ12cmを測る閉塞石を立て、閉塞石と側壁の隙間に幅10cm、厚さ32cm、高さ55cmの石をはめている。その詰めた石の前方には3個ほど凝灰岩を置かれていた。前庭部からは15～30cmの風化した凝灰岩が検出された。閉塞石の上部と外側は風化しているが、内側（玄門部側）は幅5cmの半刃の工具痕が残る。



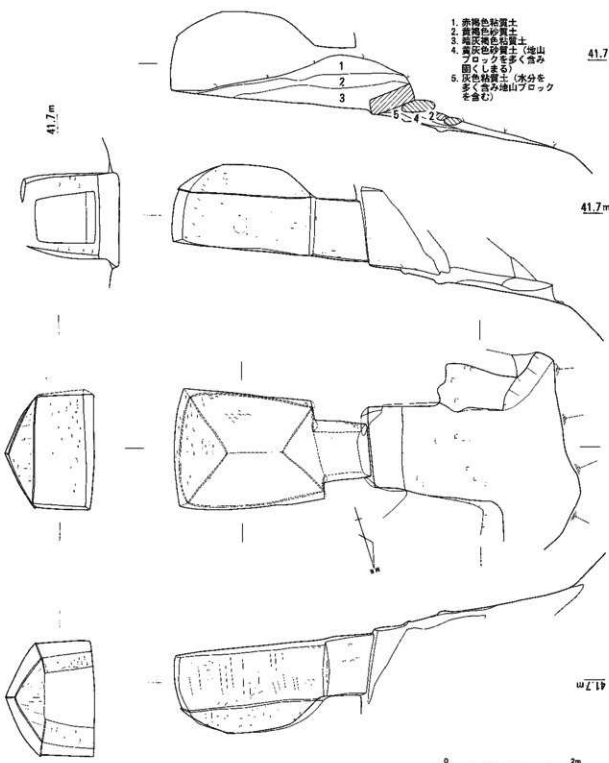
第154図　上塩冶横穴墓群22－18号穴実測図（S＝1／60）



第155図　上塩冶横穴墓群22－18号穴遺物出土状況（S＝1／30）

遺物出土状況（第153図）　玄室奥側の中央から鉄器がまとまって出土している。水浸していたので、風化が進み、細かくひび割れていた。鉄器は接合する個体が多く、大刀(173－17)の切先は玄門部方向にあり、刃部は横穴墓中央に向ける。玄門部付近の２層からもわずかに鉄器が出土している。須恵器はほとんど出土しなかった。

土層堆積状況（第152図）　調査前から閉塞石の上面がわずかに確認できた。土砂は閉塞石付近のみ厚く堆積し、玄室内は土がほとんど流入していなかった。



第156図　上塩冶横穴墓群22－19号穴実測図（S＝1／60）

工具痕　玄門部床面に溝状痕が残り、天井、床面、壁面には方形の刺突痕があり、壁面と床面の境には特に多い。刺突痕は玄室中央から外側に向かっている。前壁は平刃削痕があるが、壁は基本的に凸凹である。

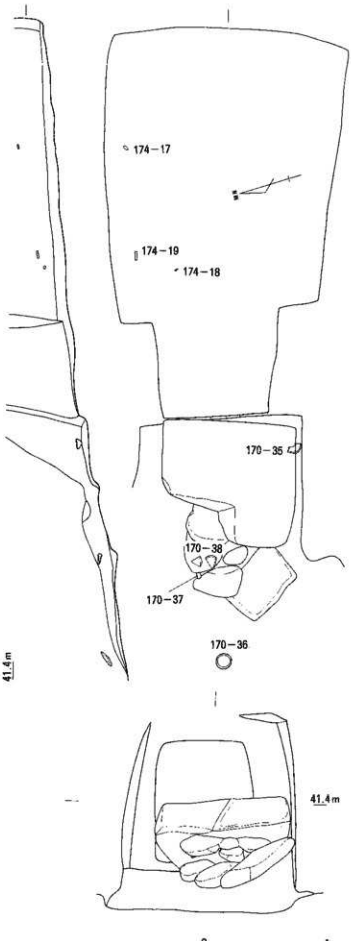
18号穴

立地　標高41mにあり、19号穴に前庭部の一部を削られている。他の横穴墓と開口方向が違い、西に開口し、神戸川や古志方面を見ることができる。1号穴との比高は2mを測る。

形態（第154図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.2m、前幅1.2m、奥行き1.05m、高さ1.1mを測り、壁は垂直に立ち上がり、天井は水平に近い。断面はきれいな台形である。床面は水平に近く、中央には幅10cm、深さ5cmの排水溝が玄室から前庭部まで続く。前庭部は玄門部から6cm下がり、奥幅1.8m、奥行き3.2mを測る。玄門部から1～2m付近で傾斜がやや強くなる。前庭部前方は19号穴に切られており、19号穴より早くに築かれている。右奥には閉塞石を受けるために庇が32cm残る。前庭部は中央部でわずかに傾斜が変わるが、基本的に平坦である。

玄室　奥幅2.3m、前幅2.25m、奥行き2.2m、高さ1.6mを測り、やや横長ではある。天井は家形平入りで、棟線は11cmにわたり表現されている。天井同士の界線も断面V字形に表現されている。奥壁はやや内傾するが、側壁はほぼ垂直に立ち上がり、軒線は床から1.2～1.3mの所に刻り込まれている。他の多くの横穴墓の軒線が玄門部の高さと同じ高さに施されるのに対し、18号穴の軒線は玄門部より上に表現されている。玄門部との境は面取りされている。床面の



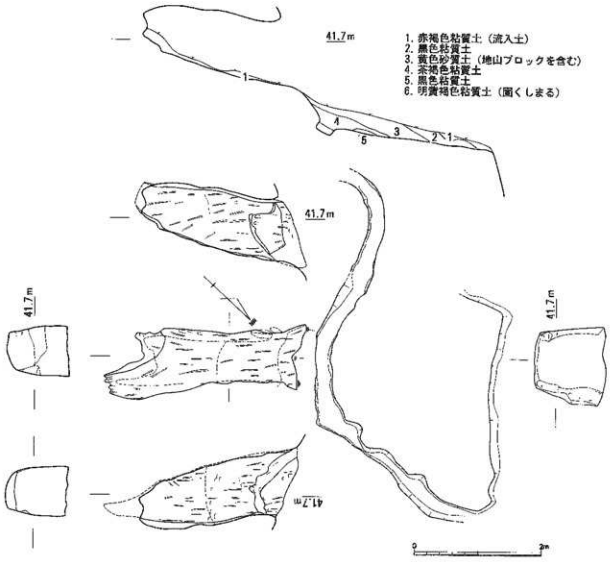
第157図　上塩冶横穴墓群22－19号穴遺物出土状況
（S＝1／30）

両側には削り出しの屍床がある。右側は幅67～72cm、長さ2.07mを測り、床面から5～8cm上がる。左側は幅60～70cm、長さ2.1mを測り、床面から5～8cm上がる。屍床の周りには幅5～7cm、深さ3～5cmの排水溝が巡る。床面は水平に近い。

閉塞状況（第155図）　前庭部には凝灰石製の蓋61cm、高さ95cm、厚さ25cmの大きな石が右側の側壁にもたれていた。本来は二枚の石で閉塞していたと思われる。その前方には床面に接して20～30cmほどの石がほぼ一列に7個並んでいた。これらも閉塞に関係すると思われるが、詳細は不明。閉塞石の表側は丸みを持ち、裏側（玄門部側）は直線的で、幅5cmほどの平刃削痕が密に残っていた。

遺物出土状況（第155図）　遺物は玄室から玄門部の中央付近から出土した。須恵器は7層中や床面上にあり、(169－28)の高坏の下から(169－18)の坏蓋が出土した。須恵器の多くは倒れたり、伏せた状態で出土し、移動していると思われる。玄室内の土砂をふるいにかけると、ひびの入った鉄釘が出土した。前庭部からの遺物の出土はなかった。10～20cmの凝灰岩片が玄室から前庭部にかけて出土した。特に6層中に多かった。

土層堆積状況（第154図）　7層は前庭部から玄室まで堆積しているが、玄室内では屍床上にはなく、中央の通路状をした一段低い場所にのみ堆積している。5層は4層とよく似ているが、わずかに暗い。



第158図　上塩冶横穴墓群22－20号穴実測図（S＝1／60）

閉塞石は動かされ、盗掘や再利用があったと思われる。

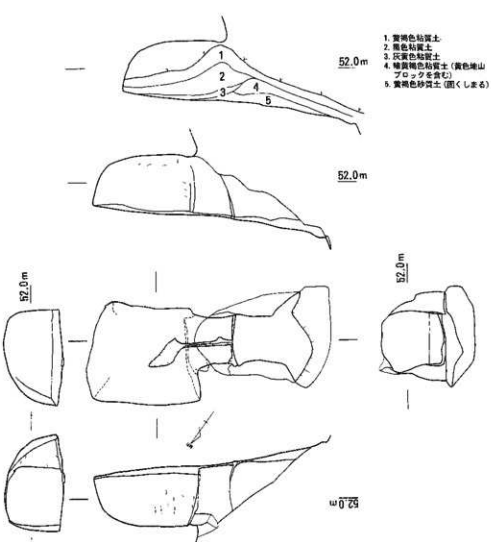
工具痕　前庭部床面にはわずかに溝状痕が残る。玄室床面には平刃削痕があり、排水溝の壁には平刃で削った跡が残る。壁面はわずかに刺突痕が残るが、平刃で丁寧に調整されている。手で触ると滑らかで、磨いている可能性もある。軒線は平刃を水平に打ち込んでいる。前庭部側壁には平刃削痕の他、2～3㎜間隔のひっかいたような跡があり、動物がひっかいた可能性がある。

19号穴

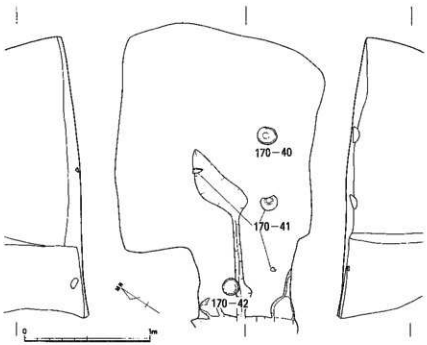
立地　標高41m付近で、18号穴の西2mに位置する。

形態（第156図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1m、前幅0.83m、奥行きは右側で0.83m、左側で0.75m、高さ0.95mを測る。側壁は内傾し、側壁と犬井の界線は明瞭で、断面は方形である。床面は傾斜している。前庭部は玄門部と6㎝ほどの段差があり、奥幅1.25m、奥行き3.3mを測る。左側は18号穴の前庭部を削る。床面は前方に傾斜する。前庭部の奥には閉塞石を受けるための庇が30㎝ほど残存していた。側壁は垂直に立ち上がり、丁寧に調整されている。前庭部右側の5㎝ぐらい高い所には0.6×1.1mの平



第159図　上塩冶横穴墓群22－21号穴実測図（S＝1／60）



第160図　上塩冶横穴墓群22－21号穴遺物出土状況（S＝1／30）

地面がある。

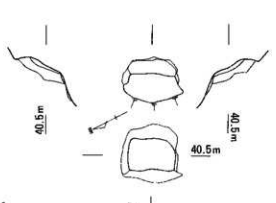
玄室　奥幅1.85m、前幅1.55m、奥行きは右側で2.1m、左側で2.3m、高さ1.4mを測り、縦長の台形プランである。側壁は垂直に立ち上がり、軒線は平刃を水平に打ち込み、深さ2～3cmに刳り込まれる。棟線は工具痕を前後に動かしV字に掘り込んでいる。奥壁は垂直気味に立ち上がるが、天井付近は丸みを持つ。床面は傾斜している。前壁の玄門部取り付け部には平刃による幅3cmの面取りがある。

閉塞状況（第157図）　幅1.08m、高さ0.9m、厚さ25cmの凝灰岩の一枚石が前方に倒れていた。閉塞石の底は前庭部の床面に接していた。その前方からは35×55cm、厚さ10cmの凝灰岩の切石の他、数個の凝灰岩片が検出された。

遺物出土状況（第157図）　前庭部から出土した(170－38)は閉塞石の下から石に接して出土した。また、(170－36)は4層中、床面から3cmほど土をかんでいた。玄室の左側からは鉄器が出土し、同一層の3層からは炭化物も検出された。

土層堆積状況（第156図）　1・2層は横穴墓の上方に赤褐色土や砂岩（黄褐色）があり、風化したり、流れ出て、横穴墓内に厚く堆積したと思われる。閉塞石が動かされ、玄室内で炭化物が多数出土したことから再利用や盗掘があったと思われる。

工具痕　玄室壁面や天井には刺突痕がわずかにあるが、幅8～10cmの丸刃できれいに調整され、縦方向の工具痕が残り、肋骨状を呈している。丸刃削痕の山状になったところをを観察すると、まっすぐではなく、波打っていた。これは丸刃を一気に削ったのではなく、ゆっくり止めるか、刃を壁面から離さないように削ったことを表していると思われる。側壁は丁寧に仕上げられているが、奥壁は平刃削痕が粗く残っており、横穴墓の仕上げ順序として側壁を完成させてから奥壁を完成させたとも考えられる。工具痕の順序としては断面方形の刺突→平刃→丸刃である。床面は平刃で丁寧に調整されている。



第161図　上塩冶横穴墓群第22支群SK01実測図
（S＝1／60）

20号穴

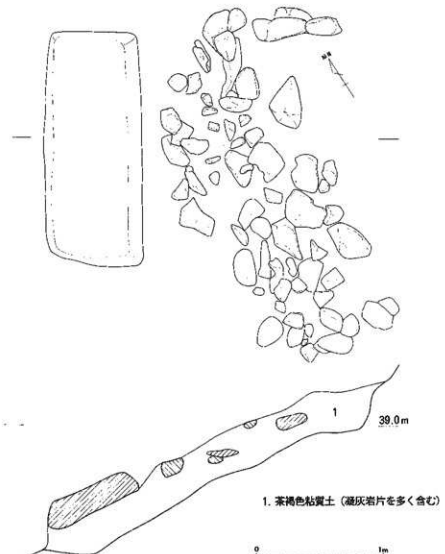
立地　19号穴から西へ４ｍの所、標高41ｍに位置する。

形態（第158図）

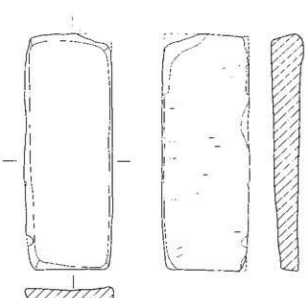
作りかけの横穴墓で、横穴の床面は前方の平坦面から0.6m上がった地点にある。前方の平坦面は奥行き2.7ｍ、幅5.2ｍを測り、崖に沿って幅20～30cm、深さ10～20cmの溝が自然斜面まで続いている。横穴は幅0.8ｍ、奥行き2.35ｍ、高さ0.95ｍを測る。入り口から45～50cmで、幅が両側から狭くなり、60cmほどになる。奥行き0.65～0.75ｍの範囲が狭く、その奥はまた少し広がる。一見すると狭くなっているところは玄門部にも見える。横穴の奥は床に手に分かれ、外開きになり、左側は入り口から３ｍまで続く。断面は方形である。床面は前方にかなり傾斜している。遺物はない。

土層堆積状況（第158図）　内部には上方から流れ込んだ１層のみ堆積していた。

工具痕　天井、床面、側壁など全ての壁に溝状痕が残っていた。溝状痕の先端を見ると幅５cmほどの平刃である。平刃の角を利用していると思われる。側壁の溝状痕は中央の膨らみを境に３単位で施されている。天井中央の界線は平刃を止めて表現されている。



第162図　上塩冶横穴墓群第22支群石製品出土状況（S＝1／30）



第163図　上塩冶横穴墓郡第22支群出土石製品実測図（S＝1／30）

21号穴

立地　上塩冶横穴墓群第22・23支群の谷の一番奥、標高51.5m付近に位置し、砂岩に掘られている。周囲は急な斜面で、単独で存在する。

形態（第159図）

第164図　上塩冶横穴墓群第22支群正面図（S＝1／200）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅0.87m、奥行き0.55mを測り、短い。側壁は垂直に立ち上がるが、側壁と天井の界線はなく、天井頂部は丸みを持つ。天井部は風化が進み、残存状況は悪い。床面には玄室から続く幅6cm、深さ2cmの排水溝がある。前庭部は玄門部から3cm下がり、奥幅0.8m、奥行き1.25mを測り、前方は急な崖になっている。玄門部から前庭部の床面は傾斜がきつい。

玄室　奥幅1.55m、前幅1.45m、奥行き1.65m、高さ0.9mを測り、縦長長方形である。コーナーは丸みを持ち、界線は不明瞭である。袖部は、左側で45cm、右側で8cmを測る。奥壁と側壁や天井部との界線は不明瞭で、丸天井である。

閉塞状況（第159図）　閉塞石は確認できなかったが、玄門部と前庭部に段差があることからここで閉塞していた可能性がある。

遺物出土状況（第160図）　玄室から玄門部にかけて須恵器が出土した。遺物は3層から検出され、かなり離れた破片が接合する。(170－40)は床面上から、(170－42)は4層中から出土した。

土層堆積状況（第159図）　1層は横穴墓の掘られている砂岩の風化したものである。1～3層は4・5層が堆積した後、それを切って堆積している。この時期に横穴墓を一回掘り返していると思われる。

工具痕　壁面の界線付近には平刃削痕がわずかに残り、側壁には幅８cm以上の丸刃削痕がある。壁面は全体に表面は滑らかである。

ＳＫ01（第161図）

標高40.3m、20号穴から７m離れ、西側は凝灰岩層が薄くなっている。凝灰岩を浅く、方形に掘り窪められていた。平面は奥幅0.7m、前幅0.95m、奥行き0.5m、高さ0.7mを測り、岩盤を断面Ｌ字状に削っている。界線上には平刃痕がわずかに残る。

石製品（第162、163図）

１号穴と２号穴の間から石製品が出土した。この石の存在は1979年の調査でわかっており[4.2]、表土を除去すると全体像が確認できた。石製品は斜面に沿って斜めになり、地山の上に堆積した茶褐色土の上面から出土した。崖側には10～40cmの凝灰岩片が多数検出された。岩片と石製品の関係は不明である。

石製品は長さ185cm、幅68cm、厚さ13～25cmを測る。上面は平坦で、角は丸みを持つ。下面は平らであるが、中央端（第163図の上方）のみ５・６mmほど掘り込まれ、わずかに凹んでいる。長辺の一方には２cm程度の面取りが施されている。表面には幅５cmの平刃削痕が残っていた。周辺から遺物はなく、時期は不明。

上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物

１．土器（第165～170図）

詳細は観察表に譲る。中世の土器と思われるものが、２号穴(166－7)と３号穴(165－1･2、166－22)からも出土している。

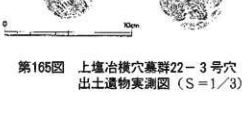
２．その他の遺物

１号穴遺物（第171図１）

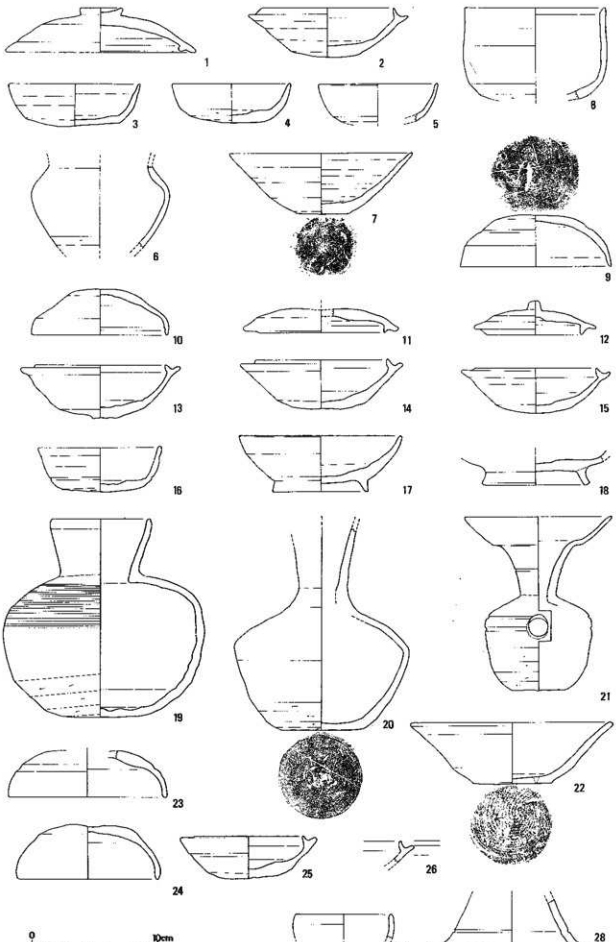
前回の発掘で玄室内も調査されているので、今回はほとんど出土していない。鉄釘(1)の破片で、剥離が著しい。木質は残っておらず、残存長4.4cmを測る。

２号穴遺物（第171図２～11）

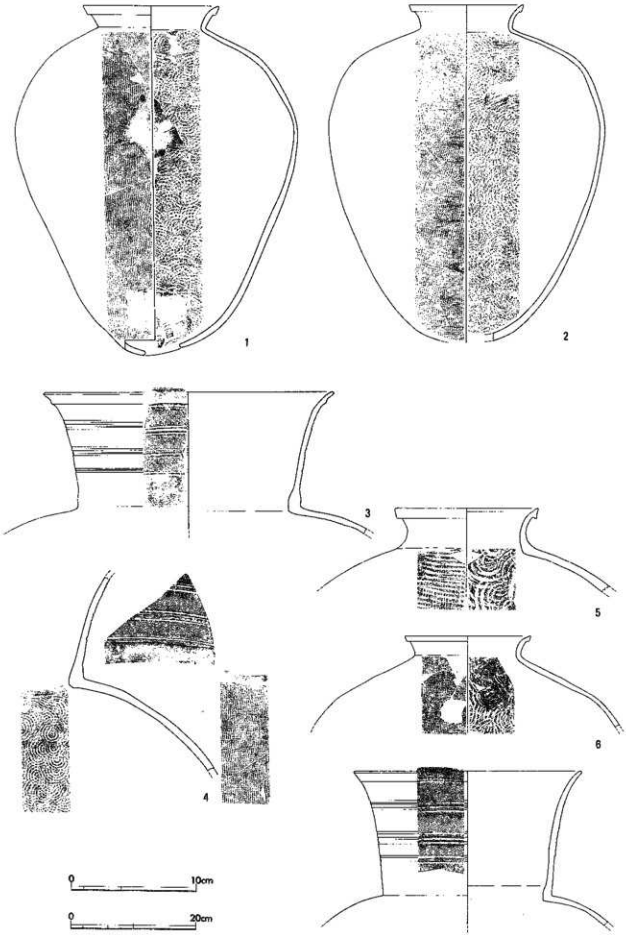
大刀(2)は大きく３つに割れ、一部は反り、表面に木質はない。復元全長67.2cm、棟幅0.45cm、幅2.7cm、茎長7.1cm、柄頭幅1.5cmを測る。両関で、関には銀装の金具が付く。鉄鏃(3～8)は(7・8)が茎部と鏃身部の境で、茎部には木質が残る。不明鉄器(9)はキャップ状を呈し、表面に繊維と思われる圧跡がある。復元径９cm、長さ2.1cm、厚さ0.15cmを測る。(10)は輪金具と思われ、内外面に黒漆が塗られ、内面には木質が残る。耳環(11)は中空の土型品で、潰されたかのように扁平になる。現状では長径3.5cm、短径３cmを測る。その他、大刀の剥離した破片が多数出土している。



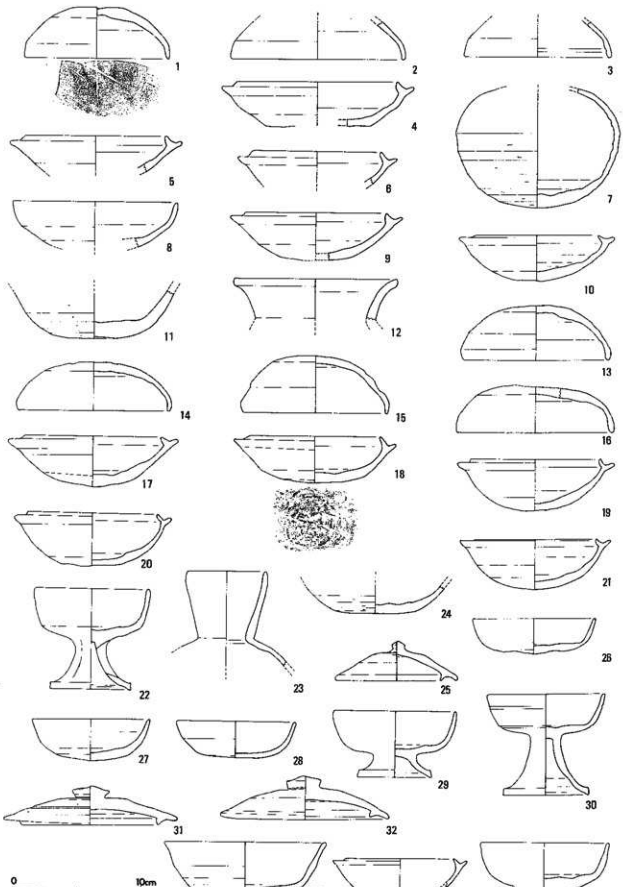
第165図　上塩冶横穴墓群22－３号穴出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）



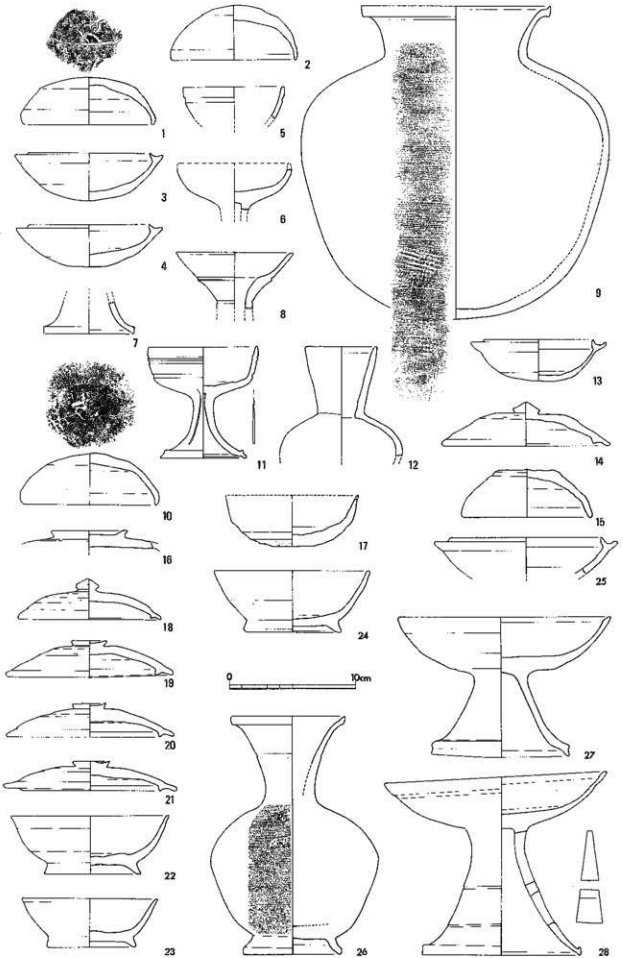
第166図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図（S＝1／3）
1～7（2号穴）8～22（3号穴）23～28（1号穴）



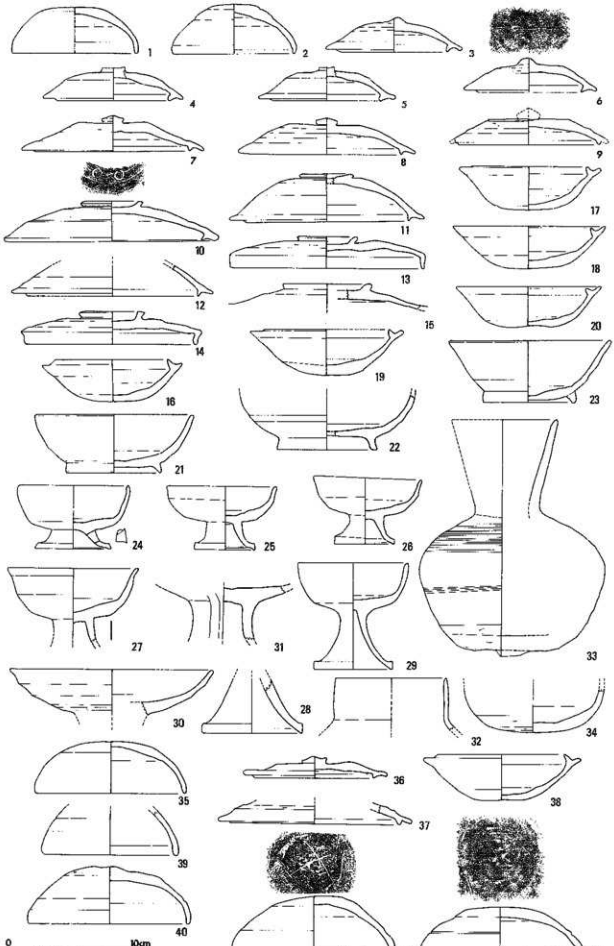
第167図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図　5（S＝1／3）その他（S＝1／6）
1・2（3号穴）3～5（2・3号穴）6（2号穴）



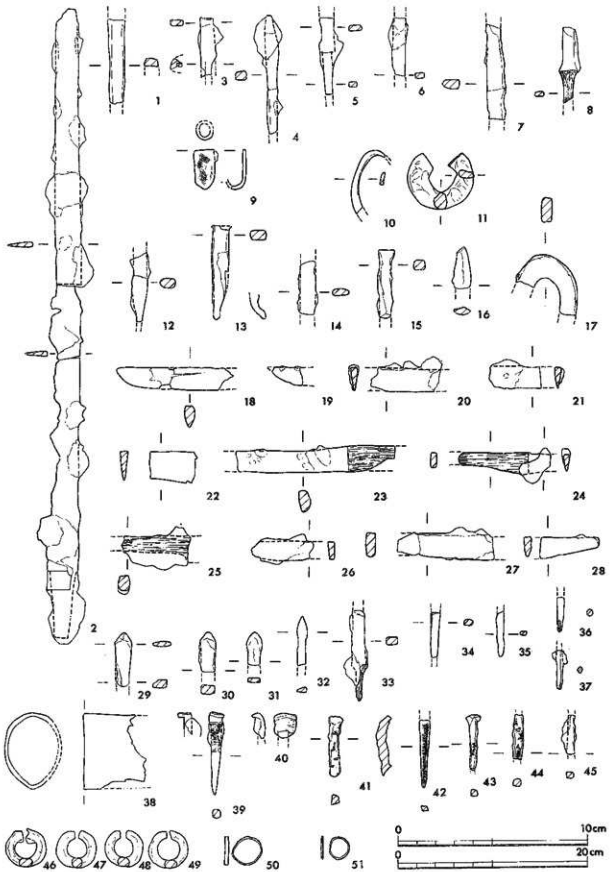
第168図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図（S＝1／3）1～7（5号穴）8～12（6号穴）13～24（7号穴）25～30（8号穴）31～33（11号穴）34・35（13号穴）



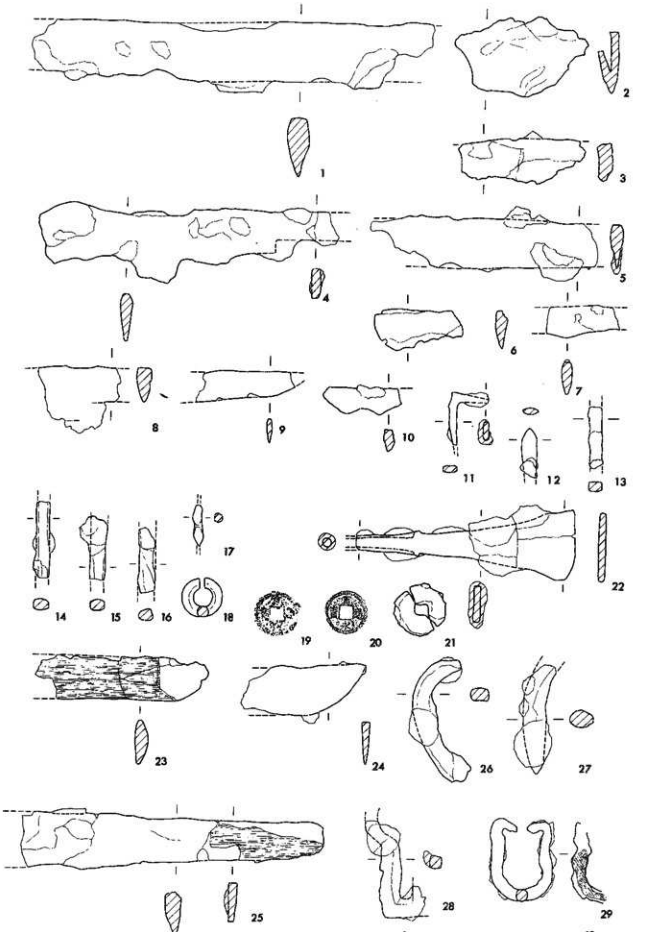
第169図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図（S＝1／3）1～9（9号穴）
10～12（14号穴）1314（15号穴）15～17（17号穴）18～28（18号穴）



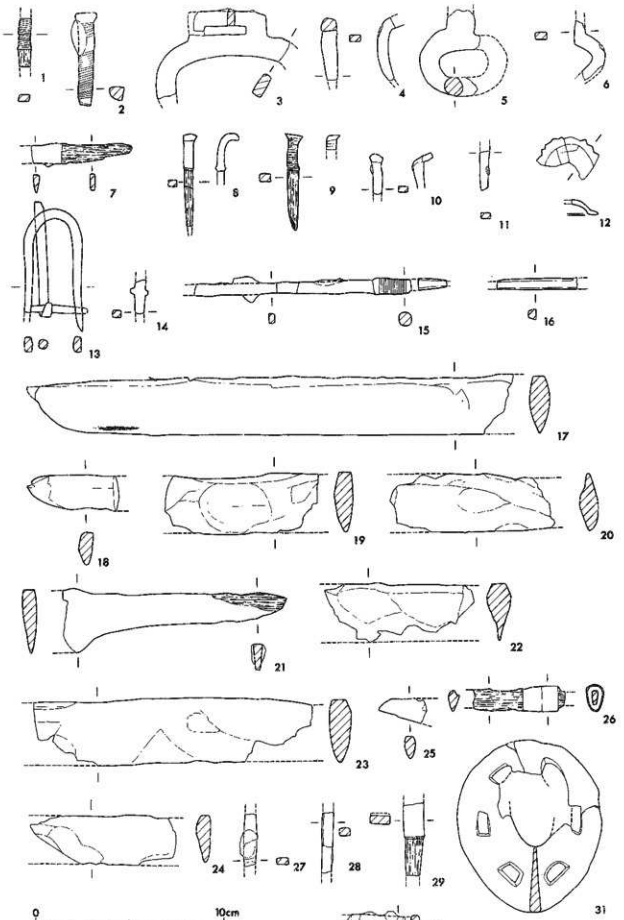
第170図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図（S＝1／3）
1～34（16号穴）35～38（19号穴）39～42（21号穴）



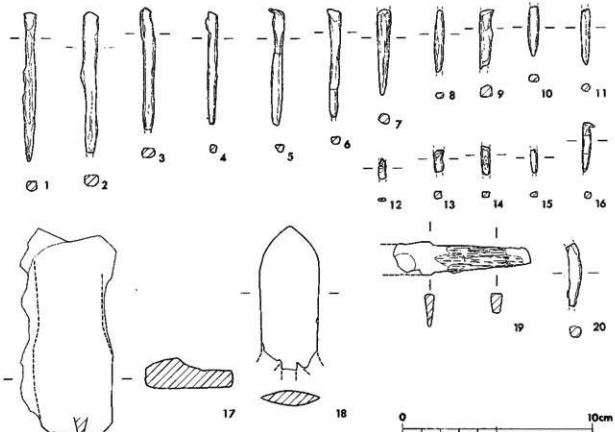
第171図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図　2（S＝1／4）その他（S＝1／2）　1（1号穴）2～11（2号穴）12～17（3号穴）18～26（4号穴）27～37（5号穴）38～51（9号穴）



第172図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図（S＝1／2）1～22（7号穴）23～29（12号穴）



第173図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図（S＝1／2）1･2（13号穴）
3～12（14号穴）13･14（15号穴）15･16（16号穴）17～31（17号穴）



第174図　上塩冶横穴墓群第22支群出土遺物実測図（S＝1／2）1～16（18号穴）17～20（19号穴）

3号穴遺物（第171図12～17）

鉄釘(12～16)と思われるが、剥離、割れがひどい。断面は方形で、(12)で0.5×0.8cmを測る。(17)は0.5×1.3cmの断面方形の鉄板がいびつな弧を描いている。馬具の一部か。

4号穴遺物（第 171図18～26）

刀子(18～26)は小片になり、茎部の数から2個体分と思われるが、接合できない。(23・24)は刃部から茎部の破片で、茎部には木質が残る、(24)は方形断面を呈し、0.3×0.8cmを測る。

5号穴遺物（第171図27～37）

刀子(27・28)の破片で、木質が残る。断面は方形を呈し、(27)は0.5×1.3cmを測る。鉄鏃(29～37)は多数の破片が出土し、9点図化した。小片になり、剥離が著しく、残りは悪い。関部は不明であるが細身で、かつ、小型であるので、それぞれ長頸式に属し、鏃箭式(29～31)、片刃式(32)と思われる。(33～37)は頸部である。

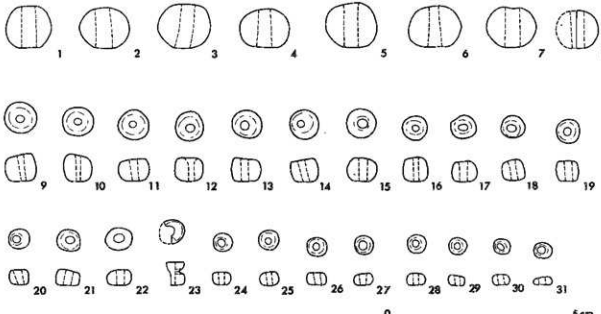
7号穴遺物（第172図1～22、第175図1～31、図版149）

大刀(1～10)は剥離や割れや錆膨れが著しく、1個体の可能性もある。(4)は刃部から茎部にかけての破片で、茎部は断面方形で0.5×1.5cmを測る。(11)は不明鉄器。幅は0.7～1cmと広がり、L字状に曲がっている。鉄鏃(12)は長頸鏃箭式に属す。幅0.8cm、厚さ0.3cmを測る。(13～16)は棒状の鉄器であり、鉄鏃あるいは鉄釘と思われる。断面は方形を呈し、(14)は0.6×0.8cmを測る。(17)は鉄鏃の茎部と思われ断面円形を呈する。耳環(18)は1個のみで小型で、断面は楕円形を呈する。銅芯鍍金製で、

一部剥離しているが、鍍金の残りは良い。環の端面で金箔を折り込んでいる。長径2.1cm、短径2cm、厚さ0.6cmを測る。古銭(19～21)は4枚出土している。(19)は径2.3cmの新寛永通宝で、銅製であり、他の3枚は鉄銭である。径2.3cmである。鉄鏃(22)は短頸方頭式で、方部幅3.7cm、鏃身部長8.6cmを測る。茎部は円形で、木質が残る。ガラス丸玉(1～8)は緑色を呈し、小口に面がなく、球体に近い。ガラス小玉(9～31)は130個出土し、23個図化した。色は紺色、薄い紺色、水色、橙色、緑色であり、形や規模はバラエティーが豊かである。小口には面をもち、(23)は製作途中と思われる個体もあり、切断により形作られたと考えられる。図化していないものについて、紺から透明感のある薄い紺色で、概して薄い紺の方が小さい。

9号穴遺物（第171図38～51、巻頭カラー3、図版149）

(38)は柄間金具と思われ、楕円形を呈する。長径4.3cm、短径3cm、厚さ0.15cmを測る。鉄釘(39～45)の頭部は折り曲げられる。(39)は全体を伺うことができ、全長4.3cm、断面0.4×0.5cmの方形を呈し、頭部から中央部にかけて横方向の木理が確認できる。(42)は釘先であるが、横方向の木理が確認できる。耳環(46～49)は4個あり、大きさや形態は類似し、断面は楕円形を呈する。銅芯鍍金製で、一部剥離しているが、鍍金の残りは良い。環の端面で金箔を折り込んでいる。(46)で長径2.15cm、短径2cm、厚さ0.7cmを測る。金製の環(50・51)は大小2個あり、(50)は直径1.4cm、幅0.2cmの金板を円形につないでいる。表面には刺突した後、2条の沈線を施し、1条は刺突を完全に消し、もう1条は凹む程度である。重さ0.38g。(51)は直径1cm、幅0.1cmの金板を円形につないでいる。表面には刺突した後、1条の沈線を施し、凹む程度で刺突は残る。重さ0.14g。金糸（図版）は太さ0.3mmと大変薄く、糸状を呈し、撚りをかけている。切れているので、元の長さはわからないが、10cmのものがある。[4]



第175図　上塩冶横穴墓群22－7号穴出土玉実測図（S＝1／1）

ガラス小玉（図版149）が3点出土し、その内2点は破損している。大変小さいが、小口には面をもつ。色は紺色と薄い紺色である。

12号穴遺物（第172図23～29）

大刀(23～25)は剥離と割れが著しい。切先(24)は背の幅0.4cm、幅2.5cmを測る。(25)は刃部から茎部の破片で、茎部は0.4×2cmの断面方形を呈し、木質が残る。不明鉄器(26・27)は断面方形でわずかに湾曲し、先端は尖っている。不明鉄器(28)は断面は一辺0.6cmの正方形を呈し、コ字に直角に曲がる。鉸具(29)は径0.6cmの断面楕円形をした鉄棒を使い、先端は尖り両側とも内側に曲げられている。表面に繊維状の痕跡が残る。

13号穴遺物（第173図1・2）

鉄釘(1・2)は断面方形で、(1)は中央で木理方向が変わる。(2)の先端はやや横に広がり尖る。断面0.7cmを測り、表面に横方向の木理が残る。

14号穴遺物（第173図3～12）

鞆(3)は素環鏡板で、立聞が一部欠損している。復元で1.3×4.2cmの長方形の立聞をもち、環は厚さ0.5×1.2cmで造られている。不明鉄器(4)は先端が細くなる。断面方形で、少し湾曲する。(5)は引手状で、径1cmの断面楕円形を呈する。(6)は引き手状を呈するが、断面は方形である。刀子(7)は茎部で木質が残る。0.3×0.8cmの断面方形で、茎部長3.7cmを測る。鉄釘(8～11)は頭を折り曲げ、木理方向は釘頭から中央が横、釘先にかけて縦方向である。(9)は0.4×0.6cmの断面方形で、長さ5cmを測る。不明鉄器(12)は残存状況は悪いが、半球状で周囲に山形の装飾がある。花形座か。

15号穴遺物（第173図13・14）

鉸具(13)は一部欠損し、錆びで被われているが、全長6.5cm、幅3cm、刺金長6.1cmを測る。輪金は断面方形で、刺金は楕円形である。鉄鏃の箆被(14)は残存状況は悪い。

16号穴遺物（第173図15・16、図版149）

鉄鏃(15・16)の箆被部は断面方形で、茎部は円形で樹皮が巻いている。残存長13.3cm。ガラス小玉が3点出土し、大変小さい。小口には面をもち、紺色と薄い紺色である。

17号穴遺物（第173図17～31）

大刀(1～24)は錆びと割れで、破損が著しく、同一個体の可能性もあるが、接合できない。(17)は切先から中央部の破片で、背の幅0.6cm、幅3cmを測る。表面に木質が残る。(21)は撫関の茎部で断面台形を呈し、木質が残る。刀子(25・26)は小片になり、剥離が著しい。切先(25)、関付近の破片(26)の関には幅1.8cmの金具が残っている。鉄鏃(27～30)と推定され、断面方形を呈し、(29)の茎部には木質が残る。鍔(31)は一部欠損しているが、卵形六窓鍔である。規模は7.2×9.2cm、厚さ0.1～0.6cmである。

第176図　上塩冶横穴墓群第23支群配置図（S＝1／1200）

18号穴遺物（第174図1～16）

鉄釘(1～16)は保存状態が悪く、亀裂が入ったり、割れたりしている。頭部は折り曲げられ、(1)は全長7.9cm、断面は0.5cmの方形である。

19号穴遺物（第174 図17～20）

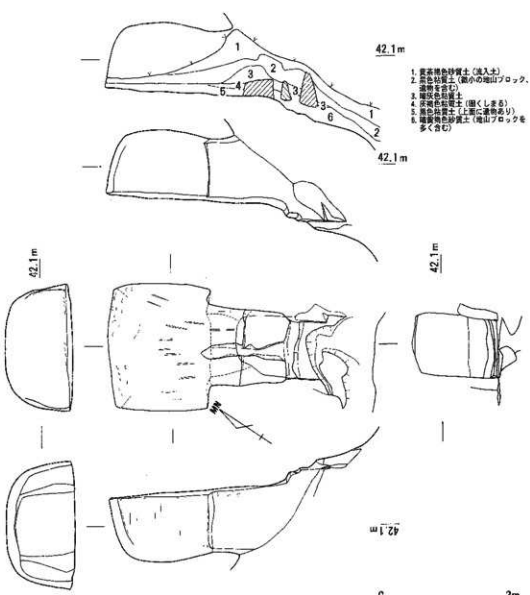
鉄斧(17)は全体が錆びに被われ、刃部の一部が欠損しいている。両側に緩やかな肩をもち、全長10.3cm、復元刃部幅3.8cmを測る。鉄鏃(18)は短頸の柳葉式で、鏃身のみ残り、逆刺部は欠損する残存幅2.9cmを測る。刀子(19)の柄部で、刃部が一部残る。柄は0.6×1cmの断面方形で、木質が残る。不明鉄器(20)はやや湾曲した鉄棒で、断面は歪な方形である。鉄釘か。

4．上塩冶穴墓群第23支群（第176図）

調査の概要

第23支群は三田谷の奥の南向き斜面に位置し、東側（谷の奥）から1号穴とした。南側の丘陵には第22支群、北側には第12支群、第24支群がある。1～3号穴と4～7号穴に大きく2つのグループに分けられる。前者は砂岩（凝灰岩の上位）に、後者は凝灰岩とその下位の凝灰質砂岩に掘られている。

調査は平成4年度のトレンチ調査の結果、二カ所に横穴墓が存在することが判明していたので、そ

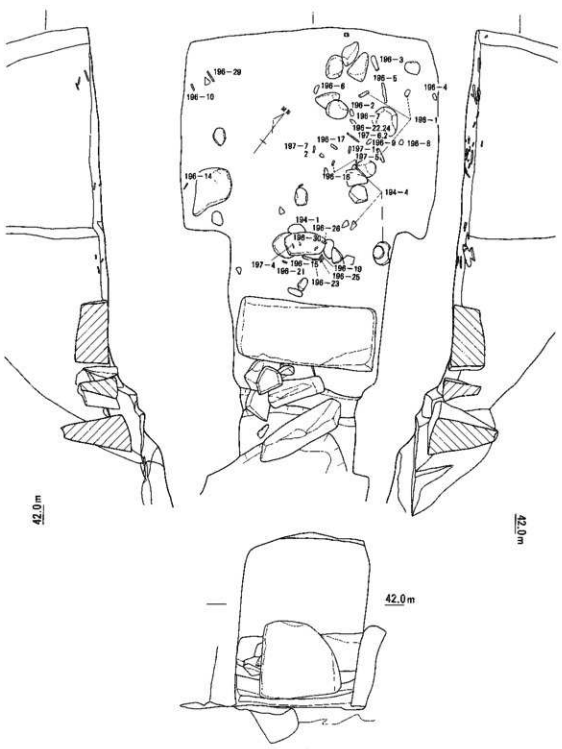


第177図　上塩冶横穴墓群23－1号穴実測図（S＝1／60）

の周辺を重機と人力で掘り下げた。調査は第22支群と平行しながら７月14日から12月22日まで行った。なお、微小遺物の存在が考えられたので、玄室内の土砂を中心に水洗し、遺物の採取に努めた。

１号穴

立地　標高41.6m付近の急な斜面に位置し、調査前は埋没していた１～３号穴は並んで存在するが、



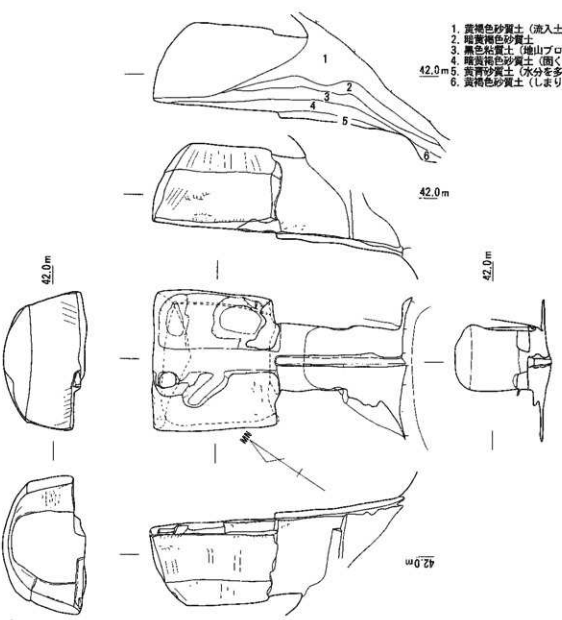
第178図　上塩冶横穴墓群23－１号穴遺物出土状況（S＝1／30）

各横穴墓の前面は急な斜面になり、墓道などは検出できず、隣の横穴墓へいくことは難しい。

形態（第177図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.3m、前幅1.2m、奥行き0.4mを測る。側壁は内傾するが、犬井との界線は明瞭で、断面は方形である。床面は水平に近い。その前方には閉塞石を受けるための施設がある。その施設は玄門部から3cmほど下がり、床面は水平になる。側面は玄門部の側面の続きで、界線はない。床面には玄門部から続く幅0.2m、長さ1.3m、深さ2cmの排水溝がある。天井部はない。さらに前方は床面が二段下がり、側壁も狭くなる。玄門部側は段差10cm、幅90cm、奥行き5～15cmを測る。その前の段は段差5～10cm、幅90cm、奥行き35～40cmを測る。前庭部は奥幅1.25m、奥行き0.3～0.5mを測る。床面は一部に溝があり、かなり凸凹である。前庭部は狭く、前方は急な崖になる。

玄室　奥行き1.5m、幅2.0m、高さ1mを測る横長長方形プランである。各壁は内傾し、丸みがある。



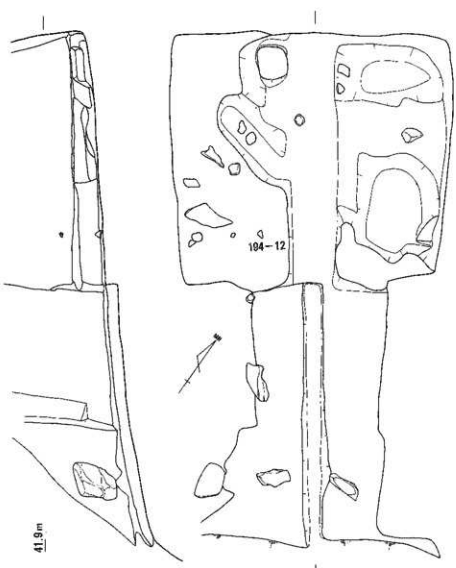
第179図　上塩冶横穴墓群23－2号穴実測図（S＝1／60）

側壁には軒線や棟線はなく、表面は滑らかである。天井は丸天井で、玄門部方向に傾斜し、玄門部とはわずかな段がある。各コーナーはしっかり表現されている。奥壁や前壁と側壁の境は工具痕で示し、玄門部との境は面取りされている。床面は凸凹で、わずかに傾斜している。

閉塞状況（第178図）　玄門部前方の下がった地点に長さ1.1m、断面0.5×0.3m直方体の砂岩が幅いっぱいに置かれていた。その前方に、高さ0.65m、厚さ0.4m、幅0.75mのやや大きめの砂岩の板石を置き、その玄室側には、厚さ0.15m、高さ0.35m、幅0.35mなどの小さな砂岩がある。大きな板石は切石で、2枚で閉塞していたと思われるが、右側の石はなくなっていた。

遺物出土状況（第178図）　玄室の右側には10～40cmの砂岩の礫が散在し、その周辺には鉄製品が散在していた。石の用途は不明であるが、棺台の可能性もある。玄室内の遺物は5層上面に多いが、5層中にもある。玄門部中央の石の下から鉄器や須恵器がまとまって出土している。前庭部の6層中からも須恵器の小片が出土した。

土層堆積状況（第177図）　1層は地山の風化した土で、流入土である。3層は2層に似るが、砂質土が混じる。6層は地山の風化した土に似ており、閉塞石を置くために積まれた土とも考えられる。



第180図　上塩冶横穴墓群23－2号穴遺物出土状況（S＝1／30）

工具痕　玄室から玄門部にかけての床面には溝状痕が残り、玄室奥壁側には平刃削痕もある。天井部や側壁には大井中央から縦方向に施され幅9～10cmの丸刃痕がわずかに残り、表面は丁寧に調整され、滑らかである。

2号穴

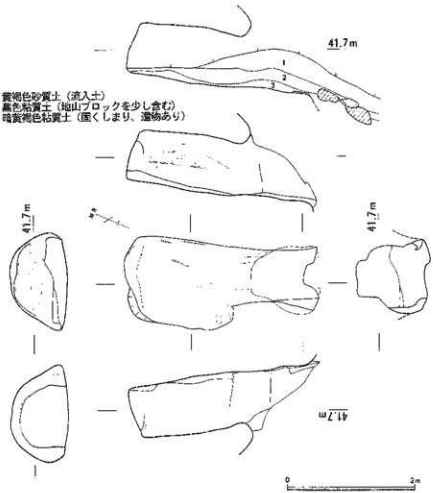
立地　標高41.8m付近に位置し、1号穴から3m離れている。砂岩に掘られ、調査前は埋没していた。

形態（第179図）

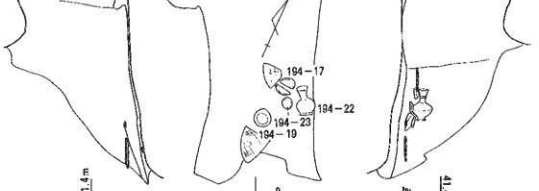
前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.05m、前幅0.95m、奥行き1.05m、高さ1.3mを測り、ほぼ正方形を呈する。床面中央部に幅15cm、深さ5～8cmの断面コ字形の排水溝が

前庭部先端まで続く。側壁は垂直に立ち上がり、丸みのある天井部に続く。前庭部は玄門部よりわずかに広がり、幅1.15m、奥行き0.85mを測る。側壁は垂直に立ち上がり、他の横穴墓とは隔絶している。玄門部から前庭部の床面はわずかに傾斜している。

玄室　奥幅2.1m、前幅1.95m、奥行き2～2.1m、高さ1.3mを測る。各コーナーは明瞭に表現され、方形プランである。奥・側壁は内傾し、床面から70～80cmの高さに2cmほどに刳り込まれた軒線はあるが、天井部と傾斜は変わらない。天井頂部には明瞭な棟線はない。しかし、工具痕を天井中央部に主軸方向に施しているので、妻入り状の棟線とも見える。天井部は前方に傾斜し、玄門部との区別は明確な段で表されている。奥壁と天井部・側壁との界線は一筋の工具痕で表現している。左前壁には軒線はなく、壁面の中央が深さ2～5cmにわたり、平刃で方形に掘り窪められていた。前壁の玄門部上方には丸みを持った界線がある。玄門部



第181図　上塩冶横穴墓群23－3号穴実測図（S＝1／60）



第182図　上塩冶横穴墓群23－3号穴遺物出土状況（S＝1／30）

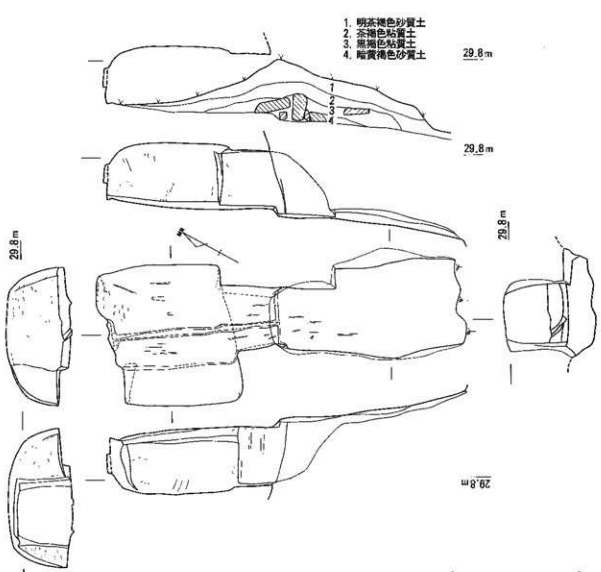
との境には2cmほどの面取りが施されている。床面の両側には削り出しの屍床がある。左側は幅80～90cm、床面から15cmほど高い。奥壁側は0.5×1.2mの範囲で崩れている。右側は床面から15cm高く、幅80cmを測る。やはり、奥壁側が0.9×1.6mの範囲で崩れ、人形に掘り窪められているようにも見える。

閉塞石や閉塞施設は検出できず、閉塞方法は不明である。

土層堆積状況（第179図）　1層は地山の風化土で、流入土と思われる。2～4層は水平堆積し、その内3層は黒色土である。5層は排水溝内にのみ堆積していた。6層も地山の風化土と同質の土である。

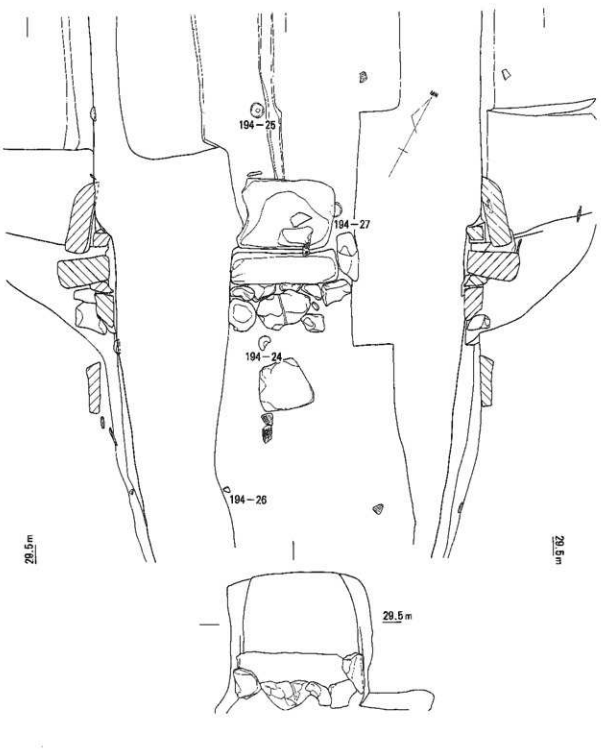
遺物出土状況（第180図）　玄室内の4層から須恵器、鉄器が少量小片で出土した。その他に砂岩の礫が左側を中心に検出された。この礫は床面の掘り窪めた時にできたと思われる。前庭部の3層からも須恵器の小片が出土した。玄門部から前庭部にかけて、幅10cm、長さ20～30cmの扁平な溶岩が3個出土した。横穴墓の周囲にはこの石材はない。

工具痕　天井部は幅10cmの断面U字の丸刃削痕を縦方向に下ろし、肋骨状を呈する。側壁奥側では幅



第183図　上塩冶横穴墓群23－4号穴実測図（S＝1／60）

10cmの丸刃削痕が奥壁に向かって施され、中央部では幅5cmの平刃削痕が残る。また、一部にはひっかき傷状の跡が残る。左前壁の凹みの工具痕は幅5cmの平刃打痕であるが、その部分のみ集中的に施され、二次的な可能性もある。奥壁は床面付近に5～6cmの平刃削痕が残る。床や左前壁の崩れた場所にも幅5～6cmの平刃削痕が残る。



第184図　上塩冶横穴墓群23－4号穴遺物出土状況（S＝1／30）

3号穴

立地　標高41.3m付近に位置し、2号穴から4m離れている。砂岩に掘られ、調査前は埋没していた。

形態（第181図）

玄門部　奥幅0.95m、前幅1m、奥行き1.4m、高さ0.82mを測り、長方形を呈する。天井部はほとんど崩れ、前方は急な崖になる。床面はわずかに傾斜し、表面は凸凹である。前庭部は現状ではなく、玄門部前方に盛土などを行い、閉塞や前庭部などを構築していた可能性もある。

玄室　奥行き1.7m、奥幅1.2m、前幅1.15m、最大幅1.3m、高さ0.9mを測る。左袖の片袖式で、袖部の幅は0.2mである。側壁は丸く、天井はアーチ形である。天井は玄門部に向け傾斜し、境はわずかにアクセントがある。奥壁は垂直気味に立ち上がり、側壁とは区別がある。床面はかなり傾斜し、玄門部手前で盛り上がっている。表面は未成形の凸凹で、調整までは行われていない。

閉塞石や閉塞施設などは検出できず、閉塞方法は不明である。玄門部先端の急斜面から30～40cmの砂岩が4個出土したが、用途は不明である。

遺物出土状況（第182図）　玄門部中央の床面から須恵器がまとまって出土した。鏃片も出土したが、接合できず、破片も少ない。玄室からは10～25cmの砂岩が3個検出された。前方の急な崖の堆積土から蓋坏や高坏が出土した。

土層堆積状況（第181図）　1～3層まで流入土で、1・3層は地山の風化した土に似る。

工具痕　玄門部床面の溝状痕は玄室との境で止まっており、玄室床面の溝状痕とはつながらない。玄室や玄門部の床面と側壁との境は幅5cmの平刃削痕がある。奥壁の表面は凸凹で、平刃削痕が残り、界線は工具を止めているだけである。右側壁は水平方向に溝状痕が残り、一部平刃削痕がある。天井にも溝状痕が残る。

4号穴

立地　標高29m付近、尾根から7m下がった地点に位置し、凝灰岩に掘られているが、床面は凝灰岩とその下位の凝灰質砂岩の境にある。調査前に開口していた。1～3号穴とは55m離れ、4～6号穴で小支群をなす。

形態（第183図）

前庭部・玄門部　玄門部は前幅0.85m、奥幅1.05m、奥行き0.8m、高さ0.9mを測る。側壁は垂直に立ち上がり、天井部との界線は明瞭で、断面は方形である。床面は水平である。前庭部との境は10cmの段差がある。前庭部は奥行き0.9mまで玄門部と同じ幅で続き、大井部はない。その前方は奥幅1.32mと広がり、前幅1.35m、奥行き1.95mを測る。床面は前庭部前部は傾斜を持つが、玄門部側は水平である。前庭部前部の側壁と床面の境ははっきりせず、丸みを持つ。側壁は7～10cmと低く、その外側は平坦になる。右側は2×4m、左側で2×2mを測り、墓道とも考えられる。

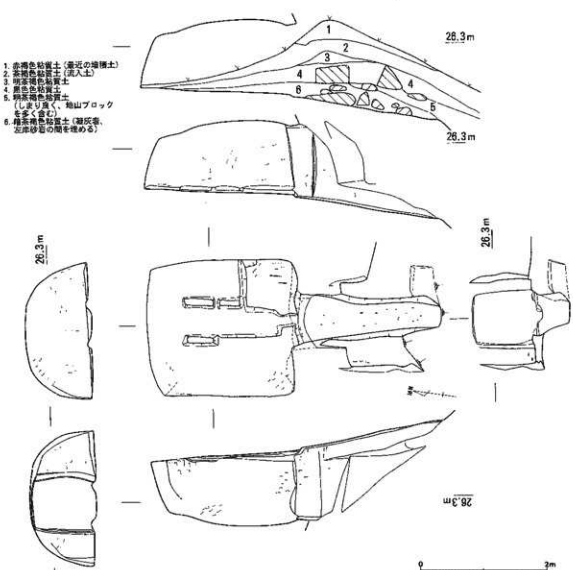
玄室　奥幅2m、前幅2.1m、奥行きは右側で2m、左側で1.9m、高さ1mを測る。菱形を呈し、ゆがんでいる。壁同士のコーナーは丸みを持ち、はっきりしない。左側には床面から10～15cmの高くなった屍床がある。屍床は幅0.62m、奥行き1.9mを測り、床面は平坦である。屍床と床面の境は丸みを持ち不明瞭である。玄室中央には幅12cm、深さ2～3cmの排水溝が前庭部まで続く。前壁と玄門部の境は面取りされている。奥壁と天井部の境は傾斜変換点ぐらいの表現で、はっきりした軒線はない。

左前壁と側壁の境は工具痕を止めて表現される程度である。棟線はない。床面はかなり傾斜している。

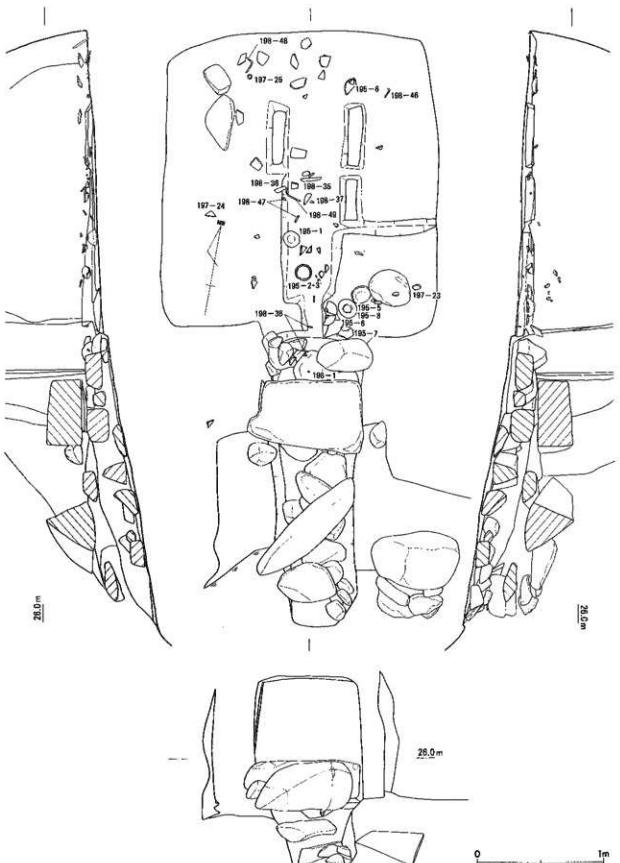
閉塞状況（第184図）　幅83cm、高さ40cm、厚さ17～22cmの凝灰岩の切石が、床面に接して原位置で確認できた。その右側には前庭部の幅に合わせるため、幅16cm、長さ37cm、高さ40cmの石が詰められていた。玄門部側には幅70cm、高さ55cm、厚さ17cmの凝灰岩の切石が倒れ込むようにあり、その下には押さえ石と考えられる小さい石があった。このことから、本来の閉塞は上下二段の切石で閉塞していたか1枚石が折れたと思われる。また、前方には10～20cmの石が5個、閉塞石に接して置かれ、その前方にも4個ほどあった。閉塞石の押さえ石の可能性がある。さらに、前方の3層中から長さ40cm、幅40cm、厚さ9cmの石が検出された。

土層堆積状況（第183図）　玄門部から玄室にかけては流入土が堆積していた。3層中から遺物が出土し、転落した閉塞石が埋まっていることから盗掘、追葬、再利用などがこの時点であったと思われる。

遺物出土状況（第184図）　玄室から玄門部にかけてわずかに遺物が出土した。玄門部に落ち込んだ閉塞石の下や3層中から須恵器が出土した。前庭部では甕片が少数検出された。



第185図　上塩冶横穴墓群23－5号穴実測図（S＝1／60）



第186図　上塩冶横穴墓群23－５号穴遺物出土状況（S＝1／30）

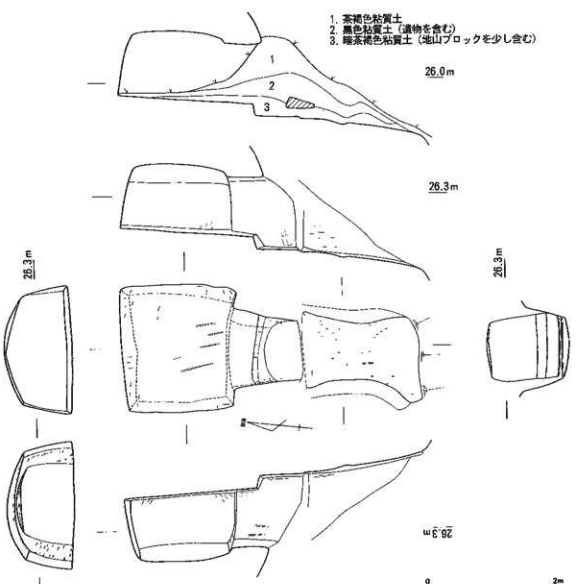
工具痕　側壁は風化のためはっきりしないが、平刃削痕が見える。玄門部から前庭部の床面には溝状痕と幅５cmの平刃削痕がある。玄室床面の中央部には溝状痕が残るが、連続した平刃削痕もある。天井部は平刃削痕があり、１単位内に細かい筋がある。これは工具を壁面から離さず、連続して力を加えたものと思われる。右奥床面には多くの平刃削痕が残り、平面形の歪さが伺える。

５号穴

立地　標高25.7m付近に位置し、４号穴から４ｍ下がった地点である。調査前はわずかに開口していた。凝灰岩の下の凝灰質砂岩に掘られている。

形態（第185図）

前庭部・玄門部　玄門部は玄室と10cmの段差があり、溝状になる。この溝は断面コ字形で、奥幅0.8m、前幅0.32m、奥行き2.3mを測り、前庭部先端まで続く。玄門部は奥行き0.85m、奥幅は溝の幅と同じで0.8m、前幅0.85mを測る。天井部は前方は風化しているが、玄室側には少し残る。側壁は垂



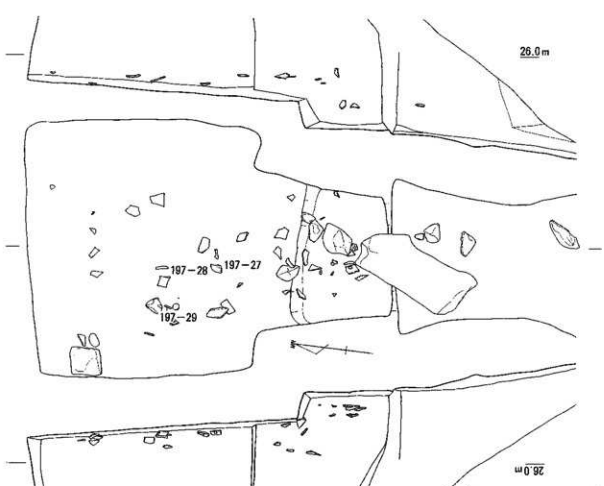
第187図　上塩冶横穴墓群23－６号穴実測図（S－1／60）

直に立ち上がり、天井とは界線がある。両側壁の中央部には幅5cmの断面V字形の切れ込みがあるが、用途は不明である。床面はかなり傾斜している。前庭部は溝より20cmほど高いところにあり、奥幅1.33m、奥行き0.95mを測る。床面は平坦である。右前庭部奥壁には1～2cmの凹みがあり、何かをはめ込むためのものか。前庭部左側の奥（玄門部）には前庭部と同じ高さで、幅10cmほどのテラスが入り込む。

玄室　奥行き2.26m、奥幅2.02m、最大幅2.18m、高さ1.07mを測る。側壁や奥壁は内傾し、天井は丸天井になる。側壁と奥壁の界線は不明瞭で、奥壁は床面から0.77m地点に傾斜変換点がある。はっきりした軒線はない。天井は前方に向かって高くなり、玄門部との境はわずかである。

床面の両側は中央より玄門部側で2～5cm高く、屍床状になる。中央の通路とは断面台形の仕切りで区別される。しかし、奥壁側には仕切がなく、床面は屍床と通路では同じ高さになる。左屍床は中央部に上幅10cm、下幅18cm、高さ3～5cmの仕切が、60cmの長さで存在する。仕切と側壁との間は0.78mを測る。右屍床は中央部に上幅11cm、下幅18cm、高さ2～6cmの仕切が、5cmの間隔をあけて二カ所に98cmの長さである。側壁と仕切との幅は0.58mを測る。右屍床には奥壁から1.48mの所には自然の岩盤の割れ目を利用した幅10cmの溝がある。両屍床とも奥壁から0.57mまでの間は仕切はなく、コ字屍床にも見える。

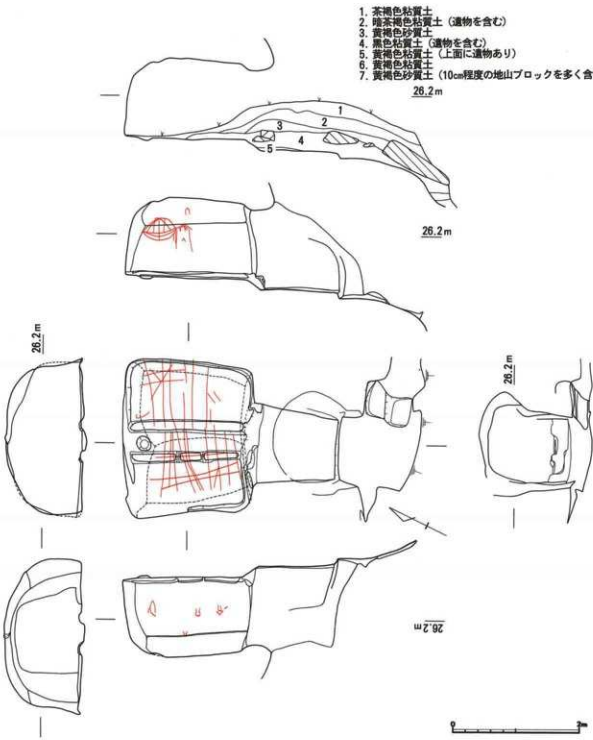
閉塞状況（第186図）　玄門部から前庭部にかけての溝には10～40cmの礫が固く充填され、前庭部と



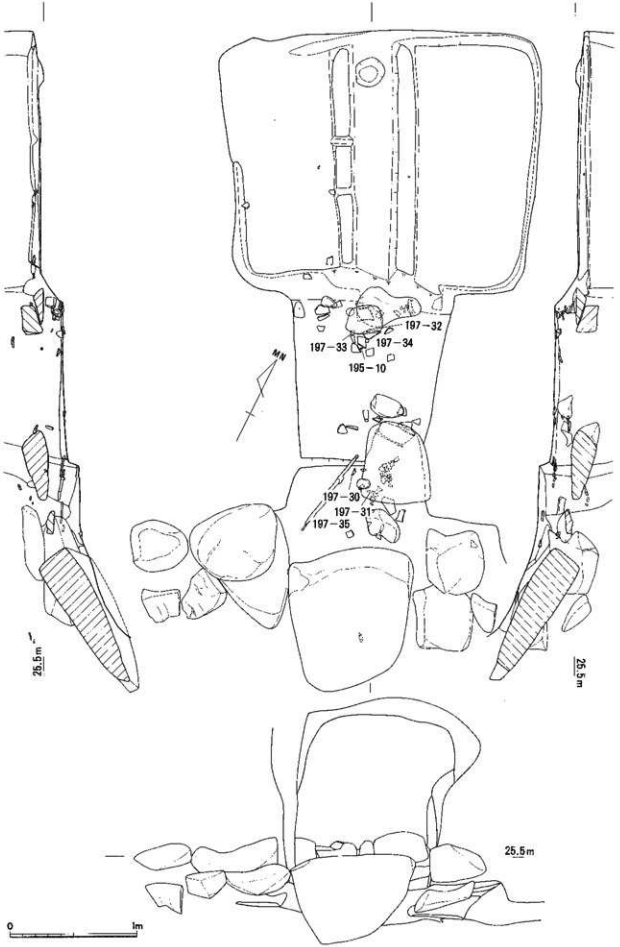
第188図　上塩冶横穴墓群23－6号穴遺物出土状況（S＝1／30）

同じ高さに整えられていた。その上に幅80～90cm、長さ53cm、厚さ30cmの凝灰岩の切石が、玄門部のテラスや前庭部にかかるように検出できた。石の上面は前方にやや下がっていた。その前方には長さ1.05m、0.3m、厚さ0.2mの棒状の凝灰岩があり、奥の切石とほぼ同じ高さであった。これらの凝灰岩で閉塞をしていた可能性がある。また、前庭部先端の右側の凹みの上には凝灰岩の大きいもので40×70cmの石が6個置かれていたが、用途は不明である。

遺物出土状況（第186図）　玄室や玄門部内の遺物は中央付近から検出された。玄室中央から(195－3)の下に(195－2)が重なって出土し、図下した以外の蓋坏の小片も出土した。甕片などの破片が奥壁側や玄室手前からもまとまって出土した。20～30cmの礫が右側手前と左側奥から検出された。鉄器は細



第189図　上塩冶横穴墓群23－7号穴実測図（S＝1／60）

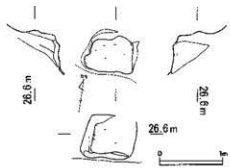


第190図　上塩冶横穴墓群23－７号穴遺物出土状況（S＝1／30）

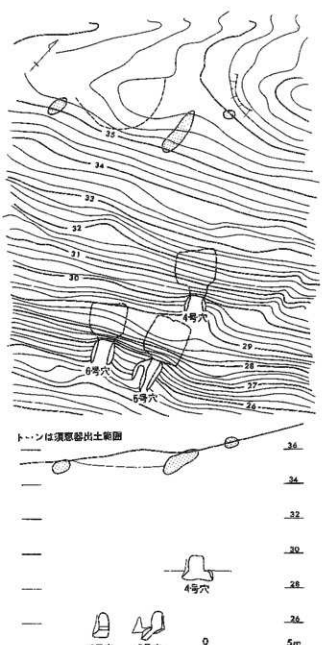
かく削れており、接合するものもある。4層の上面から遺物が出土しいるが、遺物は小片が多く、5層上面も固く締まっていることから、盗掘時の掘り残しの可能性がある。

土層堆積状況（第185図）　玄室から玄門部にかけては流入土が堆積していた。6層は前庭部から玄門部の溝内と玄室内の通路のみに堆積していた。閉塞石と思われる石が5層上面にある。以上のことから溝に礫を入れ、その間に6層を挟み、その上面に閉塞石を置いていると思われる。5層上面で追葬や盗掘が行われ、その際に棒状の凝灰岩が動かされたと考えられる。

工具痕　側壁には縦方向の平刃削痕が残る。玄門部から前庭部にかけての溝の床面には断面方形の刺突痕があり、床面と側面の境は工具を止めて表現されている。玄室床面には一部溝状痕も残るが、幅5㎝ほどの平刃削痕で、表面を滑らかにしている。天井部の奥側は平刃削痕であるが、玄門部側は削痕を消すかのように幅10㎝の丸刃削痕が施されている。



第191図　上塩冶横穴墓群第23支群SK01実測図（S＝1／60）



第192図　上塩冶横穴墓群23－4・5・6号穴遺物出土状況（S＝1／200）

6号穴

立地　5号穴とほぼ同じ高さで、標高25.8m付近に位置する。5号穴から谷の入り口方向に3mの地点である。調査前は埋没し、凝灰質砂岩に掘られている。

形態（第187図）

前庭部・玄門部　玄門部は奥幅1.3m、前幅0.93m、奥行き1.05mを測り、前方に向かって細くなる。中央部には15～20㎝の段差が存在し、下がった床面の表面は凸凹である。側壁は垂直気味に立ち上がり、断面は方形である。天井と側壁の境は丸み持つが、明瞭な界線がある。前庭部は奥幅1.2m、前幅1.35m、奥行き1.88mを測り、中央部がやや狭まる。床面は凸凹であり、前方にわずかに傾斜している。前庭部側壁は垂直気味に立ち上がり、上面は風化し不明瞭である。前庭部と玄門部は2～3㎝のわずかな段差がある。

玄室　奥幅1.93m、前幅1.8m、奥行き1.73m、高さ1.05mを測る。方形プランで、各コーナーは明瞭に表現されている。側壁や奥壁は内傾し、天井は明確な稜線はない。側壁は床面から0.8m地点で傾斜変換点（軒線）があり、天井頂部は一部で丸天井になる。奥壁と天井や側壁の境は明確で、切妻である。奥壁はホームベース形を呈し、天井頂部の稜は鋭角に表現されている。前壁天井部は面取りされ、界線は玄門部に沿って丸みを持って施されている。床面は平坦で、わずかに傾斜している。
明確な閉塞石や閉塞施設が確認できず、閉塞方法は不明である。

遺物出土状況（第188図）　玄室から玄門部の2層中や3層上面から須恵器、鉄器、石、中世土師器が出土した。須恵器は甕片で、散在していた。25cm四方の石材などが須恵器などと同一層から検出された。前庭部には長さ90cm、幅30cm、厚さ15～20cmの棒状の石があり、その石から奥側で多くの遺物が出土した。

土層堆積状況（第188図）　玄門部を中心に堆積し、玄室内はほとんどなかった。3層上面で遺物が出土し、棒状の石が検出されていることから、3層上面で盗掘、再利用などが行われたと考えられる。

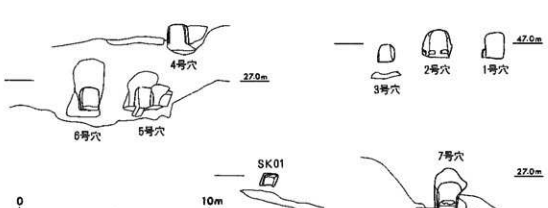
工具痕　玄室側壁と床面境付近に幅5cmの平刃削痕がある。前壁は界線に沿って平刃削痕が残る。前庭部床面は刺突痕が多く残り、溝状痕の先端が刺突痕状になる箇所もある。玄室床面には中央から外側に向かって5～6cmの平刃削痕が施されている。

7号穴

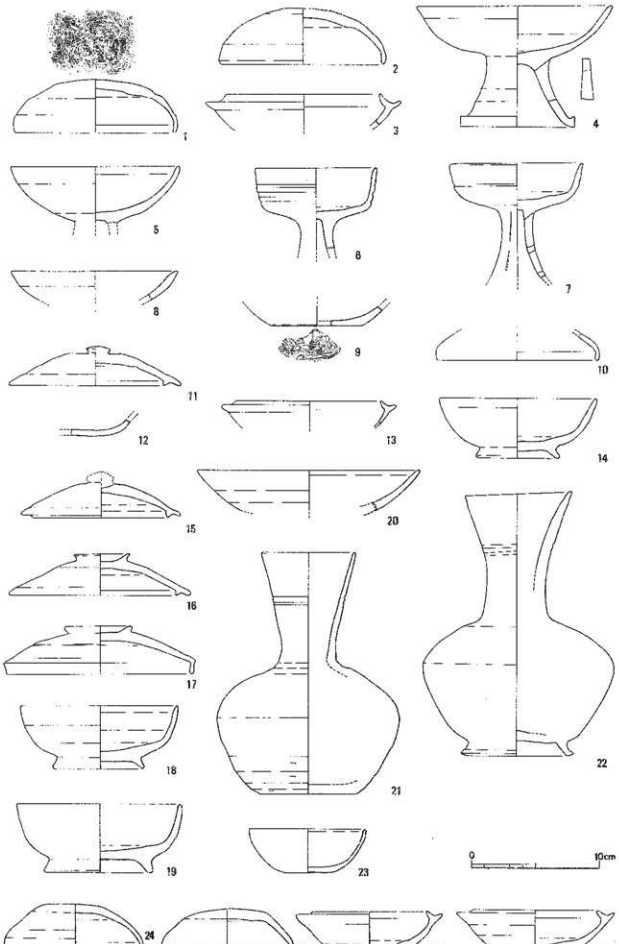
立地　第23支群で最も丘陵先端にあり、6号穴からも16m離れ、孤立している。標高25.4m付近に位置し、凝灰岩と凝灰質砂岩の境に床面が位置する。調査前から開口していた。

形態（第189図）

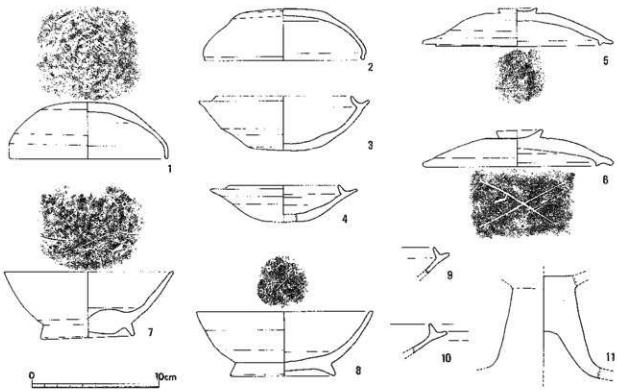
前庭部・玄門部　奥幅1.36m、前幅0.92m、奥行き1.3m、高さ1.3mを測り、前方が狭くなる。側壁と天井にははっきりした界線はないが、断面は方形である。玄室とは15cm、前庭部とは8cmの段差がある。床面はほぼ水平である。玄門部前方には閉塞石を受けるための刳り込みがある。奥行きは右側で33cm、左側で30cm、幅1.02mを測る。前庭部は奥行き0.7～0.9m、奥幅2.2mを測り、右側で55cm、左側で57cm広がる。左側の先端には方形の刳り込みがある。床面は傾斜し、前方は急な崖になる。崖は砂岩の崩れや悪い岩質が露出し、凸凹である。



第193図　上塩冶横穴墓群第23支群正面図（S＝1／200）



第194図　上塩冶横穴墓群第23支群出土遺物実測図（S＝1／3）
1～9（1号穴）10～14（2号穴）15～23（3号穴）24～27（4号穴）



第195図　上壇A横穴墓群第23支群出土遺物実測図（S＝1／3）1～7（5号穴）8（6号穴）9～11（7号穴）

玄室　奥壁2.45m、前幅2.05m、奥行き2.1m、高さ1.27mを測る。やや前方が狭くなるが、方形プランである。各コーナーは丸みを持つ。側壁は内傾し、床面から高さ75～85cmの所に刳り込まれた明瞭な軒線がある。しかし、奥壁や前壁には軒線はない。棟線は断面V字状で、長さ1.38m、最大幅8cm、深さ2cmほど掘り込まれている。天井部は丸みを持ち断面は円形に近い。前壁は垂直気味に立ち上がり、玄門部に沿って掘り込まれた界線が巡る。

左右には有縁屍床がある。右側は周囲を幅5～10cm、深さ3cmの溝が巡り、中央側には上幅13cm、下幅20cm、高さ2～5cmの断面台形の仕切がある。仕切内の規模は幅0.9m、奥行き1.9mである。左側の屍床は前壁・奥壁・側壁前半分に沿って、幅10～15cm、深さ2～5cmの溝が巡る。仕切は中央に2カ所の切れ込みがあるが、上幅10cm、下幅15cm、高さ2～5cmの断面台形の仕切がある。

中央部は幅25cmの通路状になり、床面の奥には径23cm、深さ4cmの円形の窪みがある。

線刻壁画（第189図）　前壁以外の壁面には鋭利な先端を持つ工具で描かれた壁画がある。壁面が風化しているので不明瞭であるが、深さ1cm未満である。奥壁には人？、右側壁には船、人、建物、左側壁には建物？、人？　がある。右壁の船は帆船と思われ、全長55cmを測る。建物は逆V字の屋根があり、その下に縦線が続き、その中に人がいるように見える。玄室の天井には格子状の線刻がある。縦線は棟線付近から軒線の少し下まで描かれ、横線（横穴主軸方向の線）の長さはばらつきがある。描かれた時代については、7号穴は既に開口し、江戸時代の遺物が出土していることから、確かなことは不明である。

閉塞状況（第190図）　閉塞石を受ける刳り込みの前方に、凝灰岩の板状の切石が倒れていた。規模は幅95cm、長さ120cm、厚さ30cmを測る。その両側からは溶岩や凝灰岩の角礫が検出された。大きさは幅20～50cmのものが多い。閉塞は基本的には一枚の凝灰岩で行われていたと思われ、周囲の石材の

用途は不明である。

遺物出土状況（第190図）　玄室からの出土遺物はほとんどなく、玄門部からまとまって出土した。須恵器は甕片が多く、大刀などとともに4層から出土している。(197－35)は切先を前庭部に向けている。もう一本大刀が小片になって玄門部先端付近で出土した。また、2層からは須恵器とともに江戸時代の磁器や土師器が出土している。

土層堆積状況（第189図）　玄室内には堆積土はほとんどなく、玄門部から前庭部にかけて厚く堆積していた。1～3層は流入土で、閉塞石は4層上面から検出された。4層は黒色土であり、一時期、この層まで開口していたと思われる。

工具痕　横穴墓の壁面は風化が進んでおり、工具痕は確認できなかった。

SK01

7号穴から9.5m離れた凝灰岩の標高26.1mにあり、下層には凝灰質砂岩がある。奥行き57cm、奥幅70cm、前幅70cm、高さ60cmを測り、L字状に掘られている。形態は第22支群SK01と同じである。奥壁と側壁の界線に沿って幅4cmの平刃の工具痕が残る。奥壁には水平の平刃痕が多い。周辺の岩質は凝灰岩層が薄くなり、凝灰質砂岩などはクラックが入り崩れている。

その他（第192・203図）

4号穴の尾根上から須恵器がまとまって出土した。尾根上からやや斜面側にずれた所に、径約5m、東側の高さ0.6mほどの円形の高まりがある。古墳の北東（尾根上部）側には上幅4～5mの溝が存在した。須恵器はこの溝から多数出土し、須恵器の一部は南側の斜面から、溝から落ちたかのように出土した。須恵器は甕片のみで、6号穴の前庭部から出土した甕片と接合した。

上塩冶横穴墓第23支群出土遺物

土器　須恵器と土師器がある。須恵器は蓋坏、高坏、壺がある。土師器は坏(194－12・23)や高坏、中世土師器(194－9)がある。詳細は観察表に譲る。

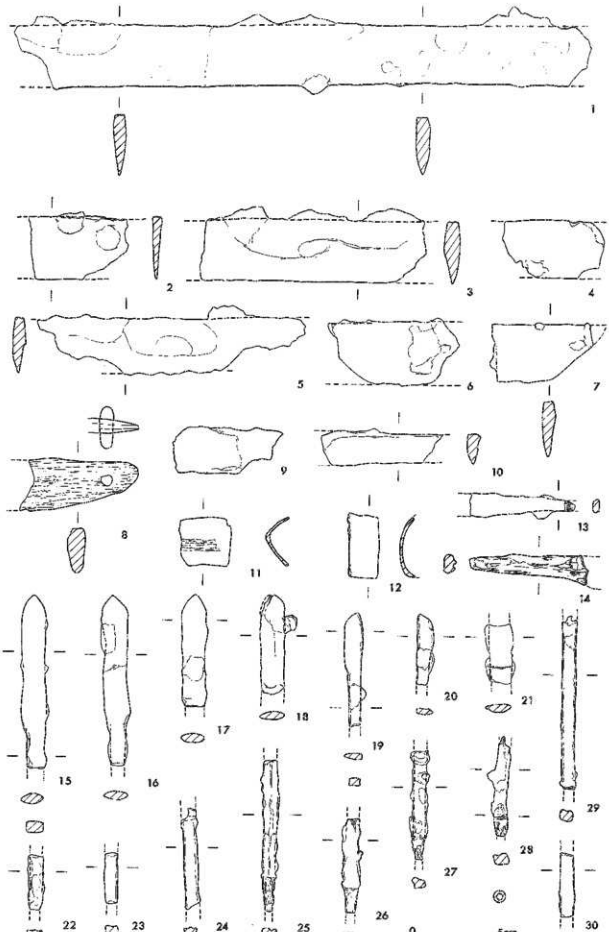
その他

1号穴遺物（第196図、第197図1～10）

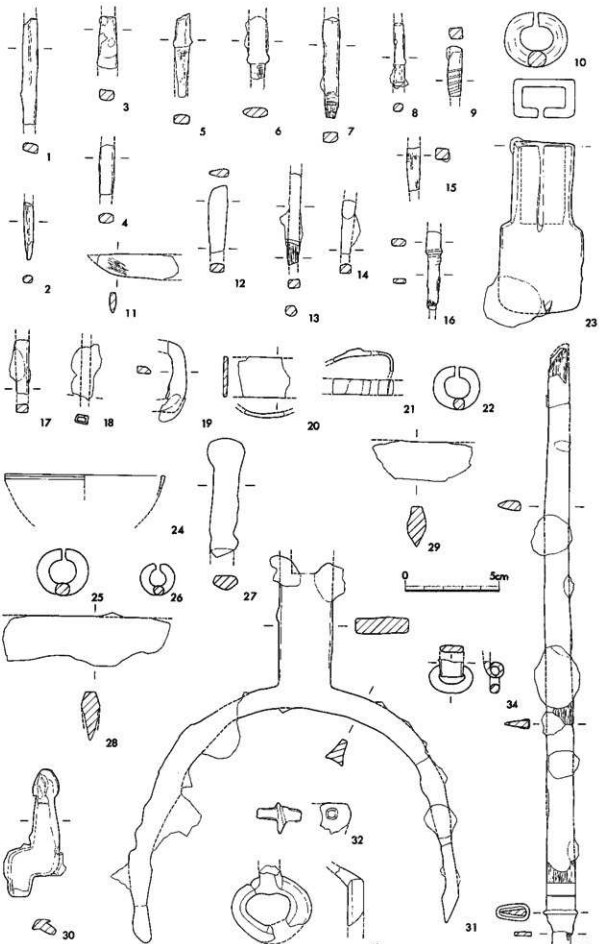
大刀(1～10)は破片ばかりで、接合しない。(1)は棟幅0.5cm、幅3cmを測る。(7)は切先付近の破片である。柄部(8)は表面には木目が残る。目釘は径6mm、長さ2.2cmを測る。刀子(11・12)は刀の金具と思われ、丸みを持つ板状の製品である。幅1.5cmを測り、裏側には木目が残る。柄部(13)の一部には木目が残る。鉄鏃(196－15～30、197－1～9)の破片で、全形を伺うことはできない。細身で長頸式に属すると思われ、鏃箭(15～18)や片刃(19・20)がある。断面は方形で、茎部には樹皮が巻き、木目が残るものもある。耳環(10)は1個出土し、銅芯鍍金製で、やや大きく鍍金の残りは悪い。環の端面で金箔を折り込んでいる。断面は円形に近く、長径3.3cm、短径2.9cm、太さ0.9cmを測る。

2号穴遺物（第197図11～16）

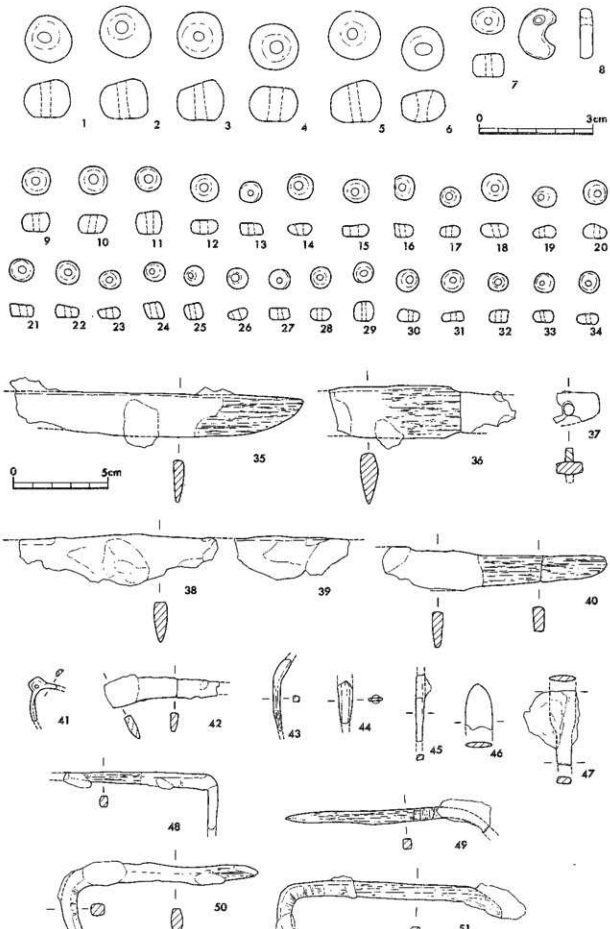
刀子(11)の切先で、木質が残る。鉄鏃(12～16)は細身で、長頸式に属すると思われ、茎部には樹皮が残る。(12)の鏃身部は片刃箭で、刃部長2.4cmを測る。金銅製の板状の破片が出土している。



第196図　上塩冶横穴墓群23－1号穴出土遺物実測図（S＝1／2）



第197図　上塩冶横穴墓群第23支群出土遺物実測図（S＝1／2）1～10（1号穴）11～16（2号穴）17～22（4号穴）23～26（5号穴）27～29（6号穴）30～35（7号穴）（S＝1／4 35）



第198図　上塩冶横穴墓群第23支群出土遺物実測図　1～34（S＝1／1）35～51（S＝1／2）
1～6（5号穴）7（6号穴）8～34（7号穴）35～51（5号穴）